京都府遺跡調査報告集

第134冊

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡
平成16・17・18年度発掘調査報告
蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群（Ⅱ）

2009

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成16・17・18年度に農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された農林水産省近畿農政局をはじめ、京都府教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理　事　長　　上　田　正　昭

例　　言

1．本書に収めた概要は下記のとおりである。

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16・17・18年度発掘調査報告

蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群（Ⅱ）

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡				
蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群	亀岡市千歳町国分	平 17.3.11 ～ 3.16 平 17.5.23 ～平 18.3.10 平 18.4.10 ～ 9.26	農林水産省 近畿農政局	伊野近富 森島康雄 黒坪一樹 岡崎研一 石崎善久 筒井崇史 村田和弘 松尾史子

3．本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4．本書の編集は、調査第２課調査担当者の編集原案をもとに、調査第１課資料係が行った。

5．現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第１課資料係主任調査員田中彰が行った。

本 文 目 次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16・17・18年度発掘調査報告
蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群（Ⅱ）---- 1

挿 図 目 次

第１図　調査地位置図---- 1
第２図　蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群調査区配置図---- 2
第３図　Ｄ６地区検出遺構配置図---- 3
第４図　国分53号墳墳丘測量図および土層断面図---- 4
第５図　国分53号墳出土遺物実測図---- 5
第６図　国分54号墳墳丘測量図および土層断面図---- 6
第７図　国分54号墳横穴式石室実測図---- 7
第８図　国分54号墳遺物出土状況図---- 8
第９図　国分54号墳出土遺物実測図---- 8
第10図　国分55号墳墳丘測量図および土層断面図---- 9
第11図　国分55号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図 ----10
第12図　国分55号墳出土遺物実測図----10
第13図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02実測図----11
第14図　Ｄ６地区出土遺物実測図----12
第15図　Ｄ９地区検出遺構配置図----13
第16図　国分56号墳墳丘測量図および土層断面図----14
第17図　国分56号横穴式石室実測図および遺物出土状況図 ----15
第18図　国分56号墳出土遺物実測図（１）----18
第19図　国分56号墳出土遺物実測図（２）----19
第20図　国分56号墳出土遺物実測図（３）----20
第21図　国分56号墳出土遺物実測図（４）----21
第22図　包含層出土遺物実測図（１）奈良・平安時代----22
第23図　溝ＳＤ02土層断面図 ----23
第24図　土坑ＳＫ04実測図 ----23
第25図　溝ＳＤ02出土遺物実測図----24
第26図　溝ＳＤ03・土坑ＳＫ04出土遺物実測図----25

第27図　国分56号墳羨門部・礫層出土遺物実測図----------26
第28図　礫層出土遺物実測図----------27
第29図　包含層出土遺物実測図（２）中世----------27
第30図　Ｄ７－１～3地区検出遺構配置図----------29
第31図　Ｄ７－１地区溝ＳＤ01、Ｄ７－３地区溝ＳＤ01土層断面図----------30
第32図　Ｄ７－３地区掘立柱建物跡ＳＢ01・柵ＳＡ01実測図----------30
第33図　Ｄ７－４地区検出遺構配置図----------32
第34図　Ｄ７－４地区溝ＳＤ01・04・21土層断面図----------33
第35図　Ｄ７－４地区中世墓ＳＸ124・145実測図----------34
第36図　Ｄ７－４地区土坑ＳＫ09・10、柱穴ＳＰ20実測図----------34
第37図　Ｄ７－５地区検出遺構配置図および掘立柱建物跡ＳＢ01、柵ＳＡ01・02実測図------35
第38図　Ｄ７地区出土遺物実測図（１）----------36
第39図　Ｄ７地区出土遺物実測図（２）----------37
第40図　100～105トレンチ検出遺構配置図----------39
第41図　107・119トレンチ検出遺構配置図----------40
第42図　柱穴ＳＰ03・47、土坑ＳＫ02・15、中世墓ＳＸ65実測図および溝ＳＤ68土層断面図--------41
第43図　100～105・107・119トレンチ出土遺物実測図----------42
第44図　Ａ２地区検出遺構配置図----------43
第45図　柱穴ＳＰ302実測図----------43
第46図　Ａ３地区検出遺構配置図----------44
第47図　竪穴式住居跡ＳＨ23・156・157・201実測図----------45
第48図　竪穴式住居跡ＳＨ234実測図----------46
第49図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図----------47
第50図　土坑ＳＫ21実測図----------48
第51図　土坑ＳＫ150・233実測図----------49
第52図　柱穴ＳＰ06実測図----------50
第53図　Ａ３地区出土遺物実測図（１）----------51
第54図　Ａ３地区出土遺物実測図（２）----------52
第55図　Ａ４地区遺構配置図----------53
第56図　竪穴式住居跡ＳＨ241・242実測図----------54
第57図　竪穴式住居跡ＳＨ237実測図----------55
第58図　竪穴式住居跡ＳＨ256実測図----------56
第59図　柱穴ＳＰ262実測図----------56
第60図　掘立柱建物跡ＳＢ11・13実測図----------57
第61図　Ａ４地区出土遺物実測図（１）----------58

第62図　Ａ４地区出土遺物実測図（２）----59
第63図　Ａ４地区出土遺物実測図（３）----60
第64図　Ａ４地区出土遺物実測図（４）----61
第65図　Ａ４地区出土遺物実測図（５）----61
第66図　Ａ５地区検出遺構配置図----62
第67図　土坑ＳＫ205実測図----63
第68図　竪穴式住居跡ＳＨ50・51実測図----64
第69図　竪穴式住居跡ＳＨ34・61実測図----65
第70図　竪穴式住居跡ＳＨ147・148実測図----66
第71図　土坑ＳＫ70実測図----67
第72図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図----68
第73図　掘立柱建物跡ＳＢ02・03実測図----69
第74図　土坑ＳＫ24・45・48実測図----70
第75図　Ａ５地区出土遺物実測図（１）----72
第76図　Ａ５地区出土遺物実測図（２）----73
第77図　Ａ５地区出土遺物実測図（３）----74
第78図　Ａ５地区出土遺物実測図（４）----75
第79図　Ａ５地区出土遺物実測図（５）----76
第80図　Ａ５地区出土遺物実測図（６）----77
第81図　Ａ５地区出土遺物実測図（７）----78
第82図　Ａ５地区出土遺物実測図（８）----78
第83図　Ａ６地区検出遺構配置図----79
第84図　竪穴式住居跡ＳＨ15実測図----80
第85図　竪穴式住居跡ＳＨ103・105実測図----81
第86図　Ａ６地区出土遺物実測図（１）----82
第87図　Ａ６地区出土遺物実測図（２）----83
第88図　Ａ６地区出土遺物実測図（３）----84
第89図　Ａ６地区出土遺物実測図（４）----84
第90図　Ａ１地区検出遺構配置図----85
第91図　Ａ１地区出土遺物実測図----86
第92図　土坑ＳＫ115実測図----87
第93図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図----87
第94図　Ｂ１－４地区検出遺構配置図----88
第95図　Ｂ１－１～３地区検出遺構配置図----89
第96図　土坑ＳＫ01・14実測図----90

第97図　Ｂ１－４地区出土鉄器実測図----90
第98図　Ｂ１地区出土遺物実測図----91
第99図　116トレンチ検出遺構配置図----92
第100図　116トレンチ出土遺物実測図----92
第101図　132～134トレンチ出土遺物実測図----93
第102図　132～134トレンチ検出遺構配置図----93
第103図　Ｂ３地区検出遺構配置図----93
第104図　Ｂ３地区出土遺物実測図----94
第105図　Ｂ４地区検出遺構配置図----95
第106図　Ｂ４地区出土遺物実測図----96
第107図　Ｂ５地区検出遺構配置図----97
第108図　溝ＳＤ61実測図----97
第109図　Ｂ５地区出土遺物実測図----98
第110図　Ｂ６地区検出遺構配置図----99
第111図　溝ＳＤ02実測図----100
第112図　土坑ＳＫ88・100実測図----100
第113図　溝ＳＤ03・段状区画ＳＸ04土層断面図----101
第114図　Ｂ６地区柱穴・土坑出土遺物実測図----101
第115図　Ｂ６地区溝ＳＤ02出土遺物実測図----102
第116図　Ｂ６地区溝ＳＤ91・03出土遺物実測図----103
第117図　Ｂ６地区段状区画ＳＸ04出土遺物実測図----104
第118図　Ｂ６地区出土石製品実測図----105
第119図　110・112トレンチ検出遺構配置図----106
第120図　110トレンチ出土遺物実測図----107
第121図　３・４トレンチ検出遺構配置図----107
第122図　３・４トレンチ出土遺物実測図----108
第123図　10トレンチ検出遺構配置図----108
第124図　10トレンチ出土遺物実測図----108
第125図　Ｃ１地区検出遺構配置図----109
第126図　竪穴式住居跡ＳＨ02・04・05実測図----111
第127図　竪穴式住居跡ＳＨ03・06実測図----112
第128図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図----113
第129図　柱穴ＳＰ30遺物出土状況図----113
第130図　Ｃ１地区出土遺物実測図（１）----114
第131図　Ｃ１地区出土遺物実測図（２）----115

第132図　Ｃ１地区出土遺物実測図（３）----116
第133図　22トレンチ検出遺構配置図----117
第134図　22トレンチ出土遺物実測図----117
第135図　Ｃ２地区検出遺構配置図----118
第136図　竪穴式住居跡ＳＨ01・36実測図----119
第137図　竪穴式住居跡ＳＨ02・35実測図----120
第138図　掘立柱建物跡ＳＢ01・柵ＳＡ02実測図----121
第139図　Ｃ２地区出土遺物実測図（１）----122
第140図　Ｃ２地区出土遺物実測図（２）----123
第141図　Ｃ２地区出土遺物実測図（３）----124
第142図　24・25トレンチ検出遺構配置図----124
第143図　25トレンチ出土遺物実測図----124
第144図　Ｃ３地区検出遺構配置図----125
第145図　竪穴式住居跡ＳＨ02・57実測図----125
第146図　Ｃ３地区出土遺物実測図----126
第147図　27・28トレンチ検出遺構配置図----127
第148図　27トレンチ出土遺物実測図----128
第149図　Ｃ４地区検出遺構配置図----128
第150図　竪穴式住居跡ＳＨ85実測図----129
第151図　Ｃ４地区出土遺物実測図（１）----130
第152図　Ｃ４地区出土遺物実測図（２）----131
第153図　Ｃ５地区検出遺構配置図----131
第154図　竪穴式住居跡ＳＨ24実測図----132
第155図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02実測図----133
第156図　竪穴式住居跡ＳＨ24出土紡錘車実測図----133
第157図　Ｃ５地区出土遺物実測図----134
第158図　Ｃ６地区検出遺構配置図----135
第159図　竪穴式住居跡ＳＨ71・72・73実測図----136
第160図　竪穴式住居跡ＳＨ74・75実測図----137
第161図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図----138
第162図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図----139
第163図　掘立柱建物跡ＳＢ03実測図----140
第164図　土坑ＳＫ77実測図----141
第165図　Ｃ６地区出土遺物実測図（１）----142
第166図　Ｃ６地区出土遺物実測図（２）----143

第167図　Ｃ６地区出土遺物実測図（３）----144
第168図　Ｃ６地区出土遺物実測図（４）----145
第169図　Ｃ６地区出土遺物実測図（５）----146
第170図　39トレンチ検出遺構配置図----147
第171図　39トレンチ出土遺物実測図（１）----147
第172図　39トレンチ出土遺物実測図（２）----148
第173図　Ｃ７地区検出遺構配置図----149
第174図　竪穴式住居跡ＳＨ01実測図----150
第175図　土坑ＳＫ02実測図----150
第176図　Ｃ７地区出土遺物実測図（１）----151
第177図　Ｃ７地区出土遺物実測図（２）----152
第178図　Ｃ７地区出土遺物実測図（３）----153
第179図　竪穴式住居跡ＳＨ01出土勾玉実測図----153
第180図　Ｃ８地区検出遺構配置図----154
第181図　竪穴式住居跡ＳＨ35・36実測図----155
第182図　掘立柱建物跡ＳＢ01、柵ＳＡ01・02実測図----156
第183図　Ｃ８地区出土遺物実測図（１）----157
第184図　Ｃ８地区出土遺物実測図（２）----158
第185図　Ｃ９地区検出遺構配置図----159
第186図　Ｃ９地区出土遺物実測図----160
第187図　35トレンチ検出遺構配置図----160
第188図　35トレンチ出土遺物実測図----160
第189図　157～159トレンチ検出遺構配置図----161
第190図　158・159トレンチ出土遺物実測図----161

図 版 目 次

図版第１　（１）調査地遠景（南から）　（２）調査地南半部全景（東から）
図版第２　（１）Ｄ６地区全景（南から）　（２）国分53号墳全景（南から）
（３）国分53号墳石室内遺物出土状況（再利用時、南から）
図版第３　（１）国分54・55号墳全景（上が北西）
（２）国分54号墳石室全景（南東から）　（３）国分55号墳石室全景（南南東から）
図版第４　（１）Ｄ６地区掘立柱建物跡ＳＢ01・02全景（上が東）
（２）Ｄ６地区柱穴ＳＰ16遺物出土状況（西から）

（３）Ｄ６地区柱穴ＳＰ48遺物出土状況（南東から）
図版第５　（１）Ｄ９地区全景（西から）　（２）国分56号墳石室全景（南から）
（３）国分56号墳玄室内遺物出土状況（東から）
図版第６　（１）国分56号墳羨道部遺物出土状況（西から）
（２）Ｄ９地区土坑ＳＫ04遺物出土状況（北から）
（３）Ｄ９地区溝ＳＤ02全景（南東から）
図版第７　（１）Ａ２地区全景（北から）　（２）Ａ３地区全景（西から）
（３）Ａ３地区竪穴式住居跡ＳＨ23全景（北から）
図版第８　（１）Ａ３地区竪穴式住居跡ＳＨ201全景（北西から）
（２）Ａ３地区竪穴式住居跡ＳＨ156全景（南から）
（３）Ａ３地区竪穴式住居跡ＳＨ157全景（南から）
図版第９　（１）Ａ３地区竪穴式住居跡ＳＨ156・157全景（西から）
（２）Ａ３地区土坑ＳＫ21全景（南西から）
（３）Ａ３地区柱穴ＳＰ06遺物出土状況（東から）
図版第10　（１）Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ241全景（北東から）
（２）Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ241遺物出土状況（南東から）
（３）Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ242全景（南南東から）
図版第11　（１）Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ237全景（南から）
（２）Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ237貼床除去後全景（南から）
（３）Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ256全景（南西から）
図版第12　（１）Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ256検出カマド全景（南西から）
（２）Ａ４地区柱穴ＳＰ262遺物出土状況（南から）
（３）Ａ４地区掘立柱建物跡ＳＢ13全景（西から）
図版第13　（１）Ａ５地区全景（西から）
（２）Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ51全景（南から）
（３）Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ148全景（南から）
図版第14　（１）Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ50全景（南から）
（２）Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ50北東部遺物出土状況（東から）
（３）Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ34全景（南東から）
図版第15　（１）Ａ５地区土坑ＳＫ70遺物出土状況（南西から）
（２）Ａ５地区掘立柱建物跡ＳＢ02全景（西から）
（３）Ａ５地区土坑ＳＫ24全景（北から）
図版第16　（１）Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ15全景（西から）
（２）Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ15遺物出土状況（南から）
（３）Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ15石杵出土状況（南から）

図版第17　（１）Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ103全景（南西から）
（２）Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ105全景（北東から）
（３）Ａ１地区全景（東からから）
図版第18　（１）Ｂ１－２地区全景（南東から）　（２）Ｂ１－３地区全景（東から）
（３）Ｂ１－４地区全景（南東から）
図版第19　（１）Ｂ１－２地区土坑ＳＫ115全景（南から）
（２）Ｂ１－４地区土坑ＳＫ14全景（西から）
（３）Ｂ１－４地区土坑ＳＫ01全景（南から）
図版第20　（１）Ｂ２地区全景（西から）　（２）Ｂ３地区全景（南東から）
（３）Ｂ４地区全景（北東から）
図版第21　（１）Ｂ５地区全景（北から）　（２）Ｂ５地区溝ＳＤ61全景（北東から）
（３）Ｂ６地区全景（南から）
図版第22　（１）Ｂ６地区段状区画ＳＸ04全景（北から）
（２）Ｂ６地区溝ＳＤ02全景（北東から）
（３）Ｂ６地区土坑ＳＫ44全景（東から）
図版第23　（１）Ｂ６地区土坑ＳＫ100全景（東から）
（２）116トレンチ全景（西から）
（３）132～134トレンチ全景（北から）
図版第24　（１）110・112トレンチ全景（南西から）　（２）10トレンチ全景（南から）
（３）３・４トレンチ全景（東から）
図版第25　（１）Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ02全景（北西から）
（２）Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ03全景（南東から）
（３）Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ04全景（北西から）
図版第26　（１）Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ05全景（北西から）
（２）Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ06全景（北東から）
（３）Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ35遺物出土状況（北から）
図版第27　（１）Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ04遺物出土状況（北西から）
（２）Ｃ１地区掘立柱建物跡ＳＢ01全景（北から）
（３）Ｃ１地区柱穴ＳＰ30遺物出土状況（北西から）
図版第28　（１）Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ01全景（西から）
（２）Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ36全景（南から）
（３）Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ36炉状施設全景（南から）
図版第29　（１）Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ02全景（南から）
（２）Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ02カマド全景（南から）
（３）Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ35全景（南東から）

図版第30　（１）Ｃ２地区掘立柱建物跡ＳＢ01全景（東から）
（２）Ｃ３地区竪穴式住居跡ＳＨ02全景（南西から）
（３）Ｃ２地区土坑ＳＫ01全景（北から）
図版第31　（１）22・24・25・27・28トレンチ全景（北から）
（２）Ｃ４地区全景（東から）
（３）Ｃ４地区竪穴式住居跡ＳＨ85全景（西から）
図版第32　（１）Ｃ５地区全景（南東から）
（２）Ｃ５地区竪穴式住居跡ＳＨ24全景（南から）
（３）Ｃ５地区竪穴式住居跡ＳＨ24カマド全景（南から）
図版第33　（１）Ｃ５地区掘立柱建物跡ＳＢ01全景（西から）
（２）Ｃ５地区掘立柱建物跡ＳＢ02全景（北から）
（３）Ｃ６地区全景（東から）
図版第34　（１）Ｃ６地区全景（西から）
（２）Ｃ６地区竪穴式住居跡ＳＨ71全景（南から）
（３）Ｃ６地区竪穴式住居跡ＳＨ73全景（南から）
図版第35　（１）Ｃ６地区竪穴式住居跡ＳＨ74・75全景（南から）
（２）Ｃ６地区土坑ＳＫ77全景（北から）
（３）Ｃ６地区掘立柱建物跡ＳＢ02全景（西から）
図版第36　（１）Ｃ７地区全景（南から）
（２）Ｃ７地区竪穴式住居跡ＳＨ01カマド全景（南から）
（３）Ｃ７地区土坑ＳＫ02全景（北西から）
図版第37　（１）Ｃ８地区全景（東から）　（２）Ｃ８地区掘立柱建物跡ＳＢ01全景（北から）
（３）Ｃ９地区全景（南東から）
図版第38　（１）35トレンチ全景（北から）　（２）39トレンチ・Ｃ６地区全景（南東から）
（３）157～159トレンチ全景（南から）
図版第39　出土遺物（１）
図版第40　出土遺物（２）
図版第41　出土遺物（３）
図版第42　出土遺物（４）
図版第43　出土遺物（５）
図版第44　出土遺物（６）
図版第45　出土遺物（７）
図版第46　出土遺物（８）

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡
平成16・17・18年度発掘調査報告

蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群（Ⅱ）

はじめに

蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群の発掘調査は、平成16年度から平成18年度にかけて実施した。調査の経過と全体の概要については、昨年度に刊行した『京都府遺跡調査報告集』第129冊で報告したので、参照願いたい。(注１)

今回の調査では、縄文時代から中世末期までの各時期の遺構・遺物を検出した。整理作業に際しては、保存処理作業の急がれる鉄製品が多数出土した国分古墳群の整理作業を優先して実施したため、昨年度は、Ｄ１～Ｄ５、Ｄ８、D10の各地区、75・76、80・81の各トレンチについて報告を行った。

今年度はＡ１～Ａ６、Ｂ１～Ｂ６、Ｃ１～Ｃ９、D６・Ｄ７・Ｄ９の各地区と、昨年度報告を行わなかった水路部分の調査トレンチの報告を行う。ただし、Ｂ２地区は削平が顕著で、トレンチ壁面の観察で土坑状の落ち込みを確認したのみで、遺物も出土しなかった。したがって、Ｂ２地区は特に一項を設けることはしなかった。本報告で用いた国土座標系は、世界測地系を使用している。また、遺構の方位はいずれも座標北からの角度で示している。

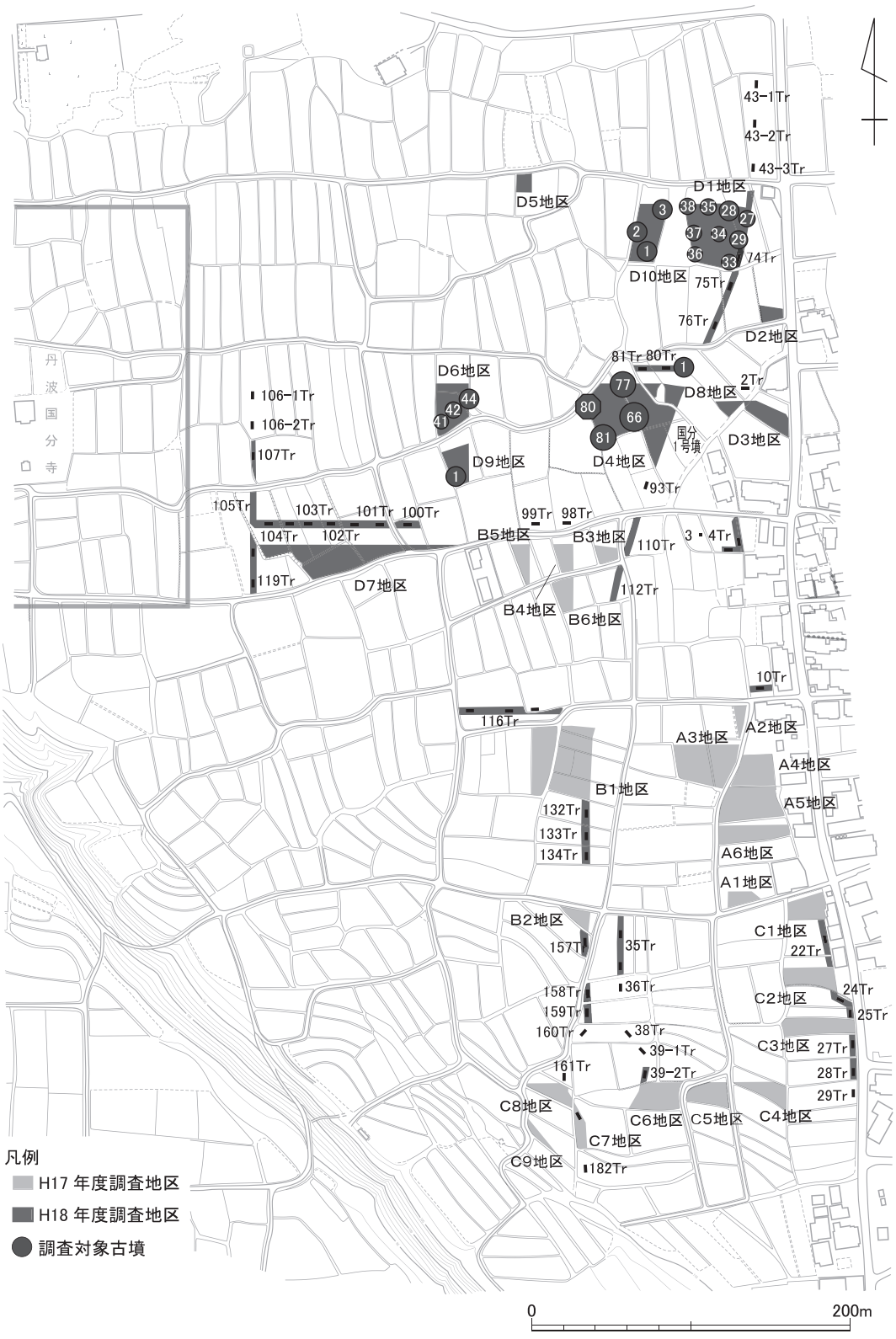
本報告の執筆は、当調査研究センター調査第２課調査第１係調査員石崎善久、調査第２係専門調査員黒坪一樹・岡﨑研一、調査第３係次席総括調査員伊野近富、同主任調査員森島康雄、同調査員筒井崇史・村田和弘・松尾史子がそれぞれ分担した。文責については各項の末尾に記した。また、本報告に掲載した写真のうち、遺構は各調査担当者が、遺物は調査第１課資料係主任調査員田中彰が撮影した。

なお、本年度は、現地での発掘調査はすべて終了したことから、報告書作成に伴う整理作業のみを実施した。報告書作成に係る経費は全額、近畿農政局が負担した。

（筒井崇史）



第１図　調査地位置図（1/50,000　京都西北部）



第２図　蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群調査区配置図（1/4,000）

検出遺構と出土遺物

今回の報告は、既報告分に引き続くものであるから、以下の項番号は『京都府遺跡調査報告集』第129冊に続くものとする。ご了承願いたい。

８．Ｄ６地区の調査

調査事例の少ない八角形墳（国分45号墳）を検出したＤ４地区の西約80mに設定した調査区である。遺構面は２面確認し、上層では平安時代ないし中世の遺構を検出した。また、古墳に伴う横穴式石室を確認していたが、墳丘そのものは堆積土で埋没していたため、一部、重機を利用しな



第３図　Ｄ６地区検出遺構配置図（1/200）

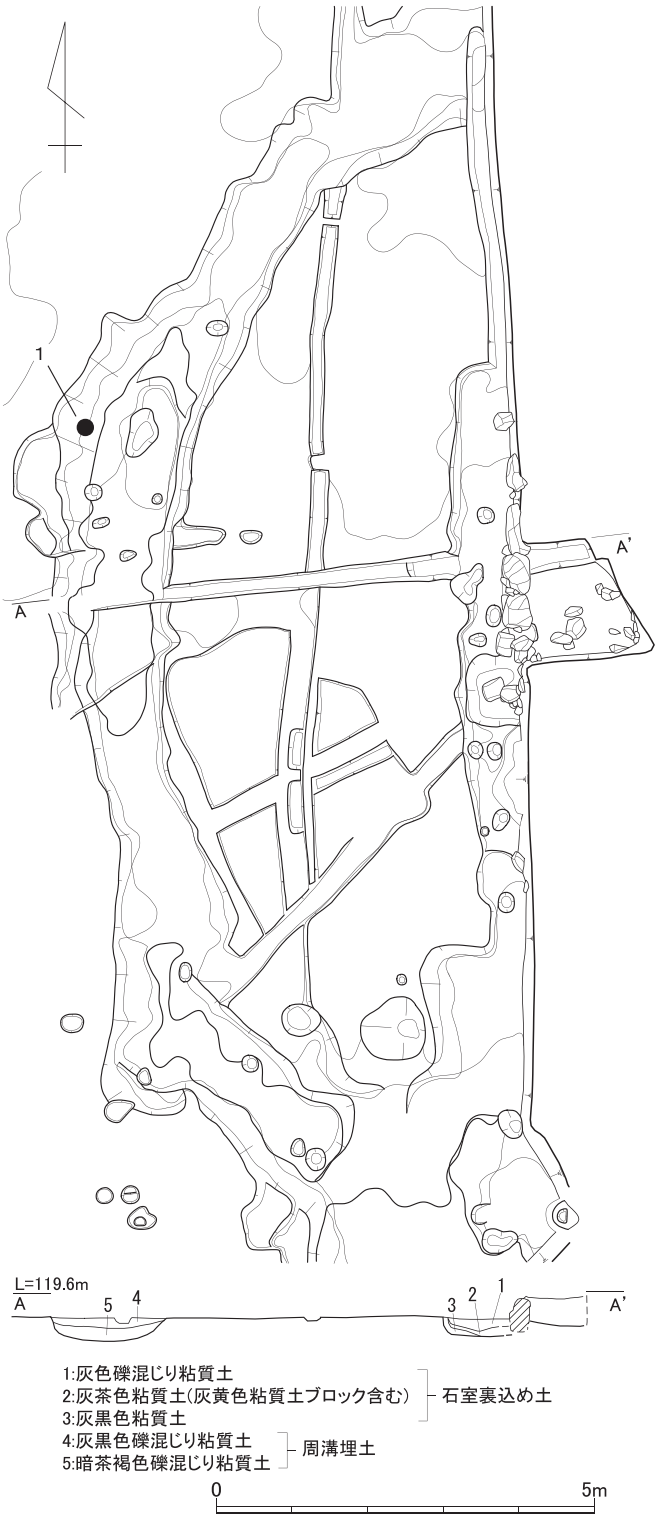
がら、墳丘の検出に努めた。下層遺構として古墳を３基検出した(第３図)。

(１)古墳時代の遺構・遺物

横穴式石室を内部主体とする古墳を３基検出した。

①国分53号墳

位置　調査区の東辺中央付近で検出した。調査区東壁と石室の右側壁がほぼ一致して検出された。したがって、墳丘の東半部については調査区外に位置する。なお、石室床面の標高は約119.1mである。



第４図　国分53号墳墳丘測量図および土層断面図

墳丘(第４図)　墳丘のおおよそ西半部を検出した。墳丘は大きく削平されており、石室を構成していた石材も１石分が残存する程度である。墳丘の周囲を幅1.2～1.8m、深さ20～35cmの周溝が弧状にめぐる。周溝の南端は石室の前庭部へとつながる。前庭部も西半部を検出したのみであるが、「ハ」字状に開く。周溝から復原できる国分53号墳の規模は、直径14～15m程度の円墳である。

石室　調査区の東壁にほぼ一致して横穴式石室の右側壁を検出した。この石室については、造成部分の設計を一部変更の上、現地で保存されることになったため、石室内部を部分的に調査したに留まる。奥壁が未確認であるが、前庭部の存在や石室掘形の形状から、ほぼ南に開口する横穴式石室と考えられる。

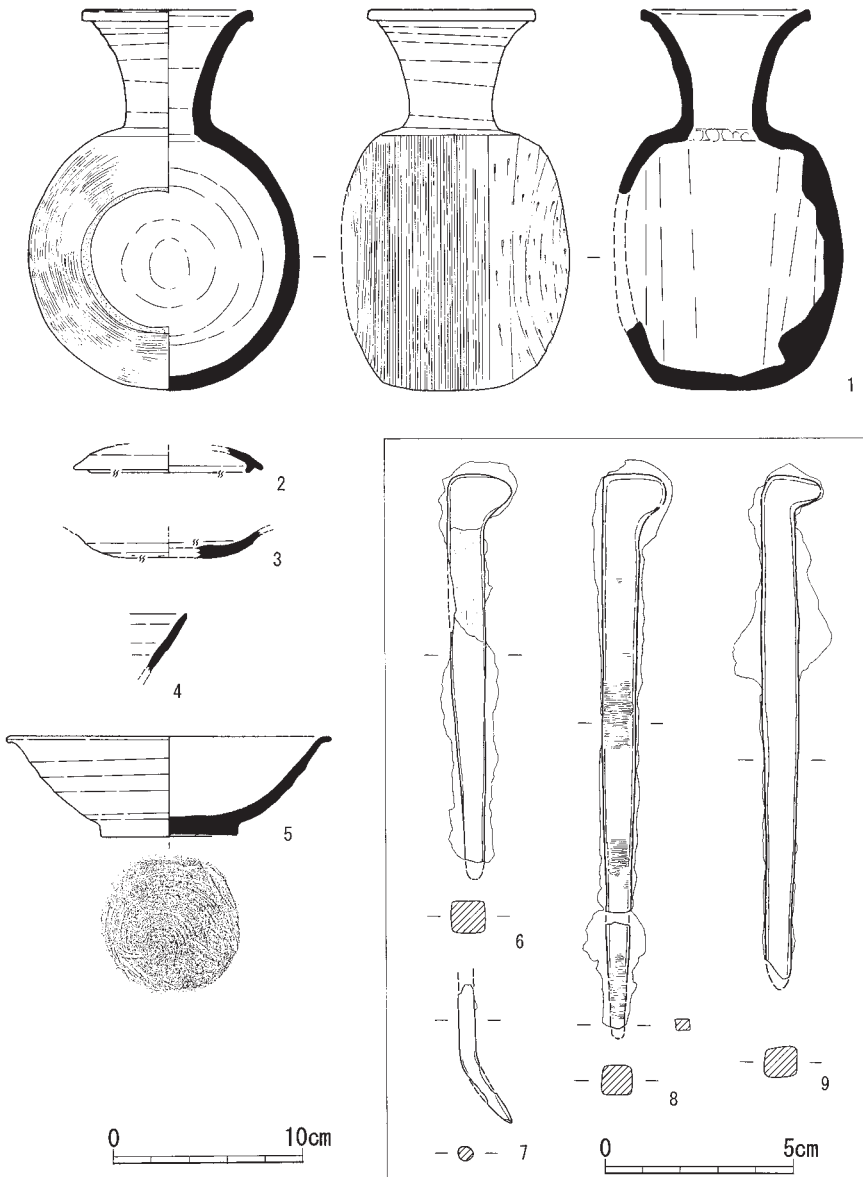
石室は基底の１石が残存する程度で、検出した右側壁も中央部から南側の石材は抜き取られていた。奥壁は調査区外に位置するため、詳細は不明である。

石室の規模は全長３ｍ以上、幅１ｍ以上を測る。石室の主軸はおおむね

南北方向である。石室掘形は奥壁側の北西角を検出しており、全長7.8m、深さ20cm前後を測る。

遺物出土状況　国分53号墳に伴う遺物としては、周溝北西部の斜面にほぼ接して須恵器提瓶（1）が出土した。前庭部からは須恵器片（2・3）が出土した。石室内の副葬品が掻き出されたものと考えられる。石室内を部分的に掘削している際にも須恵器片（4）が出土した。

一方、石室の内部を部分的に調査したところ、平安時代の須恵器椀１点と鉄釘４点が出土した（第５図５～９）。５は口縁部を上に向けた状態で出土した。６～９は５の周囲から出土した。なお、８は垂直方向に立った状態で、９は水平の状態で出土した。



第５図　国分53号墳出土遺物実測図

出土遺物（第５図）　国分53号墳に伴う遺物として須恵器４点がある（１～４）。また、石室を平安時代に再利用した際の遺物として須恵器１点、鉄製品４点がある（５～９）。

１は周溝から出土した。須恵器提瓶と考えられるが、口縁部の形態が、やや長く延びて外反している。なお、体部の閉塞に用いた粘土板は剝離し失われている。２～４は須恵器杯H[注2]や杯G蓋などの小破片である。２・３が国分53号墳の築造時期ないし追葬時期を示すと考えられる。２・３は飛鳥時代前半に位置づけられる[注3]。

５は石室の再利用に伴う須恵器椀である。糸切り痕を残す底部から、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は大きく外反する。平安時代中期のものと考えられる。６～９は５とともに出土した鉄釘である。断面形が方形を呈する大型の鉄釘で、石室の再利用の際に埋納された木櫃など

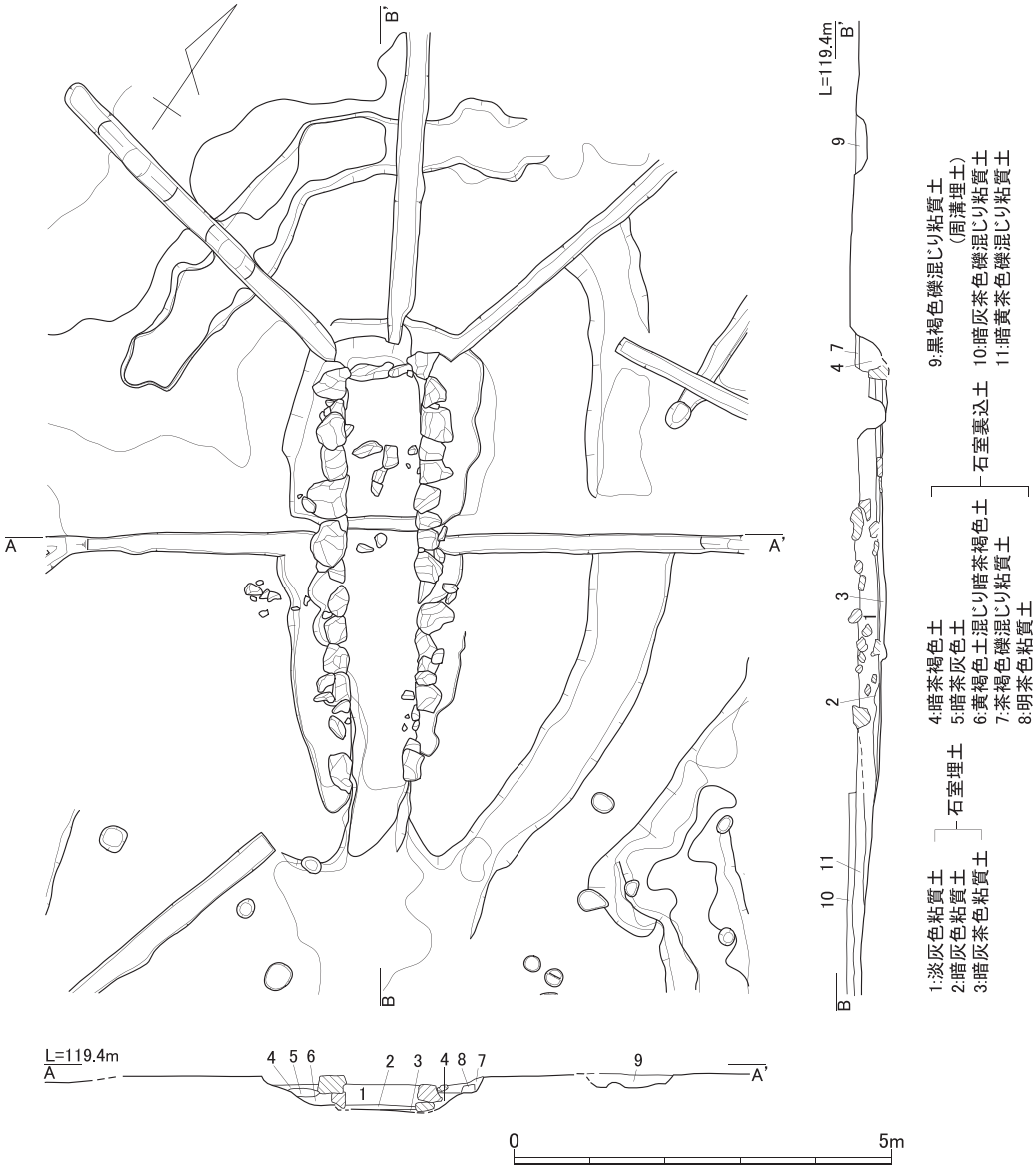
に使用されていたものであろう。

②国分54号墳

位置　国分53号墳の南西側にほぼ接して築造された古墳である。石室床面の標高は約118.8mである。

墳丘（第６図）　墳丘は上半部が大きく削平を受けていたが、古墳の周溝を検出した。周溝は幅0.7～1.0m、深さ15cm前後を測り、古墳の北西側から南東側にかけて残存する。周溝は石室前庭部へとつながる。なお、南西側の周溝は検出されなかった。ほぼ接して国分55号墳が存在するため、55号墳の築造に伴って削平された可能性もある。ただし、石室内出土遺物からは時期差は認めにくい。周溝から復原できる古墳の平面形は石室の主軸方向に長い、楕円形を呈する。墳丘の規模は長軸10.5m、短軸7.7mを測る。

石室（第７図）　おおむね南東方向に開口する無袖式の横穴式石室である。上半部が削平されて



第６図　国分 54 号墳墳丘測量図および土層断面図

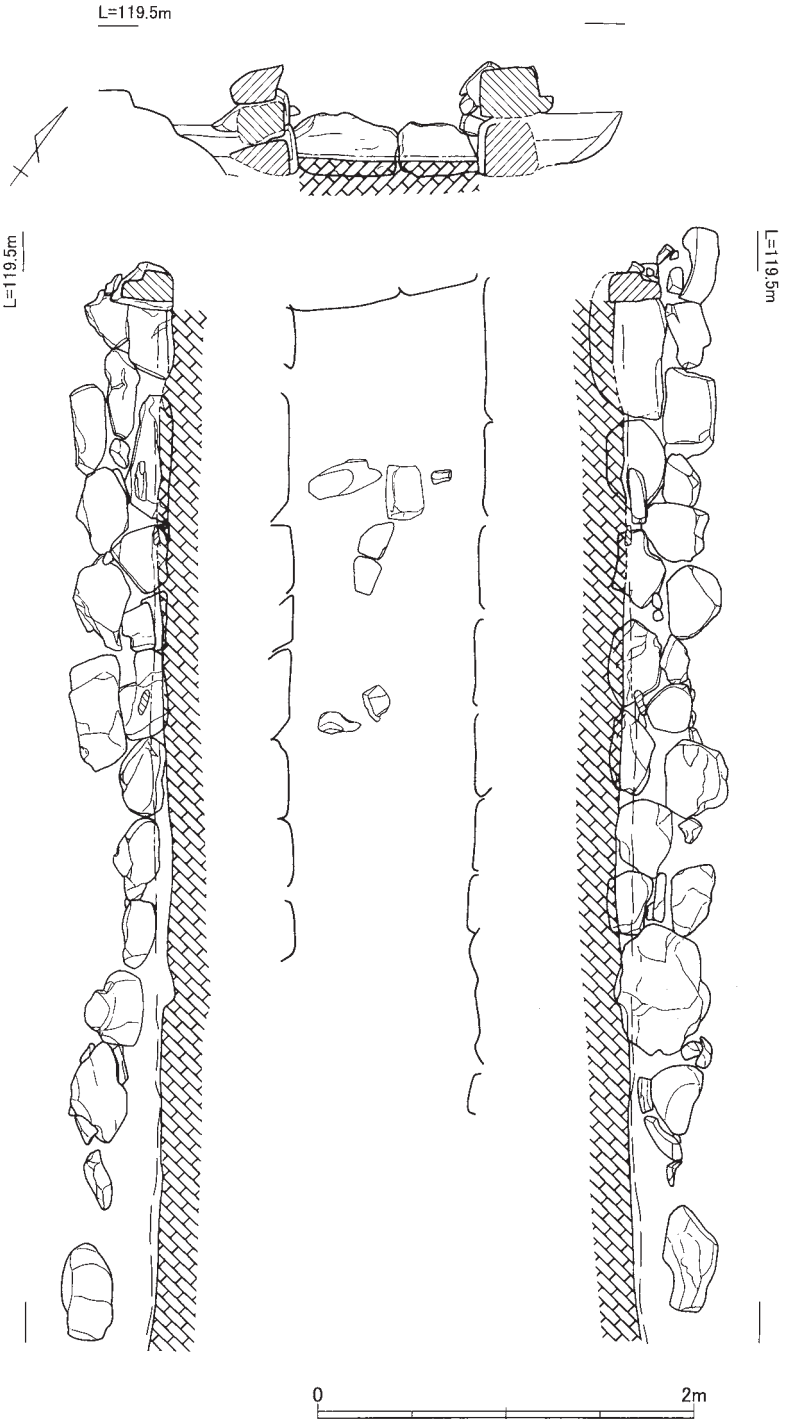
いるものの、基底石と部分的に２石目が残存していた。

奥壁は石材２石を横位に置いて構成している。

両側壁とも石材を横位にに用いて壁面を構成している。石材の積み方はやや乱雑である。左側壁では奥壁から約3.3m付近にやや大型の石材が使用されている。袖部を意識していると考えられるが、右側壁には同様の石材はみられない。この大型石材よりも羨道側の石材は両側壁とも、石材を掘形の底面から若干浮いたような状態で検出した。

石室床面には敷石等の施設はなく、若干乱れているものの、棺台と思われる石材を検出した。

石室の規模は全長5.4m、奥壁付近の幅0.95mを測る。石室の主軸は北に対して約35°西に振る。



第７図　国分54号墳横穴式石室実測図

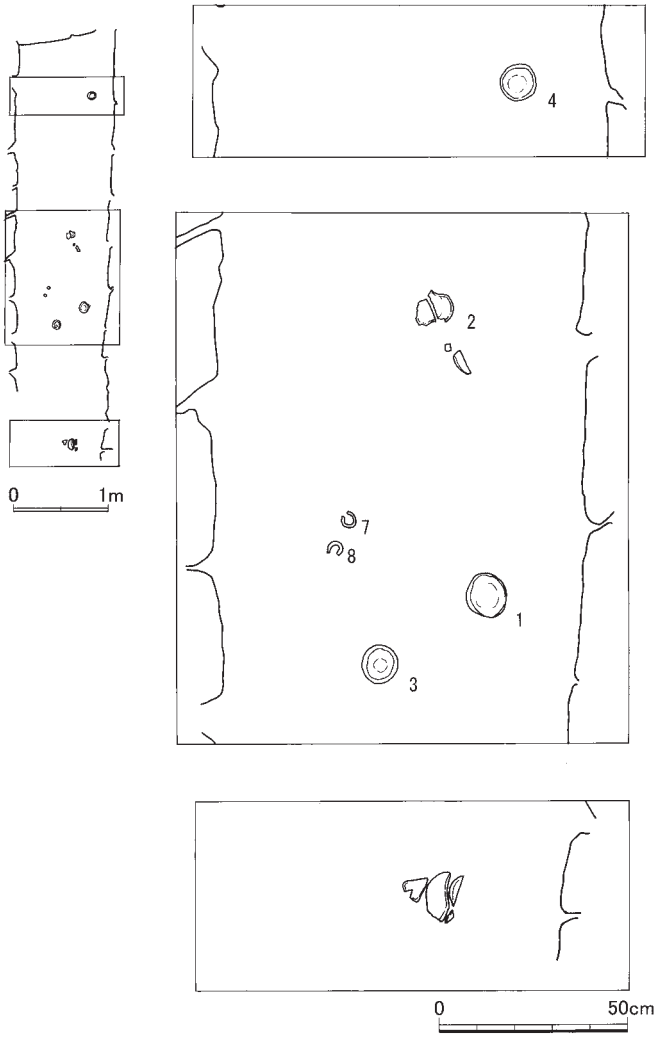
遺物出土状況（第８図）

遺物はほぼ石室床面上で出土した。出土位置は大きく３か所に分かれ、奥壁寄りでは土師器杯（４）が出土した。石室中央部近では須恵器杯Ｈ蓋（１・２）、須恵器杯Ｈ（３）、耳環２点（７・８）が出土した。このほか羨道付近の埋土から須恵器甕（５）や土師器皿（６）の破片が出土した。

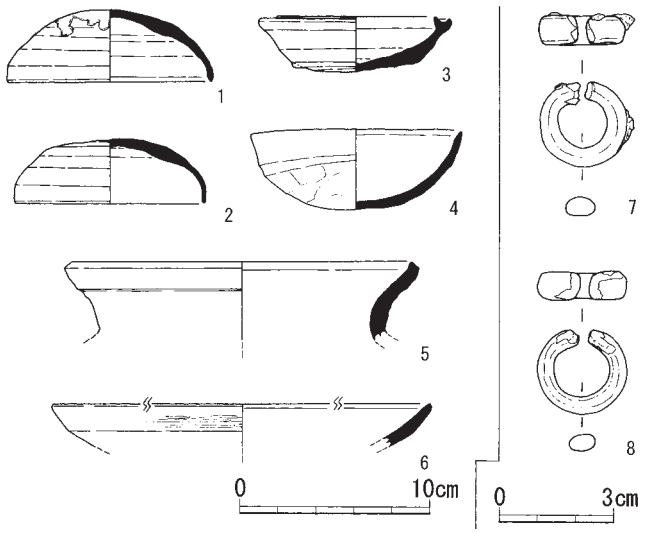
出土遺物（第９図）　国分54号墳に伴う遺物として須恵器４点･土師器２点､耳環２点がある。１・２は須恵器杯Ｈ蓋である。天井部に回転ヘラケズリ調整を施さない。３は須恵器杯Ｈである。底部はヘラキリ後不調整である。５は須恵器甕である。４は土師器杯である。椀状を呈する。６は

土師器皿の破片である。７・８は金銅製耳環である。１～４は飛鳥時代中頃に位置づけられる。

③国分55号墳



第８図　国分 54 号墳遺物出土状況図



第９図　国分 54 号墳出土遺物実測図

位置　国分54号墳の南西側にほぼ接して築造されている。石室床面の標高は約118.8mである。

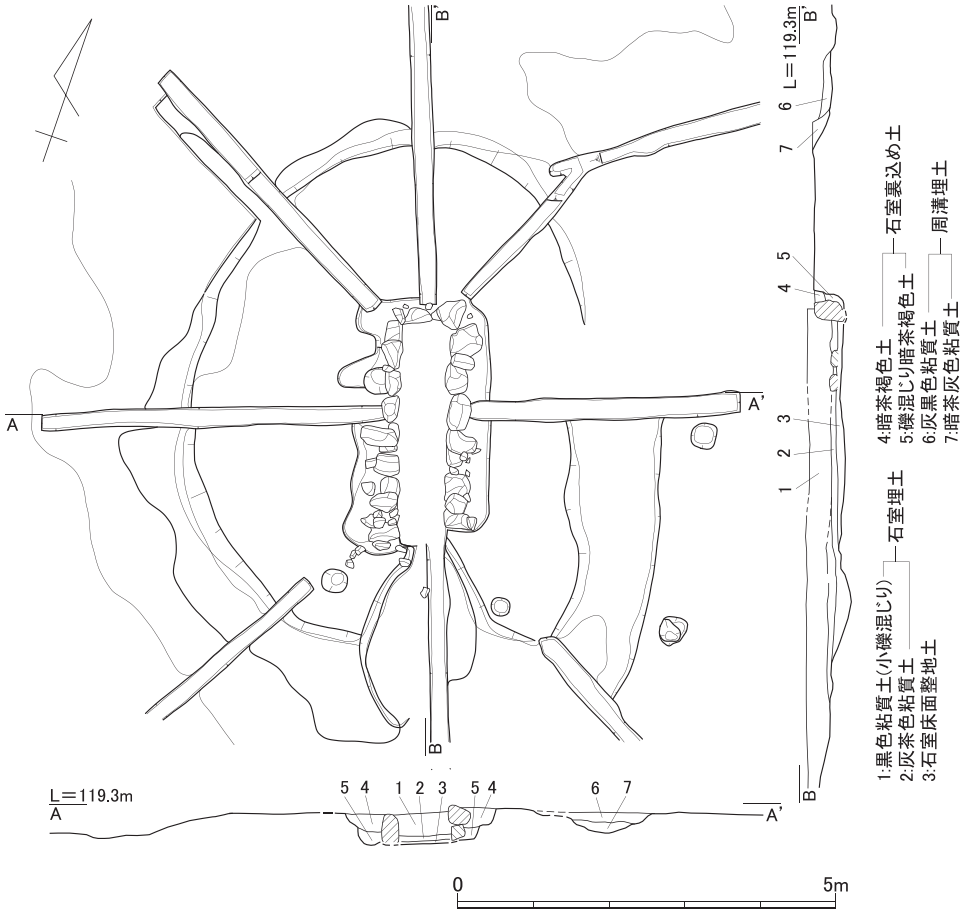
墳丘（第10図）　墳丘は国分53・54号墳と同様に、上半部が大きく削平を受けていた。古墳の周溝は南東部でのみ検出した。周溝は幅1.0～1.2m、深さ30cm前後を測る。周溝は石室の前庭部へとつながる。周溝から復原できる古墳の平面形は石室の主軸方向にやや長い、楕円形を呈する。墳丘の規模は長軸7.0m、短軸6.5mを測る。

石室（第11図左）　国分55号墳の石室はおおむね南南東方向に開口する無袖式の横穴式石室である。上半部が削平されているものの、右側壁では基底石が、左側壁では基底石と部分的に２石目が残存していた。

奥壁は石材２石を用いて構成されている。

右側壁は奥壁から1.3m付近まで石材を立位に用いており、それよりも羨道側では横位に用いる。左側壁は石材をおおむね横位に用いて壁面を構成している。石材の積み方はやや乱雑である。右側壁では奥壁から1.3mのところで石材の用い方が変化するので、袖部を意識していると考えられる。ただし、左側壁にはこのような徴候はない。

石室床面には敷石等はなく、また棺台と思われるような石材も検出し



第10図　国分55号墳墳丘測量図および土層断面図

なかった。

石室の規模は全長3.0m、奥壁付近の幅0.7mを測る。石室の主軸は北に対して約21°西に振る。

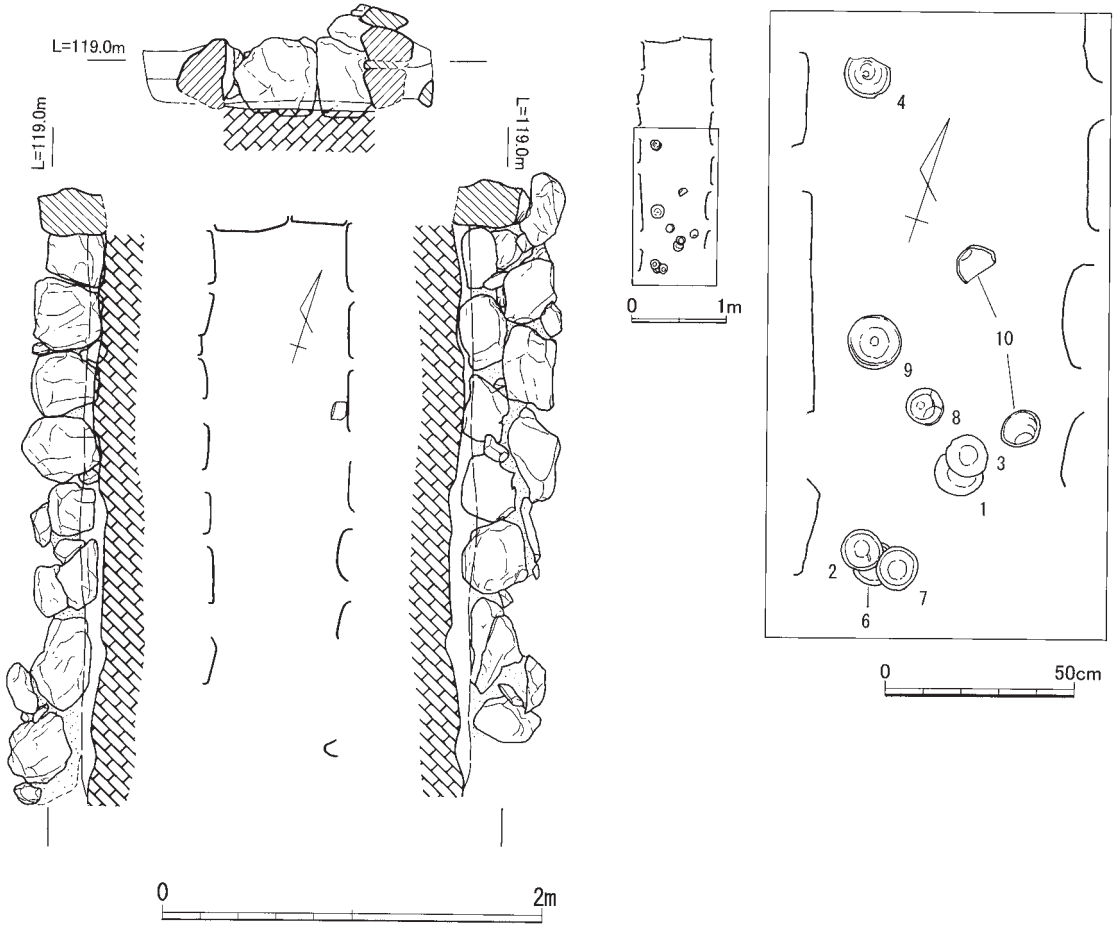
遺物出土状況（第11図右）　小規模な石室であるが、副葬されていた土器の点数が多い。遺物は石室中央部から石室入り口付近にかけてまとまって出土した。

出土遺物（第12図）　国分55号墳に伴う遺物として須恵器10点がある。２以外は完形である。１は杯Ｈ蓋、２～７は杯Ｈである。いずれも天井部ないし底部はヘラキリ後不調整もしくはナデ調整である。８は焼け歪みが著しいが、杯Ｇと考えられる。３・８は底部外面にヘラ記号が認められる。９はやや大型の椀で、若干焼け歪む。10も椀と考えられるが、あまり例を見ない器形である。口縁部にヨコナデ調整を施す。外面は縦方向にヘラケズリ調整を施す。全体に焼け歪みが著しい。１～８は飛鳥時代中頃に位置づけられる。

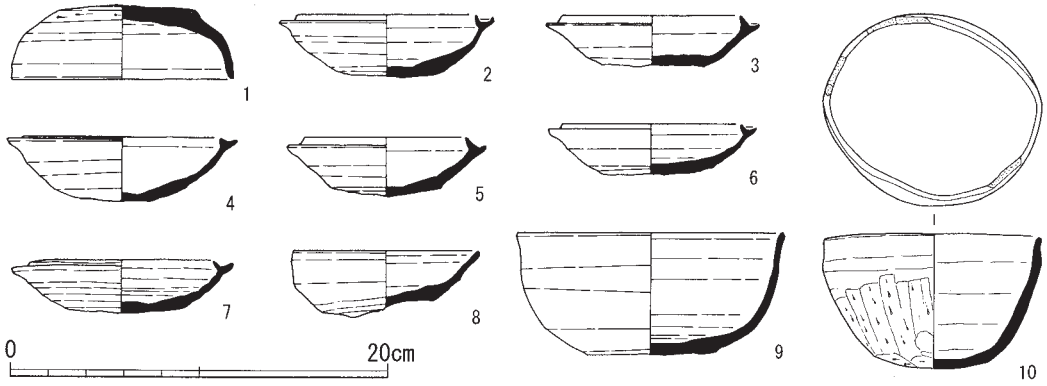
（２）平安時代・中世の遺構・遺物

①掘立柱建物跡ＳＢ01（第13図上）　調査区の北西部で検出した。桁行４間以上（約8.5m以上）、梁行２間（約6.0～6.5m）の総柱の建物である。柱筋や柱間はやや不揃いである。建物の方位は北に対して約３°西に振る。柱穴はおおむね直径20～30cm、深さ25～50cmを測る。

各柱穴から小片であるが、遺物が出土した（第14図５～12）。５は柱穴ＳＰ13から出土した土師器皿である。６・７は柱穴ＳＰ19から出土した土師器椀の底部で、６は高台を持つ。７は底部外



第11図　国分55号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図

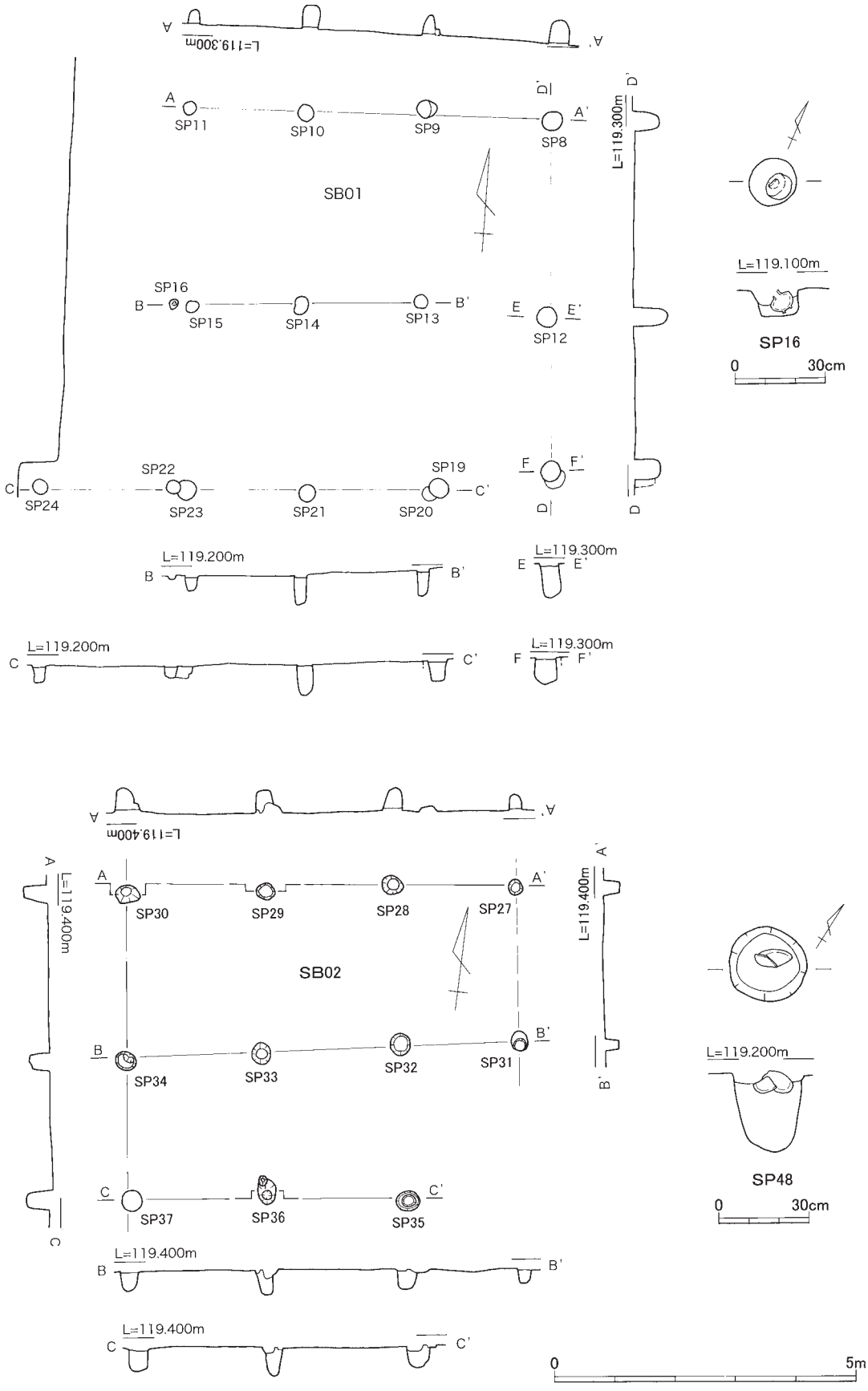


第12図　国分55号墳出土遺物実測図

面に糸切り痕がみられる。８・９は柱穴ＳＰ14から出土した瓦器椀である。10も柱穴ＳＰ14から出土した土師器の杯または皿の破片である。11は柱穴ＳＰ21から出土した瓦器椀である。12は柱穴ＳＰ９から出土した土師器の小皿である。

②掘立柱建物跡ＳＢ02（第13図下）　調査区の南西部で検出した。桁行３間（約6.5m）、梁行２間（約5.2m）の総柱の建物である。柱筋や柱間はやや不揃いである。建物の方位は北に対して約３°30′西に振る。柱穴はおおむね直径30cm前後、深さ25～40cmを測る。

遺物は少量出土した（第14図４・13）。４は柱穴ＳＰ36から出土した「て」字状口縁を呈する土



第13図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02実測図

師器皿である。13は柱穴ＳＰ28から出土した土師器の羽釜である。

③その他の柱穴　上記の掘立柱建物跡以外にも若干の柱穴を検出し、遺物も少量出土した。第14図１は柱穴ＳＰ16から出土した小型の須恵器長頸壺で、口縁部を欠損する。第14図２・３は柱穴ＳＰ48から出土した土師器皿である。いわゆる「て」字状口縁を呈する。

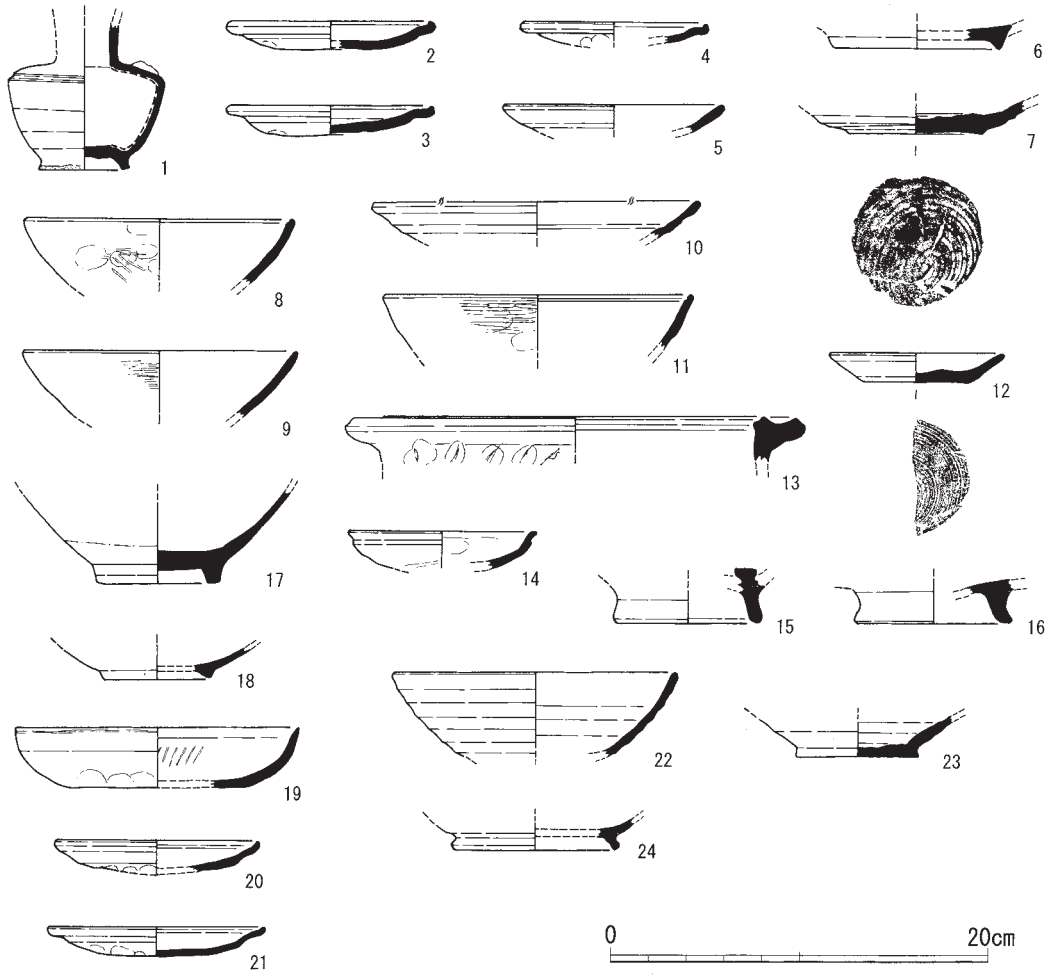
④その他の遺構　耕作に伴うと思われる素掘り溝ＳＤ01～07を検出し、白磁椀や瓦器皿、土師器椀・杯などが出土した（第14図14～17）。また、調査区の南東隅で大型の土坑ＳＫ25を検出し、瓦器椀の底部の破片が出土した（第14図18）。

（３）包含層出土遺物

遺構面の精査中もしくは古墳の周溝が埋没する過程で混入したものについて、包含層出土遺物として報告する（第14図19～24）。

19は土師器杯Ａである。内面に暗文を施す。奈良時代のものと考えられる。20・21は土師器皿である。いずれも「て」字状口縁を呈する。21はやや薄手の作りである。22は須恵器椀の口縁端部である。23は須恵器椀の底部である。平高台で、見込み部分が凹む。糸切り痕跡が認められる。24は灰釉陶器椀もしくは皿の底部である。20～24は平安時代のものと考えられる。

（筒井崇史）



第14図　Ｄ６地区出土遺物実測図

９．Ｄ９地区の調査

Ｄ６地区の南側、農道を挟んで設定した調査区である。同じ水田の北端部は遺構面が保護されることから調査は行っていない。耕作土と床土を除去すると、おおむね地山となり、調査地南半部に遺物包含層が存在する。地山上で、古墳時代と中世の遺構・遺物を検出した(第15図)。

(１)古墳時代の遺構・遺物

墳丘が完全に削平された古墳１基を検出した。古墳は横穴式石室を内部主体とする。

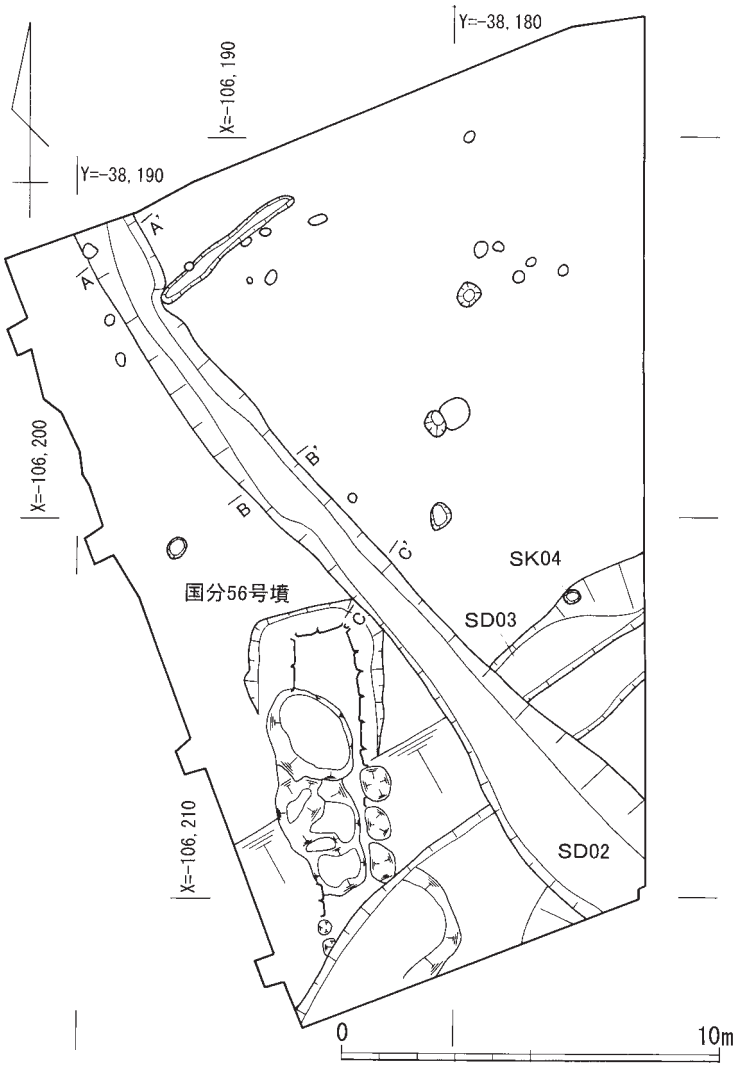
①国分56号墳

位置　Ｄ９地区の南半部に位置する。石室床面の標高は約118.7ｍである。

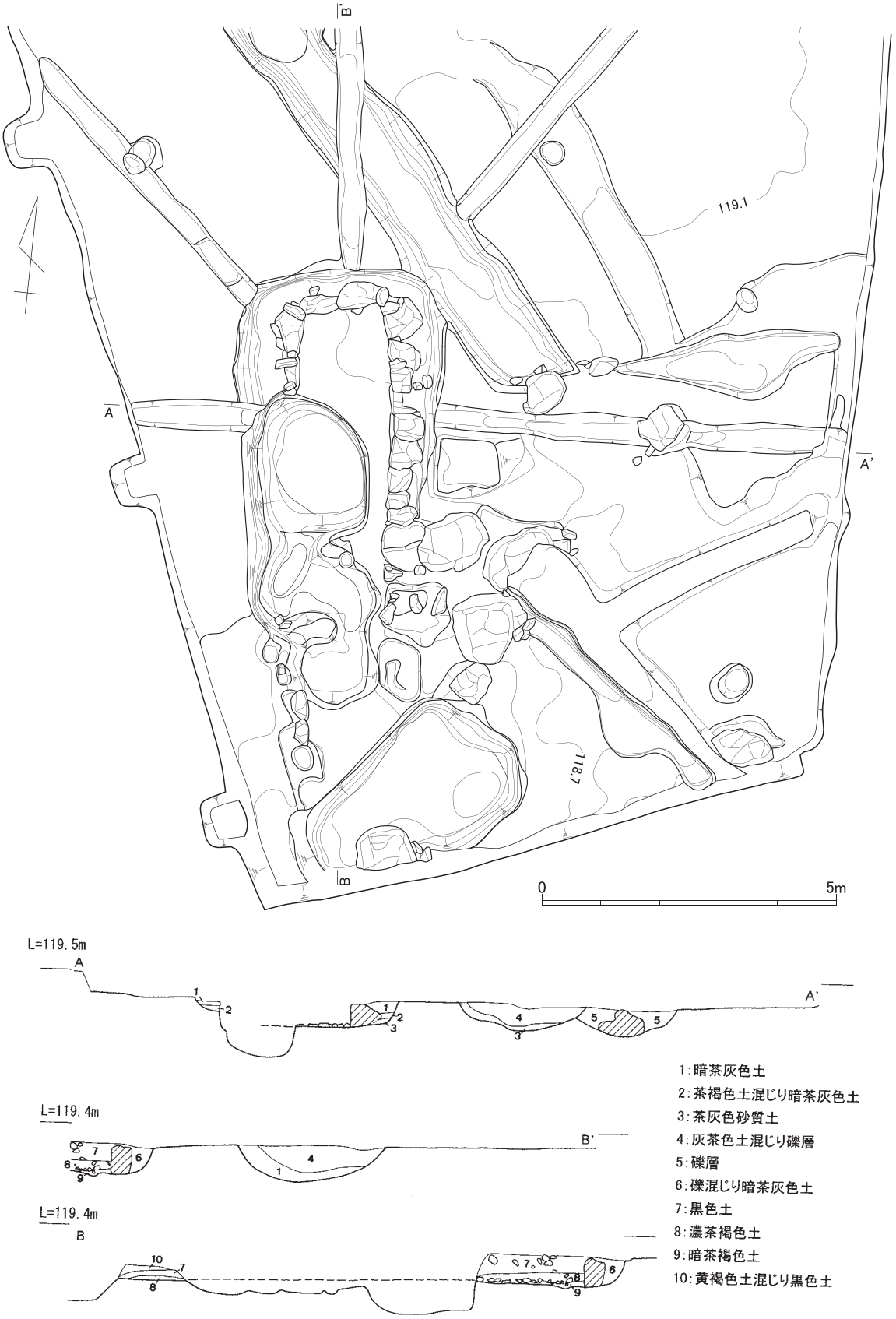
墳丘(第16図)　墳丘だけでなく、周溝の痕跡も検出することができず、墳丘は完全に削平されてしまったと考えられる。したがって、古墳の規模や墳形は不明である。

石室(第17図)　上半部が完全に破壊されており、石室は基底石から１、２石分が残存するにすぎない。玄室の左側壁は奥壁から約４ｍまでの基底石が残存していた。羨道部の左側壁は石材を東に向かって倒されたような状況で検出した。右側壁は奥壁から約1.4ｍまでと羨道部で２石を検出した。右側壁の玄室中央付近から羨道部にかけての石材は抜き取られ、直径1.2ｍないし２ｍ、深さ0.3～0.7ｍの楕円形を呈する土坑が、床面を大きく破壊して穿たれていた。この土坑から一辺約0.8～1.5ｍを測る石材を検出した。

以上のような石材の残存状況や抜き取り痕から、石室の規模は、全長8.5ｍ、奥壁付近で幅1.4ｍ、玄室中央付近で幅1.6ｍ、羨門付近で幅1.1ｍを測る。玄室中央付近が最大幅となる、いわゆる胴張りの石室である。右側壁の大半は抜き取られていたが、左側壁を中軸ラインで反転すると、残存する右側壁付近になることから、無袖式の横穴式石室と考えられる。敷石の範囲から玄室と羨道が区別でき、玄室長3.6ｍ、羨道長4.9ｍを測る。



第15図　Ｄ９地区検出遺構配置図（1/200）



第 16 図　国分 56 号墳墳丘測量図および土層断面図

折り込み

第 17 図　国分 56 号墳横穴式石室実測図および遺物出土状況図

折り込み

掘形は、羨道部での石材の抜き取りによって攪乱されているため、全長は不明である。確認できたのは4.2m分のみである。なお、幅は約3.6m、深さは約0.6mである。石室の主軸は北に対して約６°西に振る。

奥壁は２石の大型石材を用いている。側壁は0.4～0.7m大の石材を使用している。平坦な自然面を意識しており、小規模な礫で安定を図っていた。玄室床面には、長さ15～25cm、幅10～20cmほどの扁平な石を敷き詰めて敷石とする。右側壁と奥壁付近には30～40cmを測る扁平な石を、敷石より３～５cm高く据えていたことから、棺台の可能性もある。なお、石室の破壊時期については、石材を廃棄した土坑から遺物が出土せず、明確な時期については不明である。

遺物出土状況（第17図）　古墳に伴う遺物には、須恵器・土師器、鉄器（銀装鉄刀・鉄鏃・鉸具・鐙・刀子）などがある。出土土器のうち、４・６・８・９・15・18・19・21・26・27は古墳に伴うと思われる遺物であるが、石材の抜き取り穴や中世の溝ＳＤ03から出土したもので、石室が破壊された際に混入したものと考えられる。

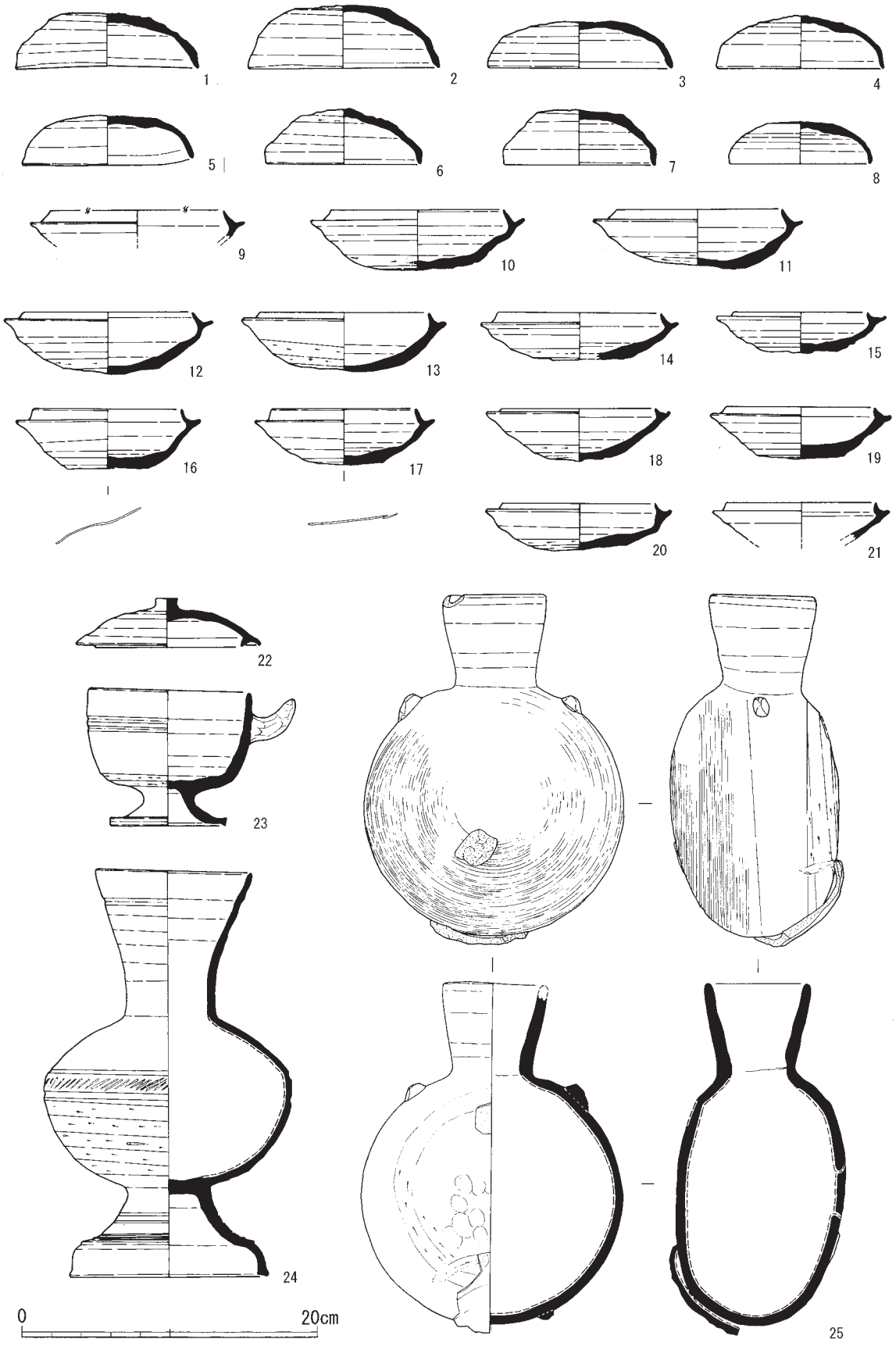
須恵器杯Ｈ蓋（１）・提瓶（25）、および銀装鉄刀（31）は羨道部の左側壁沿いの床面直上から出土した。なお、銀装鉄刀が羨道部から出土しているが、後世に動かされた可能性もある。馬具（51～57）は玄室中央の右側壁寄りの敷石上からまとまって出土した。おおむね原位置をとどめていると思われる。この範囲以外から出土した須恵器や鉄器などは、接合状況や敷石よりわずかに浮いた状態で出土したことなどから、原位置はとどめていないと考える。出土した須恵器に時期差が認められることから、追葬が行われたと考えられる。ただし、その回数については不明である。

これらの副葬品以外に、奈良時代の須恵器杯Ａ（30）が羨道部床面よりも約20cmほど浮いた状態で出土した。

（岡﨑研一）

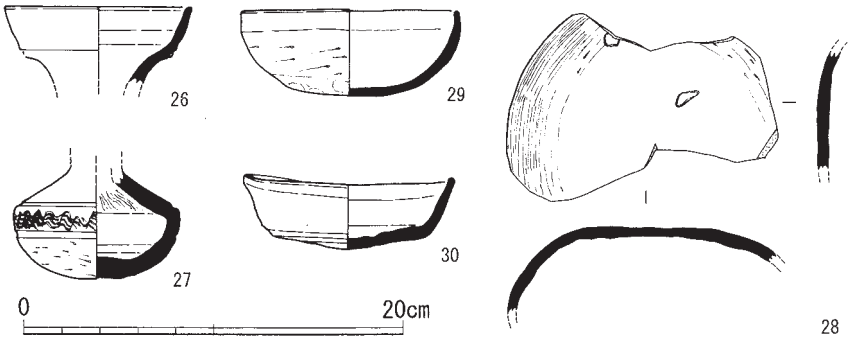
出土遺物（第18～21図）　国分56号墳に伴う遺物として、須恵器28点、土師器１点、鉄器34点がある。また混入品として奈良時代の須恵器１点がある。

１～28は須恵器である。１～８は杯Ｈ蓋である。いずれも天井部はヘラキリ後不調整である。若干、焼け歪むものもあるが、法量から３グループほどに分けられる。９～21は杯Ｈである。底部は13・16・17・20が回転ヘラケズリ調整を施す。ただし、ケズリ残した部分もみられる。その他はヘラキリ後不調整である。26・27は瑞の口縁部と体部である。体部外面の中位に波状文を施し、その上下に沈線を１条ずつめぐらす。底部には手持ちのヘラケズリ調整を施す。22・23は脚台付椀とその蓋である。ともに完形品である。22は内面にはかえりが見られ、ボタン状のつまみを有する。外面には自然釉が厚く付着している。23は牛角状の把手を持つ。23に22を載せると、上方からの自然釉の被り方が一致することから、セット関係にあると考えられる。24は脚台付長頸壺である。外上方に向かって開く口頸部と丸味を帯びた体部に、脚台が付く。体部は最大径付近に刺突文を施し、その上下に沈線を１条ずつめぐらす。体部下半は回転ヘラケズリ調整を施す。25・28は提瓶である。25は完形品である。外面に杯Ｈ蓋が融着している。湾曲する面にカキメ、平坦な面に回転ヘラケズリ調整を施す。28は体部の破片である。



第 18 図　国分 56 号墳出土遺物実測図（1）

29は土師器杯である。やや内湾気味の口縁部に、丸底の底部である。口縁部にはヨコナデ調整、その下半は手持ちのヘラケズリ調整、底部はナデ調整を施す。



第19図　国分56号墳出土遺物実測図（2）

30は須恵器杯Aである。焼け歪んでいるが、奈良時代のものと考えられ、古墳に伴うものではない。

（筒井崇史）

31～62は国分56号墳出土の鉄製品で、武器・工具・馬具・鏃などがある。

31は大刀である。全長78.9cmを測る。鞘の木質の一部が遺存する。鐔は鎚と別造りとなった喰出鍔であり、鍔部分に銀の薄膜がみられる。鉄地銀張とみられる。刀身はいわゆるカマス切先をもち、関は刃関であり、背関は現状では確認できないが、茎との関係から両関であるとみられる。茎には2か所の目釘孔が確認される。また目釘穴の間には径1.0～1.2cmを測る孔があり、方頭大刀であったものとみられる。

32～36は大刀(31)に伴う刀装具である。足金具(33)は吊金具部が中心にはこず、わずかに佩用側によるものとみられる。銀などの装飾は認められない。

37～48は鉄鏃である。総数8点以上を数える。いずれも同一型式の長頸鏃であり、鏃身部は腸抉をもつ三角形を呈する。篦被は棘状篦被である。

49は刀子である。刃部で折れ曲がっているが、2次的な土圧による変形とみられる。茎には木質が遺存しており、関は確認できない。

50～57は馬具である。50・51は鞍の鞍金具の可能性のある鋲具である。51には皮革状の付着物が観察される。52～55は木製鐙に伴う金具である。52・53は鋲具である。それぞれ、T字形の別造りの刺し金をもち、下部には革もしくは布製の鐙靼を連接するための軸をもつ。54・55は鍬先金具である。両者とも左右3鋲で構成され、ほぼ同形同大である。付着物からは鐙靼本体の材質を窺うことはできなかった。

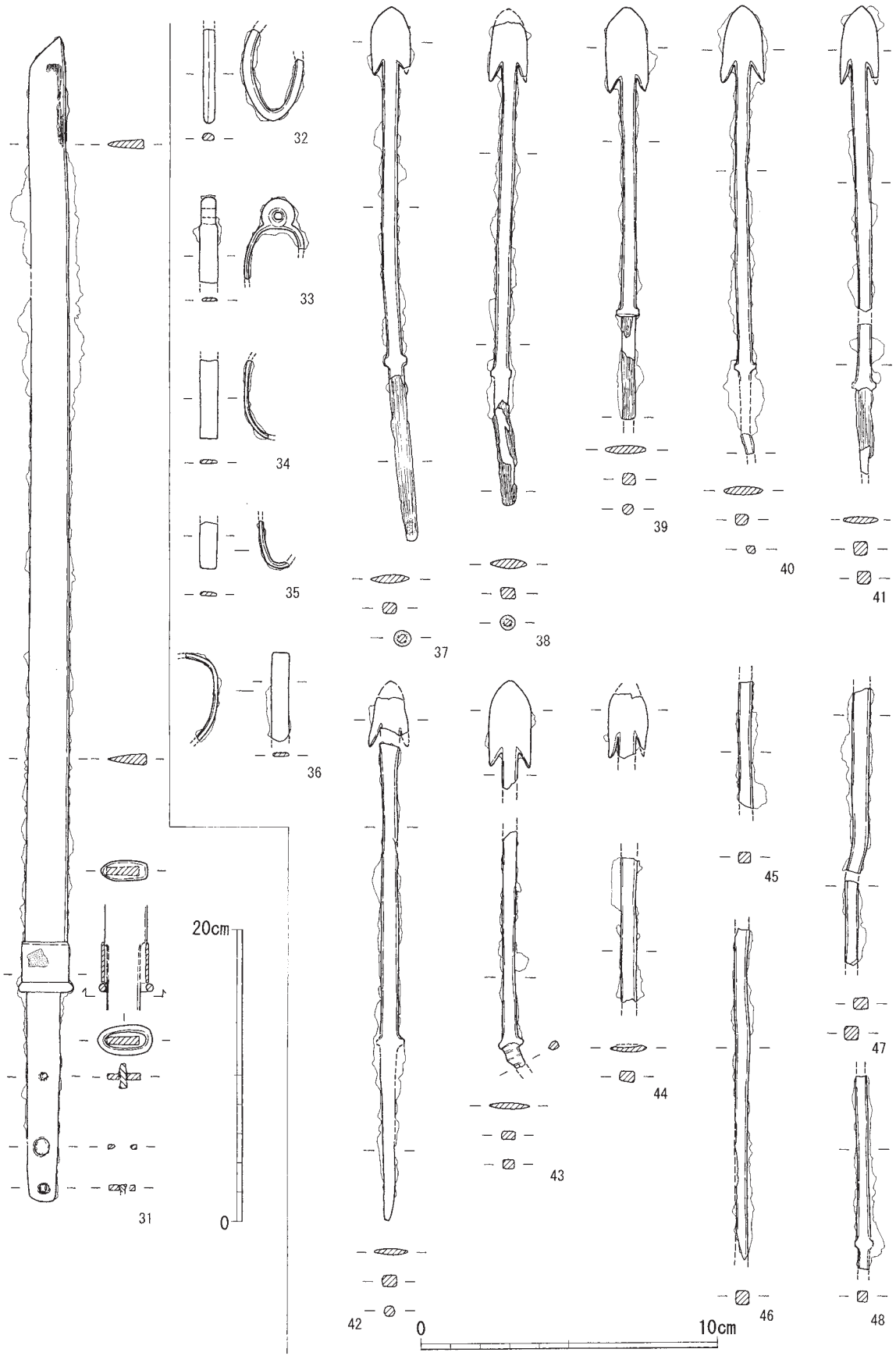
56は環状の鉄製品である。下辺はやや直線的に造られている。性格については不明であるが、50･51と劣化の度合いが酷似しているため､馬具の可能性が高い｡革金具などの用途が考えられる。

57・58は小型の鏃である。58は先端に木質が認められる。

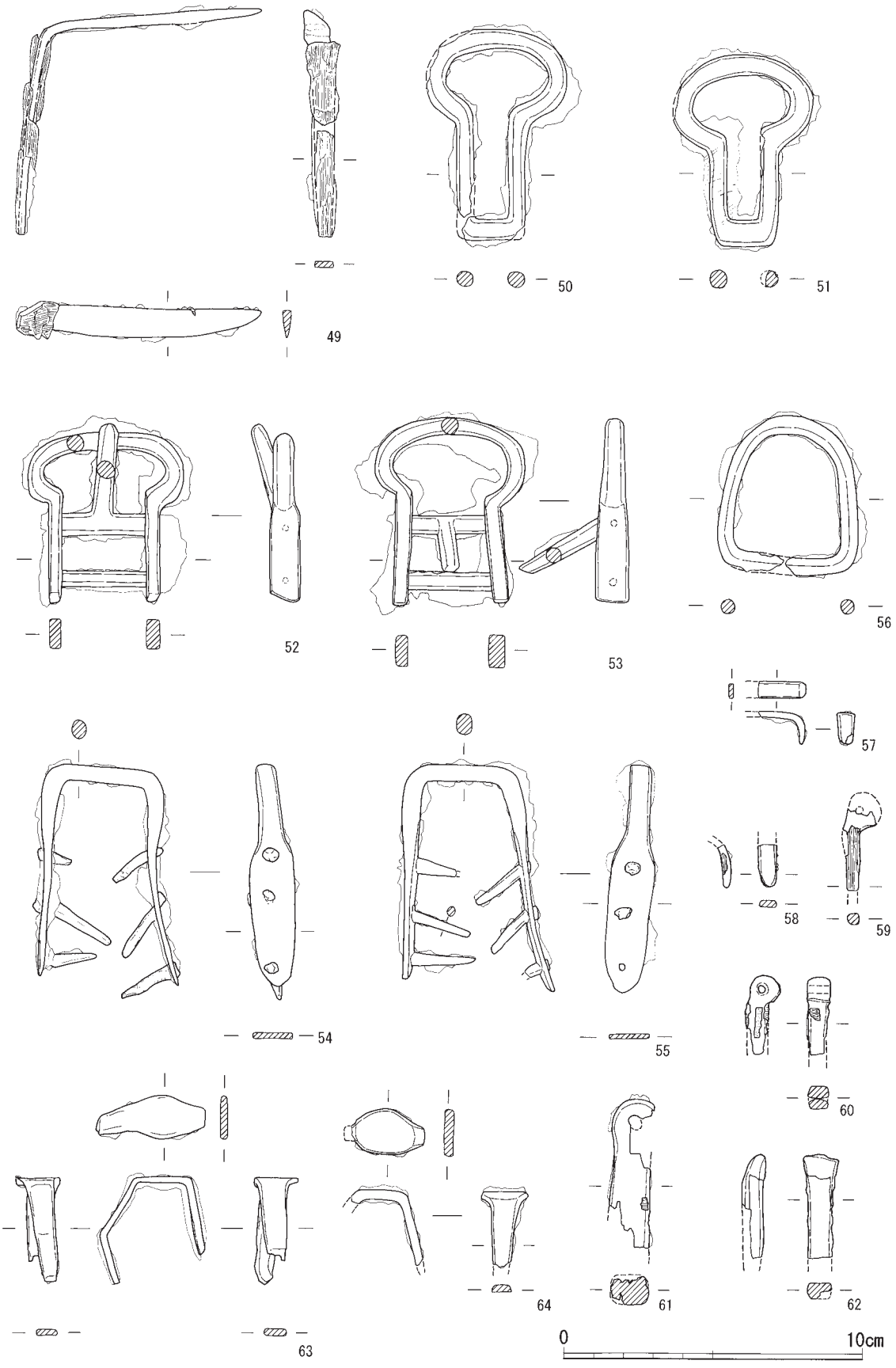
59～62は棒状の鉄製品である。いずれも欠損しているため、全容は不明であるが、頭部を環状に造り出している。59・60は鞍の鞍金具の刺し金の可能性を考えておきたい。61は轡の一部である可能性がある。62は性格不明である。

63･64は大型の鏃状の鉄製品である。

（石崎善久）



第 20 図　国分 56 号墳出土遺物実測図（3）



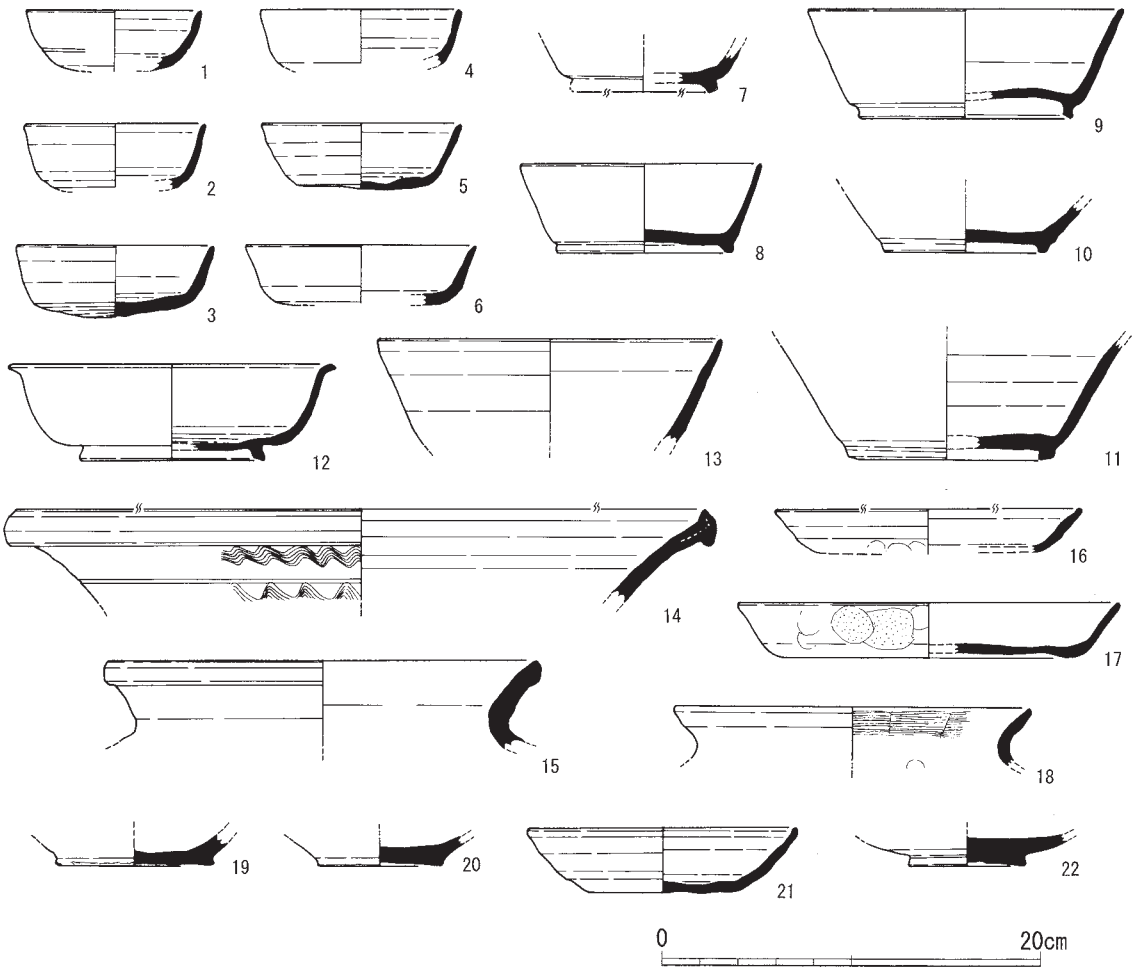
第 21 図　国分 56 号墳出土遺物実測図（4）

（２）中世の遺構・遺物

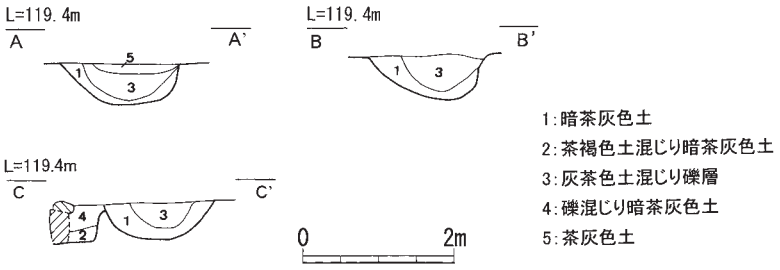
中世の遺構として溝２条、土坑１基を検出したほか、調査地南半部に南北5.5m、東西10mの範囲を覆う礫層から当該期の遺物が多量に出土した。礫層は調査地南端ほど厚く堆積しており、溝ＳＤ02・ＳＤ03の埋土とほぼ同じである。

①溝ＳＤ02（第23図）　調査地を北西から南東に向かって縦断する。検出長22.5m、幅1.4～3.4m、深さ0.5～0.6mを測り、溝の方位は北に対して約40°西に振る。埋土は、下層が暗茶灰色土、上層が拳大から人頭大の礫を多量に含む灰茶色土混じり礫層である。調査地南側では溝ＳＤ03と交差するが、切り合い関係があり、ＳＤ02の方が新しい。

出土遺物としては土師器・瓦器・瓦質土器・東播系須恵器・国産陶器・白磁・青磁などがある（第25図23～81）。23～56は土師器皿である。41～43は深身のタイプである。24・26～29・33・37・41は口縁部外面のヨコナデが弱く、指掌文が残る。45～52は口縁端部が明瞭に外折するタイプで、屈曲によってできた口縁部内面の稜線より上部に粗いハケ調整が残るものもみられる。全体に器壁が厚い。53～56は大型の浅いタイプで、色調は乳黄色～灰黄色を呈するものが大半で、33・44は明橙色を呈する。57は土錘である。58は瓦質土器羽釜である。内面に粗い横方向のハケ調整がみられる。59は瓦質土器すり鉢である。４条一単位のすり目が施されているが、底部付近

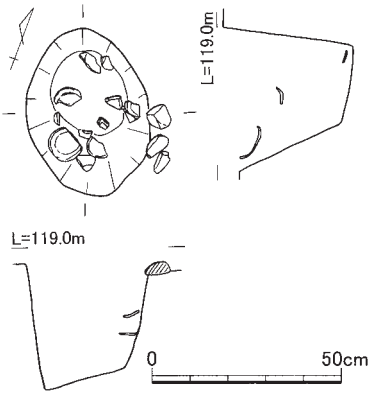


第22図　包含層出土遺物実測図（１）　奈良・平安時代



第23図　溝ＳＤ02土層断面図

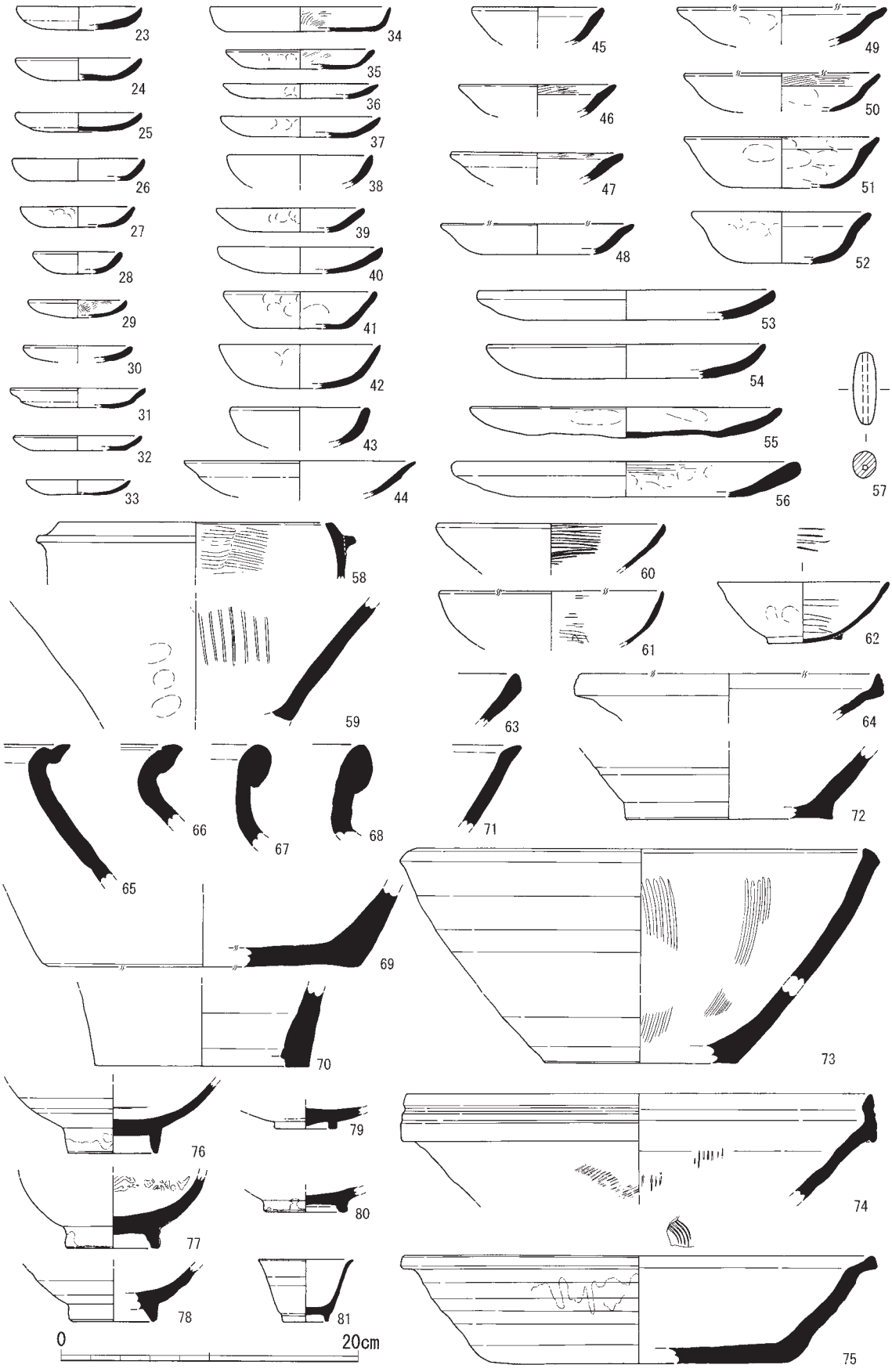
は使用による磨滅ですり目が失われている。60～62は丹波型瓦器椀である。60は内面にやや密な圏線ミガキが施される。61・62は内面に粗い圏線ミガキが、見込みにジグザグ状暗文が施される。63・64は東播系須恵器鉢である。64は硬質の土師器のような焼成で、表面にピンホール状のくぼみが無数にみられる。65・66は丹波焼甕である。65の外面には自然釉が掛かる。65は還元焔焼成で灰色、66は酸化焔焼成で赤茶色～橙茶色を呈する。67・68は備前焼甕である。口縁部を折り返して玉縁をつくっている。67は還元焔焼成、68は酸化焔焼成である。69は陶器甕である。体部外面と底部外面には板ナデがみられる。色調は灰色を呈する。丹波焼か。70は丹波焼壺である。胎土はやや砂っぽく、色調は灰色を呈するが、外面は暗茶褐色を呈する。71は丹波焼鉢である。色調は橙茶色を呈する。72は陶器鉢である。内面は使用により非常に平滑になっている。色調は淡灰色で、胎土は黒色粒を含み緻密である。備前焼か。73・74は備前焼すり鉢である。73は５条一単位のすり目が施されている。色調は灰色を呈し、胎土は緻密である。74はすり目の一部が見えるが、何条一単位であるかはわからない。色調は赤茶色を呈する。75は古瀬戸折縁皿である。内底面中央に５条の櫛描き文が施される。76・77は白磁椀である。77の内面には印花文が施される。また、内面の体部から立ち上がる部分に円周方向の擦痕が顕著にみられる。78・79は青磁椀である。78は被熱により釉の表面がザラつき、一部は発泡している。79は白磁皿である。80は青磁である。底部は蛇の目に釉剝ぎされて露胎である。81は白磁小杯である。胎土に細かな黒色粒を含む。



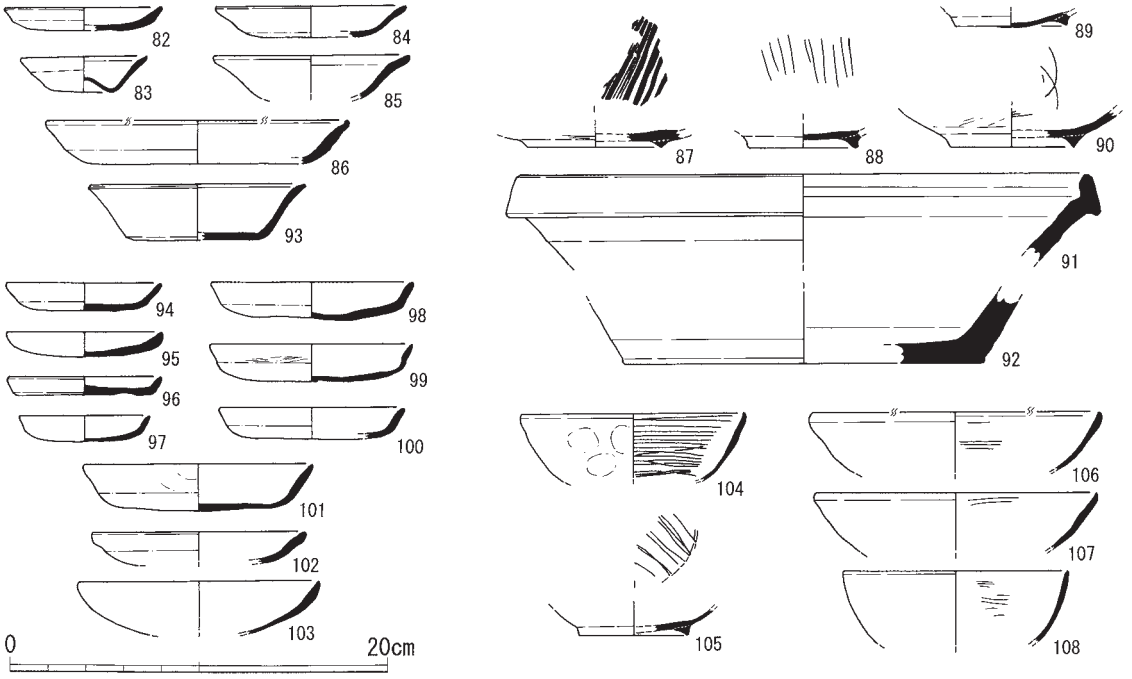
第24図　土坑ＳＫ04実測図

②**溝ＳＤ03**　調査地の南半部を北東から南西に向かって横断する。検出長14m、幅７m以上、深さ0.5mを測り、溝の方位は西に対して約35°南に振る。堆積土は茶灰色土と黒灰色土であるが、拳大から人頭大の石が多量に混じっていた。Ｄ７－１地区のトレンチ壁断面に、浅くＵ字状に窪む溝状の痕跡（ＳＤ10）を確認することができた。ＳＤ10はＤ７－１地区において平面的に検出することはできなかったが、ＳＤ03と同じ堆積状況であり、延長上に当たることから、ＳＤ03はＤ７－１地区まで延びていたと考えられる。当時の区画溝と考える。

出土遺物としては土師器・瓦器・東播系須恵器・国産陶器などがある（第26図82～93）。82～86は土師器皿である。82は乳橙色を呈する。83はヘソ皿、85は口縁端部が外折するタイプである。87～90は丹波型瓦器椀である。見込みの暗文は、87～89がジグザグ状、90が連結輪状である。91は東播系須恵器鉢である。肥厚した口縁部の外面と内面の全体に自然釉が掛かる。92は丹波焼壺



第 25 図　溝 S D 02 出土遺物実測図



第26図　溝ＳＤ03・土坑ＳＫ04出土遺物実測図

の底部である。底部外面が平滑に磨かれている。

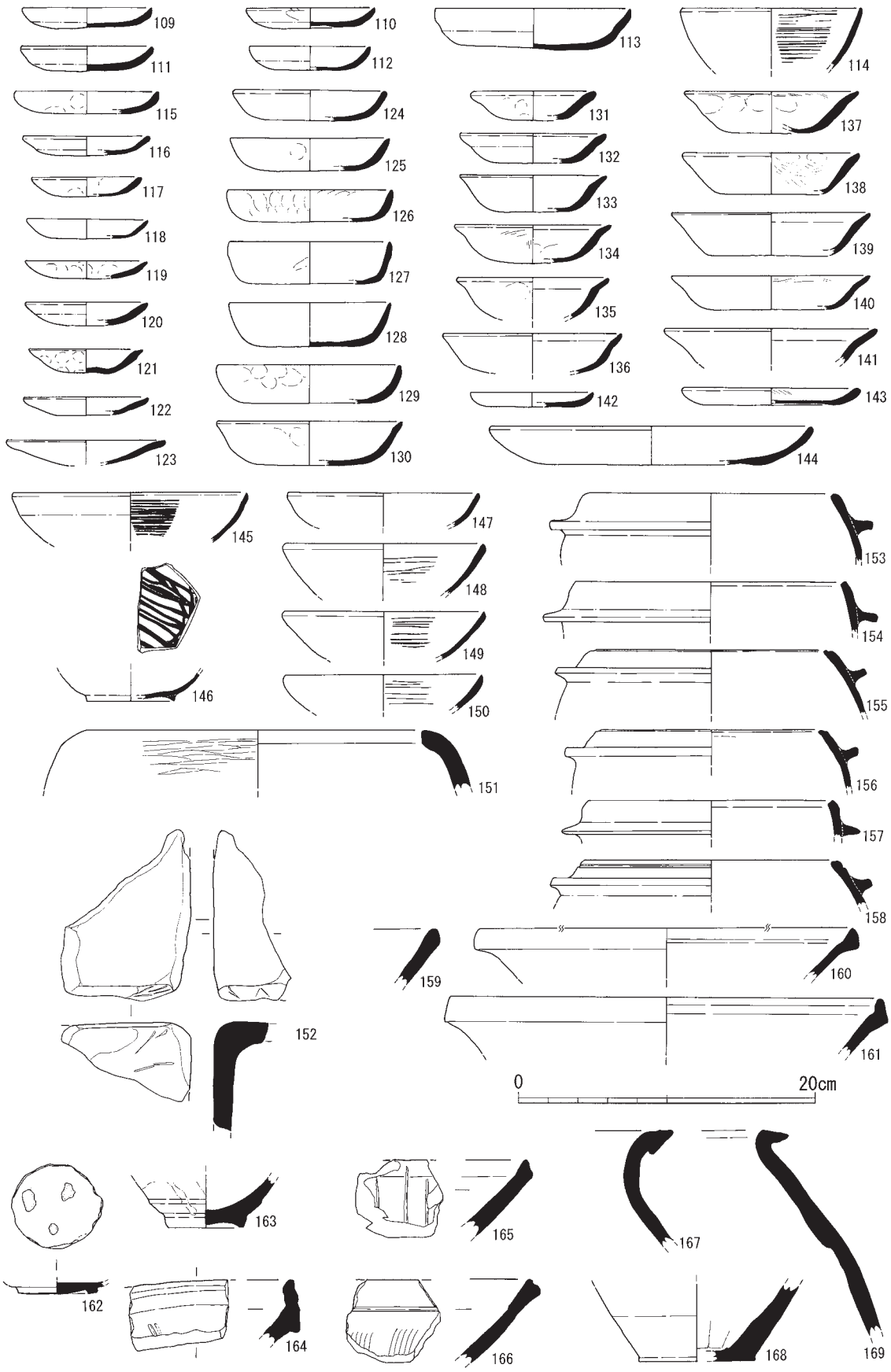
③土坑ＳＫ04（第24図）　調査区の南半部、溝ＳＤ03の北側肩付近で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.44m、短軸0.33m、深さ0.33mを測る。ＳＤ03完掘時に認められたことから、ＳＤ03以前の遺構と考える。

出土遺物としては土師器や瓦器などがある（第26図94～108）。94～103は土師器皿である。94～100は短く屈曲する口縁部の端部を尖り気味に納めるもの、101・102は緩やかに立ち上がる口縁部が「Ｓ」字状を呈するものである。104～108は丹波型瓦器椀である。13世紀中葉～後半の遺構と考えられる。

（岡﨑研一・森島康雄）

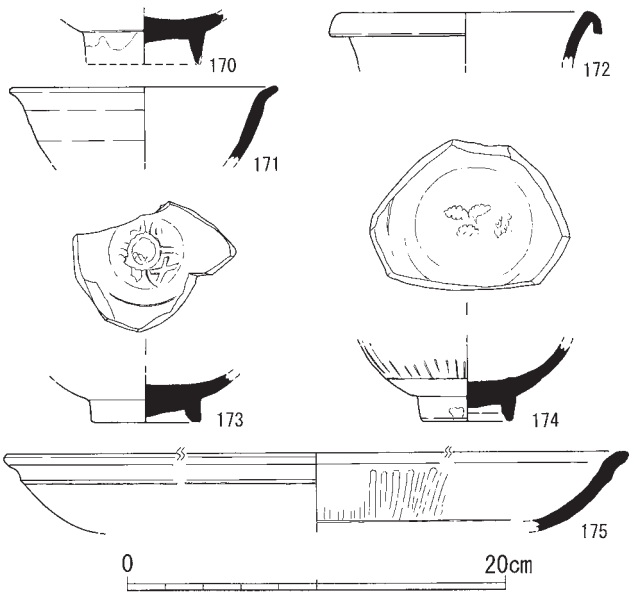
④国分56号墳羨門出土遺物　56号墳の羨門付近から土師器や瓦器などが出土した（第27図109～114）。109～113は土師器皿である。小皿は口縁部外面の面取りが形骸化したもので、13世紀中葉に位置付けられよう。114は丹波型瓦器椀である。口縁部内面にやや粗い圏線状ヘラミガキが施され、土師器皿よりはやや古い13世紀前葉のものである。

⑤礫層出土遺物　出土遺物として、土師器・瓦器・瓦質土器・東播系須恵器・国産陶器・白磁・青磁などある（第27図115～第28図175）。115～144は土師器皿である。115・117・119・124～130はヨコナデの後、口縁部外面に指押さえを施す。131～141は口縁端部が外折するタイプで口縁端部内面には粗いハケ調整が残る。142～144は口径に対して短い口縁部がわずかに立ち上がるタイプで、142・143の内面には粗いハケ調整がみられる。145～150は丹波型瓦器椀である。151は瓦質土器風炉である。外面は幅の広いヘラミガキ調整が全面に施される。152は瓦質土器方形火鉢である。底部には脚の剝離した痕跡がある。153～158は瓦質土器羽釜である。153は胎土に砂



第 27 図　国分 56 号墳羨門部・礫層出土遺物実測図

粒を多く含むやや粗い胎土である。158は口縁部外面に1条の沈線がめぐらされている。159～161は東播系須恵器鉢である。162は瀬戸灰釉である。内面に目跡が残っている。163は肥前陶器椀である。164は備前焼すり鉢である。片口部にかかる破片で、わずかにすり目がみられる。165は丹波焼すり鉢である。ヘラ描きのすり目が3条残っている。166は丹波焼すり鉢である。5条一単位の櫛描きによるすり目が認められる。167・169は丹波焼甕である。169の外面には薄い自然釉が掛かっている。168は丹波焼壺である。内面にヘラ調整の痕跡がみられる。170は白磁椀である。171は青磁椀である。被熱によって釉が縮み割れ、濁っている。172は白磁壺である。173・174は青磁椀である。173は見込みに印花文が施され、透明感のあるオリーブ色の釉が掛けられている。174は見込みに草花の印花文が、外面には蓮弁文が施される。釉は不透明で青白色を呈する。175は青磁盤である。わずかに被熱して釉の表面がザラついている。

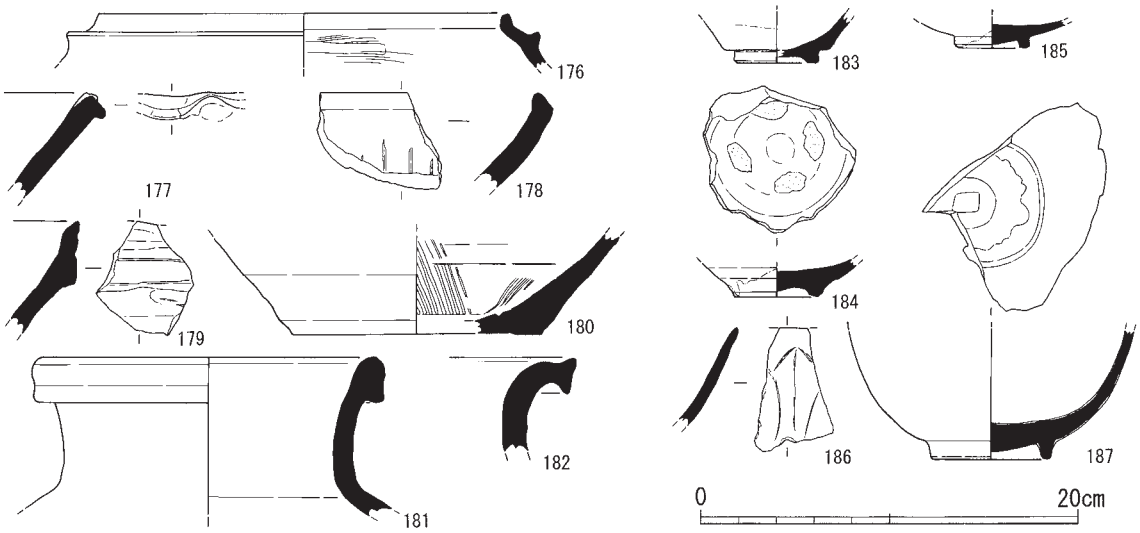


第28図　礫層出土遺物実測図

（森島康雄）

（3）包含層出土遺物

①飛鳥～平安時代の遺物　大規模な破壊を受けていた国分56号墳の周辺や遺構面の精査中に出土した遺物のうち、飛鳥時代から平安時代にかけてのものを取り上げる（第22図1～22）。このうち、16～18は土師器、22は緑釉陶器で、その他は須恵器である。



第29図　包含層出土遺物実測図（2）　中世

１～５は杯Ｇもしくは杯Ａで､飛鳥時代のものである。６は杯Ａである。７～11は杯Ｂである。高台の形態をみると時期差があるようで、７～９は奈良時代前半、10・11は奈良時代後半のもののようである。12は典型的な金属器を模倣した杯Fで、奈良時代前半頃のものであろう。13は杯の口縁部である。14･15は甕の口縁部である。14は外面に波状文が施される。16は杯Ａ､17は皿C、18は甕である。６～18は奈良時代のものと考えられる。19・20は椀の底部で、外面に糸切り痕がみられる。21は杯Ａである。口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。22は緑釉陶器椀の底部と考えられるが、施釉されておらず、無釉陶器の可能性もある。高台は削り出し高台で、内面にヘラミガキ調整が施される。

この時期の土器は、Ｄ１～Ｄ６地区に比べると、やや多く出土しているように思われる。これはＤ９地区が丹波国分寺に近いことと関係があるのかもしれないが、当該期の遺構は全く認められなかったため、詳しくは不明である。

（筒井崇史）

②中世の遺物　国分56号墳の周辺や遺構面の精査中に出土した遺物のうち、中世のものについて取り上げる（第29図176～187）。

176は土師器羽釜である。177は陶器鉢である。片口部の破片で、口縁端部が外に折れる。丹波焼か。178は丹波焼すり鉢である。ヘラ描きによるすり目が認められる。179・180は備前焼すり鉢である。179は片口部にかかる破片で、外面に重ね焼きの痕跡がみられる。180は10条一単位のすり目がみられる。内面は使用による磨滅で平滑になっている。181は丹波焼壺である。外面は自然釉が厚く掛かり、二次的に被熱して発泡している。182は陶器甕である。丹波焼か。183は瀬戸美濃焼天目茶碗である。体部下半は露胎である。184は肥前陶器皿である。見込みには砂目が認められる。185は白磁皿である。畳付部分が研磨され平滑になっている。186・187は青磁椀である。186は外面に鎬蓮弁文、187は見込みに印花文が施される。高台内は蛇の目に露胎である。

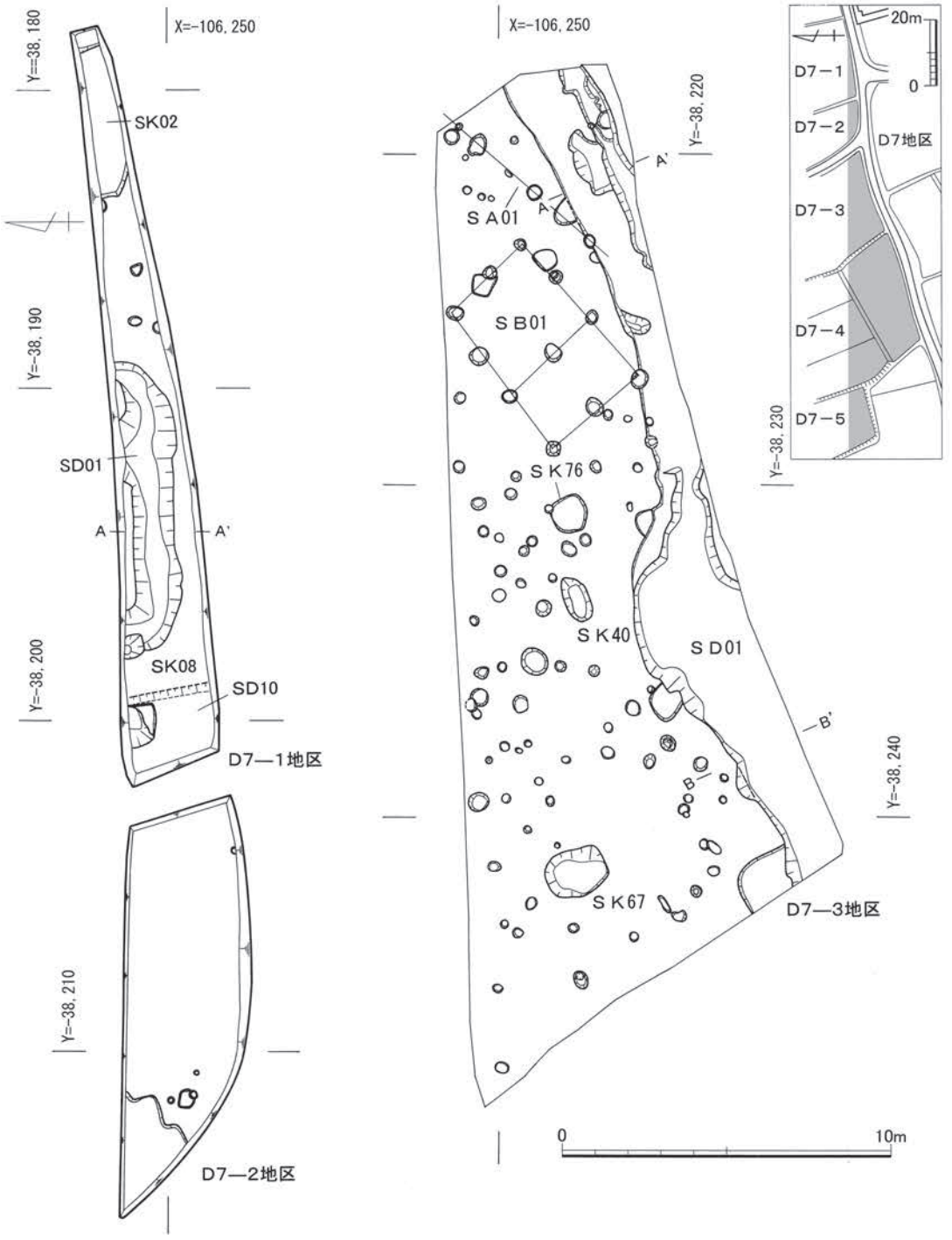
（森島康雄）

10. Ｄ７地区の調査

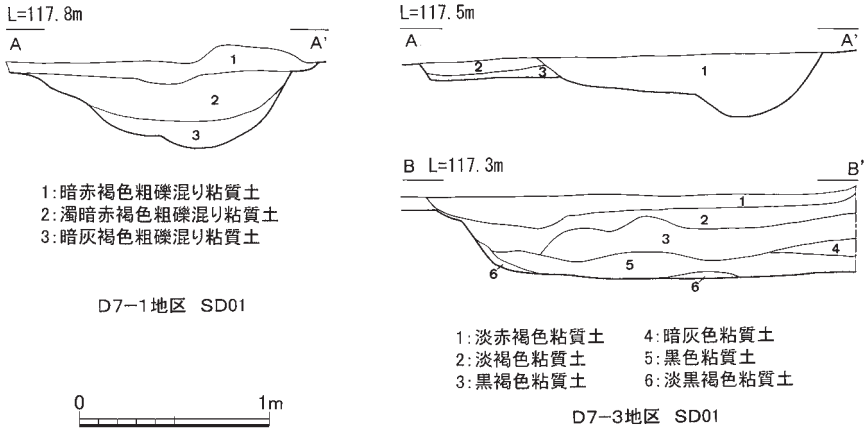
Ｄ９地区の南西約50mに設定した調査区である。東西方向に長い調査区で、総延長は120mにも及ぶ。対象地は複数の水田からなるため、水田ごとに枝番号を付すこととし、東から順にＤ７－１～Ｄ７－５地区とした。以下、調査地区ごとに主な遺構・遺物について報告する。

（１）Ｄ７－１地区の遺構

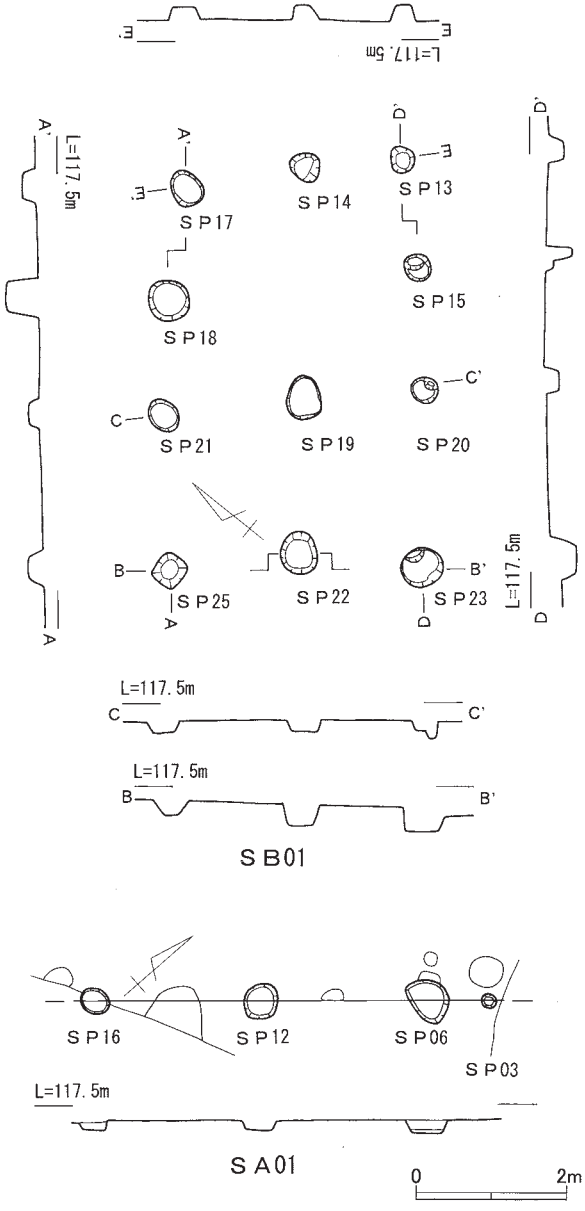
最も東に設定した調査区である。溝１条、土坑３基、柱穴４基を検出した（第30図左上）。溝Ｓ



第30図　Ｄ７－１～３地区検出遺構配置図（1/200）



第31図　Ｄ７－１地区溝ＳＤ01、Ｄ７－３地区溝ＳＤ01土層断面図



第32図　Ｄ７－３地区掘立柱建物跡
ＳＢ01・柵ＳＡ01実測図

Ｄ01は検出長９ｍ、幅1.25～1.5m、深さ20～40cmを測る。土師器片などが少量出土した。土坑ＳＫ02は調査区東端で検出した。部分的な検出で、深さは約30cmを測る。土坑ＳＫ08は平面形が楕円形を呈し、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ約20cmを測る。ＳＤ01の西側を壊して掘削されている。土坑ＳＫ09は長軸1.2m、短軸0.8m、深さ約20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。柱穴は、いずれも直径25～30cmの小規模なものである。土坑・柱穴とも、出土遺物はみられない。

また、溝ＳＤ10は、トレンチ壁面において確認した溝である。溝の幅は2.2m以上である。埋土は拳大の礫で、Ｄ９地区において溝ＳＤ03として報告した溝の延長部分に当たると考える。

（２）Ｄ７－２地区の遺構

Ｄ７－１地区の西側に設定した調査区である。柱穴３基を検出したのみである（第30図左下）。いずれも小規模なものである。トレンチの西端にはわずかに落ち込みがみられる。なお、遺物は出土していない。

（黒坪一樹）

（3）D７－３地区の遺構・遺物

D７－２地区の西側、農道を挟んで設定した調査区である。遺構面は礫混じりの黒褐色粘質土である。溝１条、掘立柱建物跡１棟、柵１条のほか、土坑および柱穴を多数検出した（第30図右）。柱穴出土遺物はほとんどが中世前期で、包含層から平安時代後期の土器が出土している。

①溝ＳＤ01（第31図） 調査区の南辺で検出した。幅が一定せず、若干蛇行するが、北西から南西に向かって流れる。検出長25m、幅2.5～3.5m、深さ25～45cmを測る。埋土は、上層が礫を含む黒褐色粘質土、下層が暗褐色粘質土である。

土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶器（備前・丹波・瀬戸）、瓦などが出土した（第39図47～51）。47～49は土師器である。49はロクロ成形で、糸切り底である。50は13世紀後半の龍泉窯系の青磁で、見込みには双魚文が施される。51は丹波焼すり鉢である。他に12世紀と15世紀の白磁椀が出土した。

②掘立柱建物跡ＳＢ01（第32図上） 調査区の東半部で検出した。桁行・梁行ともに２間で、南西側に庇を持つ建物である。建物の方位は北に対して約49°東に振る。柱間は、2.1mおよび1.5mを測る。柱穴は径25～40cmの円形である。柱穴ＳＰ14から土師器と丹波焼すり鉢が出土した。

③柵ＳＡ01（第32図下） 掘立柱建物跡ＳＢ01の南東側で２間分を検出した。直径40cm前後を測る柱穴３基からなる。柱間は2.2m等間である。方位は北に対して約40°東に振る。

④土坑ＳＫ76 掘立柱建物跡ＳＢ01の西側で検出した一辺１mの隅丸方形の土坑である。埋土から平安時代後期の須恵器杯が１点出土した（第39図52）。底部はヘラ切りである。

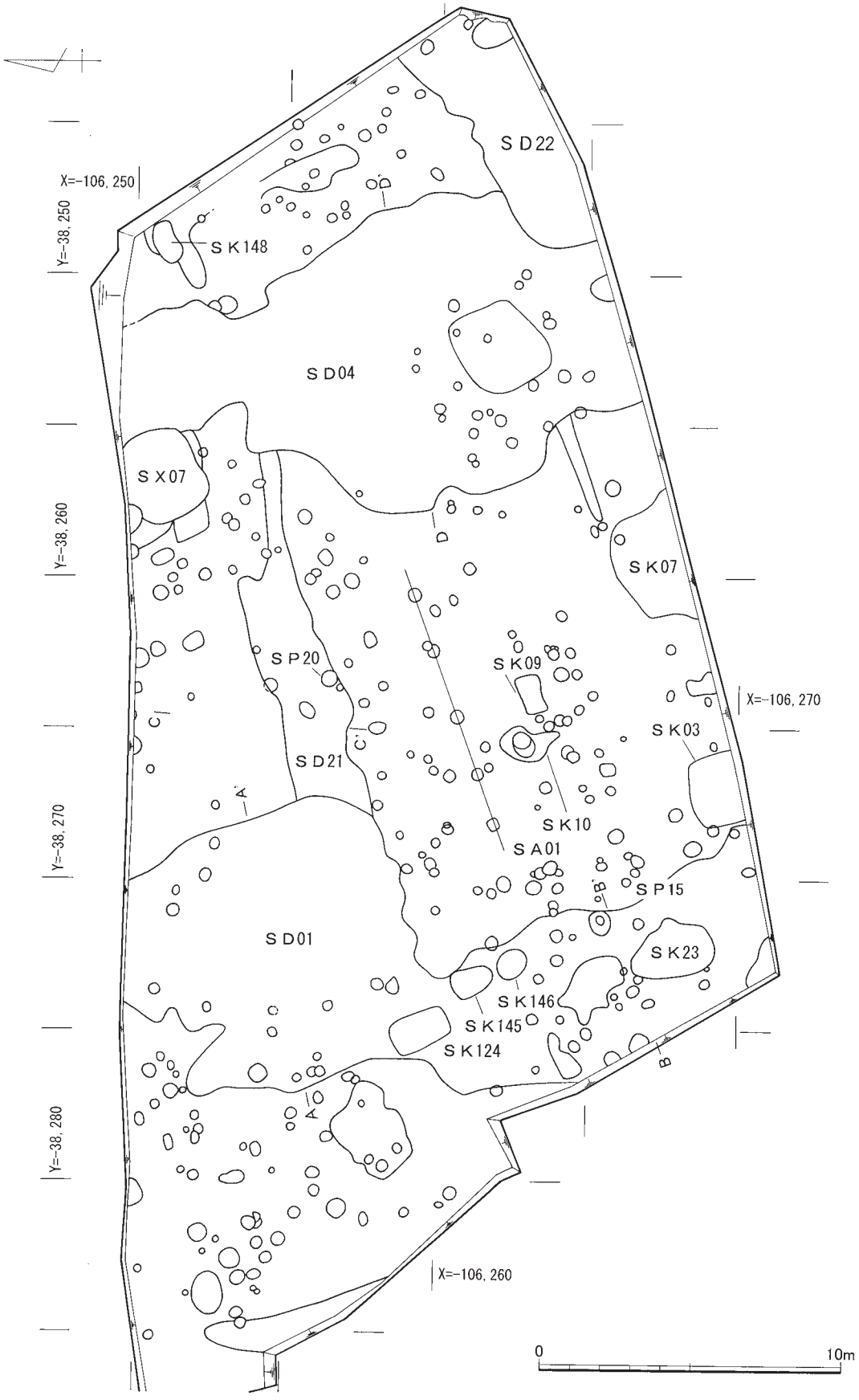
（4）D７－４地区の遺構・遺物

D７－３地区の西側に設定した調査区である。遺構は黒褐色礫混じり粘質土の上層と暗褐色礫混じり粘質土の下層で検出した。上層では、大規模な溝４条や池状遺構のほか、石組みを有する中世墓２基、大小の土坑および柱穴などを検出した。下層では、多数の柱穴を検出した。遺構の時期は平安時代後期から中世後期までである。上・下層とも多くの柱穴を検出したが、掘立柱建物跡を抽出するに至らず、平安時代の柵を復原できたのみである（第33図）。

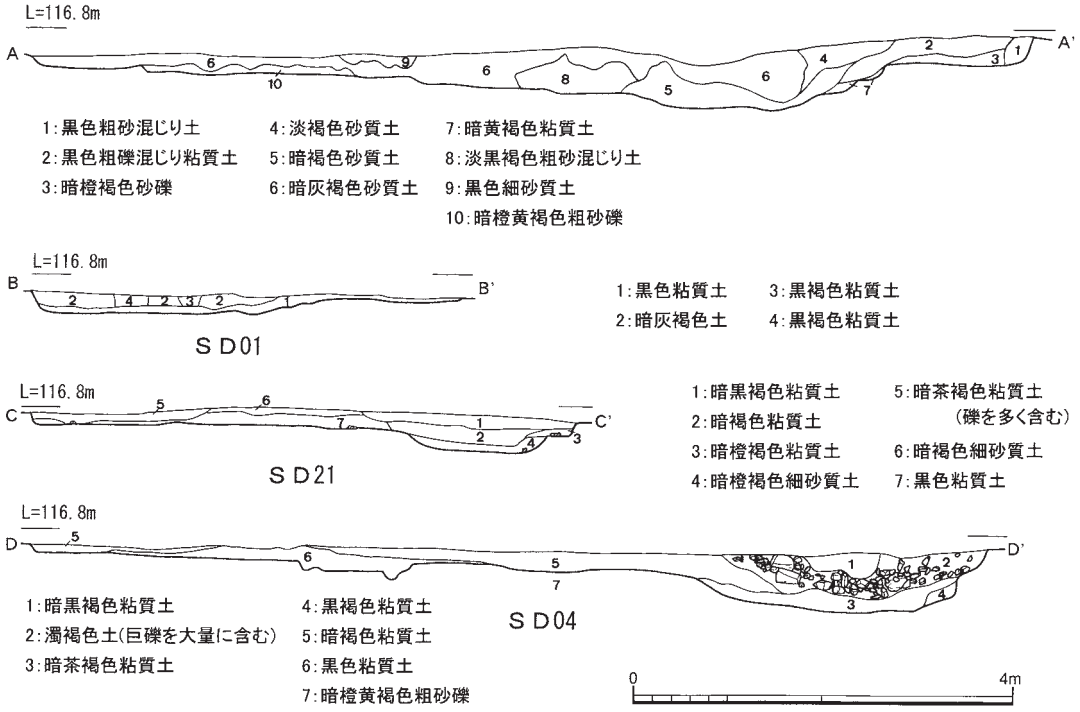
①溝ＳＤ22 D７－３地区で検出した溝ＳＤ01の延長部に当たる。検出長8.5m、幅2.5m以上、深さ約15cmを測る。後述する溝ＳＤ04と切り合い関係にあり、ＳＤ22の方が新しい。

②溝ＳＤ04（第34図下段） 南北方向に掘られ、検出長17m、幅４～10m、深さ10～60cmを測る。出土遺物には土師器（第38図26～33）、東播系須恵器、灰釉陶器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶器のほか鉄滓（椀形滓、第39図54）がある。33は硬質で外面にタタキを施す丹波型土師器鍋で、25は土錘である。国産陶器には15世紀代の備前焼すり鉢がある。輸入陶磁器は、白磁・青磁ともに12世紀から15世紀までの椀・皿類が出土しており、中心時期は13世紀代である。白磁には玉縁椀や口禿げの皿、輪花や碁笥底の皿がある。青磁には龍泉窯系や同安窯系の椀のほか、注目される資料として青白磁の壺片がある。

③溝ＳＤ01（第34図上段・中段上） 南北方向に掘られた溝である。検出長20m、幅３～５m、深さ20～60cmを測る。後述する溝ＳＤ21と重複するか所は池状に落ち込んでおり、その規模は



第33図　D７－４地区検出遺構配置図（1/200）



第34図　Ｄ７－４地区溝ＳＤ01・04・21土層断面図

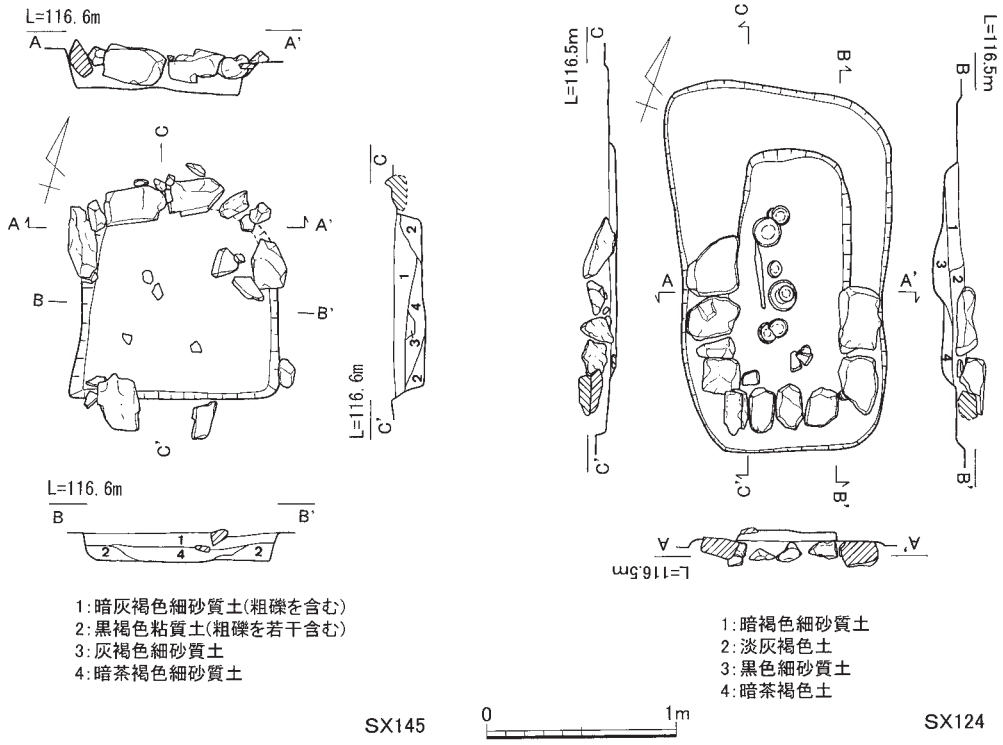
一辺５ｍほどの方形を呈し、深さ60cmを測る。出土遺物は13世紀代の土器（土師器、東播系須恵器、瓦器、瓦質土器）が多く、他に輸入陶磁器、国産陶器のほか鉄製雁股鏃（第39図55）や火打金（第39図56）などが出土した。輸入陶磁器は、12世紀から15世紀代の白磁や青磁の椀・皿類が出土しており、中心時期は13世紀代である。白磁には玉縁椀や口禿げの皿、輪花若しくは碁笥底の皿がある。38は同安窯系の青磁碗である。国産陶器には備前焼のすり鉢や丹波焼の甕がある。また、少量ではあるが緑釉陶器や須恵器など、奈良時代から平安時代にかけての土器も出土した。

④**溝ＳＤ21**（第34図中段下）　東西方向に掘られた溝で、検出長11.5m、幅0.5～2.5m、深さ20cmを測る。埋土からは13世紀から15世紀にかけての土器が出土した（第38図34～42）。34・35は土師器皿、36・37は瓦器、39・40は瓦質土器すり鉢である。39・40の内面にはハケ調整の後、ヘラ描きによるすり目が施される。41は瓦質土器羽釜、42は備前焼すり鉢である。42の内面には７条一単位の櫛描きによるすり目が施される。

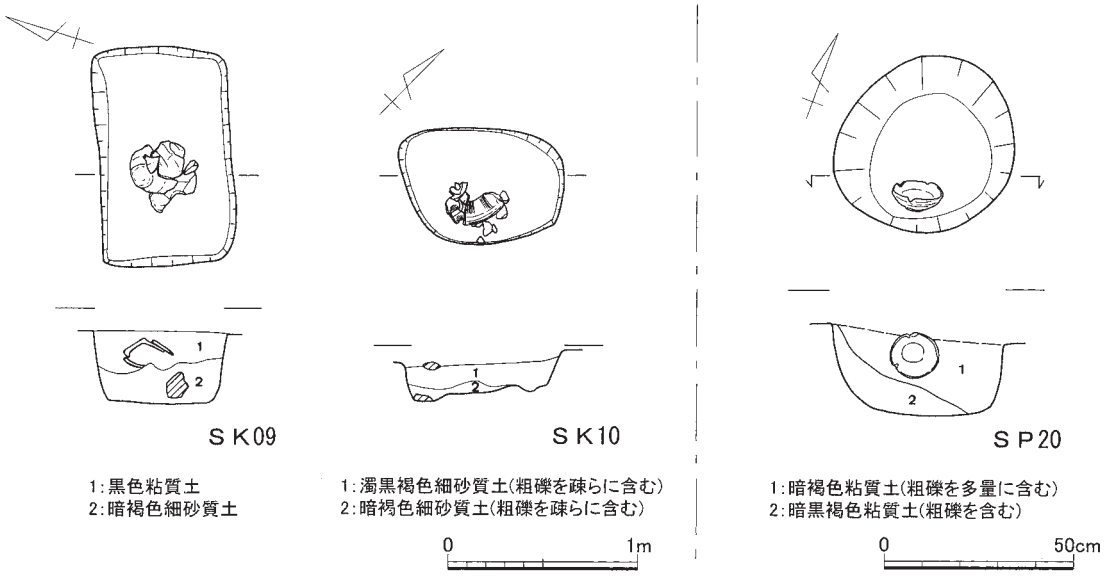
⑤**中世墓ＳＸ145**（第35図左）　石組みを有する。平面形は一辺１ｍの正方形で、深さ15cmを測る。北辺の一辺に角礫が残存していた。

⑥**中世墓ＳＸ124**（第35図右）　石組みを有する。平面形は隅丸長方形で、長辺２ｍ、短辺0.8～1.2m、深さ20cmを測る。角礫が長辺の南半および南短辺に配されている。中央やや西寄りで複数の土師器皿が重ねられた状態で出土した（第38図１～10）。12世紀末から13世紀初頭頃のものと考えられる。また、鉄製の小刀（第39図53）１点が、石組みの長辺に沿うようにして切っ先を南にして出土した。これらは出土位置から副葬品と考えられる。

⑦**土坑ＳＫ09**（第36図左）　長方形の土坑で、長辺0.6m、短辺0.35m、深さ20cmを測る。中から底部を斜め上にした壺の破片が出土した（第38図45）。丹波焼か。



第35図　Ｄ７－４地区中世墓ＳＸ124・145実測図

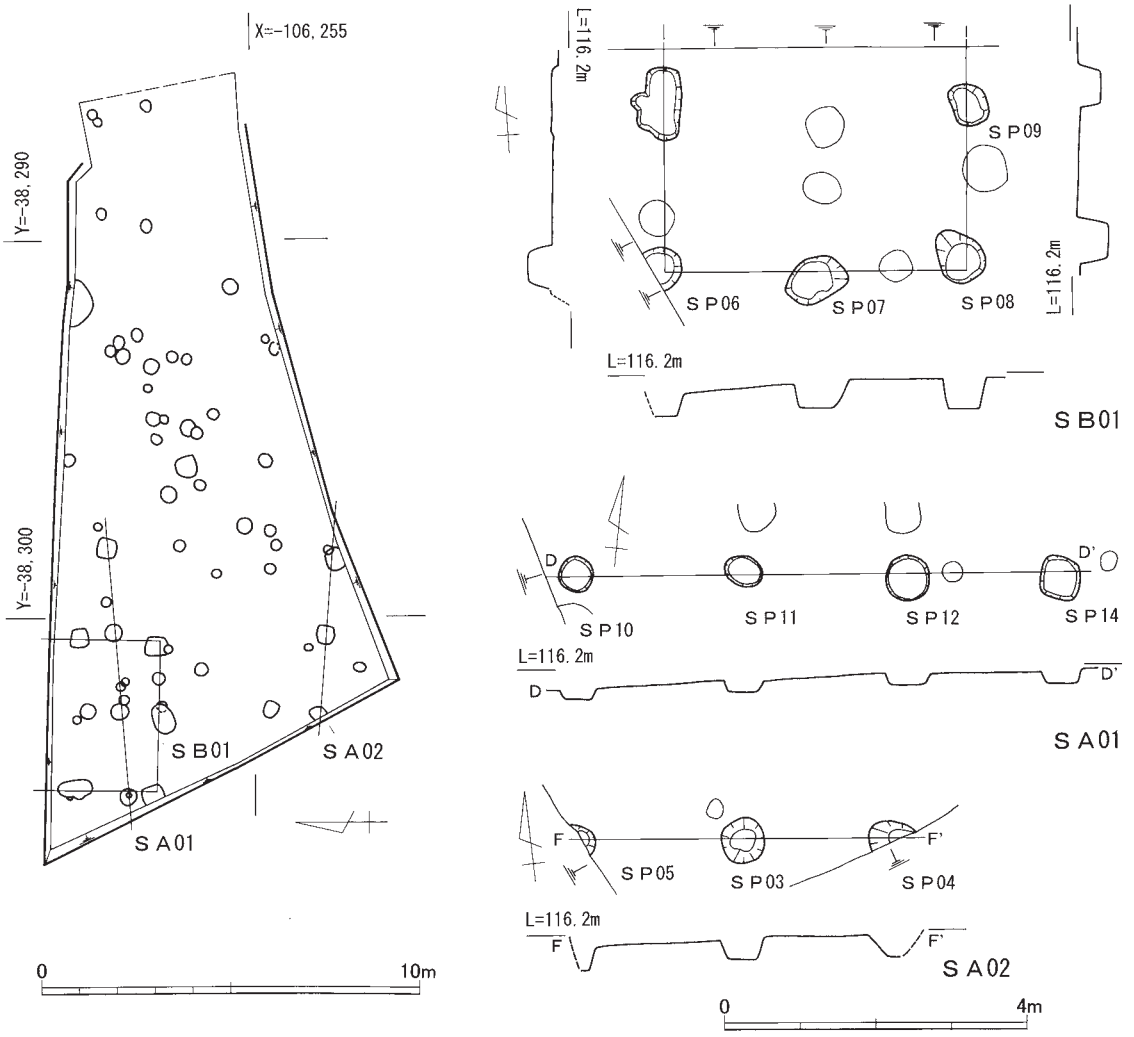


第36図　Ｄ７－４地区土坑ＳＫ09・10、柱穴ＳＰ20実測図

⑧柱穴ＳＰ20（第36図右）　溝ＳＤ21と切り合い関係にあり、ＳＰ20の方が古い。径約50cmの円形の土坑で、丹波型瓦器椀と土師器皿が出土した（第38図20・21）。

⑨柵ＳＡ01　下層で検出した。４間分を確認した。柱間は２～2.3mで、方位は東に対して約20°北に振る。柱穴は径40cmの円形で、深さは10cmを測る。複数の柱穴から平安時代の遺物が出土した（第38図22～24）。22は「て」字状口縁の土師器皿、23は緑釉陶器椀、24は黒色土器椀である。

⑩土坑ＳＫ07　調査区の中央部南端で検出した方形土坑である。長辺2.5～4.5m、短辺2.5mを



第37図　Ｄ７－５地区検出遺構配置図（1/200）および掘立柱建物跡ＳＢ01、柵ＳＡ01・02実測図

測る。埋土から13世紀中頃の土器が出土した(第38図11～16)。11～14は土師器皿、15・16は丹波型瓦器椀である。

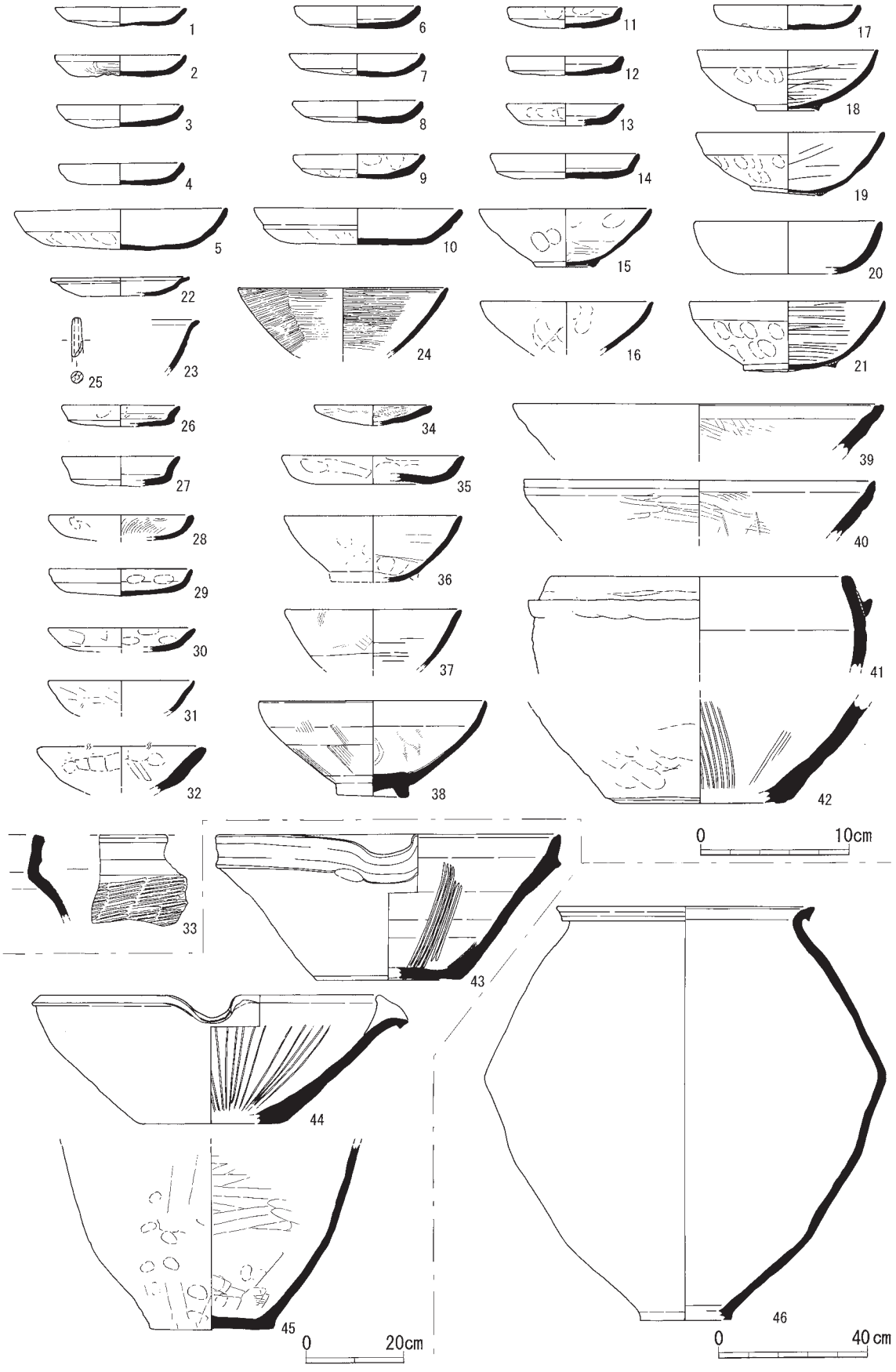
⑪**土坑ＳＫ23**　調査区南西部で検出した不整形な土坑である。埋土には角礫が多く含まれていた。埋土から13世紀の土器が出土した(第38図17～19)。17は土師器皿である。18・19は瓦器椀である。

⑫**土坑ＳＫ10**(第36図中)　柵ＳＡ01の南側で検出した。長軸0.4m、短軸0.3m、深さ15cmを測る。15世紀頃の備前焼すり鉢が出土した(第38図43)。７条一単位の櫛描きによるすり目が施される。

⑬**柱穴ＳＰ15**　直径30cm、深さ20cmの円形の柱穴である。丹波焼すり鉢が出土した(第38図44)。内面にはヘラ描きによるすり目が施される。

⑭**土坑ＳＸ07**　調査地北部西よりで検出した一辺2.5mの隅丸方形の土坑である。土坑内には拳大から人頭大の石が多量に詰まっており、丹波焼甕が出土した(第38図46)。

(黒坪一樹・松尾史子)



第 38 図　D 7 地区出土遺物実測図（1）

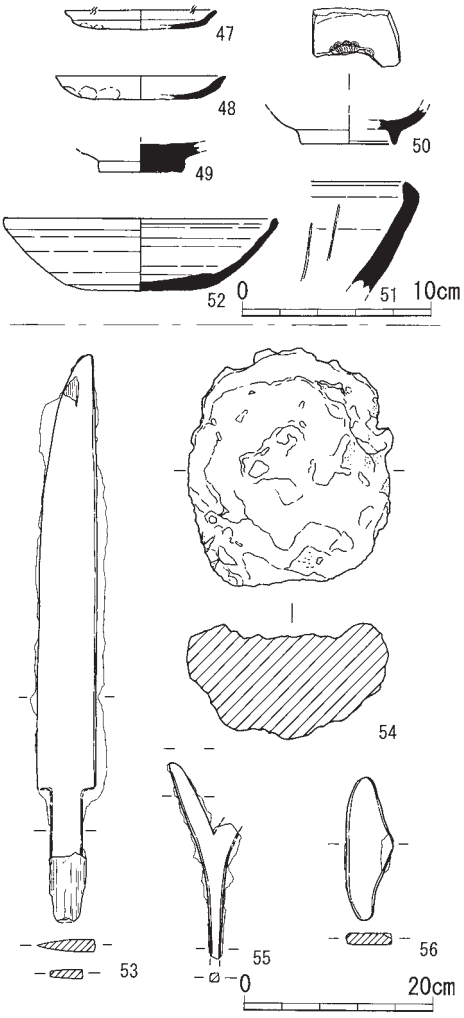
（５）Ｄ７－５地区の遺構・遺物

Ｄ７－４地区の西側に設定した調査区である。上層と下層の２面の調査を行い、下層で多数の柱穴を確認した。柱穴の規模・形状などからほとんどが上層で確認できなかった中世の遺構であると考えられるが、次に報告する遺構は、中世より古い可能性がある。

①掘立柱建物跡ＳＢ01（第37図右上）　下層で検出した桁行１間以上（2.8m以上）、梁行２間（約４ｍ）の建物である。建物の方位は北に対して約２°東に振る。柱間は７尺等間である。柱穴はおおむね50～60cmの不整形な円形で、深さは30～40cmを測る。出土遺物はない。

②柵ＳＡ01（第37図右中）　下層で検出した東西方向の柵である。３間分を確認した。柱間は不揃いである。柱穴は径40～50cmの不整形な円形もしくは隅丸方形で、深さは20cm前後である。柵の方位は東に対して約15°北に振る。ＳＢ01と前後関係にあるが、重複関係がなく、遺物も出土していないため、新旧関係および時期は不明である。

③柵ＳＡ02（第37図右下）　下層で検出した東西方向の柵である。２間分を確認した。柱間は７尺等間である。柱穴は一辺約50cmの隅丸方形で、深さは30cm前後を測る。柵の方位は東に対して約15°南に振る。柱間と埋土が掘立柱建物跡ＳＢ01と同じであることから同時期に存在した可能性がある。



第39図　Ｄ７地区出土遺物実測図（２）

（松尾史子）

11．100～105・107・119トレンチの調査

（1）100～105トレンチの遺構・遺物

Ｄ７－２～５地区の北側に設定した用水路部分のトレンチである。土坑数基と多数の柱穴を検出した。これらの遺構の時期は、出土遺物から概ね12世紀から14世紀と考えられる。

①土坑ＳＫ39　調査区西部で確認した不整形な土坑である。土師器や瓦器が出土した（第43図９～18）。９～16は土師器皿で、都の土器を模倣して口縁部をナデによって仕上げる。17・18は瓦器椀である。12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。

②柱穴ＳＰ47（第42図左中）　直径30cmの円形の柱穴である。土師器皿がまとまって出土した（第43図１～８）。いずれも円盤状の粘土塊を手の平上で成形し、内面のみをナデて仕上げる。亀岡盆地で一般的にみられるタイプで、14世紀後半頃のものと考えられる。

③柱穴ＳＰ49　直径30cmの円形の柱穴である。出土した土師器皿（第43図19・20）は、いずれも口縁端部のみをナデ、体部には指の痕が明瞭に残る。

（2）107トレンチの遺構・遺物

105トレンチの北側に設定した用水路部分のトレンチである。土坑２基のほか多数の柱穴を確認した。柱穴は概ね直径20～30cm前後を測る。遺構の時期は出土遺物から概ね12世紀から13世紀頃と考えられる。

①土坑ＳＫ02（第42図左上）　調査区北部で検出した。長径2.8m、短径1.5mを測る楕円形の土坑である。土坑の中央部で土師器皿がまとまって出土した（第43図21～26）。いずれも口縁部に二段ナデを施す。

②柱穴ＳＰ04　直径20cmの円形の柱穴である。13世紀の土師器小皿が出土した（第43図27）。

③柱穴ＳＰ03（第42図右上）　調査区西部で検出した。直径30cm、深さ約20cmの柱穴である。瓦器椀と瓦が出土した（第43図28・59）。

④包含層出土遺物（第43図49～58）　51～56は奈良時代後半から平安時代にかけての須恵器、49・50は白磁椀、57は土錘、58は瓦質土器羽釜である。

（3）119トレンチの遺構・遺物

Ｄ７－５地区の西側に隣接する用水路部分のトレンチである。中世墓１基、溝１条のほか多数の柱穴を確認した。遺構の時期は、出土遺物から概ね13世紀から14世紀である。

①土坑ＳＫ19　第43図29・30は内面のみをナデて仕上げる土師器皿である。

②柱穴ＳＰ67　径40cm、深さ30cmの楕円形の柱穴である。土師器皿（第43図32・33）や丹波型瓦器椀（第43図34）が出土した。

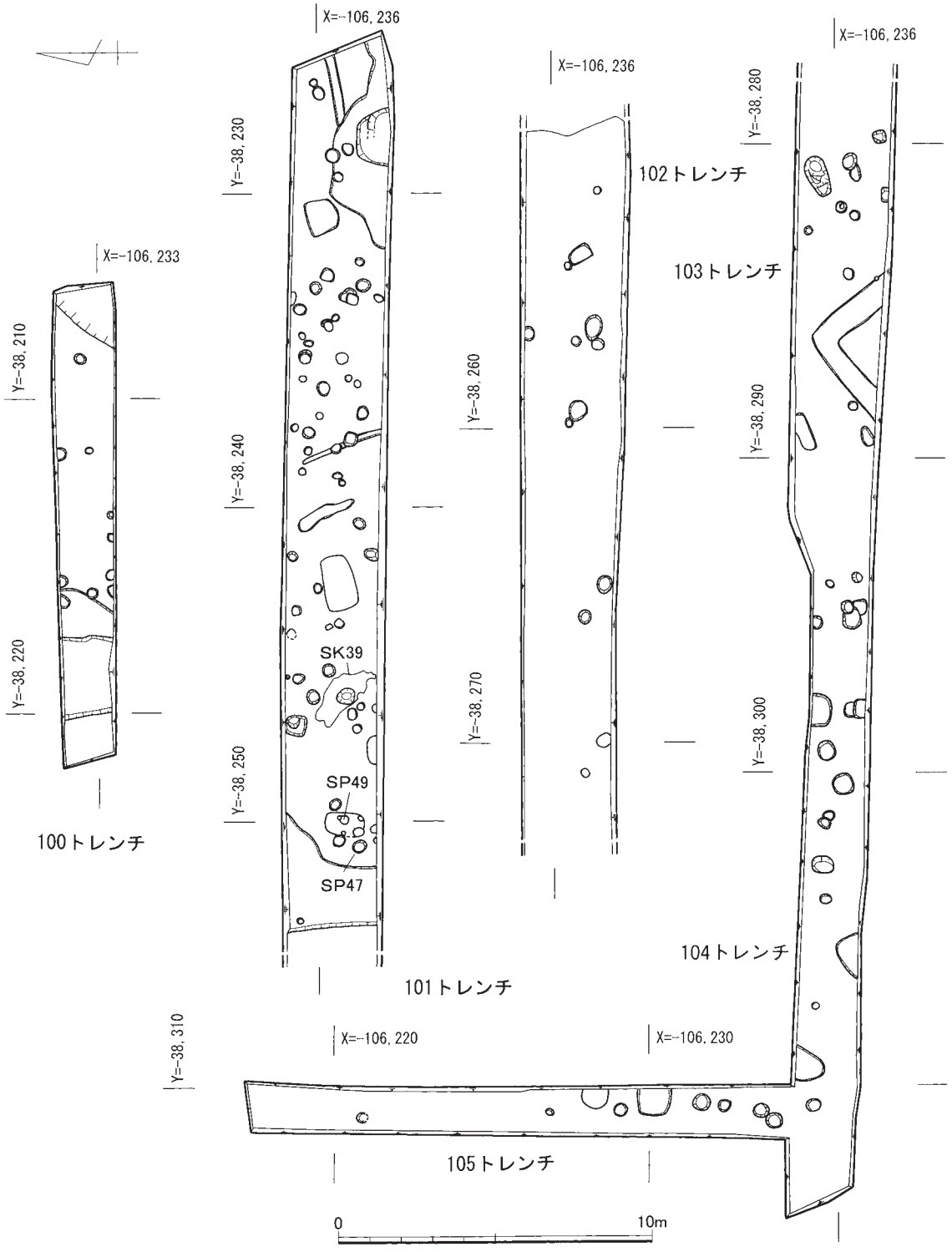
③土坑ＳＫ15（第42図左下）　径50cm、深さ15cm前後の不正円形の土坑である。土師器皿もしくは杯が出土した（第43図35・36）。35はＳＰ49出土資料と同じく口縁端部のみをナデる。

④土坑ＳＫ37　第43図37は土師器皿、第43図38は瓦器椀、第43図39は瓦質土器羽釜である。

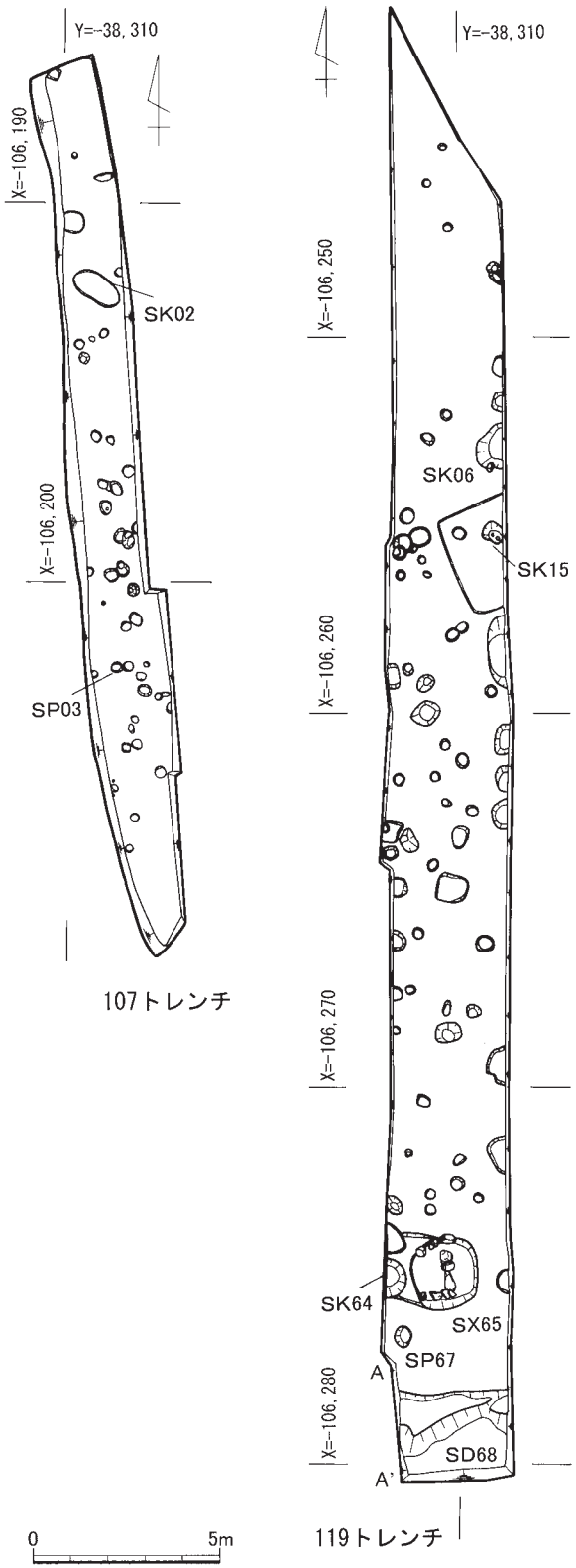
⑤土坑ＳＫ06　径1.1m、深さ10cmの半円形の土坑である。101トレンチの土坑ＳＫ47と同じタイプの土師器皿（第43図40～42）と青磁椀（第43図44）が出土した。青磁椀は釉が分厚く、見込み

に草花の印花文が施される。これらは14世紀後半頃と考えられる。ほかに瓦質土器すり鉢が出土した(第43図45)。底部付近ですり目が格子状となる独特のものである。時期は15世紀以降に下ると考えられる。

⑥**中世墓ＳＸ65**(第42図右中)　一辺約２ｍ、深さ約10cmの隅丸方形の土坑である。土坑底部



第40図　100～105トレンチ検出遺構配置図（1/200）



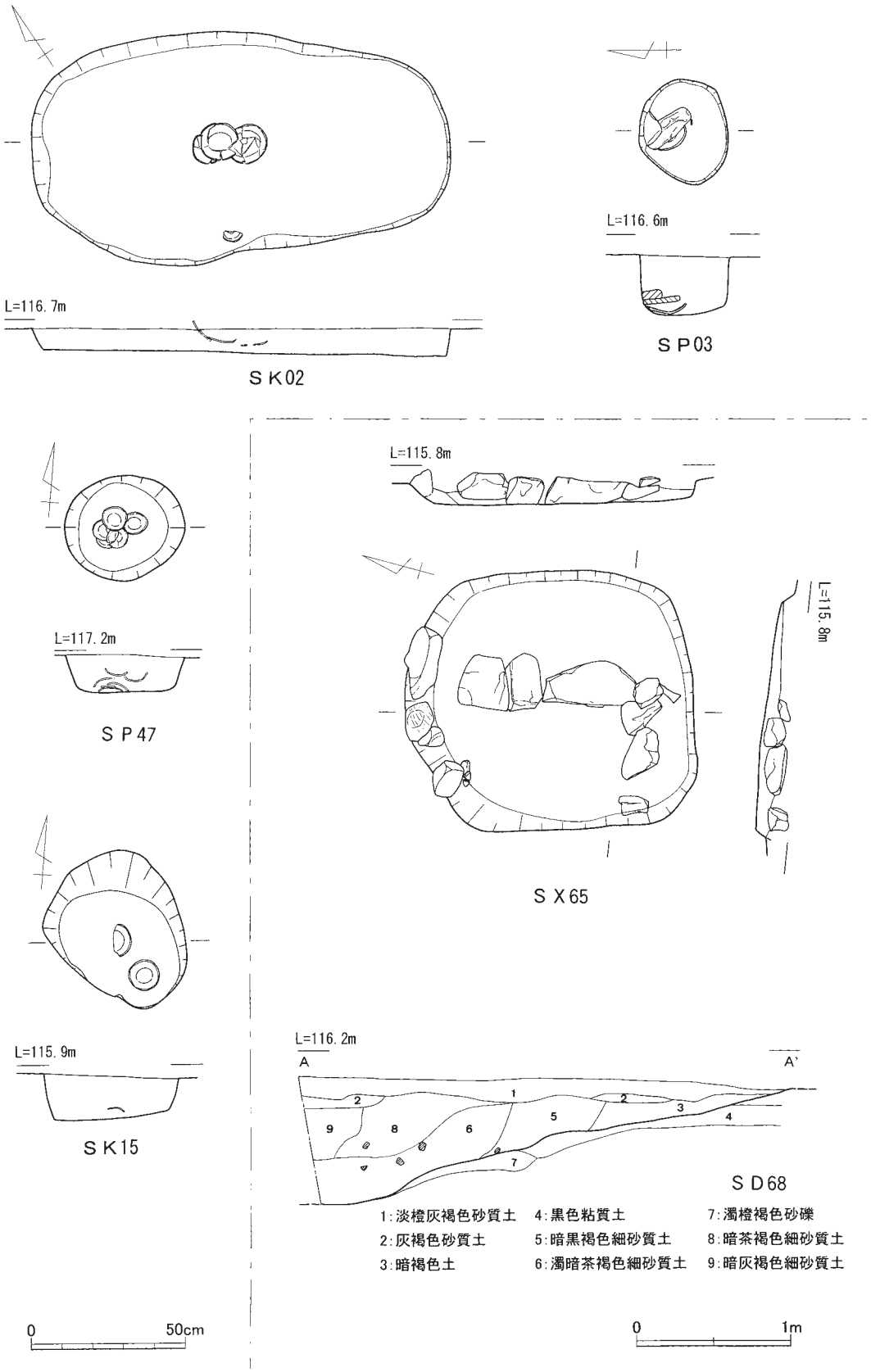
第41図　107・119トレンチ検出遺構配置図（1/200）

には「L」字状に並べた石列が1段分あり、墓の可能性がある。遺物は少量出土した（第43図47・48）。47は土師器皿、48は瓦器椀である。

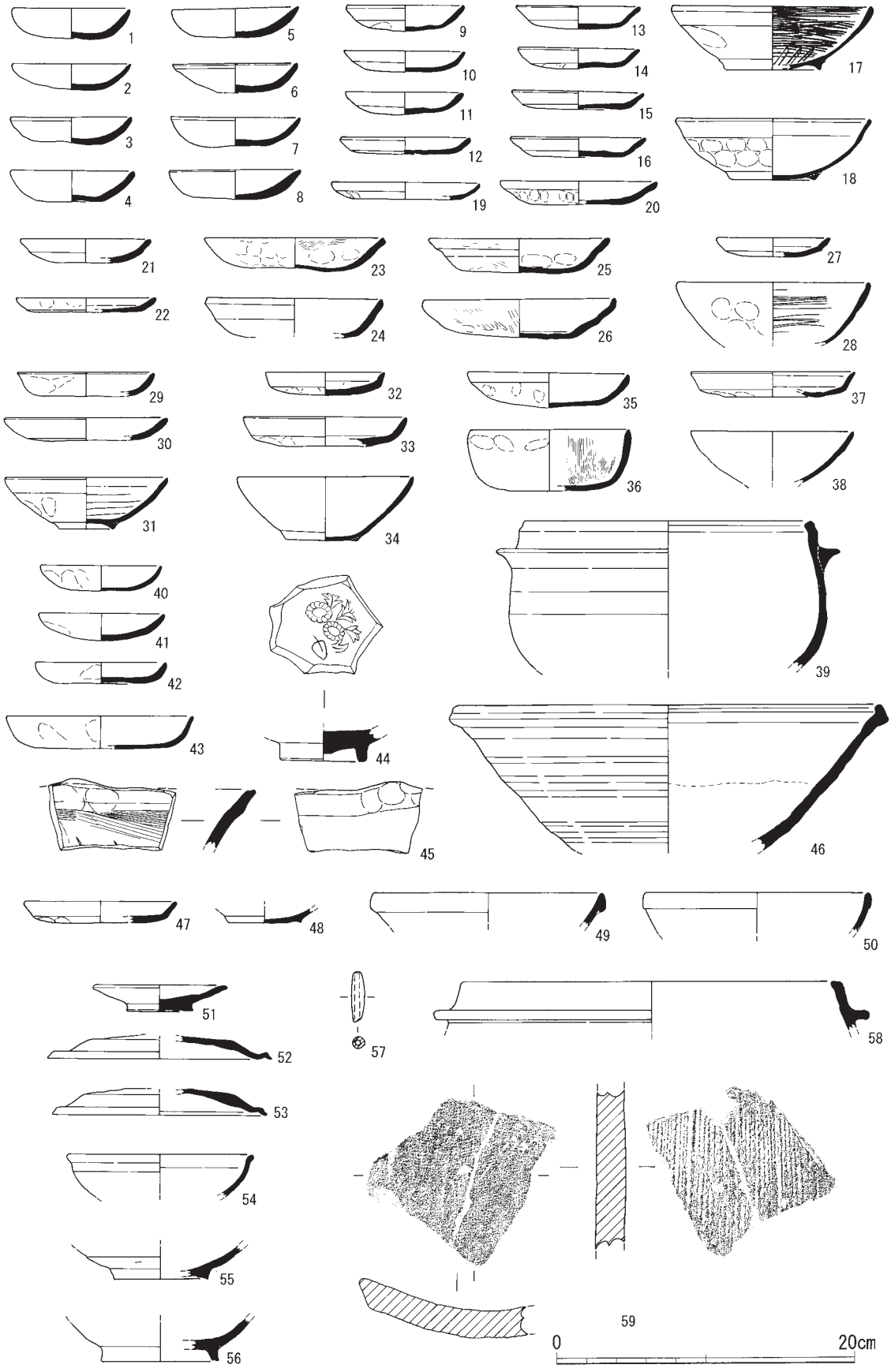
⑦**土坑ＳＫ64**　調査地南西部で検出した。径90cm、深さ30cmを測る。東播系須恵器鉢が出土した（第43図46）。内面見込み部分は、かなり使い込んでいたらしく磨滅が著しい。

⑧**溝ＳＤ68**　調査地の南端で検出した。北から南に向かって落ち込み状を呈するが、埋土の堆積状況から溝と考える。検出長３m、幅２m、深さ80cmを測る。

（松尾史子）



第42図　柱穴ＳＰ03・47、土坑ＳＫ02・15、
中世墓ＳＸ65実測図および溝ＳＤ68土層断面図



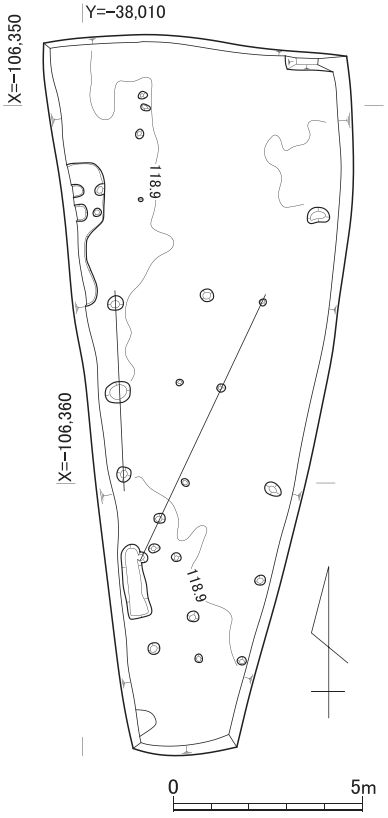
第 43 図　100 ～ 105・107・119 トレンチ出土遺物実測図

12. Ａ２地区の調査

Ａ地区で最も北に設定した調査区で、柱穴を20基以上を検出した。柱穴群は第44図に示したように、柵状に並ぶものがみられるものの、掘立柱建物として復原できるようなものはみられなかった。

これらの柱穴からは、瓦器や土師器などの土器片がごく少量出土した。柱穴の時期は出土遺物から中世と思われるが、詳細は不明である。

（筒井崇史）



第44図　Ａ２地区検出遺構配置図

13. Ａ３地区の調査

Ａ２地区の南西側に設定した調査区である。弥生時代、飛鳥・奈良時代、中世の各時期の遺構・遺物を検出した。調査区は南西に向かって傾斜しており、西側では黒褐色粘質土（黒ボク層）が厚く堆積していた。中世の遺構はこの上面で検出した（第46図）。

（１）弥生時代の遺構・遺物

明らかに弥生時代の遺構と判断できるのは柱穴ＳＰ302のみであるが、遺物の出土しなかった柱穴も多数あることから、弥生時代に属する柱穴も存在すると思われる。ただし、竪穴式住居跡や土坑などの遺構は検出されなかった。

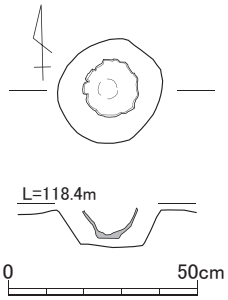
①柱穴ＳＰ302（第45図）　調査区南部のほぼ中央で検出した。直径28cm、深さ10cmを測る。弥生土器の甕の底部の破片（第53図１）が柱穴内に据え置かれたような状況で出土した。１は平底の底部で、外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。詳細は不明であるが、弥生時代中期の甕と考えられる。

（２）飛鳥・奈良時代の遺構・遺物

飛鳥・奈良時代の遺構としては、竪穴式住居跡５基のほか、土坑、柱穴、溝などを多数検出した。竪穴式住居跡は出土した遺物からいずれも飛鳥時代のものである。柱穴も多数検出したが、掘立柱建物や柵としてまとまるものは確認できなかった。

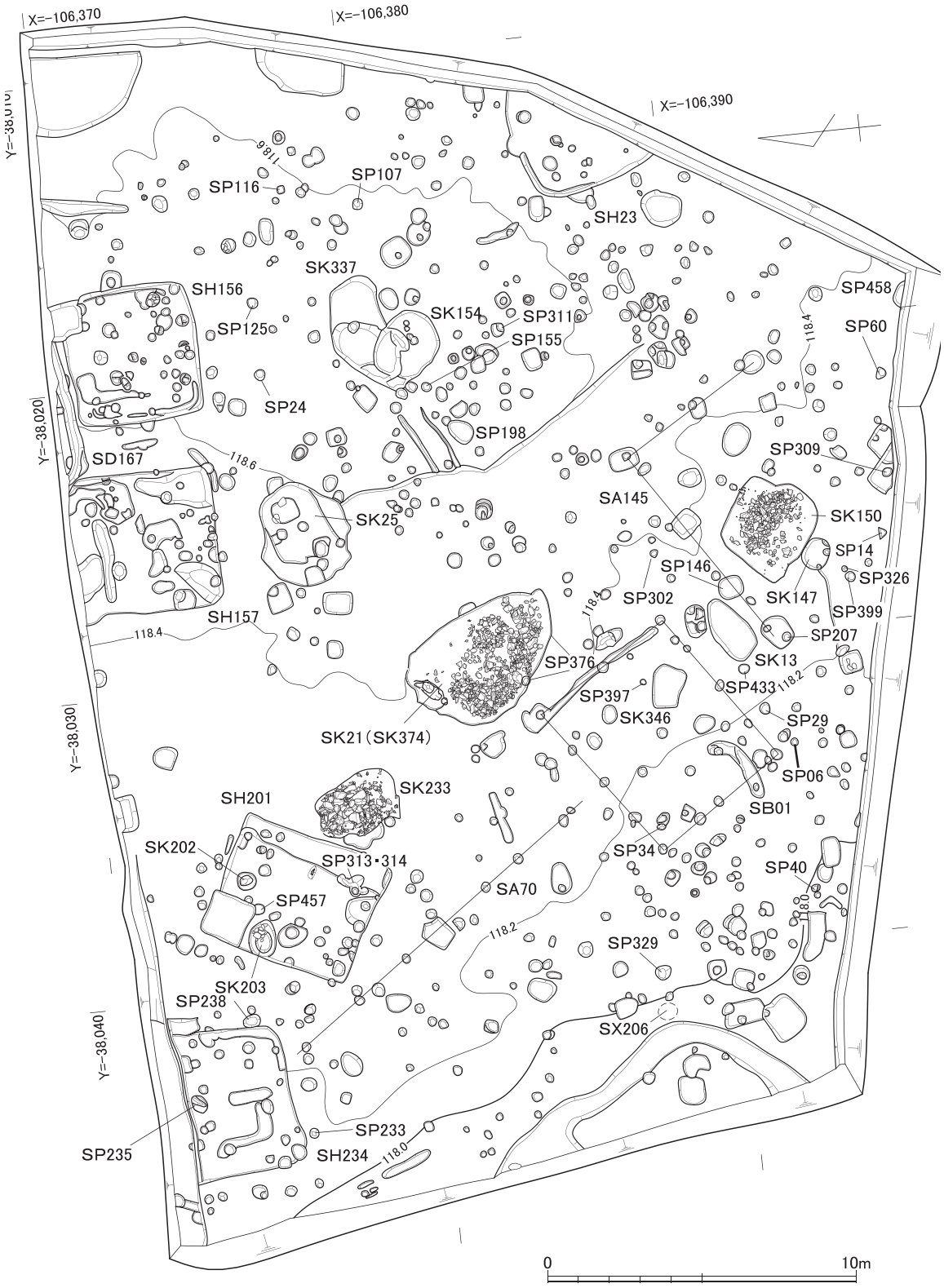
①竪穴式住居跡ＳＨ23（第47図左上）　調査区の東辺中央付近で検出した。住居跡の南東側約1/2は農道の下に延びる。平面形は隅丸方形で、北辺検出長3.5m、西辺検出長4.0m、深さ15cmを測る。北辺の中央にカマドを設けている。主柱穴は北辺に沿って２基検出した。北辺から西辺にかけて部分的に周壁溝を検出した。住居の方位は北に対して約17°西に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第53図２～５）。２は須恵器高杯の脚部で、３方に長方形のスカシがある。３は須恵器壺の口縁部である。

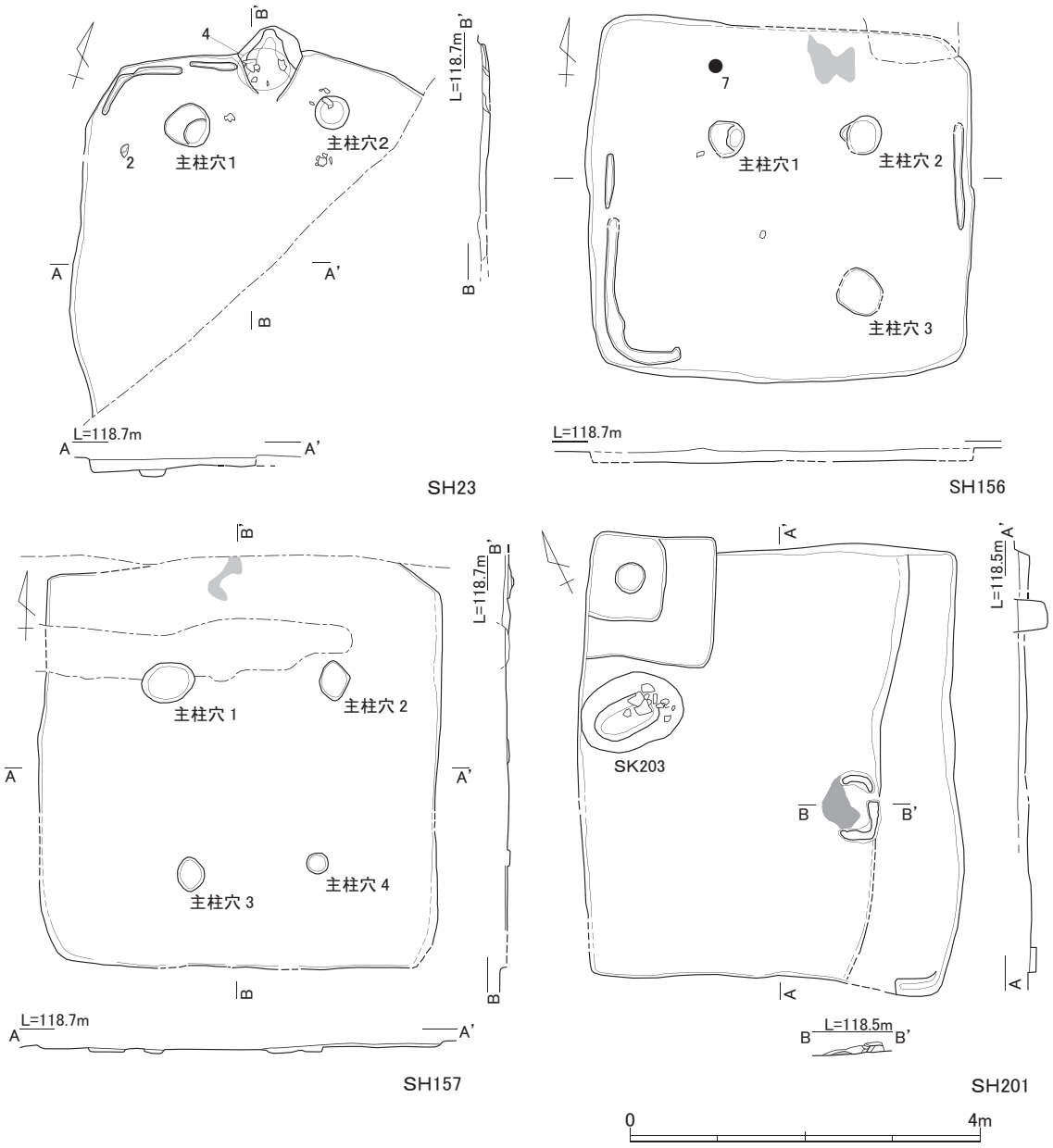


第45図　柱穴ＳＰ302実測図

４は土師器甕である。やや内湾気味の口縁部を有する。５は土師器杯である。内面に暗文を有する。５はいわゆる畿内産土師器[注4]の模倣品と考えられ、飛鳥時代中頃から後半に位置づけられる。類似した器形のものが昨年度報告した国分45号墳の石室内から出土している[注5]。



第 46 図　Ａ３地区検出遺構配置図（1/200）

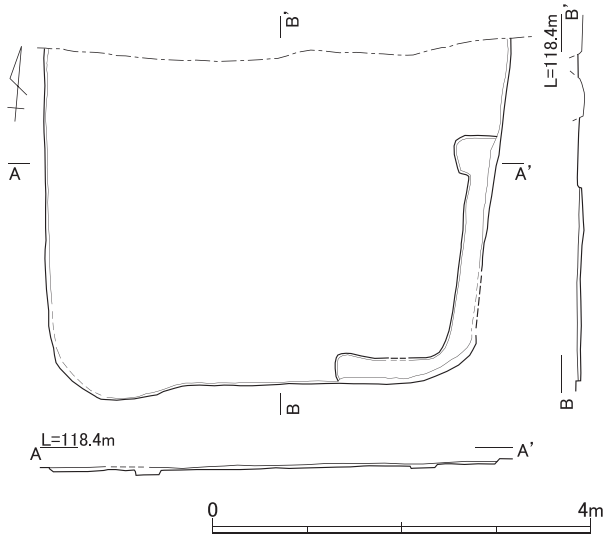


第47図　竪穴式住居跡ＳＨ23・156・157・201実測図

②**竪穴式住居跡ＳＨ156**（第47図右上）　調査区の北辺東寄りで検出した。竪穴式住居跡ＳＨ157と東西に並んで検出した。平面形は方形で、住居の方位はおおむね南北方向である。北辺長4.1ｍ、西辺長４ｍ、深さ10cmを測る。東辺と西辺から南辺にかけての周壁溝を確認した。主柱穴は３基検出したが、南西部については不明である。主柱穴は、直径40～50cm、深さ15～30cmを測る。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第53図６～８）。６は内面にかえりを有する須恵器杯Ｂ蓋である。飛鳥時代後半のもので、住居の時期を示すと考える。７は土師器杯Ｃである。内面に暗文を施す。８は土師器鍋の口縁部である。７は畿内産土師器と考えられるが、６よりも古く、飛鳥時代前半から中頃のものと考えられる。

③**竪穴式住居跡ＳＨ157**（第47図左下）　調査区の北辺で検出した。竪穴式住居跡ＳＨ156の西



第48図　竪穴式住居跡ＳＨ234実測図

側に位置する。平面形は方形で、北辺長は4.5m、西辺長は4.3mを測る。深さは非常に浅く５cm程度である。住居の方位はおおむねＳＨ156に一致する。北辺の一部はトレンチ壁と重複するため検出できていない。主柱穴は４基である。直径20～50cm、深さ５～12cmを測る。

出土遺物として須恵器などがある（第53図９・10）。９は６と同様の須恵器杯Ｂ蓋である。10は須恵器長頸壺の体部以下である。高台がやや長く古い様相を示す。９・10はほぼ同時期のものと考えられ、飛鳥時代後半に位置づけられる。

④竪穴式住居跡ＳＨ201（第47図右下）　調査区の北西部で検出した。平面形は方形で、北東辺4.2m、北西辺4.8m、深さ15cm前後を測る。住居の方位は北に対して約26°東に振る。南東辺にカマドを設置している。周壁溝や主柱穴は確認できなかった。

出土遺物としては須恵器や土師器などがある（第53図11～15）。11は土師器鍋である。12・13は須恵器杯Ｈ蓋である。13はカマドから出土したもので、住居跡の時期を示すと考える。14は須恵器杯Ｇ蓋の破片である。15は須恵器杯Ｇである。12～15は同時期に存在してもよく、飛鳥時代中頃に位置づけられる。このほか後世の混入品として、中世の土師器や古瀬戸などがある（第54図95～97）。95・96は土師器皿である。96は口縁端部が外折するタイプである。97は古瀬戸袴越腰香炉である。口縁部内面から腰部外面にかけて、緑を帯びた灰釉が掛けられる。

⑤竪穴式住居跡ＳＨ234（第48図）　調査区の北西隅で検出した。平面形は方形で、西辺長3.6m以上、南辺長4.5m、深さ３～５cmを測る。住居の方位はおおむね南北方向である。北辺は調査区外に延びる。住居は、ほとんど削平されていて、かろうじて輪郭が確認できたのみである。東辺から南辺にかけて幅25～30cm、深さ５cm程度の周壁溝を検出した。主柱穴は確認できなかった。時期の決め手となる出土遺物はないが、竪穴式住居跡ＳＨ156・157とほぼ同じ方位であることから、飛鳥時代後半の住居である可能性が高い。

⑥土坑ＳＫ346　調査区の中央部、やや南寄りで検出した。平面形は不整形な方形である。出土遺物としては奈良時代前半の須恵器杯Ｂ蓋がある（第53図16）。

⑦土坑ＳＫ337　調査区の北東部で検出した。平面形は不整形な形状である。出土遺物としては飛鳥時代中頃の須恵器杯Ｇ蓋がある（第53図17）。

⑧土坑ＳＫ147　調査区の南東部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸１m、短軸0.8m、深さ20cm前後を測る。出土遺物として大型の須恵器杯がある（第53図21）。

⑨柱穴ＳＰ329　調査区の南西部で検出した。平面形は円形で、直径45cm、深さ25cmを測る。

柱穴内から須恵器杯Aが出土した(第53図19)。19の底部外面には墨痕が認められたが、文字は判別できなかった。

⑩**柱穴ＳＰ417**　調査区の北西部で検出した。土師器甕が出土した(第53図20)。

⑪**溝ＳＤ167**　調査区の北辺、東寄りで検出した東西方向の溝である。検出長4.3m、幅0.4m、深さ10～20cmを測る。竪穴式住居跡ＳＨ156と重複しており、これらより新しい。出土遺物として土師器杯C、高杯杯部破片などがある(第53図22・23)。いずれも内面に暗文を施す。

⑫**不明遺構ＳＸ206**　調査区の西辺寄りで検出した。遺構としての平面形は確認できなかったが、須恵器甕が出土した地点である。出土遺物としては須恵器甕のほか、杯Ｂ・鉢Ｅなどがある(第53図24～26)。

(伊野近富・筒井崇史)

(３)中世の遺構・遺物

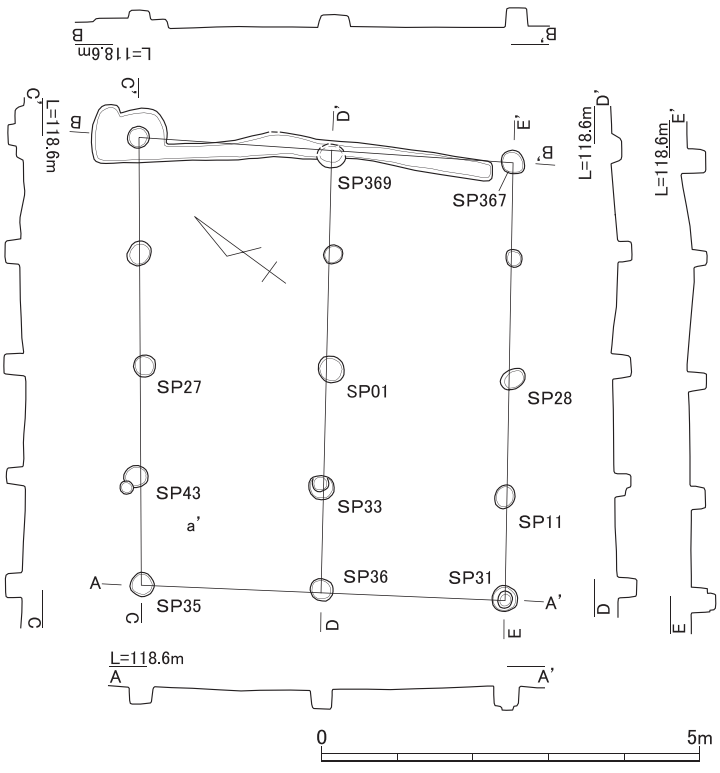
中世の遺構として土坑や柱穴を多数検出した。これらは調査地全体に点在しており、北西から南東にかけて建物群が構成されていたと考えられる。その一部が建物として復原できた。

①**掘立柱建物跡ＳＢ01**(第49図)　調査区の南部で検出した。桁行４間(約5.9m)、梁行２間(約4.9m)の総柱の建物である。建物の方位は北に対して32°ないし36°西に振る。柱穴はいずれも直径20cm程度、深さ20cm程度である。埋土は灰褐色や暗褐色である。出土遺物としては瓦器や土師器がある(第54図27～29)。27・29は土師器皿である。29は立ち上がり部が強い指押さえで凹凸が激しい。28は丹波型瓦器椀である。焼成不良で断面が灰黒色を呈する。27・28は柱穴ＳＰ01から、29は柱穴ＳＰ33から出土した。

②**柵ＳＡ70**　調査地の北西部で検出した。柵の方位は北に対して約36°西に振る。柱穴は６基で、直径30～40cmである。

③**柵ＳＡ145**　調査地の南東部で検出した。「L」字状に屈折する。柵の方位は北に対して約33°西に振る。柱穴は６基検出した。柱穴の平面形は隅丸方形で、長辺1.2m、短辺0.8mである。

④**土坑ＳＫ21**(第50図)　調査地の中央部で検出した。平面形は不整形な楕円状を呈し、北西から南東方向に主軸を持つ。長軸5.5m、短軸3.5mである。底面には20～50cm大の自然石が置かれていた。

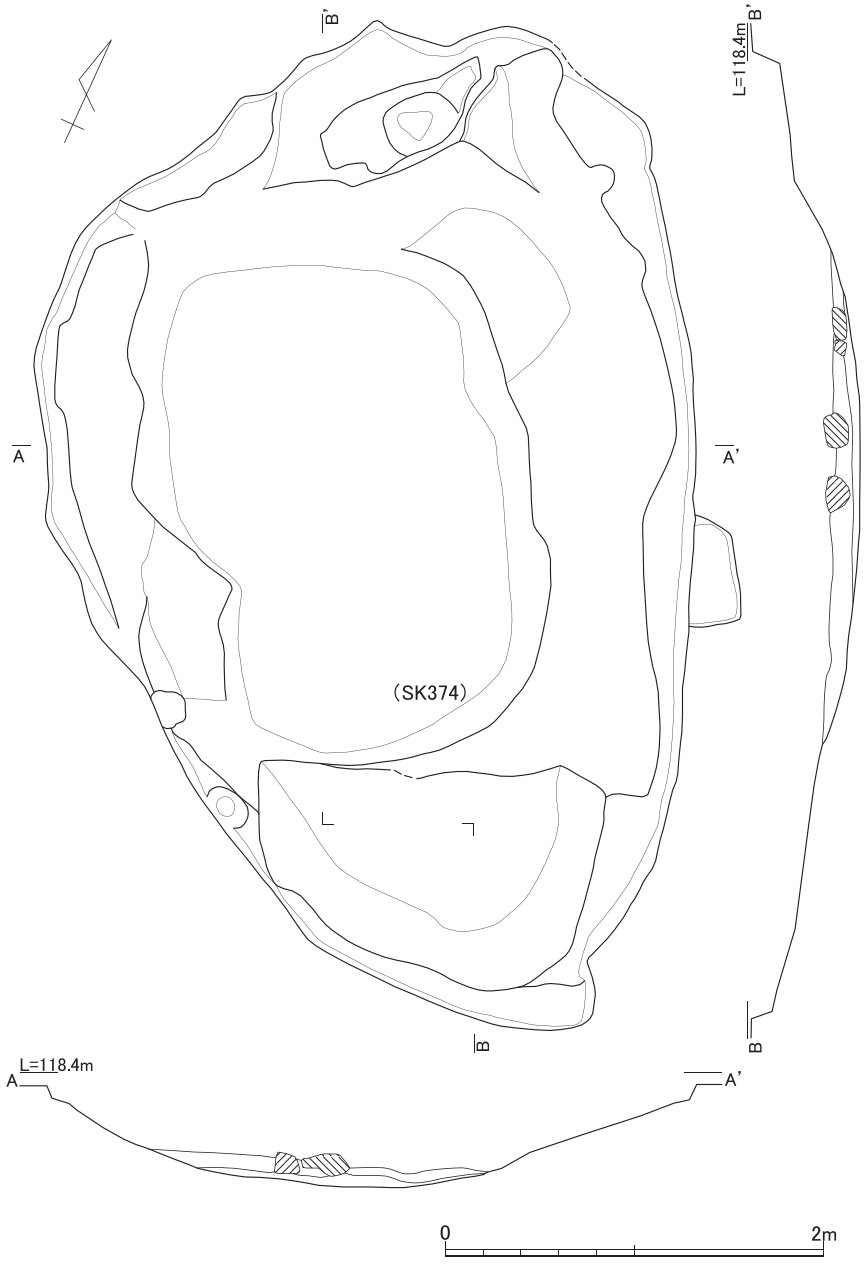


第49図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図

出土遺物としては土師器や瓦質土器、輸入陶磁器などがある（第54図90～94）。90・91は土師器皿である。90は口縁部のヨコナデが施されない。92は瓦質土器羽釜である。口縁部外面に３条の沈線によって、段が形成されている。２次的に被熱したためか、大半が赤橙色を呈する。胴部外面はヘラケズリ、内面はハケ調整が施される。93・94は白磁皿である。93は体部下半以下が露胎であるが、94は畳付以外は全面施釉である。内面に重ね焼きの痕跡が認められる。

⑤土坑ＳＫ150（第51図上）　調査地の南部で検出した。平面形はやや不整形な隅丸方形である。南西辺長2.8m、北西辺長2.5m、深さ約20cmを測る。拳大から一辺30cm程度の角礫が土坑内から集中して出土したが、乱雑に投棄されたような状態であった。

出土遺物としては瓦器や瓦質土器、須恵器などがある（第54図85～89）。85・86は丹波型瓦器椀

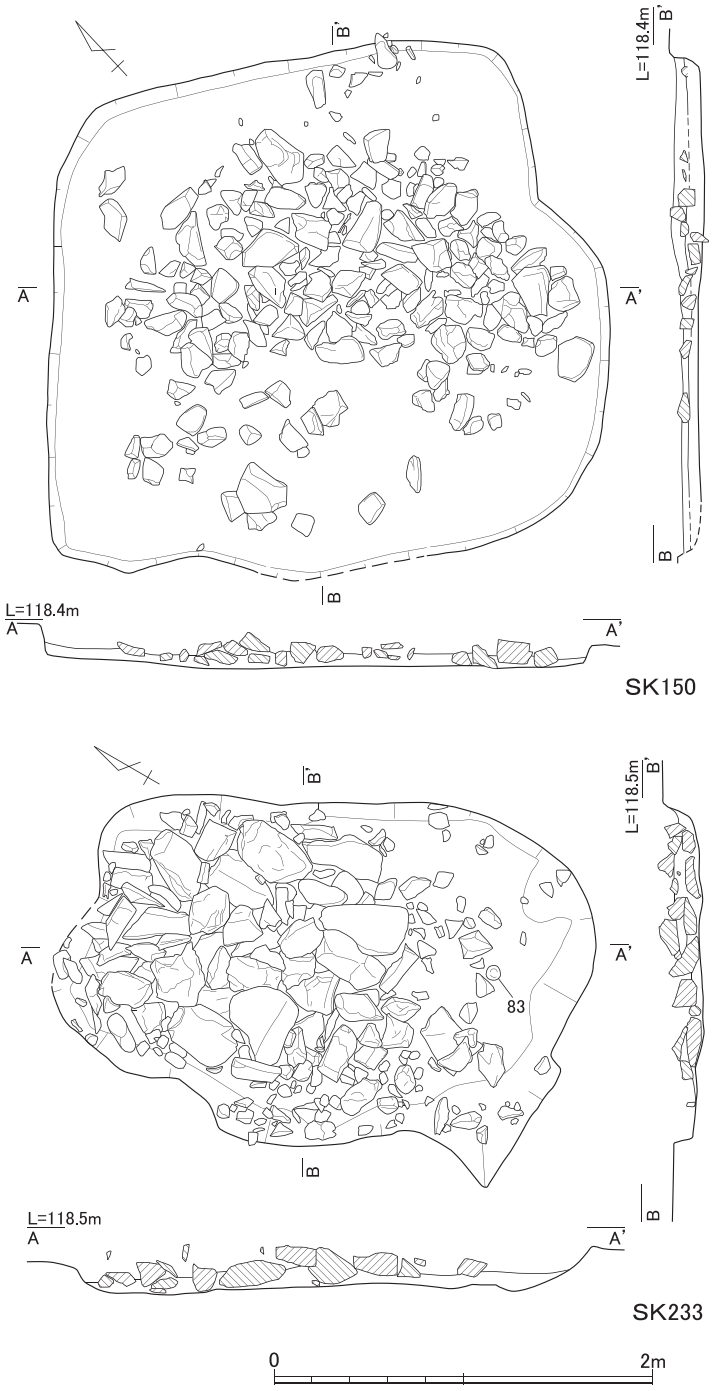


第 50 図　土坑ＳＫ 21 実測図

である。86は内面にやや粗い圏線ミガキが施され、外面にもわずかにヘラミガキが施される。２次的に被熱したためか、器面の下半が灰橙色～淡灰色を呈する。87は瓦質土器羽釜である。88は東播系須恵器鉢である。外面に重ね焼きの痕跡がみられる。89は備前焼すり鉢である。７条一単位のすり目が施される。色調は暗灰色を呈するが、破断面はやや紫色を帯びる。

⑥土坑ＳＫ233（第51図下）　調査区の北西部で検出した。平面形は不整形であるが、北西から南東方向に主軸を持つ、隅丸長方形状を呈する。長軸2.9m、短軸1.8mである。底面に20～40cm大の石が置かれていた。性格は不明である。出土遺物として土師器皿がある（第54図83）。83は口縁部外面は端部まで指掌痕がみられる。ほぼ完形である。

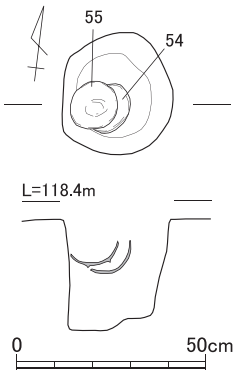
⑦土坑ＳＫ203　調査区の北西部、竪穴式住居跡ＳＨ201の上面で検出した。平面形は楕円形で、長軸1.2m、短軸0.8m、深さ約40cmを測る。出土遺物としては飛鳥時代後半の土師器杯Ｃ（第53図18）と中世の土師器皿がある（第54図71・72）。18は内面に暗文を施す。71・72は断面が灰黒色を呈し、器表面は灰橙色～淡灰色を呈する。



第51図　土坑ＳＫ150・233実測図

⑧土坑ＳＫ202　土坑ＳＫ203と同様に、竪穴式住居跡ＳＨ201の上面で検出した。土師器皿が出土した（第54図73・74）。

⑨土坑ＳＫ13　調査区の南半部、中央付近で検出した。土師器や瓦器が出土した（第54図75～78）。75・76は土師器皿である。75は口縁端部をわずかに内側に折り曲げる。77・78は丹波型瓦器椀である。77は内面に粗い圏線ミガキが施される。78は内面にやや密な圏線ミガキが、外面に



第52図　柱穴
ＳＰ06実測図

粗いヘラミガキが施される。

⑩**土坑ＳＫ377**　調査区の中央、北東寄りで検出した。黒色土器Ｂ類椀が出土した（第54図79）。内面に密な圏線ミガキが施され、口縁内端部に沈線がめぐらされる。外面はヘラケズリの後、密なヘラミガキが施される。

⑪**土坑ＳＫ374**（第50図）　土坑ＳＫ21の下部にあたる。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺3.0m、短辺2.0mを測る。丹波型瓦器椀が出土した（第54図80）。炭素が吸着しておらず、淡橙灰色を呈する。

⑫**土坑ＳＫ25**　調査区の北半部、中央付近で検出した。土師器皿が出土した（第54図82）。口縁部が緩やかに立ち上がり、端部はやや尖り気味におさめる。

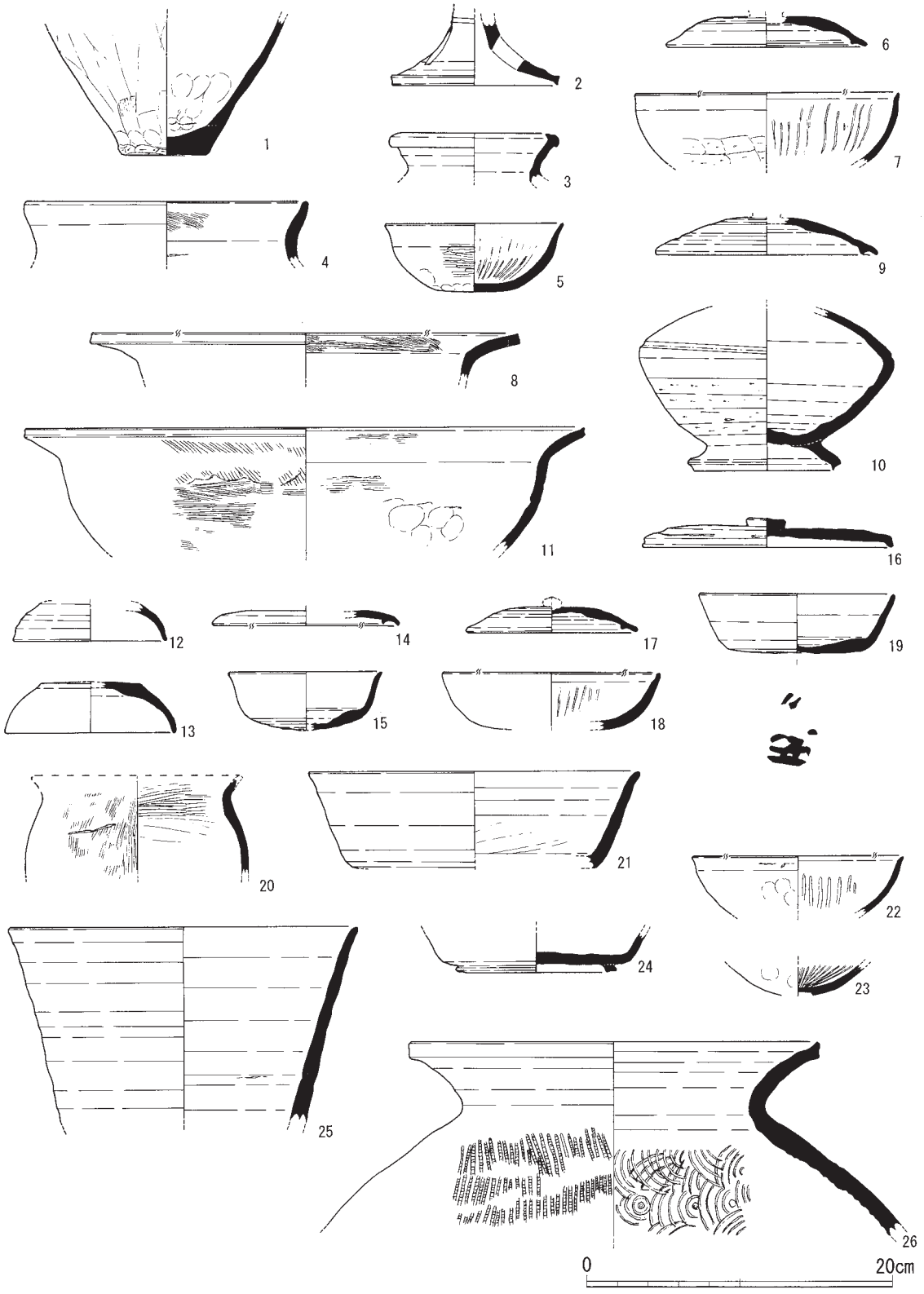
⑬**土坑ＳＫ154**　調査区の東半部、中央付近で検出した。無釉陶器椀が出土した（第54図84）。平高台で内外面にヘラミガキが施される。

⑭**柱穴ＳＰ24**　調査区の北東部で検出した。土師器皿が出土した（第54図81）。口縁端部がわずかに外反する。

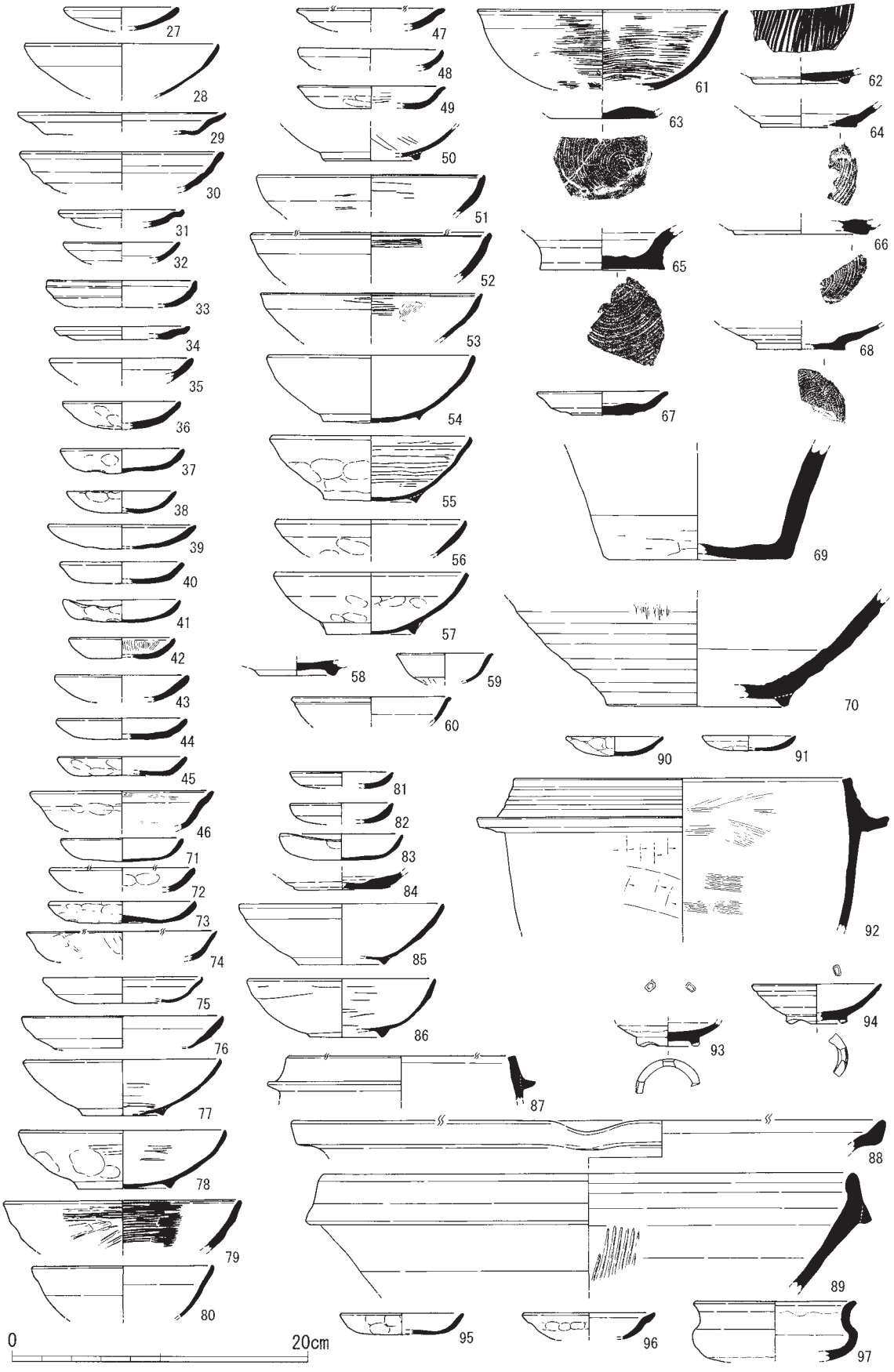
⑮**柱穴群**　Ａ３地区では多数の柱穴を検出したが、建物や柵としてまとまるものは上記のものを除いて、確認することはできなかった。柱穴はおおむね平面形が円形で、直径30～50cm、深さ10～30cmのものが多い。

出土遺物としては土師器や瓦器、黒色土器、須恵器などがある（第54図30～70）。30～48は土師器皿である。30は３段のヨコナデが施される。31・34は「て」字状口縁であるが、34は退化している。33は２段ナデで、口縁端部が直立するものである。37・38・41・42・44は口縁部のヨコナデが施されない。49は瓦器皿である。口縁部内面に圏線ミガキが施される。50～58は丹波型瓦器椀である。51～53は口縁内端部に沈線がめぐらされる。59は瓦器小椀である。60は緑釉陶器椀である。61・62は黒色土器Ｂ類椀である。63～66は回転台土師器杯、67は回転台土師器皿である。底部に回転糸切り痕がみられる。68は須恵器椀である。69は須恵器壺である。体部外面の底部付近は横方向のヘラケズリが施される。瓦質に近い焼成である。70は東海系陶器鉢である。内面はアバタ状に剝離している。30～32はＳＰ14から、33はＳＰ309から、34・35はＳＰ198から、36・37はＳＰ238から、38・39はＳＰ235から、40・64はＳＰ34から、41・42はＳＰ125から、43はＳＰ29から、44はＳＰ313から、45はＳＰ457から、46はＳＰ314から、47～51はＳＰ326から、52はＳＰ146から、53はＳＰ40から、54・55はＳＰ06から（第52図）、56はＳＰ397から、57はＳＰ376から、58はＳＰ433から、59はＳＰ434から、60はＳＰ311から、61はＳＰ458から、62はＳＰ223から、63はＳＰ116から、65はＳＰ20から、66・68はＳＰ155から、67はＳＰ399から、69はＳＰ60から、70はＳＰ107から出土した。

（森島康雄）



第53図　A３地区出土遺物実測図（１）



第 54 図　Ａ３地区出土遺物実測図（２）

14. Ａ４地区の調査

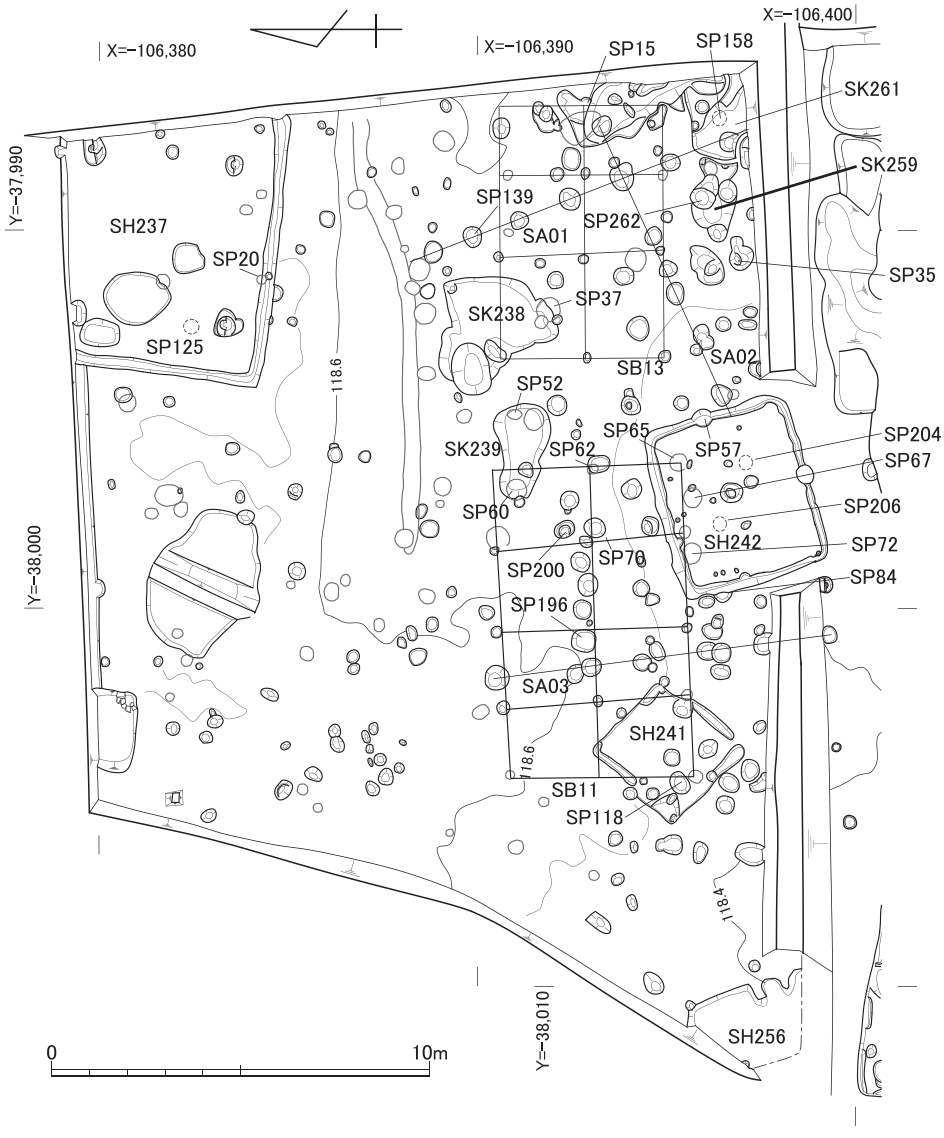
Ａ３地区の東側、農道を挟んで設定した調査区である。古墳時代、飛鳥時代、奈良時代の各時期の遺構･遺物を検出した。地形的には南に向かって傾斜しているため、南側に黒褐色粘質土(黒ボク層)が堆積していた。この上面で中世と奈良時代の遺構を検出した。また、地山上で古墳時代や飛鳥時代の遺構を検出した(第55図)。

(１)古墳時代の遺構・遺物

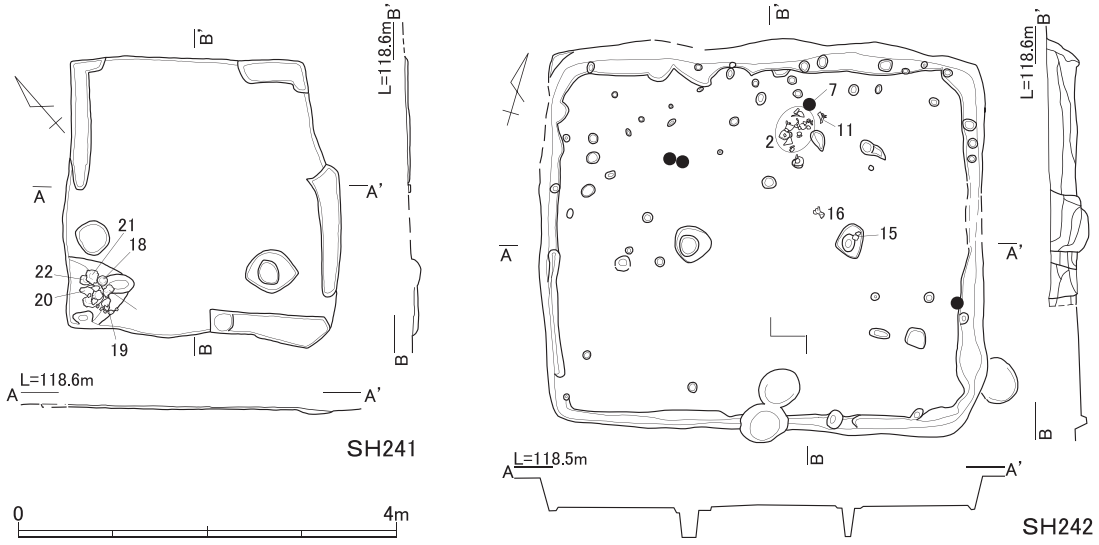
古墳時代の遺構としては竪穴式住居跡２基を検出した。

①竪穴式住居跡ＳＨ241(第56図左)　調査区の南西部で検出した。住居跡の平面形は方形を呈し、一辺3.0mほどのやや小型の住居跡である。周壁溝は部分的に認められる。明らかに主柱穴と思われるような柱穴は検出されなかった。土師器が住居の西角でまとまって出土した(17～22)が、深さ10cm程度の土坑状を呈する。住居の方位は北に対して約41°東に振る。

出土遺物としては土師器がある(第61図17～22)。17・18は小型の壺ないし甕である。17は磨滅



第55図　Ａ４地区遺構配置図(1/200)



第56図　竪穴式住居跡ＳＨ241・242実測図

が著しく調整が不明瞭である。18は内外面ともヘラケズリ調整を施す。器壁が厚く重い土器である。外面下半に煤が付着する。19～21は甕である。19は口縁端部を内上方につまみ上げ、体部内面を頸部付近までヘラケズリ調整を施す。20は口縁端部内面が若干肥厚する。21は口縁部と底部を欠損するが、体部外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。22は口縁部が外上方に開く鉢である。古墳時代前期に位置づけられる。

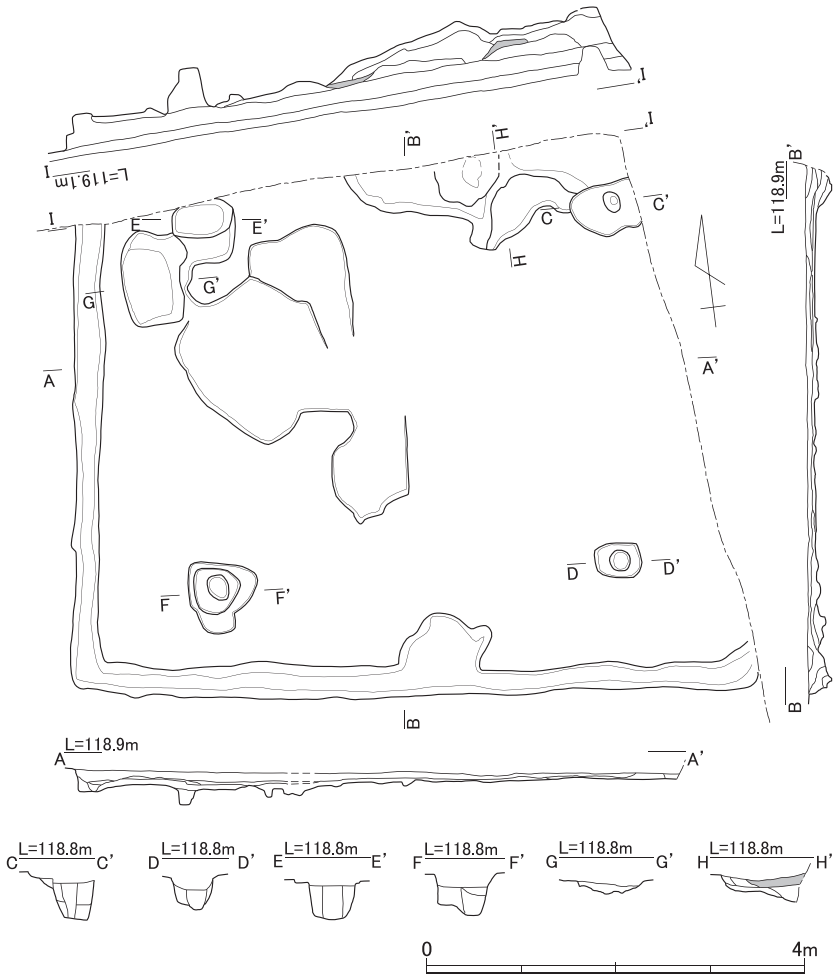
②竪穴式住居跡ＳＨ242（第56図右）　調査区の南辺中央付近で検出した。当初は北半部のみを検出したのみであるが、Ａ５地区との間の畦畔を除去して、全面的に検出した。

住居跡の平面形は長方形を呈し、一辺が4.1ないし4.6m、深さ30cmを測る。幅20～30cm、深さ５～10cm程度の周壁溝がほぼ全周する。主柱穴は２基確認した。平面形は不整形な形状を呈するが、直径30～40cm、深さ25～30cm程度を測る。住居の方位は北に対して約17°西に振る。遺物は床面直上から多数の土器と鉄器１点が出土した（２・７・11・15・16・95など）。また、埋土からも土器が出土した。

出土遺物としては土師器や鉄器がある（第61図１～16、第65図95）。１・２は小型丸底土器である。１は複合口縁を呈し、口縁部外面に９条の擬凹線文を施す。後述する６とともに、北陸系の特徴を有する土器である。３・４は二重口縁状を呈する壺の口縁部である。４は口縁部内面にヘラミガキ調整を施し、擬口縁部外面に列点文を施す。５は器台の可能性もあるが、器種は不明である。６～９は甕である。６は複合口縁を呈し、磨滅気味であるが、口縁部外面に９条前後の擬凹線文を施す。体部内面にヘラケズリ調整を施す。８は体部外面にタタキ調整がみられる。12～14は壺または甕の底部である。13は外面にタタキ調整がみられる。10・11は高杯である。10は椀形高杯の杯部である。11は「ハ」字状に開く高杯脚部で、スカシ孔は認められなかった。15・16は小型器台である。95は刀子の茎であろうか。土器は古墳時代前期に位置づけられる。

（２）飛鳥時代の遺構・遺物

飛鳥時代の遺構としては、竪穴式住居跡２基、土坑２基などがある。また、多数の柱穴を検出



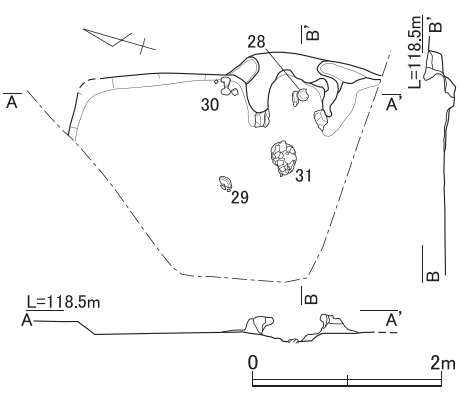
第57図　竪穴式住居跡ＳＨ237実測図

しており、当該期の建物や柵が存在する可能性がある。

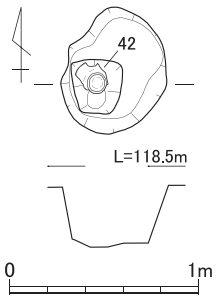
①竪穴式住居跡ＳＨ237（第57図）　調査区の北東隅で検出した。比較的大型の竪穴式住居跡であるが、東辺と北辺は調査区外にあるため、正確な規模は不明である。南辺長7.3m、西辺長4.9m以上、深さ15cm程度を測る。住居には貼り床が施されており、これを除去した後の、掘形底面は凹凸が著しい。幅30cm前後、深さ５～10cmの周壁溝が全周する。主柱穴は４基確認し、おおむね直径40～50cm、深さ35～45cmを測る。トレンチ北壁に沿って土坑を２基検出した。どちらも浅いため機能については不明である。カマドは未検出であるが、上述の土坑埋土に焼土を含んでおり、住居の北辺にカマドが敷設されていた可能性がある。住居の方位は北に対して約８°東に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第61図23～26）。23は土師器甕である。24～26は須恵器杯Ｈ蓋である。いずれもほぼ同形同大の個体である。25は天井部付近に補助ケズリがみられる。(注6)ＳＨ237出土遺物は次のＳＨ256出土遺物よりも明らかに新しく、飛鳥時代中頃に位置づけられる。

②竪穴式住居跡ＳＨ256（第58図）　調査区の南西隅で検出した。竪穴式住居跡ＳＨ242と同様に、Ａ５地区との間の畦畔を除去して、可能な限り調査を行った。しかし、南側はＡ５地区とし



第58図　竪穴式住居跡ＳＨ256実測図



第59図　柱穴ＳＰ262実測図

た水田によって削平されていたため、規模等は不明である。東辺にカマドを有する。周壁溝や主柱穴は未検出である。住居の方位は北に対して約19°西に振る。遺物はカマドの周囲で出土した。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第61図27～第62図32）。27・28須恵器杯蓋である。天井部に回転ヘラケズリを施す。口径は13cm程度を測り、竪穴式住居跡ＳＨ237よりも古い様相を示す。29は須恵器長頸壺の口頸部から体部中位にかけての破片である。口頸部外面に沈線を２条施す。また、体部外面に沈線２条を施し、その間を刺突文で充填する。30は須恵器𤭯である。大きく開く口縁部と、小型化した体部からなる。底部外面は手持ちのヘラケズリ調整の後、ナデ調整を施す。体部中位に直径1.5cmほどのスカシ孔を１か所穿つ。31は土師器甕である。カマドの前庭部で出土した。32は製塩土器と推定されるが、蔵垣内遺跡では類似した特徴を持つものがなく、粗雑な土師器鉢の可能性もある。須恵器から古墳時代後期後半ないし末頃に位置づけられる。

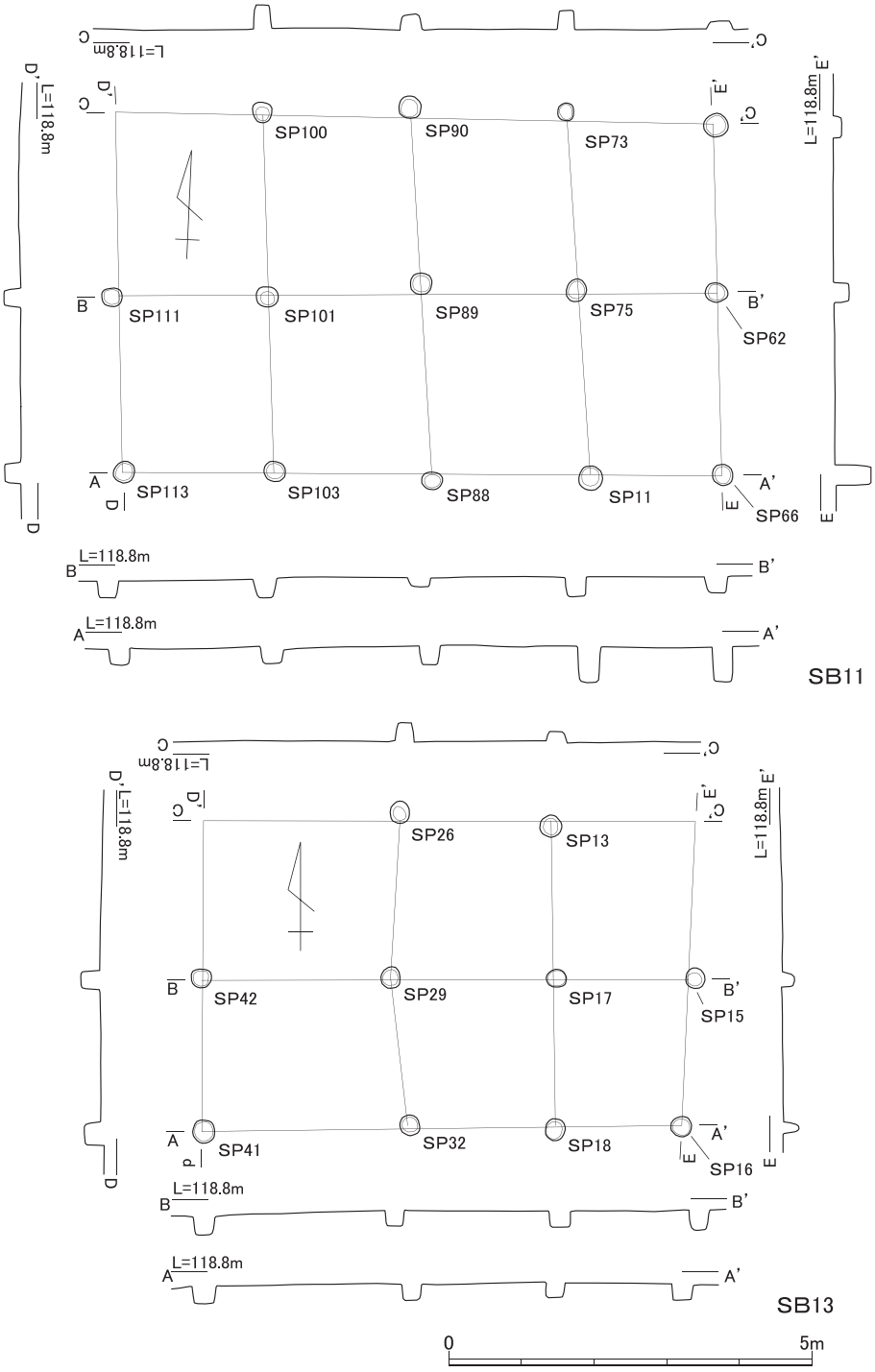
③土坑ＳＫ239　調査区のほぼ中央で検出した。不整形な形状を呈するが、長軸2.5m、短軸1.5m、深さ40cmを測る。出土遺物として須恵器がある（第63図33～35）。33は須恵器杯Ｇ蓋である。34は須恵器杯Ｇである。35は須恵器甕である。

④土坑ＳＫ238　調査区の中央やや東寄りで検出した。土坑ＳＫ239よりも不整形な形状を呈し、長軸3.3m、短軸2.6m、深さ35cmを測る。東半部で10～30cm程度の礫がまとまって出土したが、性格は不明である。出土遺物として須恵器や土師器がある（第63図36～38）。36は須恵器杯Ｇである。37は須恵器壺の口縁部であろう。外面に沈線を２条施す。38は土師器甕である。ＳＫ239・ＳＫ238出土の須恵器杯Ｇは古い特徴を持つと考えられ、飛鳥時代中頃に位置づけられる。

⑤柱穴ＳＰ262（第59図）　調査区の南東部で検出した。平面形は不整形な楕円形を呈し、長軸0.67m、短軸0.56m、深さ30cmを測る。柱穴内から須恵器脚台付皿が出土した（第63図42）。42は「ハ」字状に開く脚台を有し、内端部が接地する。飛鳥時代後半から奈良時代前半頃のものと推定される。

⑥柱穴ＳＰ206　調査区の南辺中央付近、竪穴式住居跡ＳＨ242の上面で検出した。平面形は円形を呈し、直径0.7m、深さ30cmを測る。柱穴からは須恵器杯Ａ（もしくは杯Ｇ）が出土した（第63図43）。43は34・36に比べると器高が低く、やや厚手の作りである。

⑦柱穴ｆ　Ａ４地区とＡ５地区の間の畦畔を除去後、竪穴式住居跡ＳＨ242の上面で検出した。平面形は円形を呈し、直径0.54m、深さ30cmを測る。柱穴からは須恵器杯Ｇ蓋などが出土した（第63図54）。小破片で、焼け歪みが著しい。宝珠つまみを持つ。

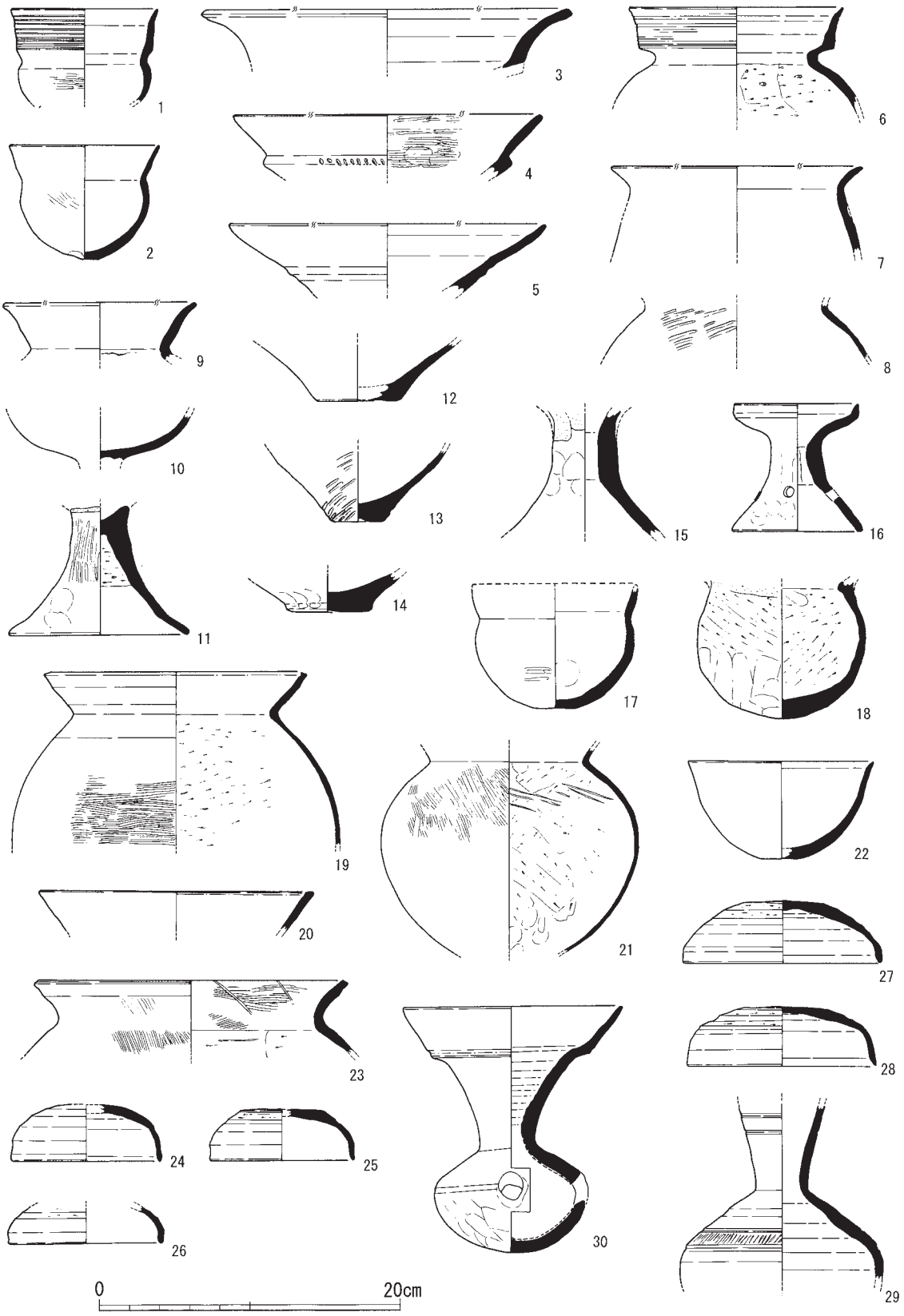


第60図　掘立柱建物跡ＳＢ11・13実測図

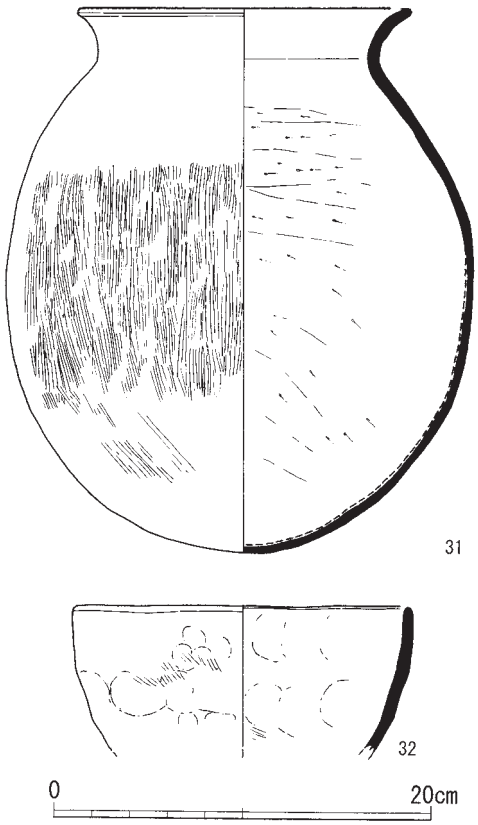
（３）奈良時代の遺構・遺物

奈良時代の遺構として多数の柱穴を検出したが、柵状の柱列として復原できたのは３条ほどである（柵ＳＡ01～03）。これらは柵ではなく掘立柱建物である可能性もある。

①柵ＳＡ01　調査区の南東部で検出した。柱穴７基が直線上に並ぶ。検出長は8.4mである。柱穴はおおむね円形を呈し、直径40～60cm、深さ20～30cmを測る。柵の方位は北に対して約21°西に振る。



第 61 図　A 4 地区出土遺物実測図（1）



第62図　A４地区出土遺物実測図（２）

②**柵ＳＡ02**　調査区の南東部で検出した。柵ＳＡ01とほぼ直交する。柱穴６基が直線上に並ぶ。検出長は7.8mである。柱穴はおおむね円形を呈し、直径50cm前後、深さ20～30cmを測る。柵の方位は東に対して約24°北に振る。

③**柵ＳＡ03**　調査区の南西部で検出し、Ａ５地区で検出した柱穴１基も含まれる。柱穴６基が直線上に並ぶ。検出長は8.9mである。柱穴はおおむね円形を呈し、直径40cm前後、深さ10～30cmを測る。柵の方位は北に対して約７°西に振る。

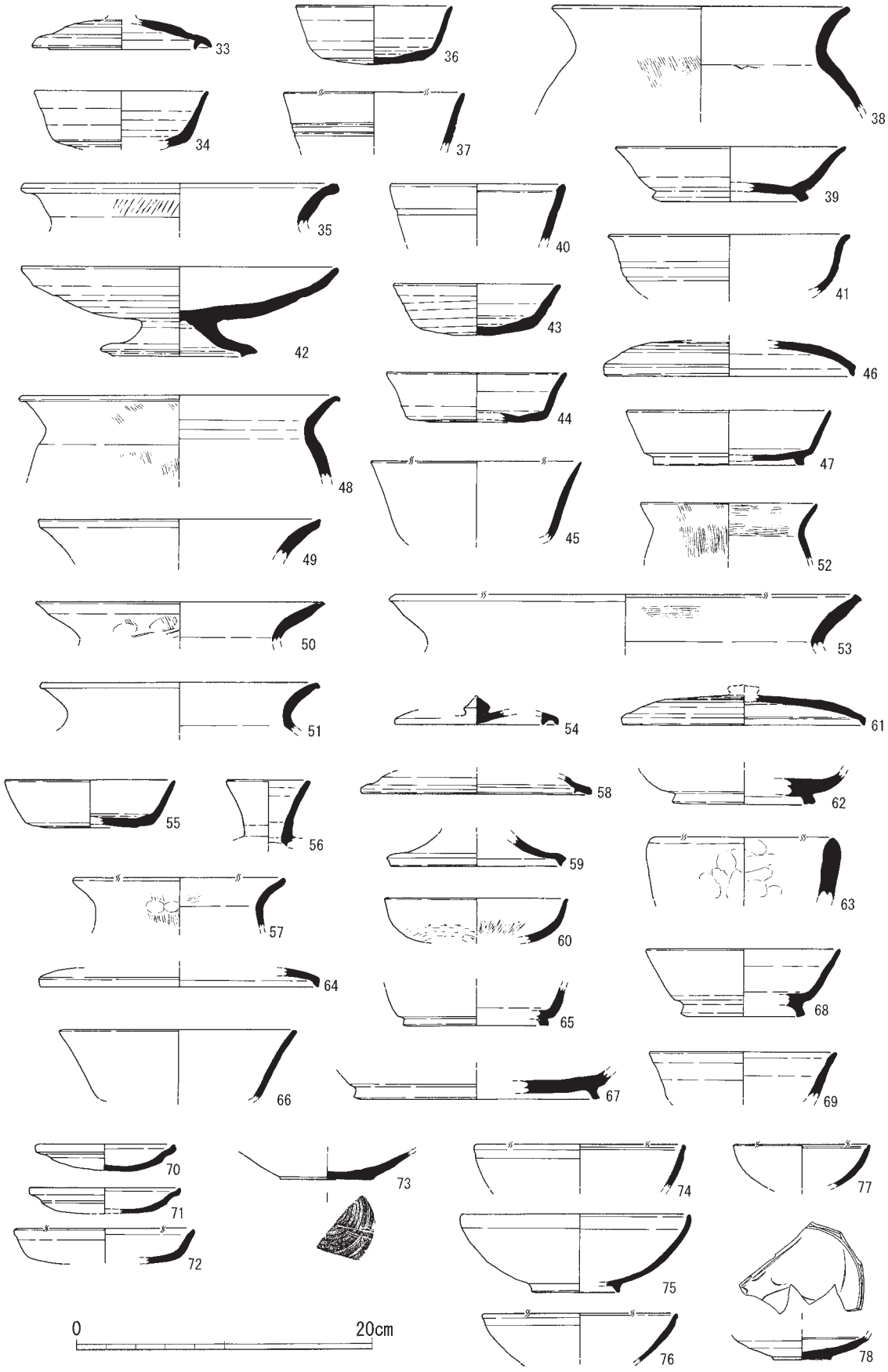
④**その他の柱穴群**　上記の柵に復原した柱穴以外の柱穴からもこの時期の遺物が出土している（第63図44～53・55・56・59～69）。44～47・55・56・59・61・62・64・65・67～69は須恵器である。48～53・57・60・66は土師器である。63は製塩土器である。44はＳＰ60から出土した杯Ａである。45はＳＰ35から出土した杯である。46はＳＰ196から出土した杯Ｂ蓋である。47はＳＰ57から出土した杯Ｂである。48～53は甕である。48はＳＰ200から、49･52はＳＰ37から、50はＳＰ84から、51はＳＰ70から、53はＳＰ139から出土した。55は杯Ａ、56は平瓶の口縁、57は甕で、ＳＰ52から出土した。59はＳＰ65から出土した高杯脚部である。60は杯で、内面に放射状暗文がみられる。ＳＰ67から出土した。61は杯Ｂ蓋、62は杯Ｂ、63は製塩土器で、ＳＰ72から出土した。64はＳＰ204から出土した杯Ｂ蓋の口縁端部の破片である。65はＳＰ20から出土した杯Ｂである。66は杯、67は杯Ｂで、ＳＰ15から出土した。68はＳＰ118から出土した杯Ｂである。69はＳＰ62は出土した。

（４）中世の遺構・遺物

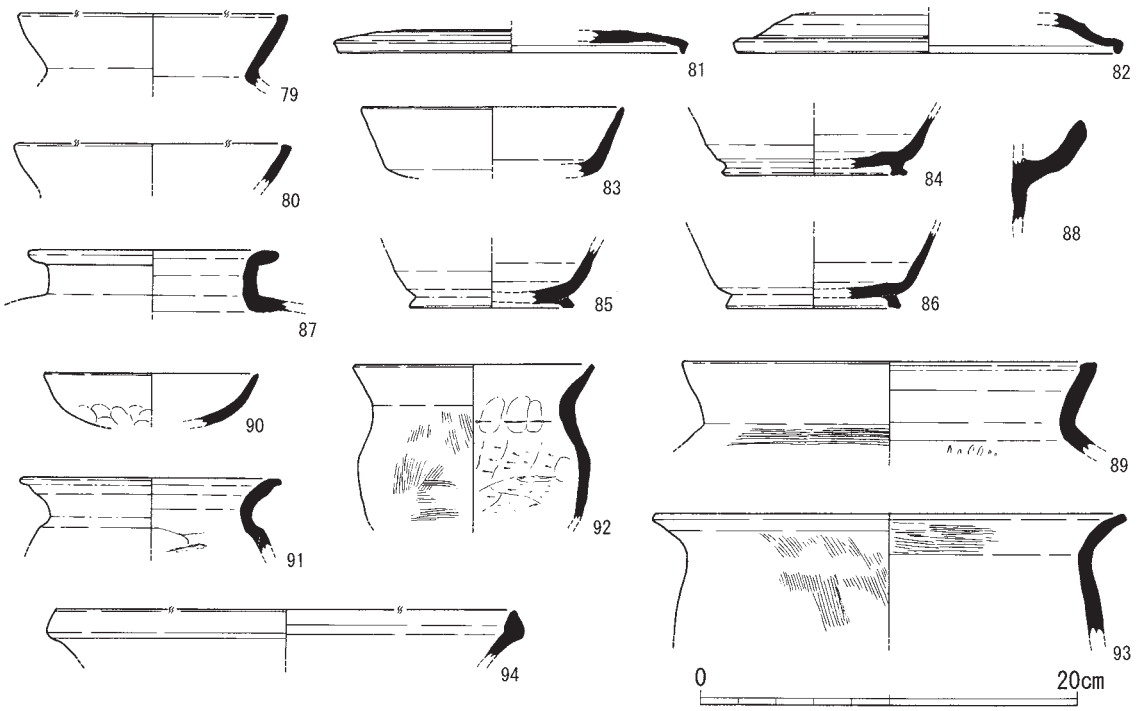
中世の遺構として掘立柱建物跡２棟のほか、柱穴を多数検出した。

①**掘立柱建物跡ＳＢ11**（第60図上）　調査区の南西部で検出した。桁行４間（約8.2m）、梁行２間（約4.8m）の総柱の建物である。ただし北西角の柱穴を検出することはできなかった。柱穴はおおむね円形を呈し、直径25～30cm、深さ10～50cmを測る。建物の方位は北に対して約４°西に振る。柱穴ＳＰ89から丹波型瓦器椀の小破片が出土した（第63図74）。口縁内端部に沈線がめぐらされる。全体に磨滅が著しく、調整が観察できないが、外面にはヘラミガキがみられる。

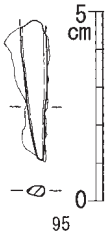
②**掘立柱建物跡ＳＢ13**（第60図下）　調査区の南東部で検出した。桁行３間（約6.6m）、梁行２間（約4.2m）の総柱の建物である。ただし北西と北東の角の柱穴を検出することはできなかった。柱穴はおおむね円形を呈し、直径25～30cm、深さ15～30cmを測る。柱筋や柱間は不揃いだが、建物の方位はおおむね南北方向である。遺物は出土しなかったが、柱穴の規模や埋土などの状況



第 63 図　A 4 地区出土遺物実測図（3）



第64図　A４地区出土遺物実測図（４）



第65図　A４地区出土遺物実測図（５）

から掘立柱建物跡ＳＢ11と同時期と判断した。

（筒井崇史・森島康雄）

③その他の柱穴群　上記の建物以外にも中世の遺物を出土する柱穴を確認している。以下、遺物についてのみ報告する（第63図70～73・75～78）。70～72は土師器皿である。70・71は「て」字状口縁をもつ。73は回転台土師器皿である。体部に回転糸切り痕跡がみられる。75～77は丹波型瓦器椀である。77は口縁内端部に沈線がめぐらされる。全体に磨滅が著しく、調整が観察できない。77は小椀である。78は白磁皿である。見込みにヘラ描き文が施される。70・76はＳＰ121から、71はＳＰ50から、72はＳＰ79から、73はＳＰ116から、75はＳＰ92から、77はＳＰ49から、78はＳＰ179から出土した。

（森島康雄）

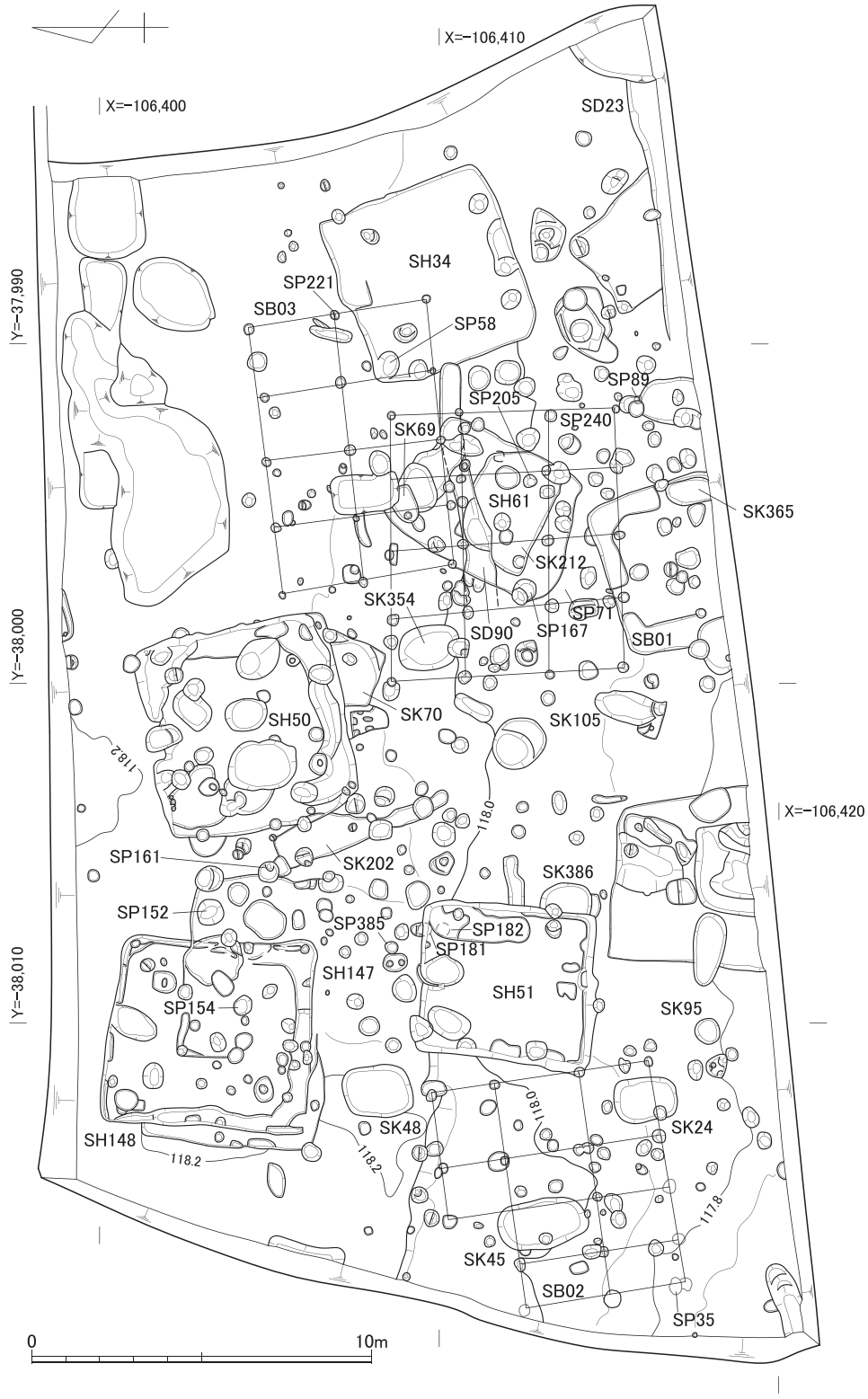
（５）包含層出土遺物

遺物包含層や遺構面の精査中に出土した遺物について報告する（第84図79～94）。81～89・94は須恵器、79・80・90～93は土師器である。79・80は布留式甕の口縁部である。81は杯Ｂ蓋である。82は大型の蓋である。口縁端部が大きく屈曲する。83は杯、84～86は杯Ｂである。高台の形状から古い様相を示すと考えられる。87は短頸壺の口縁部である。口縁端部を大きく外方へ屈曲する。88は甕などの把手である。89は甕の口縁部である。90は椀状を呈する杯である。91～93は甕である。92は体部内面にヘラケズリ調整がみられる。94はいわゆる東播系須恵器の鉢である。

（筒井崇史）

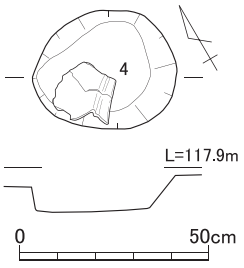
15. Ａ５地区の調査

Ａ４地区の南側に設定した調査区である。地形的にはＡ４地区から引き続き南に向かって傾斜しているが、北半部では水田面の造成によって、黒褐色粘質土（黒ボク層）は削平されたようで、床土の直下で地山を検出した。一方、南半部では黒褐色粘質土が厚く堆積をしていた。他の地区



第 66 図　Ａ５地区検出遺構配置図（1/200）

と同様に、この上面で中世の遺構を検出した。また、地山上で古墳時代、飛鳥時代、奈良時代の遺構を検出した(第66図)。



第67図　土坑ＳＫ205実測図

(1)古墳時代の遺構・遺物

古墳時代と思われる土坑は3基ある。隣接するＡ４・Ａ６地区では当該期の竪穴式住居跡を検出したが、Ａ５地区では検出されなかった。

①土坑ＳＫ365　調査区の南辺中央付近で検出した。平面形は不整形な楕円形を呈し、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ10cmを測る。土師器片が出土した(第75図１・２)。１は小型丸底土器もしくは小型壺の口縁部、２は布留式甕の口縁部である。古墳時代前期のものであろう。

②土坑ＳＫ205(第67図)　調査区の南東部、竪穴式住居跡ＳＨ61の下層で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径35cm前後、深さ10cmを測る。土師器や土錘などが出土した(第75図３～６)。３は二重口縁壺の口縁部、４は複合口縁を呈する甕である。４は口縁部の特徴から山陰系の甕と考えられる。５・６は土錘である。３・４は古墳時代前期に位置づけられる。

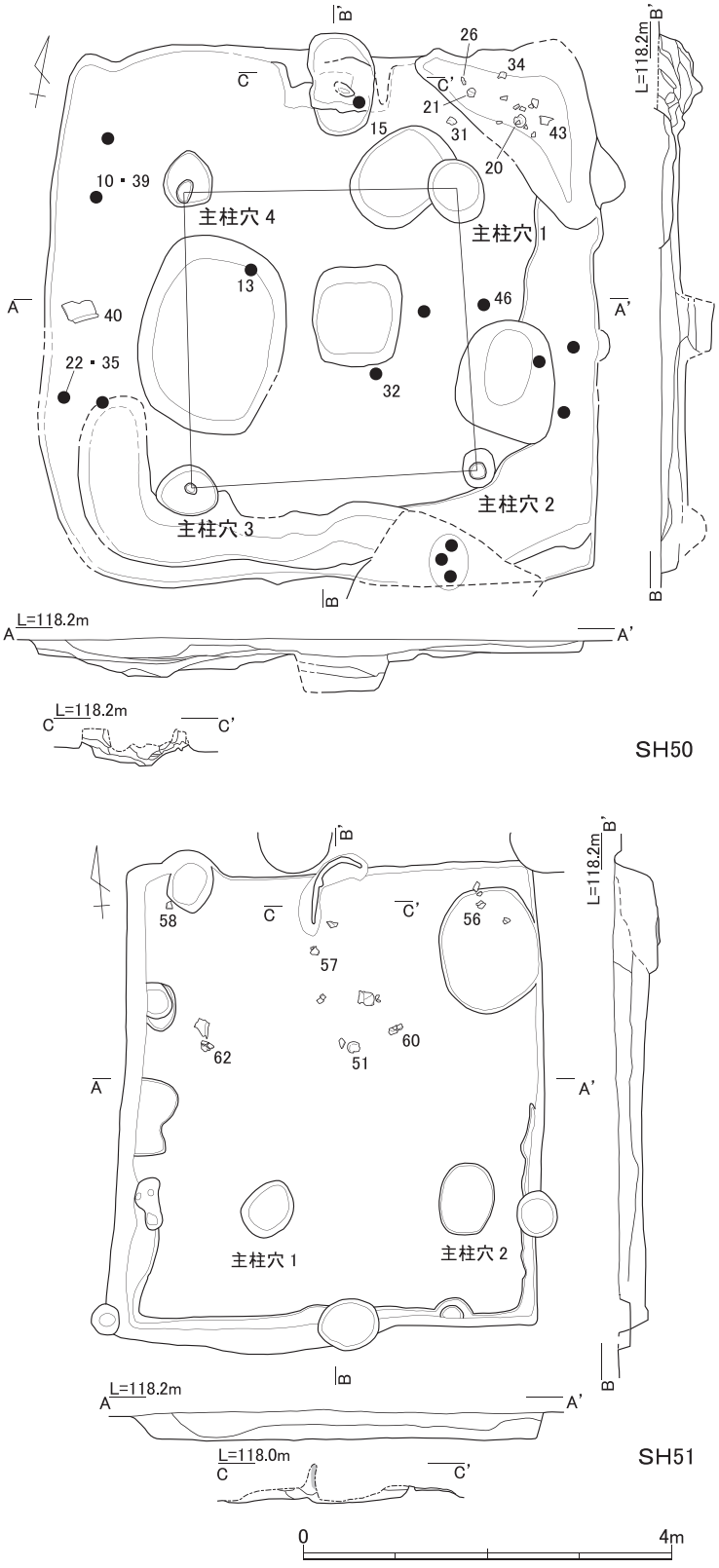
③土坑ＳＫ105　調査区の南辺中央付近で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.9m、幅0.9m、深さ約40cmを測る。出土遺物としては土師器や須恵器の破片がある(第75図７・８)。７は土師器布留式甕の口縁部である。８とは時期差があるので、混入であろう。８は須恵器杯蓋である。口縁端部が面状に内傾し、外面にやや明瞭な稜がめぐる。陶邑編年のＭＴ15型式に相当する(注7)と思われるが、当該期の遺物は今回の調査地全体においても出土例はわずかである。調査地周辺に当該期の集落等が存在した可能性がある。なお、ＳＫ105は今回の調査対象地で検出した唯一の古墳時代後期の遺構である。

(2)飛鳥・奈良時代の遺構・遺物

飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構として、竪穴式住居跡６基のほか、土坑、柱穴などを多数検出した。

①竪穴式住居跡ＳＨ50(第68図上)　調査区の中央部やや北寄りで検出した。平面形は方形を呈し、一辺5.8～6.0m、深さ約25cmを測る。住居の遺存状況は、今回の調査で検出した当該期の住居の中でも最もよいものの１つで、後述するように多量の遺物が出土した。北辺の中央にカマドを有する。幅60～80cm、深さ５～15cmを測る周壁溝が住居の南辺と東辺に認められる。主柱穴は４基確認した。平面形は円形を呈し、直径50～70cm、深さ20～30cmを測る。住居の方位は北に対して約11°西に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器などがある(第75図９～第76図46)。９～26は須恵器である。９～12は杯Ｈ蓋、13は杯Ｇ蓋で、住居の時期よりも少し古い時期の遺物と考えられる。14～18は杯Ｂ蓋であるが、14・15はかえりを有する。19は杯Ａ、20は杯Ｂ、21～26は杯Ｇもしくは杯Ａである。27は製塩土器である。28～46は土師器である。28は皿、29は杯Ａ、30は在地系の杯、31は高杯の杯部である。29は内面に暗文がみられる。32～42は甕である。口縁部の形状の違いがわかるように図示したが、体部の形状については不明なものが多い。32は球形、40は長胴の



第68図　竪穴式住居跡ＳＨ50・51実測図

形状を呈する。43・44は鍋である。45は甑等の口縁部であろうか。46は器種不明の製品である。甑の可能性もあるが、内傾する形態や鍔状の突帯など、一般的な甑とは異なる特徴もみられる。類似した製品として、京田辺市薪遺跡で出土した円筒形土製品がある(注8)。14～26がおおむねＳＨ50の時期を示すと考え、飛鳥時代後半から奈良時代の初めに位置づけられる。

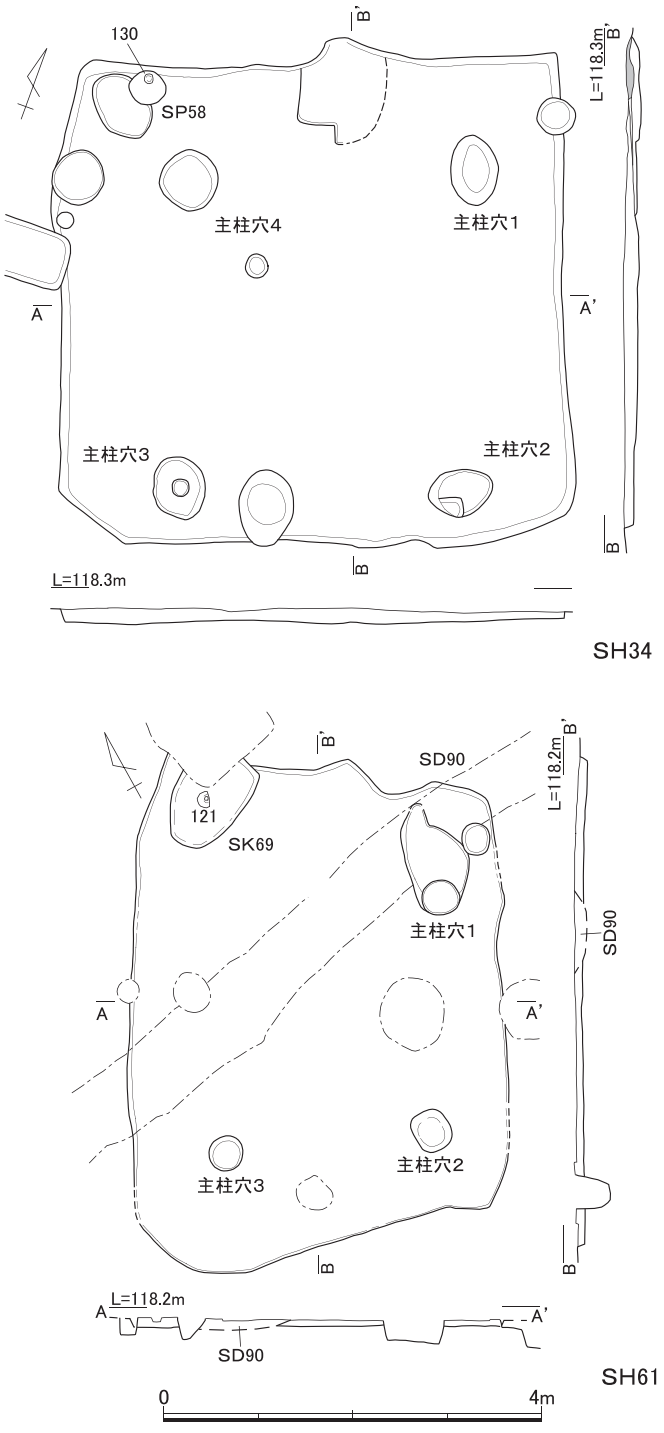
②竪穴式住居跡ＳＨ51（第68図下）　調査区の西部、竪穴式住居跡ＳＨ50の南西約４ｍで検出した。平面形は方形で、一辺4.5～5.0m、深さ約30cmを測る。ＳＨ50同様、遺構の遺存状況は非常によく、多量の遺物が出土した。北辺の中央にカマドを有する。幅15～25cm、深さ５cm前後の周壁溝が住居の南半部に認められる。主柱穴は本来４基と考えられるが、南側の２基を確認するに留まった。平面形はほぼ円形を呈し、直径60～75cm、深さ10cm前後を測る。住居の方位は北に対して約４°東に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器、鉄器などがある（第76図47～62・第82図236～238）。47～56は須恵器である。47～49は杯Ｂ蓋、50～52は杯Ｂ、53・54は杯Ａである。55は長頸壺の口縁部、56は類例をあまりみないが、壺の体部であろう。57は製塩土器である。58～62は土師器甕である。62は長胴の体部を有する。236は刀子の刃部と茎

で、木質が遺存する。237・238も刀子で、中央部分を欠損するが同一個体と考えられるものである。47～54は竪穴式住居跡ＳＨ50の出土遺物に比べ、わずかに新しい要素が認められ、奈良時代初め頃に位置づけられる。

③竪穴式住居跡ＳＨ34（第69図上）
調査区の東部で検出した。平面形は方形で、一辺5.2～5.4m、深さ約15cmを測る。北辺の中央にカマドの痕跡を確認した。周壁溝は検出されなかった。主柱穴は４基確認した。平面形は円形を呈し、直径60～70cm、深さ35cm前後を測る。住居の方位は北に対して約20°西に振る。

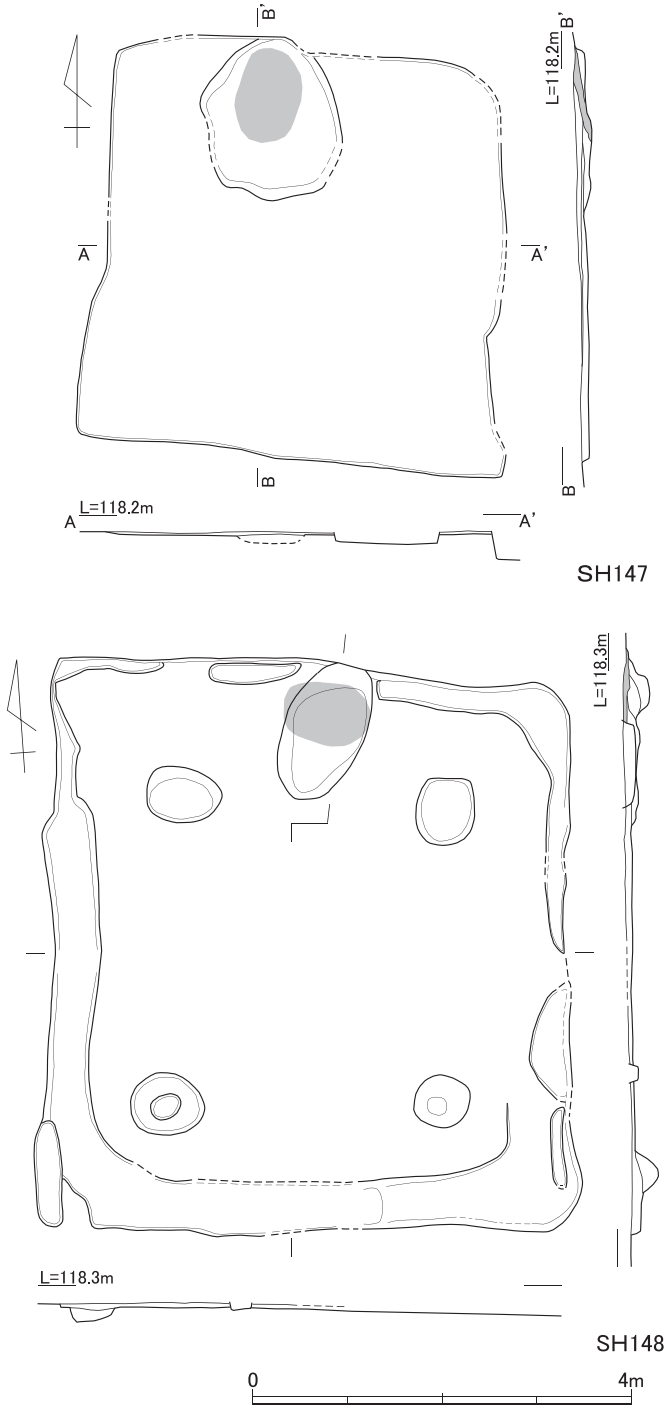
出土遺物としては須恵器や土師器がある（第77図63～72）。63～69は須恵器である。63は杯Ｇ蓋である。64～66は杯であるが、64と65・66は形態が異なり、区別できる。67は破断箇所から斜め下方に伸びていくので、瑞の可能性がある。68は口縁部の形態から提瓶の可能性がある。69は器種不明であるが、横瓶の口縁部の可能性もある。67～69は63～66に比べるとやや古い特徴をもつが、共伴していてもよいと考える。70～72は土師器である。70は器種不明、71は杯Ｃ、72は甕である。63・65・66・71がこの住居の時期を示すと考えられ、飛鳥時代後半に位置づけられる。



第69図　竪穴式住居跡ＳＨ34・61実測図

④竪穴式住居跡ＳＨ61（第69図下）　調査区の中央部、やや東寄りで検出した。平面形は不整形な方形で、一辺3.9～4.9mを測るが、南西隅はやや広がる。カマドの有無は不明である。周壁溝は検出されなかった。主柱穴は本来４基と考えられるが、３基を確認したに留まる。平面形は円形を呈し、直径35～45cm、深さ10cm前後を測る。住居の方位は北に対して約29°東に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第77図82～90）。82～89は須恵器である。82・83は杯



第70図　竪穴式住居跡ＳＨ147・148実測図

Ｂ蓋、84～86は杯Ｂの底部、87は杯Aの底部、88は杯の口縁部、89は片口の鉢の口縁部である。90は土師器杯Ａである。奈良時代初め頃に位置づけられる。

⑤竪穴式住居跡ＳＨ147（第70図上）

調査区の北西部で検出した。平面形は方形で、一辺4.4mを測り、深さは５～６cmと非常に浅い。北辺の中央でカマドの痕跡を確認した。周壁溝や主柱穴は、削平が著しいことや、周辺に多数の柱穴がみられることから確認することはできなかった。住居の方位はほぼ南北方向である。

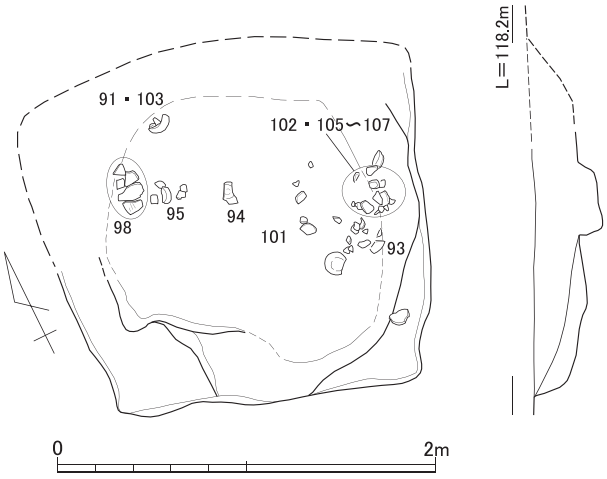
出土遺物としては須恵器や土師器がある（第77図73～79）。73～75は須恵器である。73は杯Gまたは杯Ｂの蓋と推定され、内面にかえりを有する。74は壺または甕の口縁部、75は杯の口縁部である。76～79は土師器である。76は短頸壺と推定される。77は高杯の脚部、78・79は甕の口縁部である。73から飛鳥時代後半に位置づけられよう。

⑥竪穴式住居跡ＳＨ148（第70図下）

調査区の北西部、竪穴式住居跡ＳＨ147と重複して検出した。切り合い関係や出土遺物からＳＨ148の方が新しい。平面形は隅丸方形で、一辺5.4～6.0mを測り、深さは５cm程度と非常に浅い。北辺の中央にカマドを有する。周壁溝は幅30～50cm、深さ５～10cmを測り、断続的にめぐる。主柱穴は４基検出した。平面形は円形を呈し、直径60～80cm、深さ20～50cmを測る。住居の方位はほぼ南北方向である。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第77図80・81）。80は須恵器杯Ｂ蓋である。81は土師器甕の口縁部である。80から奈良時代初め頃に位置づけられ、竪穴式住居跡ＳＨ51とほぼ同時期と考えられる。

⑦**土坑ＳＫ70**（第71図）　調査区の中央部で検出した。竪穴式住居跡ＳＨ50と重複しており、ＳＫ70の方が新しい。ＳＨ50との切り合いから北辺が不明瞭であるが、平面形は隅丸方形を呈する。長辺3.3m以上、短辺3.3m、深さ50～70cmを測る。主軸は北に対して約22°東に振る。



第71図　土坑ＳＫ70実測図

出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器などがある（第77図91～第78図109）。91～98は須恵器である。91～96は杯Ａ、97は杯である。98は平底を呈する鉢Ａである。99～103は土師器である。99・100は杯Ａ、101～103は甕の口縁部である。104～109は製塩土器である。須恵器杯Ｂ蓋を欠くが、須恵器杯Ａや土師器杯Aの特徴から奈良時代前半頃に位置づけられる。

⑧**土坑ＳＫ354**　調査区の中央、土坑ＳＫ70の南側で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸1.3m、深さ30～40cmを測る。

出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器がある（第78図110～120）。110～115は須恵器である。110・111は杯Ｂ蓋で、110は内面にかえりを有する。112は杯Ａ、113・114は長頸壺の口縁部、115は盤である。116～119は土師器甕の口縁部である。120は製塩土器である。土坑ＳＫ70よりも少し古い様相を示し、奈良時代初め頃に位置づけられる。

⑨**土坑ＳＫ69**　竪穴式住居跡ＳＨ61の北辺に重複して検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ約30cmを測る。出土遺物として須恵器がある（第78図121・122）。121は杯Ｂ蓋、122は杯Ｂである。121は竪穴式住居跡ＳＨ61出土の83とおおむね同時期と考える。

⑩**土坑ＳＫ212**　竪穴式住居跡ＳＨ61と重複して検出した。平面形は隅丸長方形で、長辺3.4m、短辺2.4m、深さ25～35cmを測る。出土遺物として須恵器がある（第78図123～125）。123・124は杯Ｂ蓋、125は杯Ｂである。出土した遺物からはＳＨ61との前後関係は不明であるが、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

⑪**土坑ＳＫ95**　調査区の南西部で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.8m、深さ約30cmを測る。出土遺物としては須恵器杯Ｂ蓋がある（第78図126）。

⑫**土坑ＳＫ202**　調査区の中央部、竪穴式住居跡ＳＨ50の西側で検出した。平面形はやや不整形な長方形を呈し、長軸2.7m以上、短軸1.3m、深さ約10cmを測る。出土遺物としては須恵器杯Ｇ蓋がある（第78図127）。

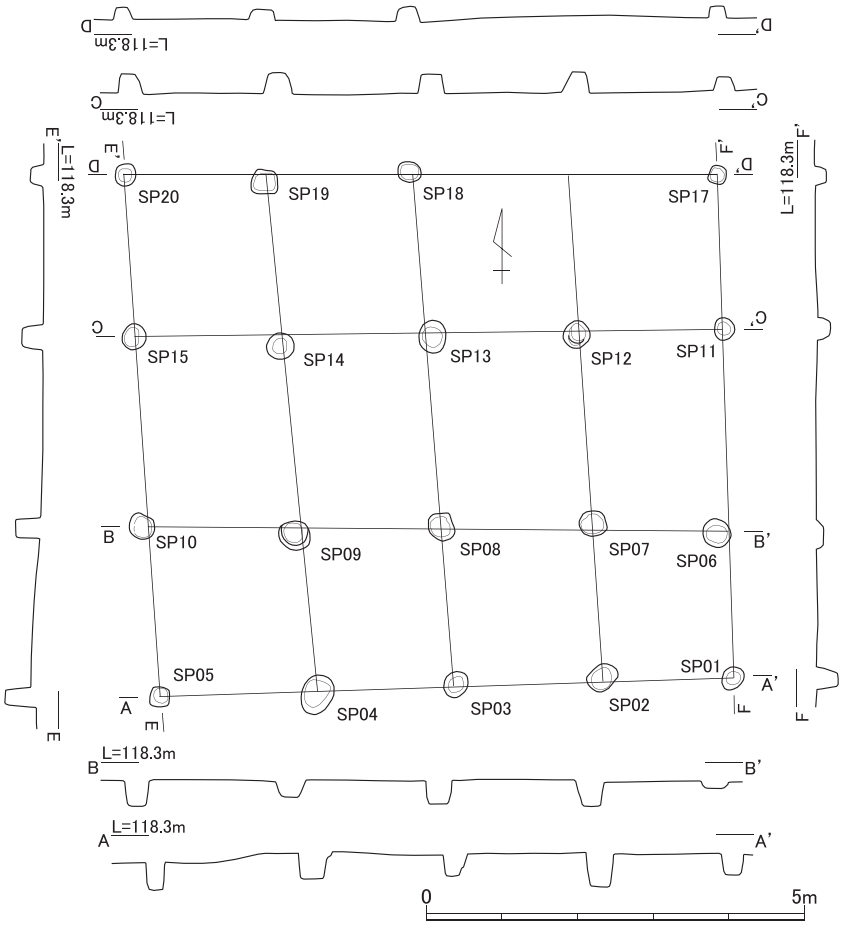
⑬**土坑ＳＫ386**　調査区の中央部、竪穴式住居跡ＳＨ51の東側に接して検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸0.9m以上、深さ約30cmを測る。出土遺物としては土師器高杯の杯部がある（第78図128）。外面にヘラケズリ調整、内面に暗文を施す。

⑭**溝ＳＤ90**　調査区の中央部、竪穴式住居跡ＳＨ61と重複して検出した。全長9.8m、幅0.3～0.8m、深さ約15cmを測る。出土遺物としては土師器甕や製塩土器、鉄器がある（第78図129・第82図235）。235は鉄鏃である。

⑮**柱穴群**　Ａ５地区では多数の柱穴を検出したが、建物や柵としてまとまるものを確認することはできなかった。柱穴はおおむね平面形が円形で、直径30～50cm、深さ20～30cmのものが多い。平面形が方形で、一辺が50cmを超えるような柱穴は検出しなかった。

出土遺物としては須恵器や土師器などがある（第78図130～140）。130は柱穴ＳＰ58から出土した須恵器杯Ｈ蓋である。131～133は須恵器杯Ｂ蓋である。131は柱穴ＳＰ385から、132は柱穴ＳＰ181から、133は柱穴ＳＰ182から、それぞれ出土した。134も柱穴ＳＰ182から出土した須恵器壺の口縁部である。135は柱穴ＳＰ161から出土した須恵器杯Ａである。136は柱穴ＳＰ167から出土した須恵器杯である。137は柱穴ＳＰ71から出土した土師器杯Ａである。内面に暗文、外面にミガキ調整を施す。138・139は土師器甕である。138は柱穴ＳＰ152から、139は柱穴ＳＰ154から出土した。140は柱穴ＳＰ221から出土した須恵器椀である。底部外面に糸切り痕が認められることから平安時代のものである。

（筒井崇史）

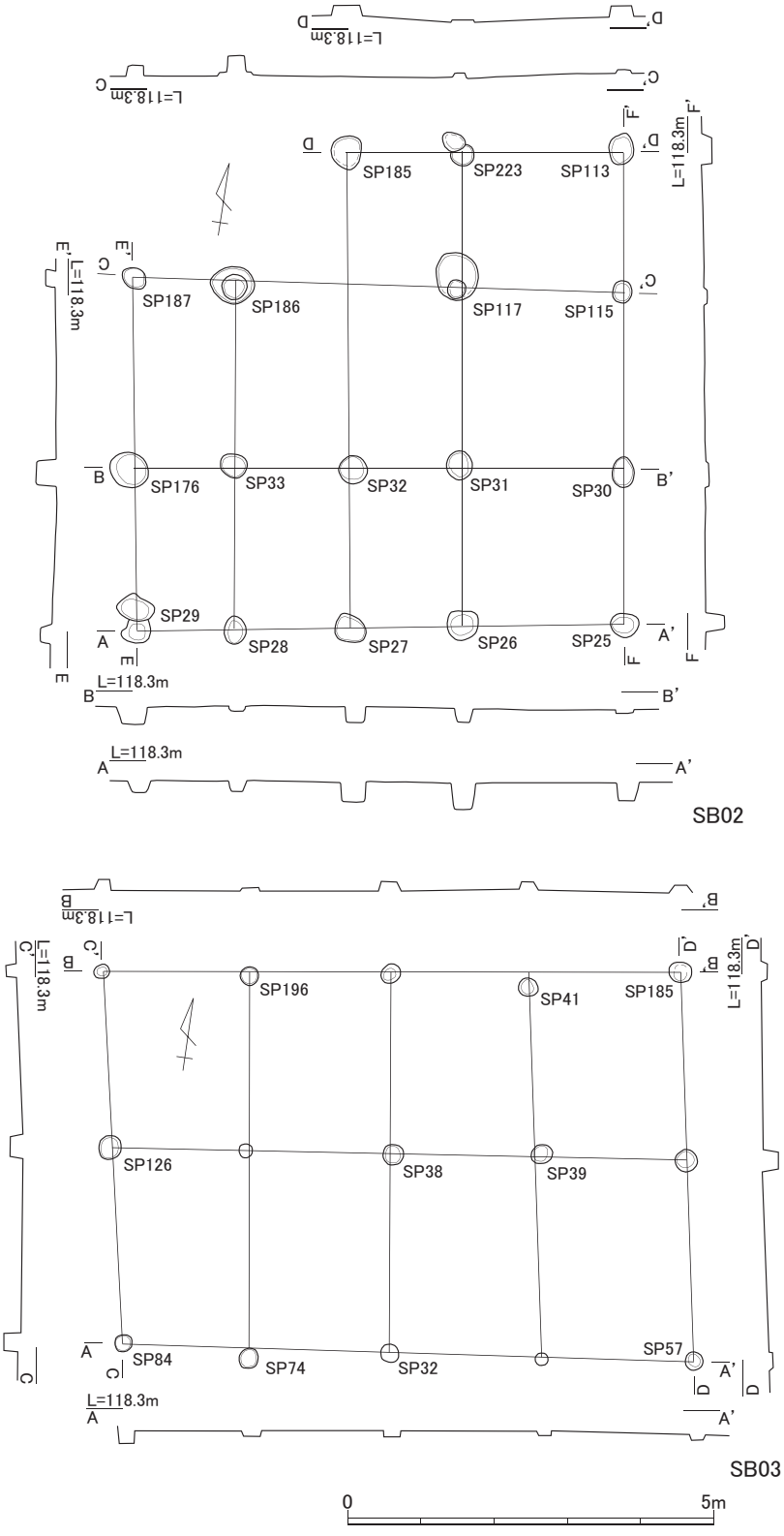


第72図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図

（3）中世の遺構

中世の遺構として、掘立柱建物跡３棟、土坑３基、溝１条のほか、多数の柱穴を検出した。

①掘立柱建物跡ＳＢ01（第72図）　調査区の東半部で検出した。桁行４間（約7.8m）、梁行３間



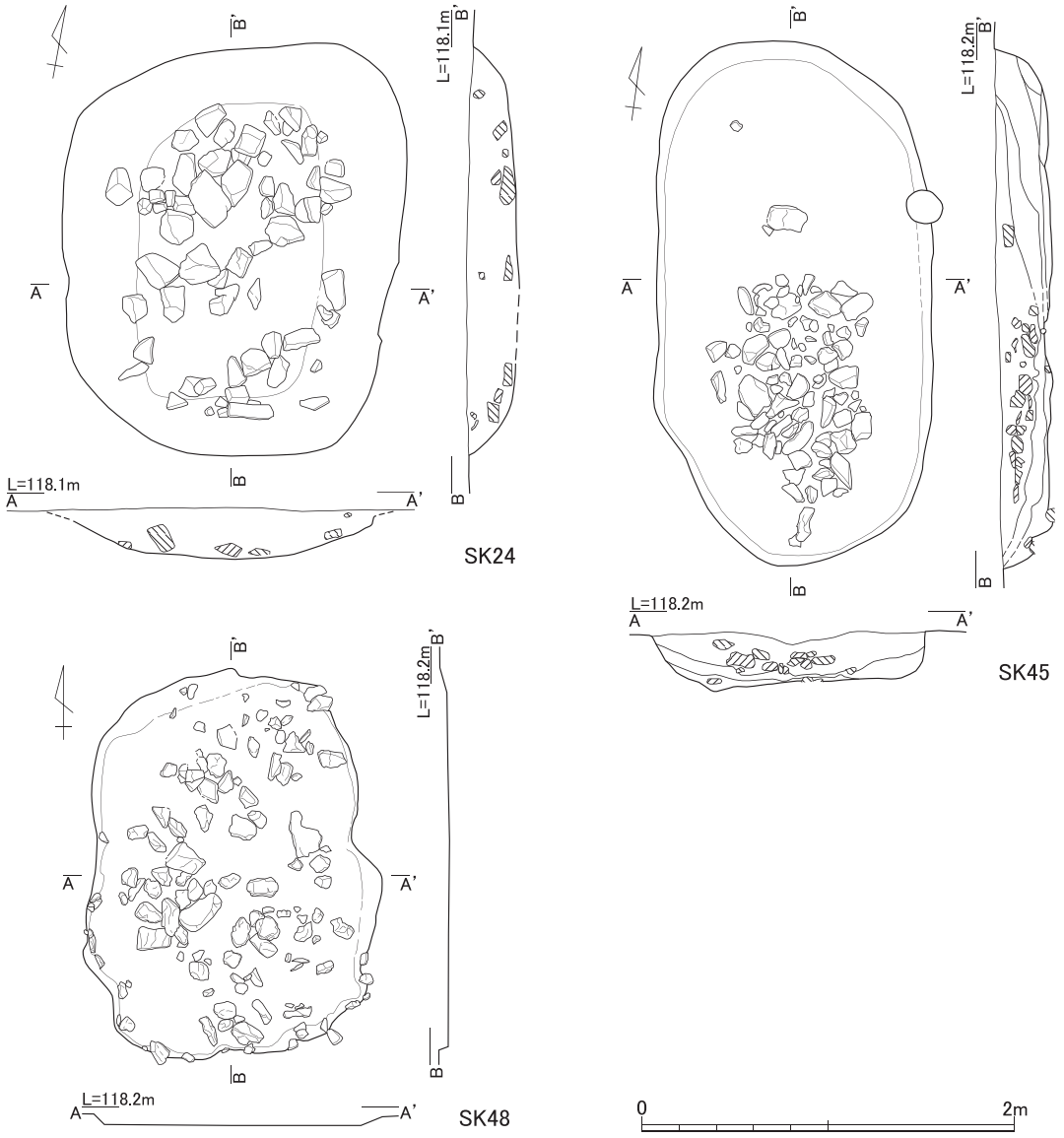
第73図　掘立柱建物跡ＳＢ02・03実測図

（約6.7m）の総柱の建物である。柱穴の平面形はおおむね円形で、直径25～40cm、深さ10～30cmを測る。建物の方位は北に対して約1°30′西に振る。

出土遺物としては瓦器や土師器がある（第79図141・142）。141は土師器皿である。142は丹波型瓦器椀である。141は柱穴ＳＰ11から、142は柱穴ＳＰ03から出土した。

②掘立柱建物跡ＳＢ02（第73図上）　調査区の西半部で検出した。桁行４間（約6.6m）、梁行３間（約6.5m）の総柱の建物である。柱穴の平面形はおおむね円形で、直径30～40cm、深さ10～30cmを測る。建物の方位は北に対して約８°西に振る。

出土遺物としては瓦器や土師器がある（第79図143～155）。143・144は土師器皿である。145～155は丹波型瓦器椀である。全体に磨滅が著しいが、145の内面には密な圏線ミガキ、148・151・153の内面に粗い圏線ミガキがみられる。152の内面には縦方向のハケ調整がみられる。146・149は器表面が灰橙色～淡灰色を呈する。143･148は柱穴ＳＰ33から､144･146･147は柱穴ＳＰ32から、



第74図　土坑ＳＫ24・45・48実測図

145は柱穴ＳＰ186から、149～155は柱穴ＳＰ30から出土した。

③掘立柱建物跡ＳＢ03（第73図下）　調査区の東半部で検出した。掘立柱建物跡ＳＢ01と重複する。桁行４間（約7.8m）、梁行２間（約5.2m）の総柱の建物である。柱穴の平面形はおおむね円形で、直径25～30cm、深さ10～25cmを測る。建物の方位は北に対して約７°西に振る。

出土遺物としては土師器がある（第79図156）。156は土師器甕である。外反する短い口縁部の端部を内側に折り曲げる。体部内面は板ナデ、外面はナデ調整で指押さえがみられる。柱穴ＳＰ38から出土した。

④土坑ＳＫ24（第74図左上）　調査区の南西部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長辺約2.2m、短辺約1.8m、深さ約15～25cmを測る。土坑内から一辺８～15cm大の角礫が多量に出土した。角礫の間から細片化した土師器や瓦器が出土した（第79図162～175）。

162～168は土師器皿である。162～164は口縁部が緩やかに立ち上がり端部を尖り気味に納めるもの、165～168は口縁部の上半がやや外反して端部をわずかに内側に折り曲げるものである。169～174は丹波型瓦器椀である。いずれも磨滅が著しいが、内面に粗い圏線ミガキが施されるものである。175は瓦質土器羽釜である。やや外傾する短い口縁部をもつ。

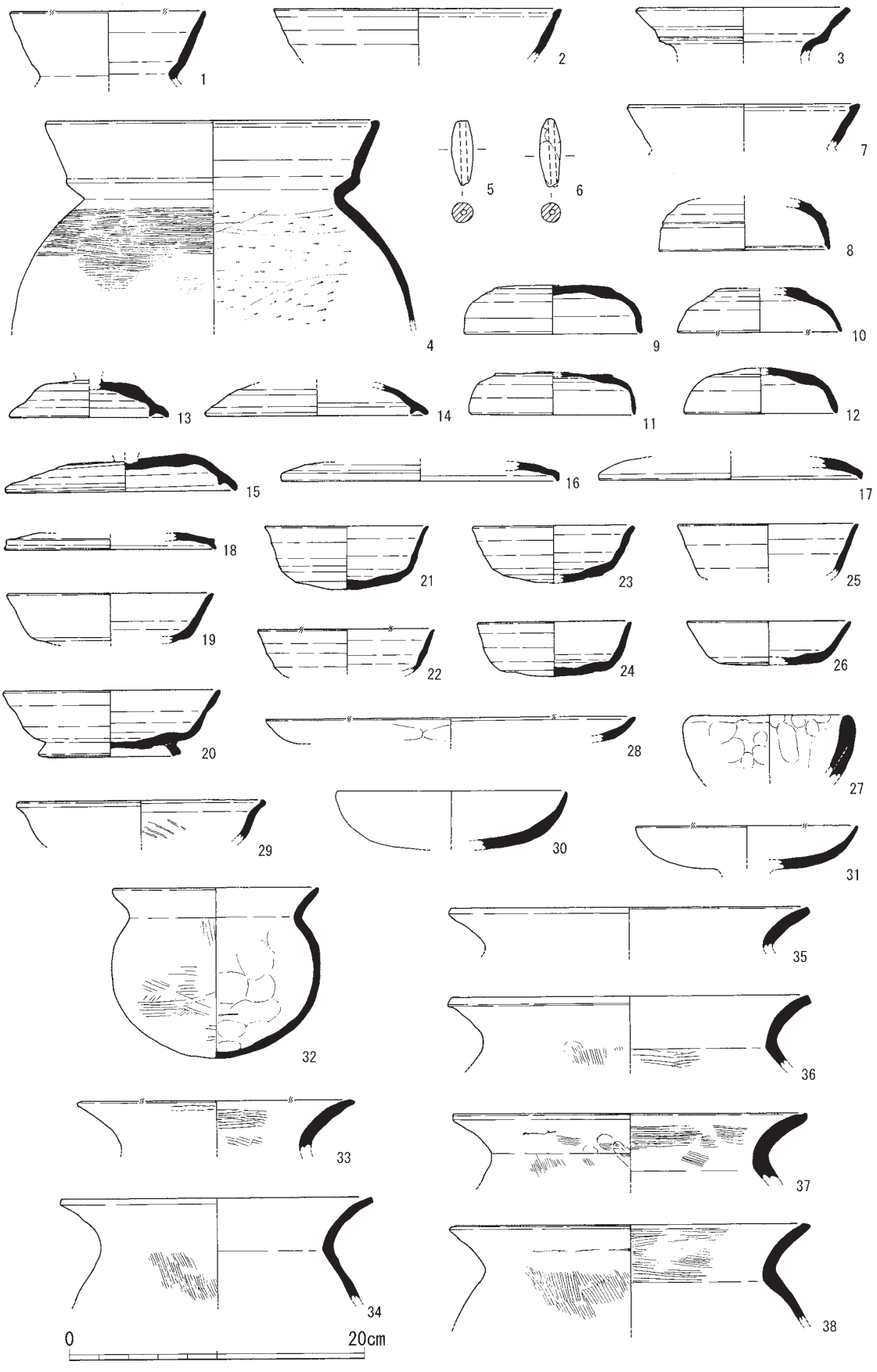
⑤土坑ＳＫ45（第74図右）　調査区の西端部、中央付近で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸2.8m、短軸1.5m、深さ約30cmを測る。土坑ＳＫ24同様に一辺10～20cm大の角礫が多量に出土した。角礫の間から細片化した瓦器や須恵器が出土した（第79図176～178）。176・177は丹波型瓦器椀である。器表面が剝離して調整は観察できないが、剝離の様子や色調が近似し、同一個体である可能性がある。178は篠窯産須恵器鉢である。口縁端部は玉縁状で、色調は淡灰色を呈する。

⑥土坑ＳＫ48（第74図左下）　調査区の西端部で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長辺2.1m、短辺1.5m、深さ約12cmを測る。土坑ＳＫ24・ＳＫ48同様に一辺10～25cm大の角礫が多量に出土した。

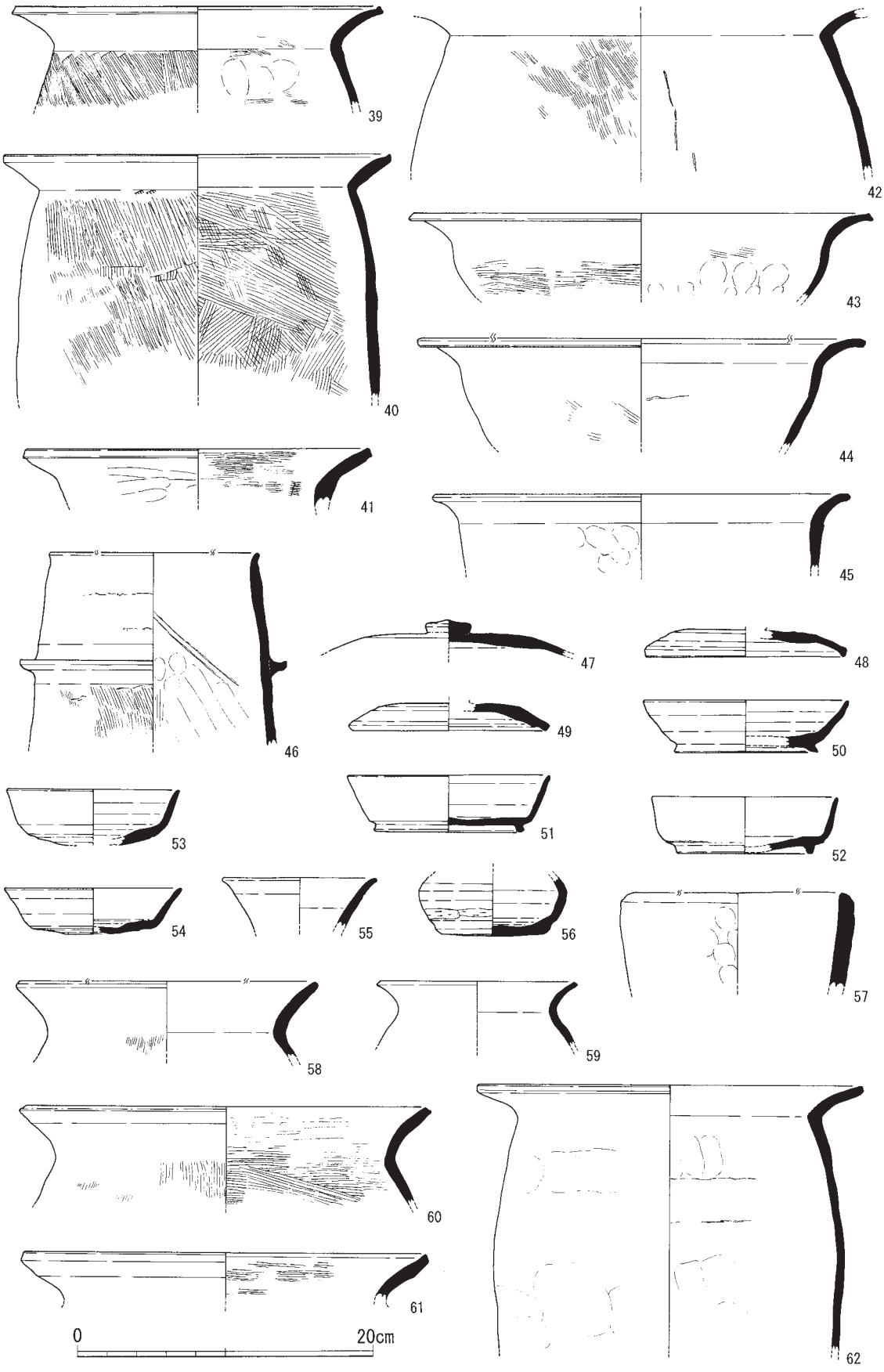
角礫の間から細片化した土師器や瓦器・須恵器・瓦質土器が多量に出土した（第80図179～213）。179～204は土師器皿である。179～189は短い口縁部が屈曲して立ち上がるもので、端部は尖り気味に納める。190～196は口縁部が緩やかに立ち上がるものでやや深手になる。197～204は大皿で、立ち上がり部に強い指押さえがみられる。204の内面外面には放射状の線が刻まれている。205～211は丹波型瓦器椀である。全体に磨滅が著しいが、205は内面に間隔の開いた圏線ミガキが、見込みにはジグザグ状暗文がみられる。212は瓦質土器羽釜である。外面は指押さえによる凹凸が著しい。213は東播系須恵器鉢である。内面は使用により胎土中の砂礫が脱落してアバタ状を呈する。214は瓦質土器甕である。外面は斜格子タタキ、内面はハケ調整が施される。丸底の底部片は接合しないが同一個体である。内外面にヘラケズリが施される。

⑦溝ＳＤ23　調査区南壁に沿って検出した。検出長33m、幅0.4～0.9m、深さ10cm前後を測る。

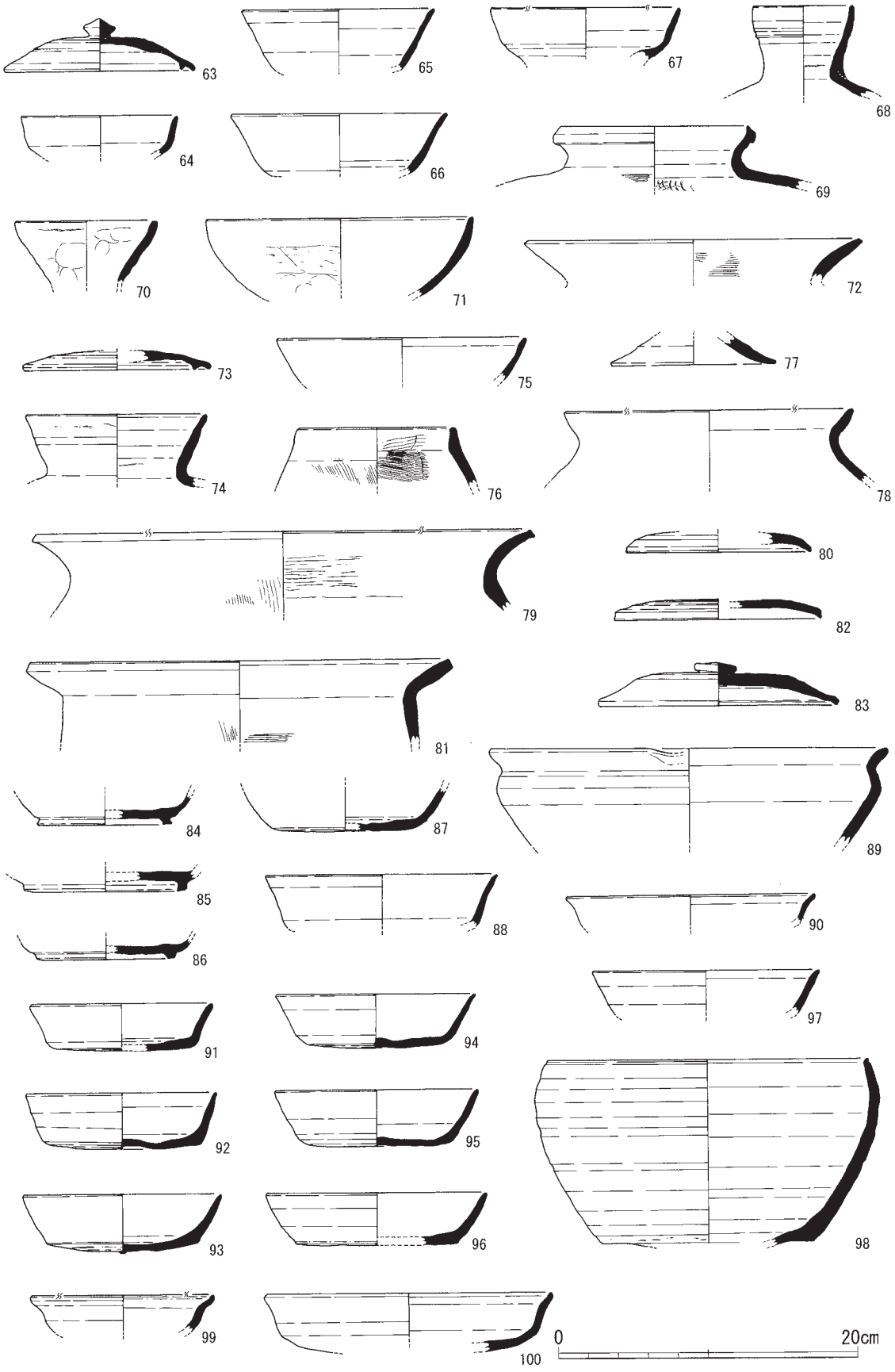
出土遺物としては緑釉陶器椀がある（第80図215）。215は平高台から丸みを持って立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。ヘラミガキの後全面に施釉されている。胎土は暗灰色を呈し、硬



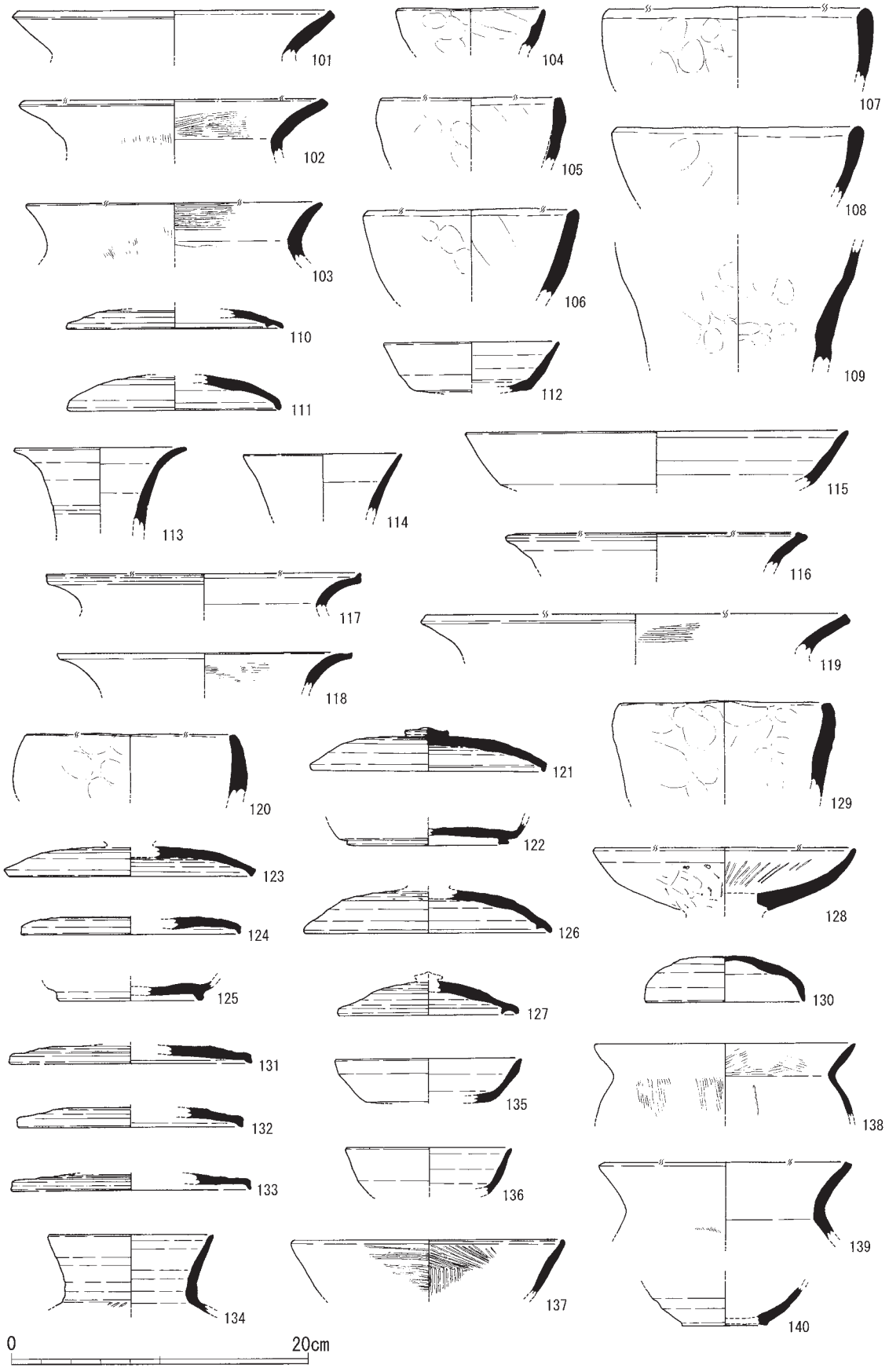
第 75 図　A 5 地区出土遺物実測図（1）



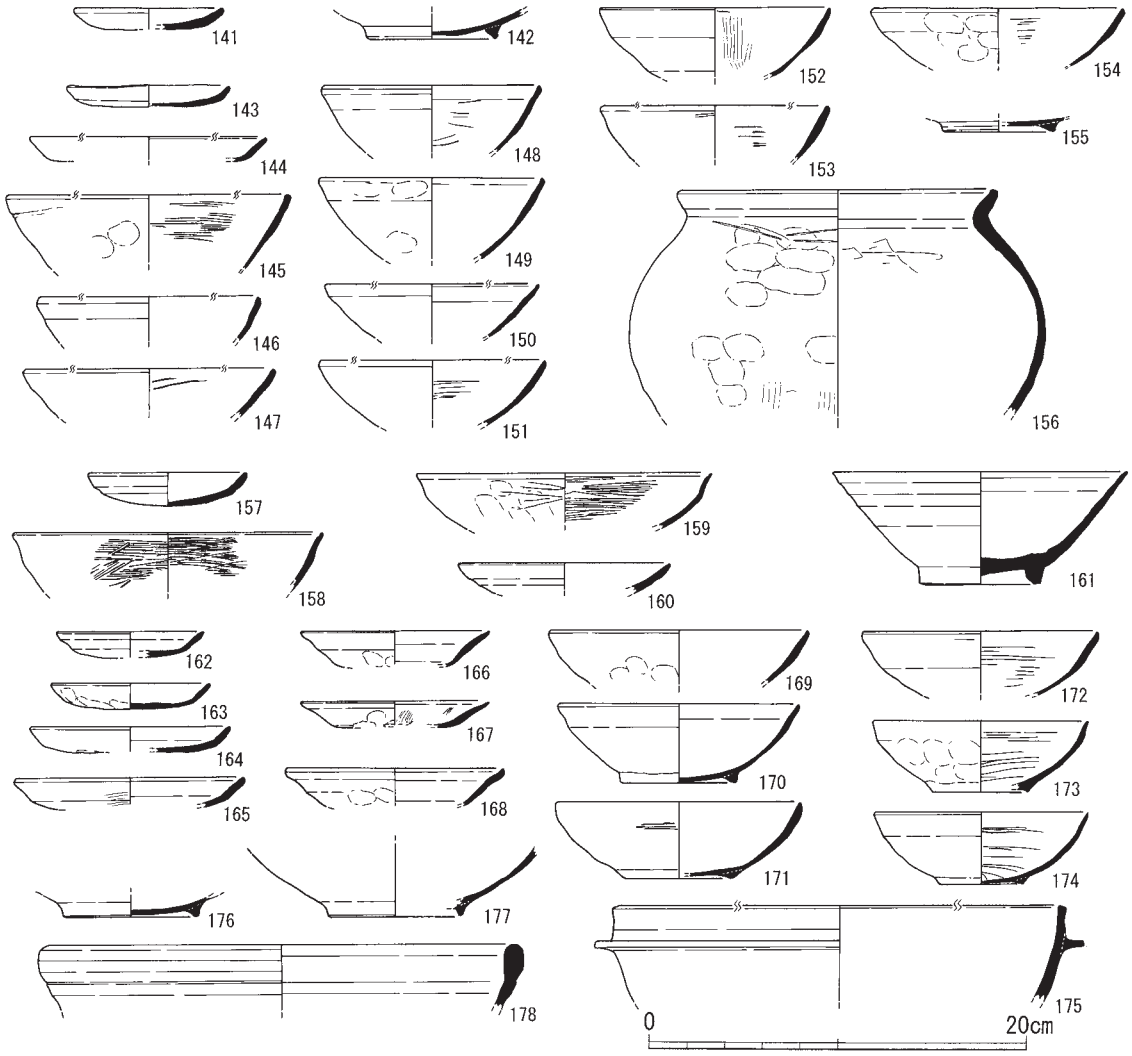
第 76 図　A５地区出土遺物実測図（２）



第 77 図　Ａ５地区出土遺物実測図（３）



第78図　A５地区出土遺物実測図（４）



第79図　Ａ５地区出土遺物実測図（５）

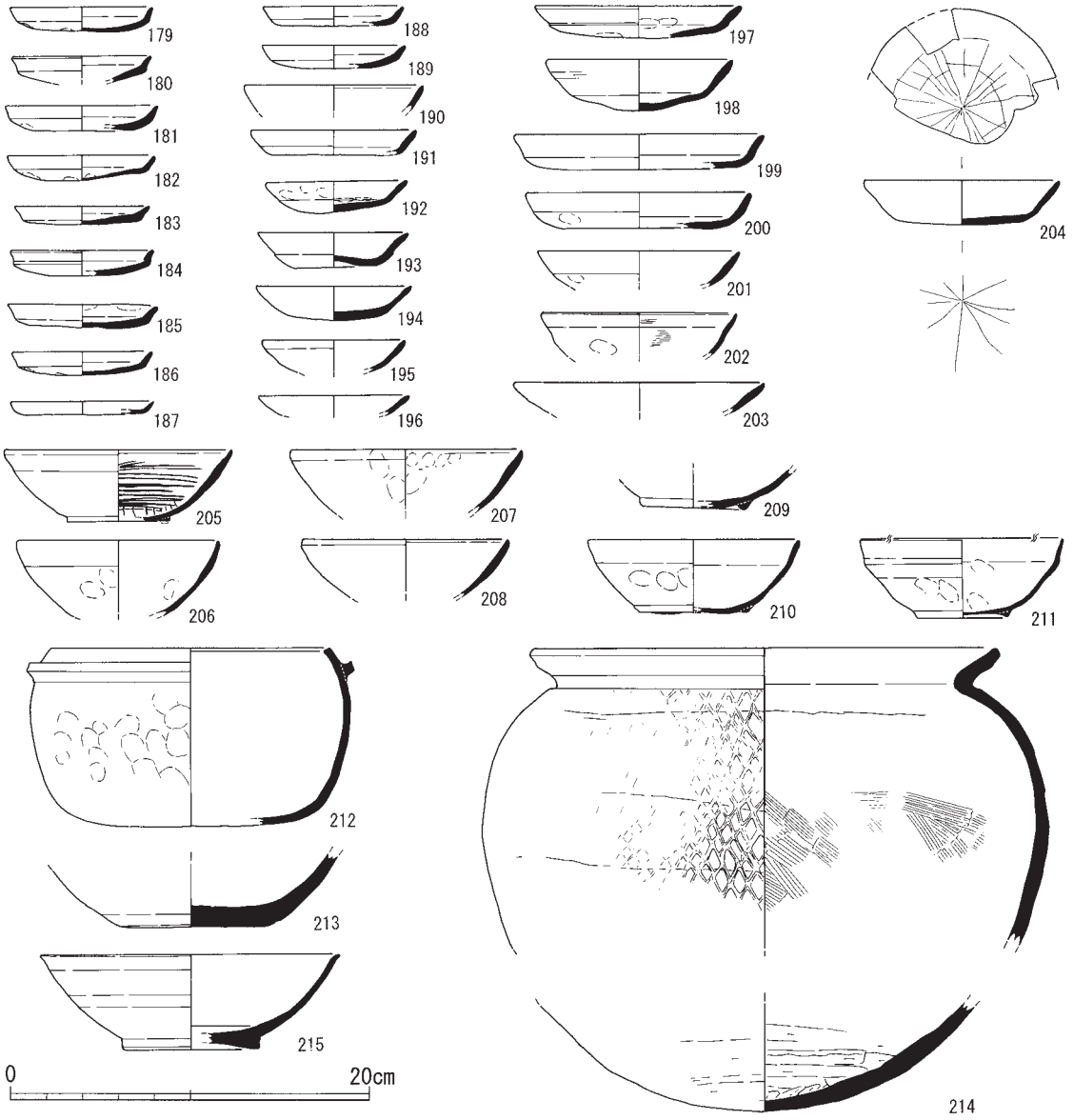
質である。

⑧柱穴群　建物や柵などを構成しない柱穴については上述のとおりであるが、ここでは中世の遺物について報告する（第79図157～161）。157は土師器皿である。158は黒色土器Ｂ類椀である。159は瓦器椀である。外反する口縁部の内端面に沈線がめぐらされること、内面に施される密な圏線ミガキが細いことなどから、大和型と考えられる。160は白磁皿である。外面に漆状の黒色物質が付着している。161は白磁椀である。見込みは輪状に釉剝ぎされる。157～159は柱穴ＳＰ89から、160は柱穴ＳＰ35から、161は柱穴ＳＰ240から出土した。

（森島康雄）

（４）包含層出土遺物

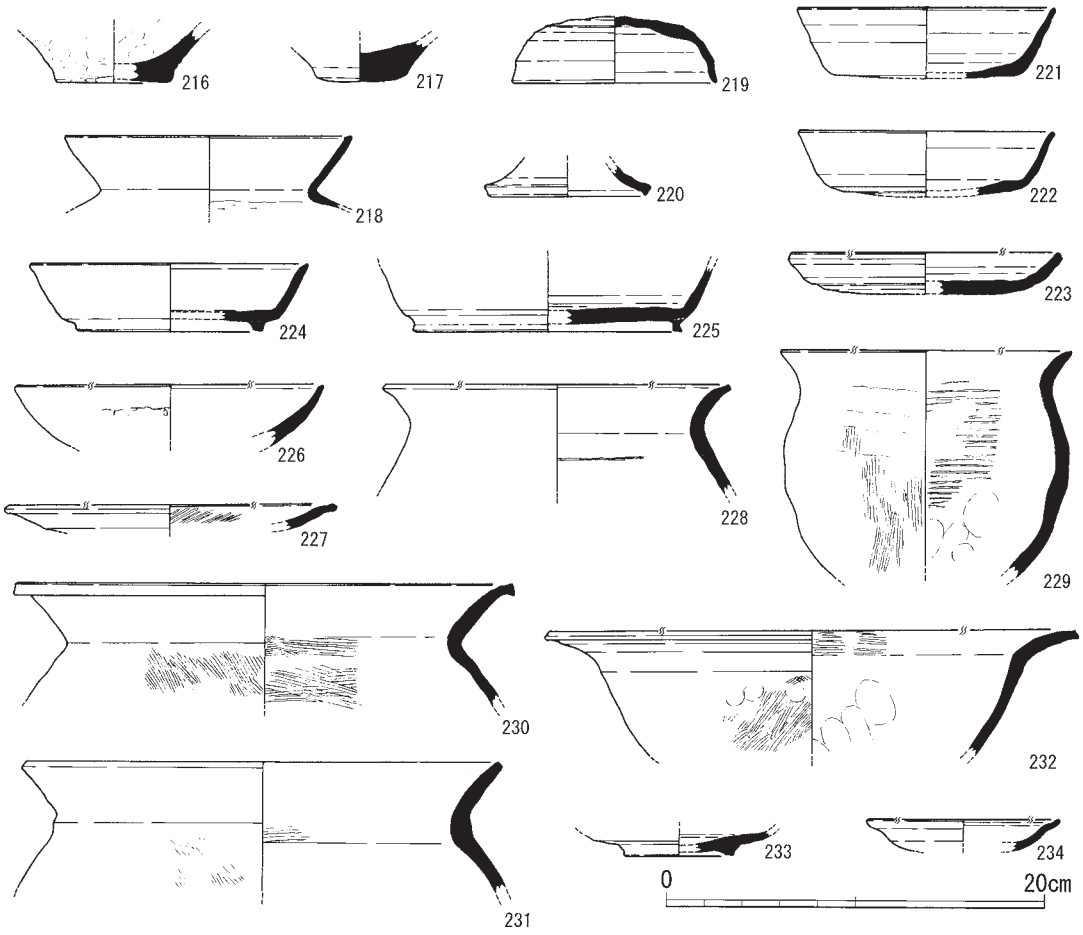
遺物包含層や遺構面の精査中に出土した遺物について報告する（第81図216～234）。216・217は弥生土器の底部と思われる破片である。218は布留式甕の口縁部である。口縁端部の肥厚はわずかである。219は天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施さないことから、飛鳥時代の須恵器杯Ｈ



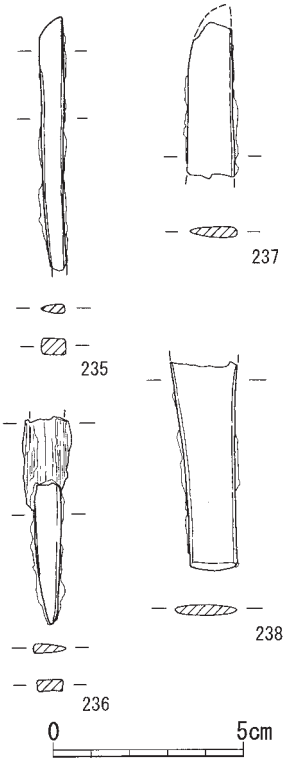
第80図　Ａ５地区出土遺物実測図（６）

蓋である。220は219とほぼ同時期の須恵器高杯脚部である。221・222はほぼ同形同大の須恵器杯Ａである。223はやや厚手の須恵器皿である。224・225は須恵器杯Ｂである。221～225は奈良時代のものと思われる。226は土師器杯で、飛鳥時代のものと思われる。227は土師器高杯の杯部である。内面に放射状暗文を施す。奈良時代に属するであろう。228～231は土師器甕である。229は内面に３～４本/cmの粗いハケ調整を横方向に施す。232は土師器鍋である。228～232は飛鳥ないし奈良時代のものであろう。233は緑釉陶器椀の底部の破片である。234は「て」字状口縁を呈する土師器皿である。233・234は平安時代のものである。

（筒井崇史）



第 81 図　Ａ５地区出土遺物実測図（７）



第 82 図　Ａ５地区出土
遺物実測図（８）

16. Ａ６地区の調査

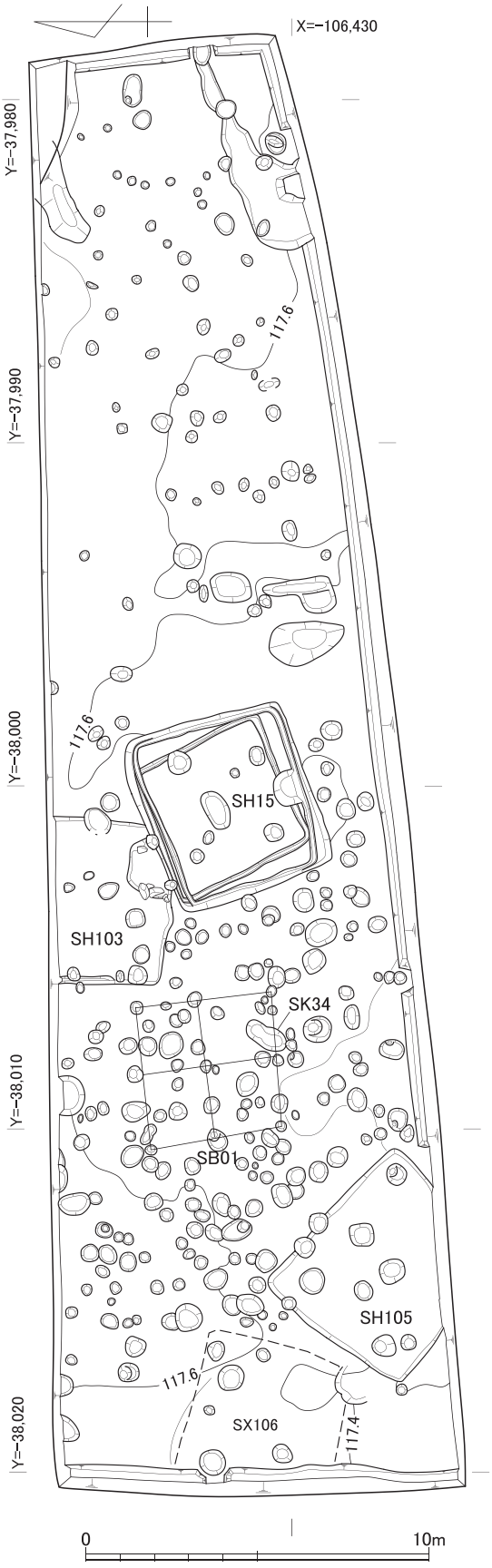
Ａ５地区の南側に設定した調査区である。古墳時代、奈良時代、中世の各時期の遺構・遺物を検出した。調査地全体に黒褐色粘質土(黒ボク層)が堆積しており、奈良時代や中世の遺構を検出した(第83図)。

(１)古墳時代の遺構・遺物

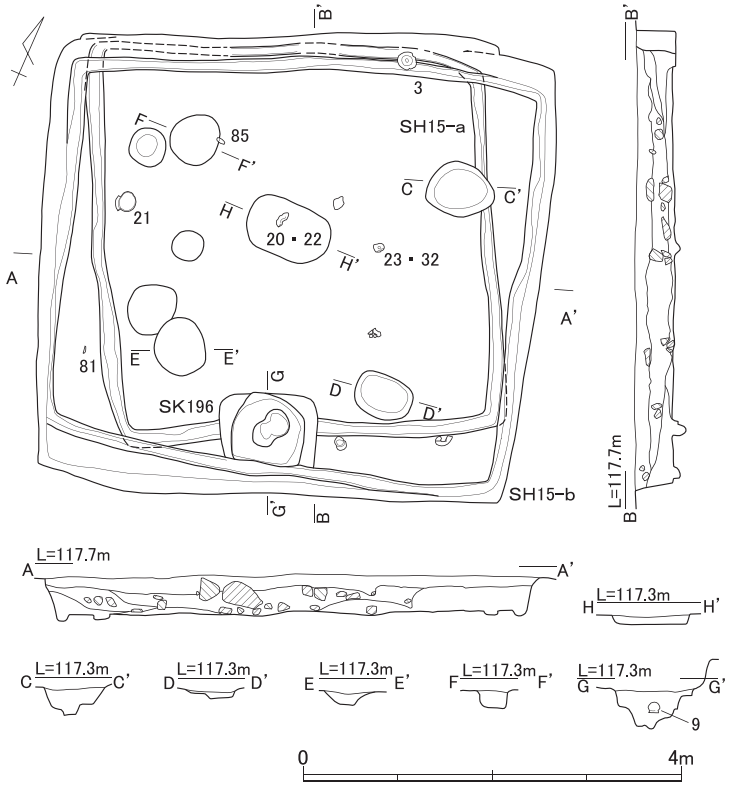
古墳時代の遺構として竪穴式住居跡３基・土坑１基・柱穴多数を検出した。

①竪穴式住居跡ＳＨ15(第84図)　調査区の中央部で検出した。ほぼ同じ位置で建て替えが認められる(ＳＨ15－ａ・ＳＨ15－ｂ)。ＳＨ15－ａは、平面形がほぼ方形で、一辺4.2m、深さ40cmを測る。住居の遺存状況は非常によい。ＳＨ15－ｂに壊されているところを除き、幅15cm程度、深さ５～15cmの周壁溝が全周する。ＳＨ15－ａに伴う主柱穴は確認できなかった。住居の方位は北に対して約27°西に振る。ＳＨ15－ｂは、一辺4.7m、深さ40cmを測る。幅15～20cm、深さ10cm前後の周壁溝が全周する。主柱穴は４基確認した。直径30～60cm、深さ10～25cmを測る。南辺中央で貯蔵穴と思われる土坑ＳＫ196を検出した。住居の方位は北に対して約17°西に振る。

出土遺物としては土師器や鉄器、石杵がある(第86図１～第87図35、第89図81～83・86)。１・２は複合口縁状を呈する壺の口縁部、３・４は二重口縁状を呈する壺の口縁部である。５～７は直口壺の口縁部である。７から予想される体部径は30cm以上と、大型品になる可能性がある。８は有段の口縁を有する壺と考えるが、鼓形器台の可能性もある。内面はナデ調整、外面に縦方向の暗文風のヘラミガキ調整が施される。９～11は小型丸底土器である。11は口縁部を欠損するが、９・10は短い口縁部を有する。ほぼ同形同大で、調整法もほぼ同じである。９は土坑ＳＫ196から出土



第83図　Ａ６地区検出遺構配置図(1/200)



第84図　竪穴式住居跡ＳＨ15実測図

した。12は平底の壺の底部である。13～23は甕である。13は短い口縁部を有する在地系と考えられるもの、14は口縁端部に外傾する面を持つもの、15～23は口縁端部内面が肥厚する、いわゆる布留式の範疇でとらえられるものである。19は磨滅が著しく、口縁部の肥厚が不明瞭である。いずれも体部は基本的に球形を呈し、外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。なお、22は体部外面にハケ調整に先行してタタキ調整が施された痕跡がみられる。14も体部の特徴は布留式甕に準じる。24～30は高杯である。24は大型高杯の杯部で、杯底部中央の充填状況がよくわかる。磨滅が著しいが、ヘラミガキ調整を施す。25～27は高杯杯部である。28～30は高杯杯底部である。いずれも杯底部外面側に直径３～４mm程度の刺突痕が認められる。30は明瞭にヘラミガキ調整を確認できるが、25～29についてはハケ調整を主体とする可能性が高い。31は椀状の杯部をもつ高杯の可能性が高いものである。32はやや低脚で中実の高杯脚部である。33・34は中空の高杯脚部である。外面にハケ調整を施す。35は小型器台の脚部である可能性が高い。81～83は鉄器である。81は先端を欠損する鉇である。残存長12.4cmを測る。82は刀である。83は鉄鏃の茎であろう。86は石杵である。住居の掘削作中に出土した。床面から20cmほど上位で出土したことから、住居の埋没過程で混入したものと考えられる。残存長7.7cm、残存最大径4.8cmを測る。

②竪穴式住居跡ＳＨ103（第85図上）　調査区の中央部、北壁寄りで検出した。竪穴式住居跡ＳＨ15と重複し、ＳＨ103の方が古い。南東隅をＳＨ15に切られ、北半部は調査区外となるが、平面形は方形と考えられる。一辺5.9m、深さ約20cmを測る。周壁溝は西辺のみに認められ、幅15cm、深さ５cm程度を測る。床面で多数の柱穴を確認したが、主柱穴と判断するには至らなかった。住居の方位はほぼ南北方向である。時期の判断できるような遺物は出土していないが、竪穴式住居跡ＳＨ15よりも古いことから、古墳時代前期の竪穴式住居と考えられる。

③竪穴式住居跡ＳＨ105（第85図下）　調査区の南西隅で検出した。南角が調査区外となるが、平面形は方形を呈すると考えられる。一辺4.9～5.4m、深さ約25cmを測る。周壁溝は確認されなかった。主柱穴は３基確認した。直径60cm前後、深さ20～30cmを測る。住居の方位は北に対し

て約40°東に振る。

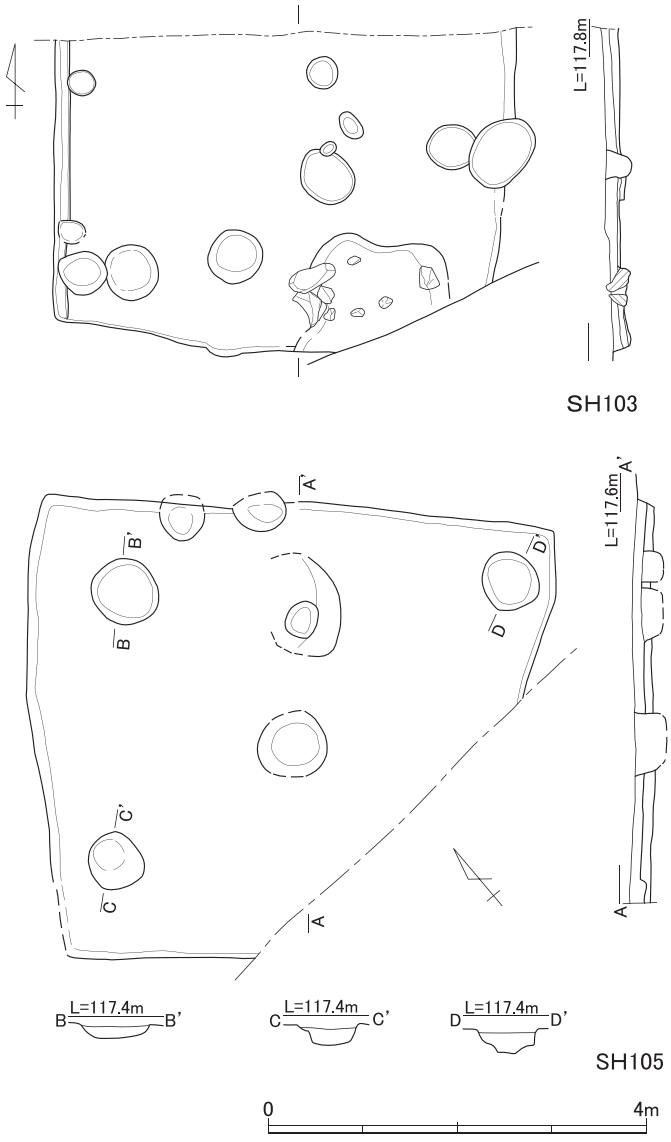
④不明遺構ＳＸ106　調査区の西端で検出した。当初、竪穴式住居跡と考えたが、明確な掘形を検出することはできなかった。土坑もしくは自然地形の可能性がある。

出土遺物として土師器や鉄器がある。土器で図示できたのは高杯脚裾部の１点のみである（第87図36）。また鉄器として、図示しなかったが鉄鏃が１点出土している。

（２）奈良時代の遺構・遺物

明らかに奈良時代といえる遺構はほとんどない。ただ、奈良時代の遺物が一定量出土しているので、当該期の遺構が存在したと考えられる。

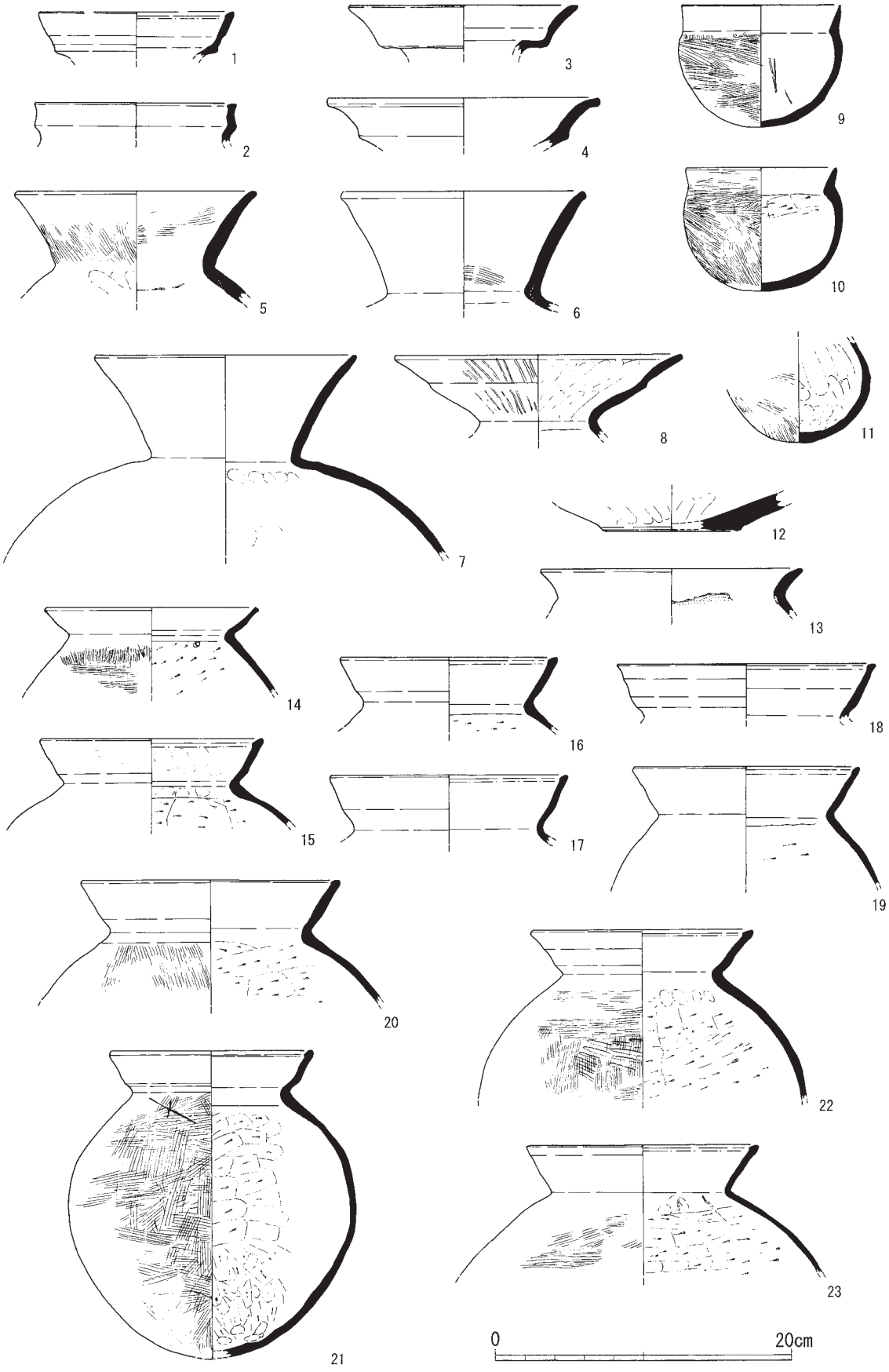
①土坑ＳＫ34　調査区の西半部で検出した。平面形は不整形な楕円形を呈し、全長1.5m、幅0.6m、深さ約40cmを測る。出土遺物として須恵器がある（第87図37・38）。37は杯Ｂ蓋、38は杯である。



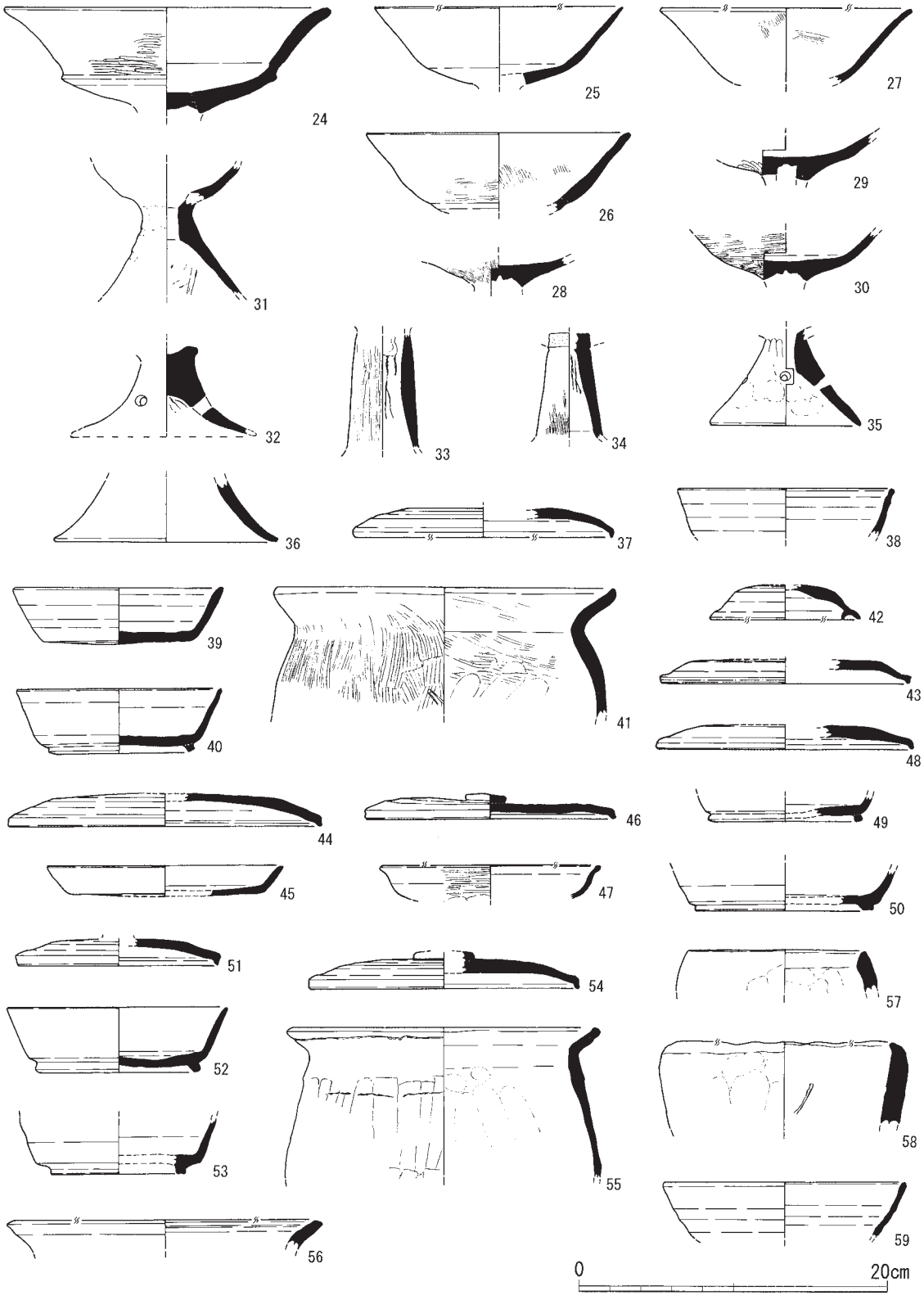
第85図　竪穴式住居跡ＳＨ103・105実測図

②柱穴群　Ａ６地区では多数の柱穴を検出した。これらは掘立柱建物跡ＳＢ01として復原したもの以外は、建物や柵としてのまとまりを確認することはできなかった。

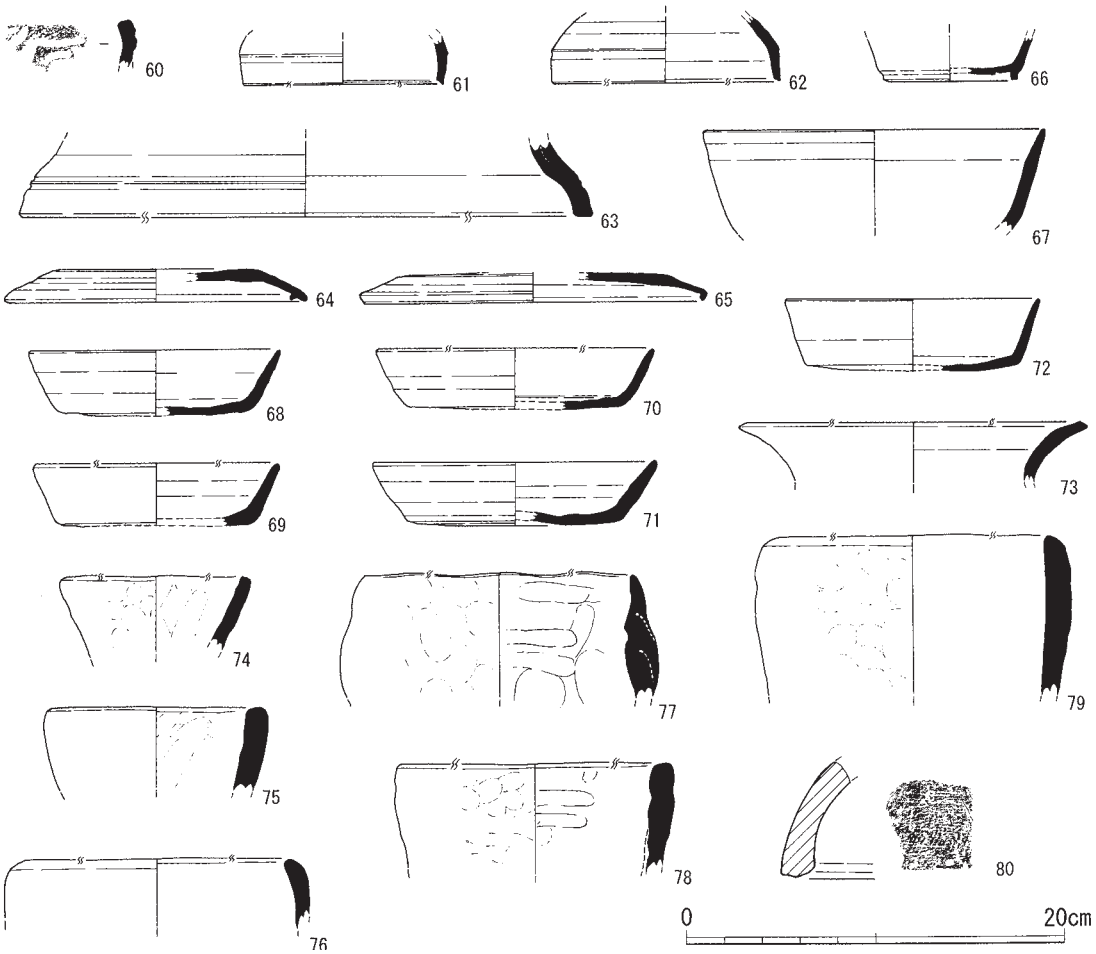
なお、柱穴からは比較的多数の遺物が出土した（第87図39～59、第89図84）。柱穴ＳＰ１から須恵器杯Ａ（39）が出土した。柱穴ＳＰ16からは須恵器杯Ｂ（40）、土師器甕（41）が出土した。柱穴ＳＰ27からは須恵器杯Ｇ蓋（42）・杯Ｂ蓋（43）が出土した。柱穴ＳＰ13からは須恵器杯Ｂ蓋（44）・皿Ａ（45）が出土した。柱穴ＳＰ137からは須恵器杯Ｂ蓋（46）、土師器杯Ａ（47）が出土した。47は外面にヘラミガキ調整を施す。柱穴ＳＰ182からは須恵器杯Ｂ蓋・杯Ｂ（48～50）が出土した。柱穴ＳＰ25からは須恵器杯Ｂ蓋（51）が出土した。柱穴ＳＰ43からは須恵器杯Ｂ（52）と鉄器（84）が出土した。84は刀子の茎と思われる。柱穴ＳＰ28からは須恵器杯Ｂ（53）が出土した。柱穴ＳＰ156からは須恵器杯Ｂ蓋（54）が出土した。柱穴ＳＰ46からは土師器甕（55）が出土した。外面にヘラ状の工具で強く粘土をケズリ取ったような痕跡が認められる。柱穴ＳＰ170・ＳＰ29からは製塩土器（57・58）が出土した。柱穴ＳＰ32からは須恵器椀の口縁部と思われれる破片（59）が出土した。42



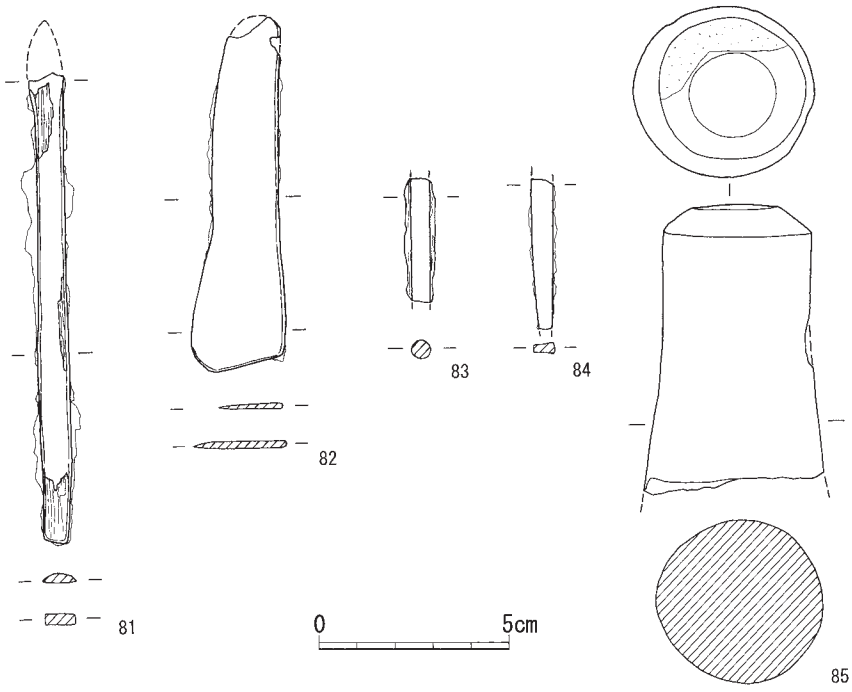
第 86 図　A 6 地区出土遺物実測図（1）



第 87 図　Ａ６地区出土遺物実測図（２）



第 88 図　Ａ６地区出土遺物実測図（３）



第 89 図　Ａ６地区出土遺物実測図（４）

が飛鳥時代、59は平安時代のものと思われるほかは、おおむね奈良時代のものである。42は43と同じ柱穴から出土しているので混入であろう。

（3）包含層出土遺物

Ａ６地区では、遺構面の精査中や黒褐色粘質土の掘削中などにも遺物が出土した。これらの遺物としては、縄文土器、須恵器、土師器、製塩土器、瓦などがある（第88図60～80）。

60は縄文土器の破片である。後期のものであろうか。61・62は須恵器杯蓋である。ともに口縁端に面を持ち、口縁部と天井部の境には緩いながらも稜を有する。陶邑編年のＭＴ15～ＴＫ10型式に相当すると考える。63は須恵器器台の脚端部であろうか。63は古墳時代のものであろう。64・65は須恵器杯Ｂ蓋である。64は内面にかえりを有する。66は須恵器杯Ｂの底部である。67は大型の須恵器杯の口縁部である。68～72は須恵器杯Ａである。口径13cm前後、器高3.5cm前後のものが多い。73は土師器甕の口縁部であろう。74～79は製塩土器である。Ａ６地区ではＡ５地区などにくらべると製塩土器の出土例が多い。80は丸瓦である。内面に布目圧痕が認められる。

（筒井崇史）

17. Ａ１地区の調査

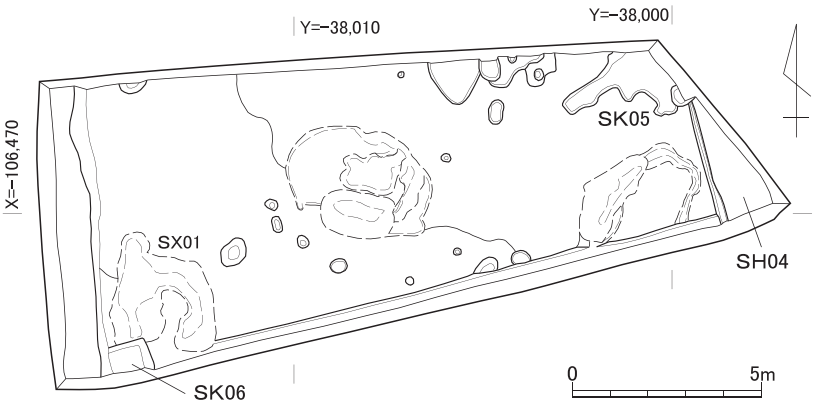
Ａ地区で最も南に設定した調査区で、Ａ６地区の南約30ｍに位置する。農道を挟んで、東側にはＣ１地区が位置する。古墳時代や奈良時代の遺構・遺物を検出した（第90図）。遺構面までの堆積土が比較的厚く、奈良時代から中世にかけての遺物包含層を形成していた。

（1）古墳時代の遺構・遺物

竪穴式住居跡１基、土坑１基のほか、風倒木痕から当該期の遺物が出土した。

①竪穴式住居跡ＳＨ04　調査区の東端で検出した。西辺を検出したのみで、規模等は不明である。深さは約10cmである。幅14～26cm、深さ５cm前後の周壁溝がめぐる。出土遺物としては土師器布留式甕などがあるが、小片のため図示していない。

②土坑ＳＫ06　調査区の南西隅で検出した。土坑の一部を検出したのみで、全容は不明である。竪穴式住居跡の可能性もあるが、周壁溝は未検出である。深さは約20cmである。出土遺物としては、土師器甕（第91図１）がある。布留式の甕であるが、やや厚ぼったい個体である。



第90図　Ａ１地区検出遺構配置図（1/200）

③その他　風倒木痕（ＳＸ01）を掘削したとこ

ろ、土師器小型丸底土器（第91図２）の体部片が出土した。風倒木の時期を示すと考えられる。外面全体にヘラケズリ調整を施す。

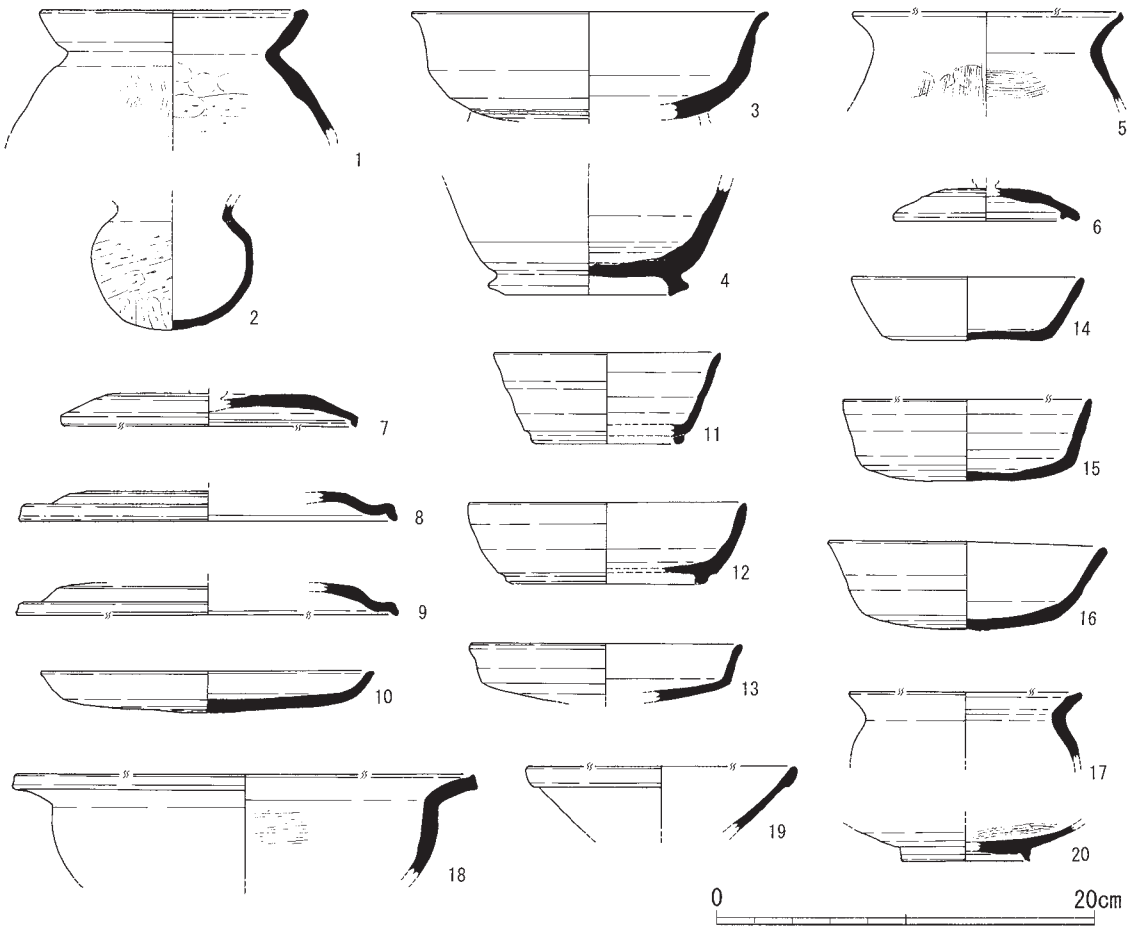
（２）奈良時代の遺構・遺物

①土坑ＳＫ05　調査区の北東隅で検出した。不整形な平面形を呈する。深さは５～10cmである。出土遺物として須恵器杯ＦまたはＬ、須恵器壺底部、土師器甕（第91図３～５）などがある。

（３）包含層出土遺物

第91図６～20は遺物包含層や遺構面の精査中に出土した土器である。奈良時代の須恵器が多いが、飛鳥時代の須恵器や平安時代の無釉陶器、中世の白磁椀などがある。６～16は須恵器である。６は内面にかえりを有する杯Ｇ蓋である。７～９は杯Ｂ蓋である。10は皿Ａである。11・12は杯Ｂである。13～16は杯Ａである。ただし13は皿の可能性がある。17は小型の土師器甕である。口縁部内面に２条の強いナデの痕跡が認められる。いわゆる「青野型」甕[注9]の特徴を有するものと考えられる。18は土師器鍋である。19は白磁椀である。20は須恵質で、内面にミガキ調整を施し、高台は削り出し高台であることから、いわゆる無釉陶器椀と考えられる。

（筒井崇史）



第91図　Ａ１地区出土遺物実測図

18. Ｂ１地区の調査

Ａ３地区の西約60mに設定した調査区である。対象地は複数の水田からなるため、水田ごとに枝番号を付した(Ｂ１－１～４地区)。地形的には南西に向かって低くなっており、調査地の南側ほど黒褐色粘質土(黒ボク層)が厚く堆積し、その上面で中世の遺構を検出した。一方、北側では、地山面直上で、中世や平安時代の遺構を検出した(第94・95図)。

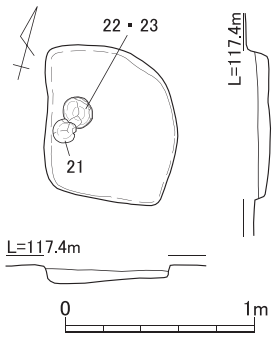
また、黒褐色粘質土を除去して土坑や柱穴を検出したが、形態的に不明瞭なものが多く、建物や柵としてのまとまりは認められなかった。また、時期を示すような遺物もほとんど出土しなかった。

(１)平安時代の遺構・遺物

確実に平安時代の遺構といえるのは土坑１基のみである。

①土坑ＳＫ115(第92図)　Ｂ１－２地区の東辺中央付近で検出した。平面形は一辺0.7～0.8mを測るやや不整形な方形を呈する。深さは15cm程度である。土坑から土師器皿２点と黒色土器椀１点が出土した(第98図21～23)。22と23は重なった状態で出土した。

21･22は土師器皿である。器壁は薄く、口縁部は「て」字状を呈する。胎土にクサリ礫を含む。23は黒色土器Ａ類椀である。見込みと内面に、やや隙間のあるヘラミガキが施され、口縁内端部には沈線がめぐらされる。体部外面は指押さえのみで、特に調整は施されない。10世紀中葉に位置付けられる。



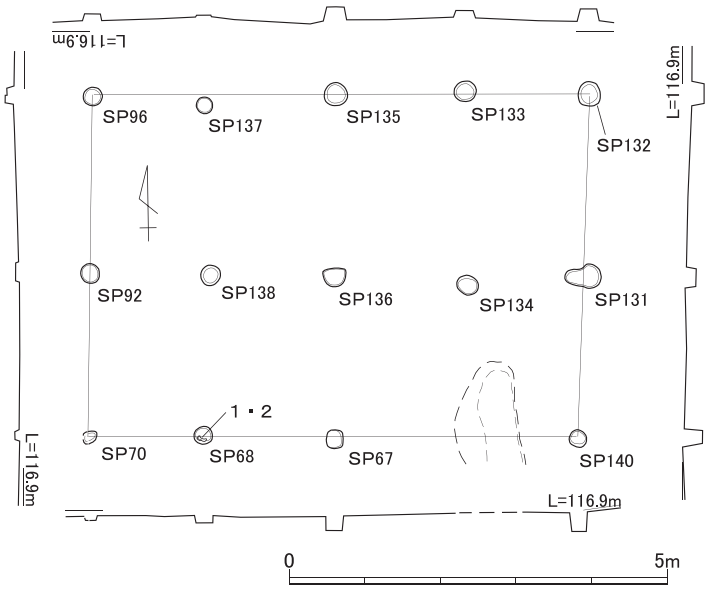
第92図　土坑
ＳＫ115実測図

(２)中世の遺構・遺物

検出した遺構としては、掘立柱建物跡２棟、柵１条、土坑２基以上、柱穴多数がある。

①掘立柱建物跡ＳＢ01(第93図)　Ｂ１－４地区の北半部で検出した。桁行４間(約6.5m)、梁行２間(約4.6m)の東西方向の総柱の建物である。柱間は、桁行が1.5～1.7m、梁行が2.2～2.4mと、梁行の方が少し長い。柱筋や柱間はやや不揃いである。建物の方位は北に対して１°東に振る。

出土遺物としては土師器や瓦器がある(第98図１～５)。１は土師器皿である。大きな底部から口縁部が短く立ち上がる。口縁端部はやや屈曲して直立気味に終わる。２～５は丹波型瓦器椀である。い



第93図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図

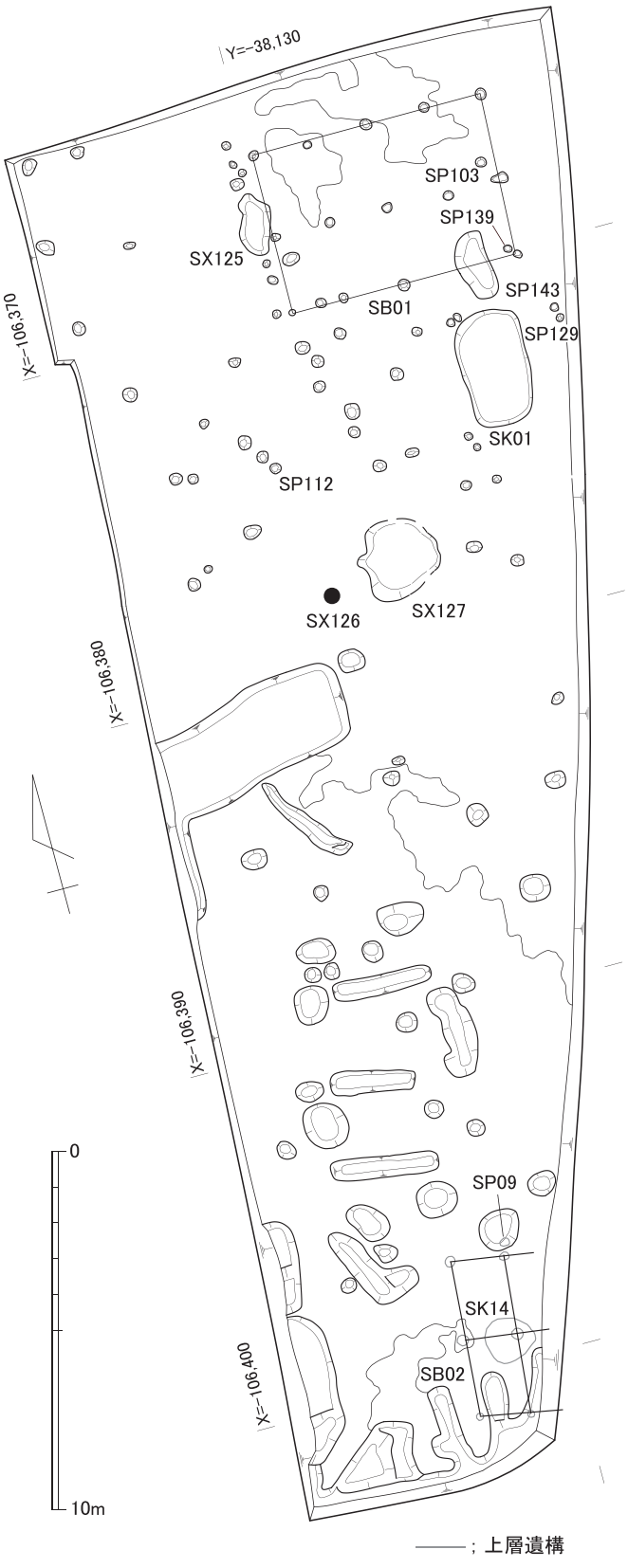
ずれも磨滅が著しく、ヘラミガキなどは不明であるが、13世紀前半頃までにおさまると思われる。１・２は柱穴ＳＰ68から、３は柱穴ＳＰ136から、４・５は柱穴ＳＰ140から出土した。

②掘立柱建物跡ＳＢ02　Ｂ１－４地区の南端付近で検出した。桁行２間（約4.5m）、梁行１間以上（約1.4m以上）の総柱の建物である。柱穴のうち１基は後述する土坑ＳＫ14と重複しており、ＳＢ02の方が新しい。

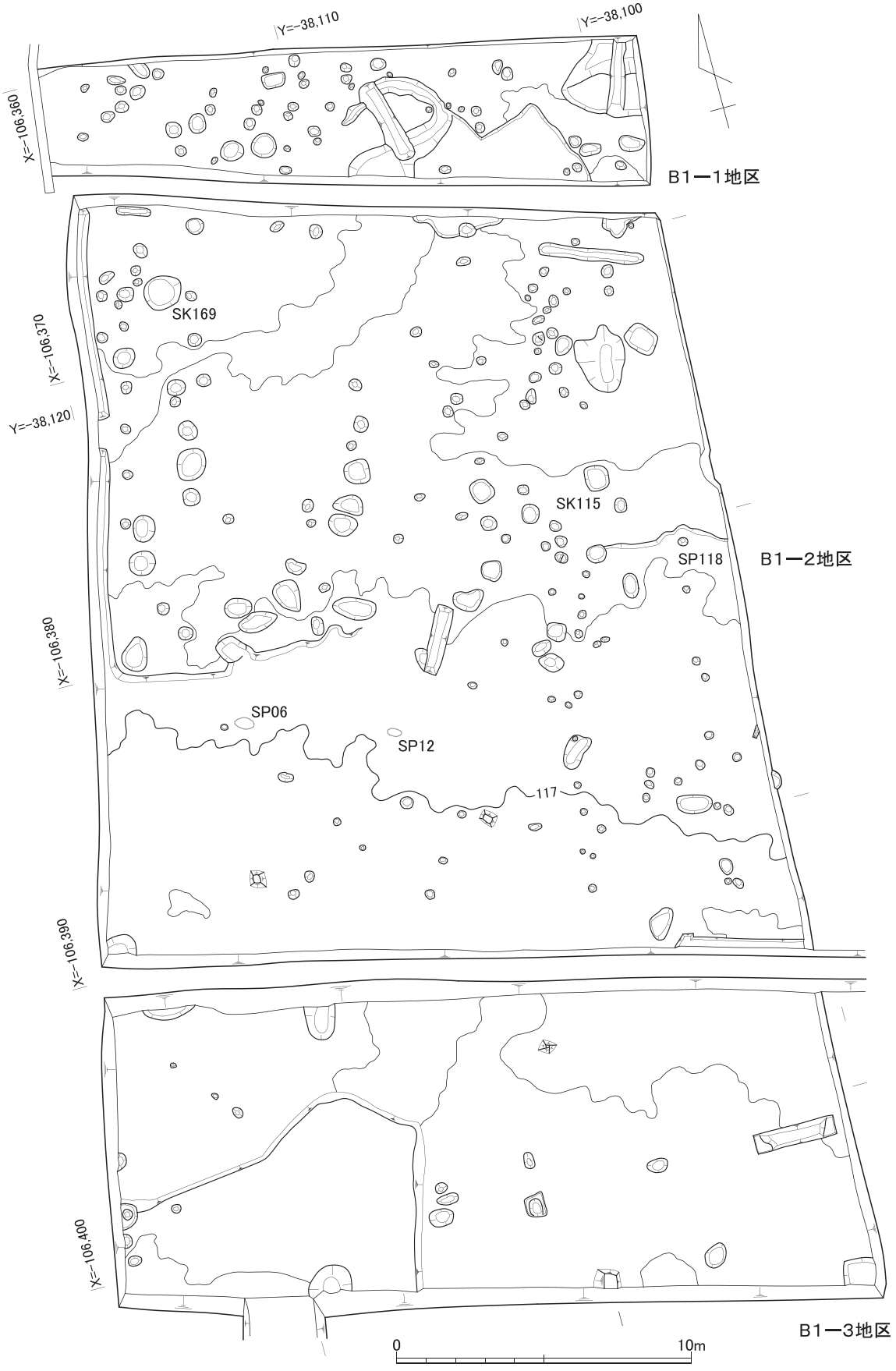
③土坑ＳＫ01（第96図上）　Ｂ１－４地区の北半部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、全長3.3m、幅1.85m、深さ約20mを測る。埋土から細片化した土器が出土した。また検出面で、鉄刀１点が出土した。

出土遺物としては土師器や瓦器、須恵器、瓦質土器、鉄刀などがある（第98図25～44、第97図51）。25～30は土師器皿である。いずれも口縁部にヨコナデが施される。32～37は丹波型瓦器椀である。内面の圏線ミガキの比較的密なものから大きく間隔が開いたものまでがみられる。38～42は瓦質土器羽釜である。胴部内面は横方向の粗いハケもしくは板ナデ調整であるが、38のみは縦方向の粗いハケ調整がみられる。42は口縁部外面に２条の沈線がめぐらされる。43・44は東播系須恵器鉢である。44は淡紫赤色を呈する。51はＳＫ01検出面で出土した鉄刀である。残存長16.1cm、幅1.2cmを測る。

④土坑ＳＫ14（第96図下）　Ｂ１－４地区の南端付近で検出した。平面形は



第94図　Ｂ１－４地区検出遺構配置図（1/200）



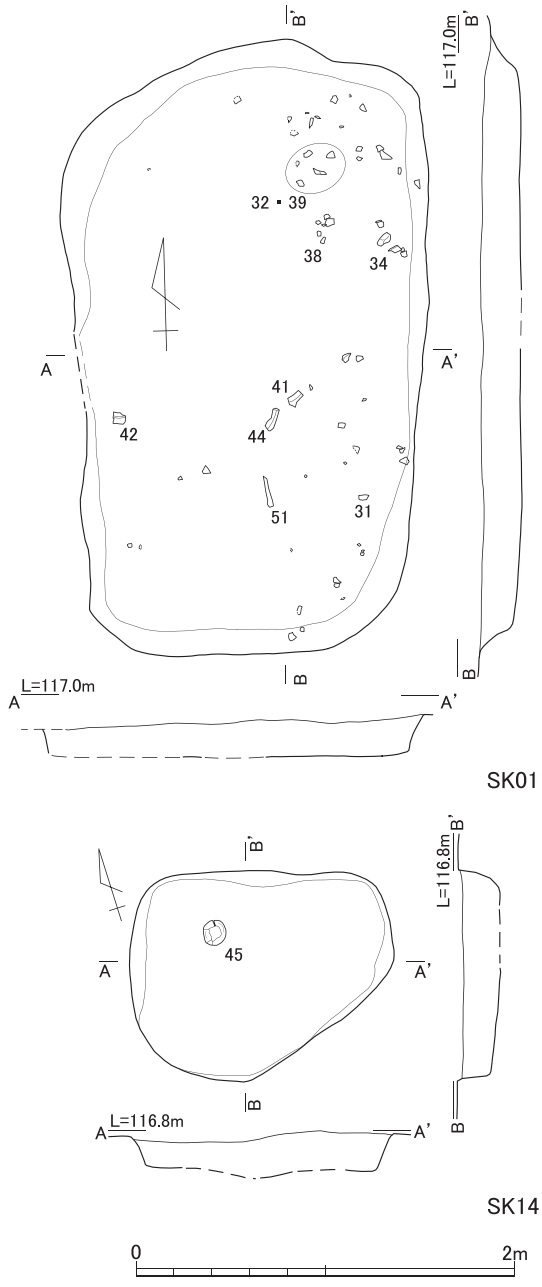
第95図　B１－１～３地区検出遺構配置図（1/200）

不整形な楕円状を呈し、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ10～15cmを測る。

出土遺物として土師器皿１点がある（第98図45）。内面は底部中心部付近までヨコナデが施されるが口縁部内面の一部はヨコナデが弱く、粗いハケ調整が残っている。

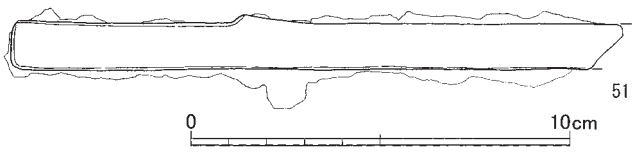
⑤柱穴群　柱穴は調査区全体において多数検出したものの、建物や柵としてのまとまりはあまり認められなかった。

出土遺物としては土師器や瓦器などがある（第98図６～20）。６はＢ１－４区柱穴ＳＰ09から出土した「て」字状口縁の土師器皿である。７～12は丹波型瓦器椀である。８は内面に粗い圏線ミガキ、見込みにジグザグ状暗文が施されているが、他は磨滅が著しく不明である。７・８はＢ１－４区柱穴ＳＰ103から、９はＢ１－４区柱穴ＳＰ139から、10はＢ１－４区柱穴ＳＰ129から、11はＢ１－４区柱穴ＳＰ112から、12はＢ１－４区柱穴ＳＰ143から出土した。13～15はＢ１－２区柱穴ＳＰ12から出土した土師器皿である。15は口縁部のヨコナデが施されない。16～19はＢ１－２区柱穴ＳＰ06から出土した土師器皿である。18・19は薄手で直線的に開く口縁部をもつものである。20はＢ１－２区柱穴ＳＰ118から出土した黒色土器Ｂ類椀である。見込みに密なジグザグ状ヘラミガキが直交する２方向に施されたのち、体部内外面に密なヘラミガキが施される。口縁内端部には沈線がめぐらされる。



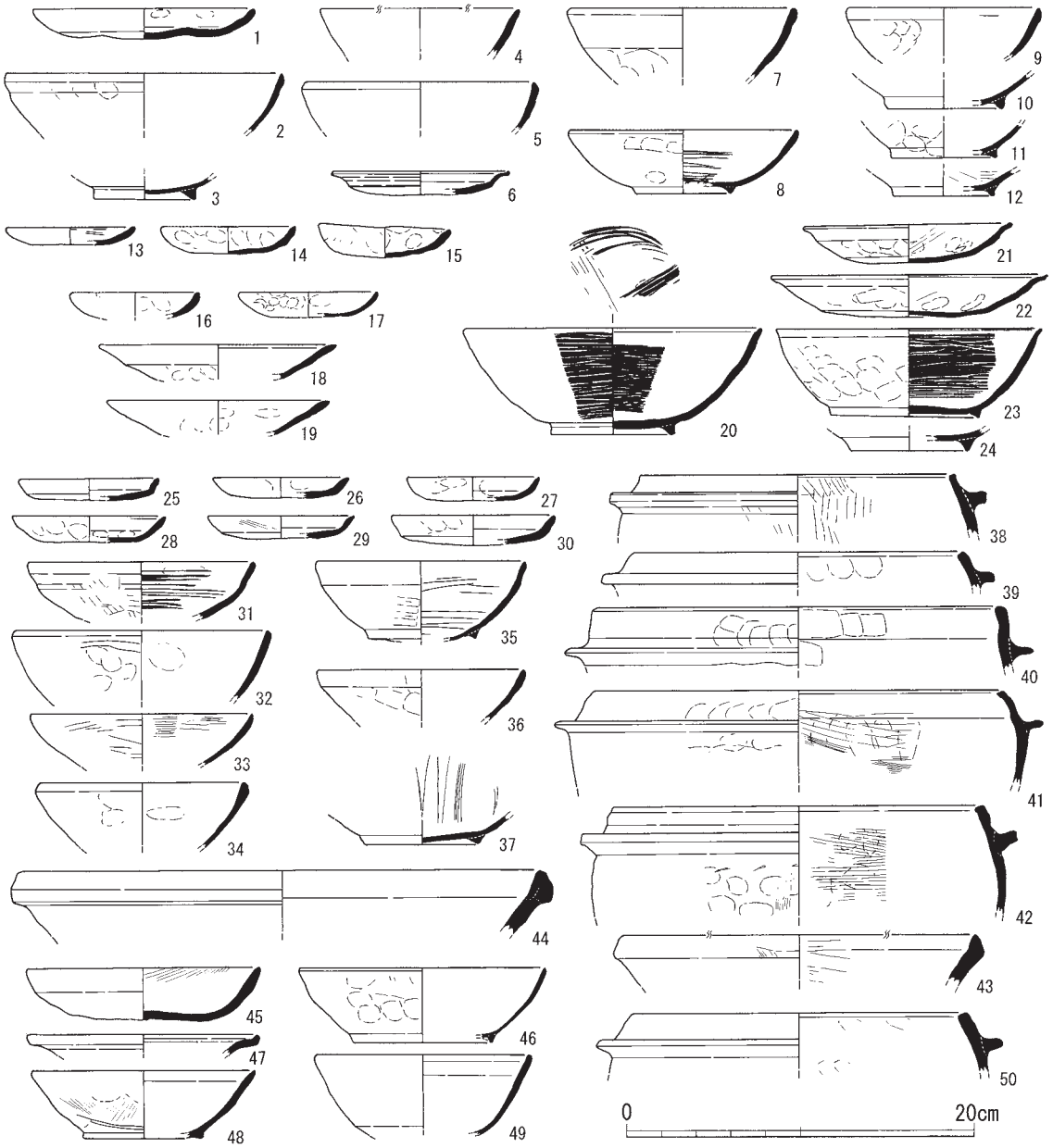
第96図　土坑ＳＫ01・14実測図

⑥土坑ＳＫ169　Ｂ１－２区の北西隅で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、直径1.2m、深さ25cmを測る。丹波型瓦器椀が出土した（第98図24）。磨滅により調整は不明であるが、断面三角形の高い高台をもつ。



第97図　Ｂ１－４地区出土鉄器実測図

⑦不明遺構ＳＸ125　Ｂ１－４地区の掘立柱建物跡ＳＢ01の西側に接して検出した。不整形な形状を呈する。土器が少量出土した（第98図46・47）。46は丹波型瓦器椀である。内面にやや粗い圏線ミガ



第98図　Ｂ１地区出土遺物実測図

キが施される。47は古瀬戸折縁皿である。

⑧**不明遺構ＳＸ126**　Ｂ１－４地区の中央部で検出した。明確な遺構の形状を確認することはできなかったが、丹波型瓦器椀が出土した地点である（第98図48・49）。48の外面には粗いハケ調整がみられる。磨滅が著しく、ヘラミガキは失われている。

⑨**不明遺構ＳＸ127**　Ｂ１－４地区の中央部で検出したが、風倒木の可能性がある。瓦質土器羽釜（第98図50）が出土した。砂粒を多く含む粗い胎土で、焼成は甘い。

（筒井崇史・森島康雄）

19. 116トレンチの調査

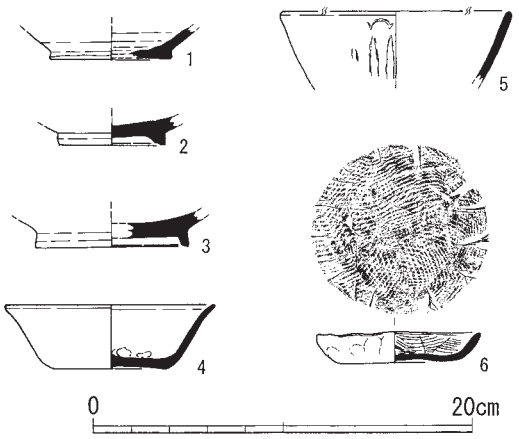
Ｂ１地区の北西側、東西方向に伸びる用水路部分に設定したトレンチである。調査区は西に向かって傾斜しており、西側では暗茶褐色土や黒褐色土が堆積していた。遺構は上層と下層の２面で検出した(第99図)。

上層遺構としては溝２条、土坑１基などを検出した。このうち、東端で南北方向の溝ＳＤ01を検出した。幅２ｍ、深さ40cmを測る。規模等から当時の区画溝の可能性がある。

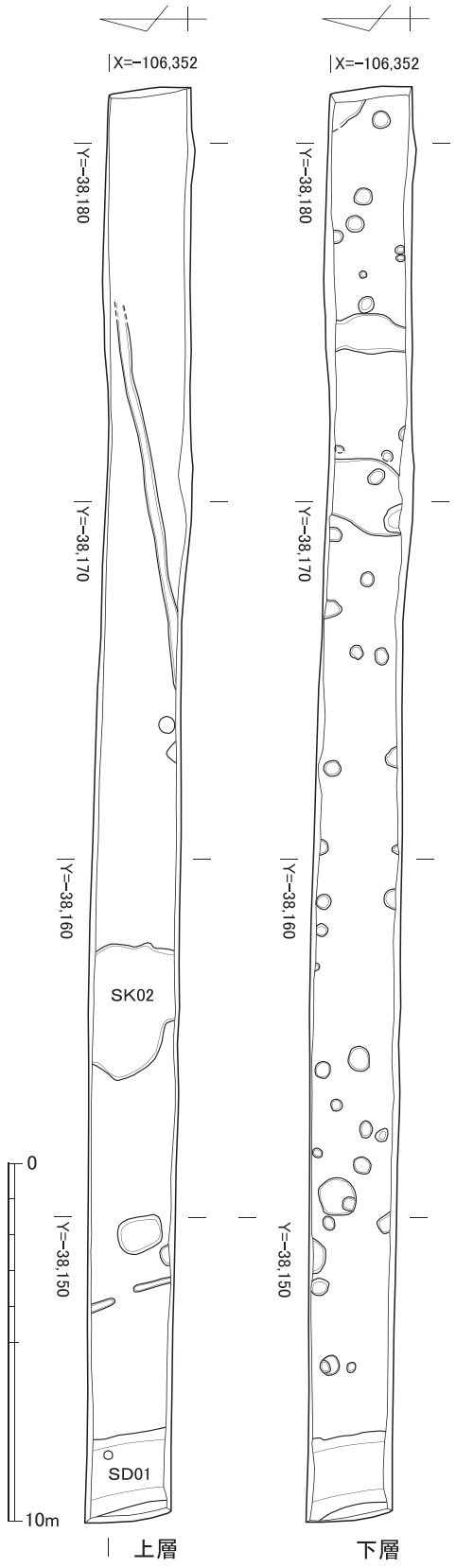
下層遺構としては時期不明の柱穴を多数検出した。

遺物は重機掘削中や包含層から少量出土した(第100図１～６)。１は底部に糸切り痕の残る須恵器椀である。２は高台を削り出す緑釉陶器椀である。３も削り出し高台と考えられる灰釉陶器の椀である。４は釉薬が緑灰色に近い発色をするが、白磁杯である。５は小破片であるが、青磁椀である。６は内面にハケ調整が明瞭に残る土師器皿である。

(伊野近富・筒井崇史)



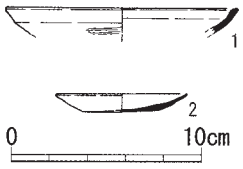
第100図　116トレンチ出土遺物実測図



第99図　116トレンチ
検出遺構配置図（1/200）

20. 132～134トレンチの調査

Ｂ１地区から南に伸びる用水路部分に設定したトレンチである。北部と南部の２つのトレンチに分かれており、北部のほうが40cmほど高い。耕作土と床土を除去するとすぐに地山であった。柱穴を40基以上検出したものの、建物や柵として復原することはできなかった(第102図)。



第101図　132～134トレンチ出土遺物実測図

出土遺物としては須恵器や土師器がある(第101図１・２)。遺構に伴うものではなく、精査中に出土した。１はヘラミガキ調整が認められる須恵質の土器で、無釉陶器の皿と思われる。２は土師器皿である。

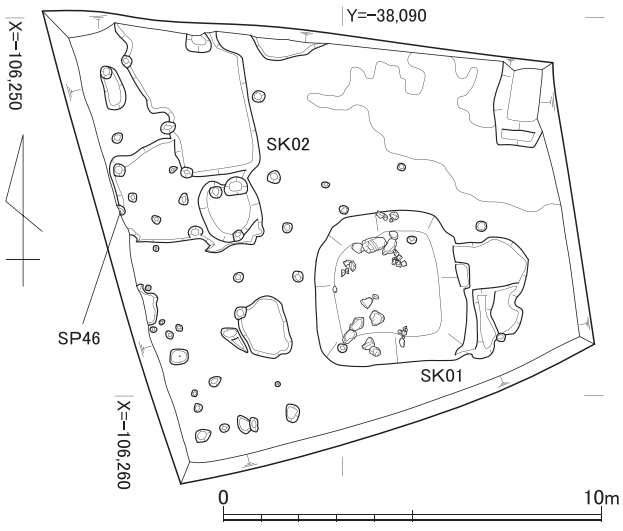
(伊野近富・筒井崇史)

21. Ｂ３地区の調査

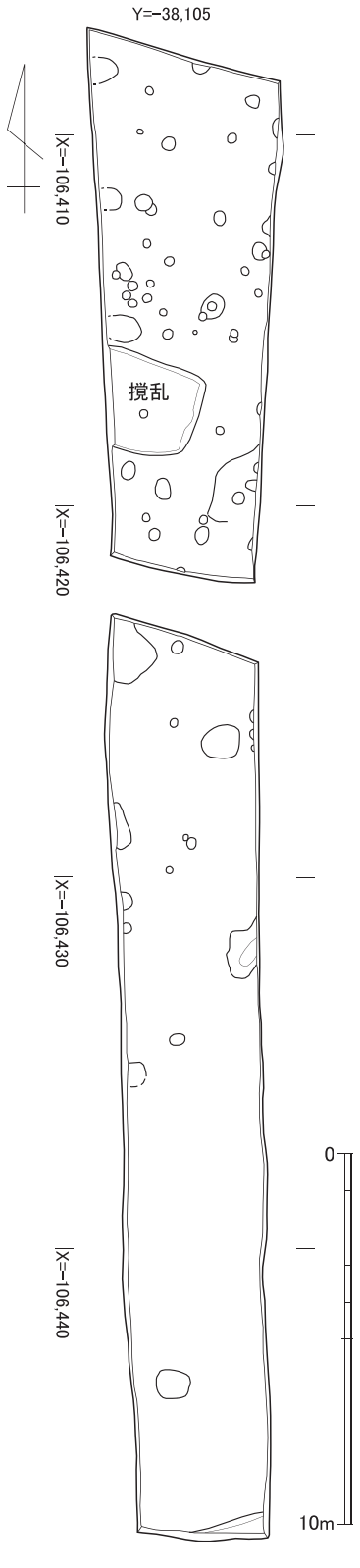
Ｂ１地区の北約100mに設定した調査区である。耕作土・床土を除去すると､おおむね地山となる。この上面で遺構を検出した。

検出した遺構としては、土坑２基以上、柱穴多数がある。柱穴は建物や柵として復原することはできなかった(第103図)。遺構はおおむね中世に位置づけられる。

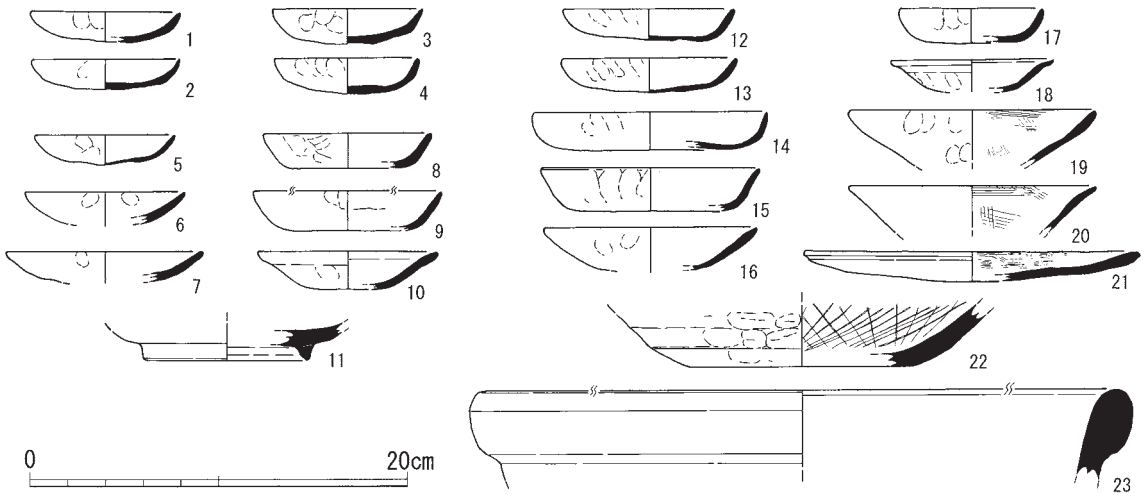
①土坑ＳＫ01　調査区の中央やや南寄りで検出した。平面形は隅丸方形で、一辺3.8～4.1m、深さ35cm程度を測る。出土遺物としては土師器や青磁がある(第104図５～11)。５～10は土師器皿である。７～９は口縁部外面のヨコナデが施されない。11は



第103図　Ｂ３地区検出遺構配置図(1/200)



第102図　132～134トレンチ検出遺構配置図(1/200)



第104図　Ｂ３地区出土遺物実測図

青磁皿である。

②**土坑ＳＫ02**　調査区の北西隅で検出した。平面形は不整形で、長方形を呈する複数の土坑が重複したような形状を呈する。したがって、複数の土坑が切り合っている可能性が高い。長軸6.0m、幅2.8～4.0m、深さ10～25cmを測る。出土遺物としては土師器や瓦質土器、国産陶器などがある（第104図12～23）。12～21は土師器皿である。16・18は口縁部のヨコナデが明瞭で整った器形であるが、他は口縁部外面のヨコナデが施されず、歪みが大きい。19・20は内面に粗いハケ調整のみられるタイプである。21は口縁部が肥厚するのみでほとんど立ち上がらない。内面に粗いハケ調整がみられる。22は瓦質土器すり鉢である。内面に斜交するヘラ描きによるすり目が施される。外面は横方向のヘラケズリである。この遺構から出土した同種の破片がＢ５地区ＳＫ46出土のもの（第109図33）と接合した。22とはすり目の密度が異なることから別個体と思われる。23は備前焼甕である。器表面は光沢のある赤茶褐色、破断面は淡紫茶色を呈する。このほか、備前焼すり鉢片が出土している。

③**柱穴ＳＰ46**　調査区の西端、トレンチ壁面に重複して検出した。直径30cm、深さ15cmの円形を呈する小規模な柱穴である。土器は重なったような状態で出土した（第104図１～４）。いずれも土師器皿で、口縁部外面のヨコナデが施されず、指掌痕が残る。色調は１・２が茶灰色、３・４が灰橙色を呈する。

（筒井崇史・森島康雄）

22. Ｂ４地区の調査

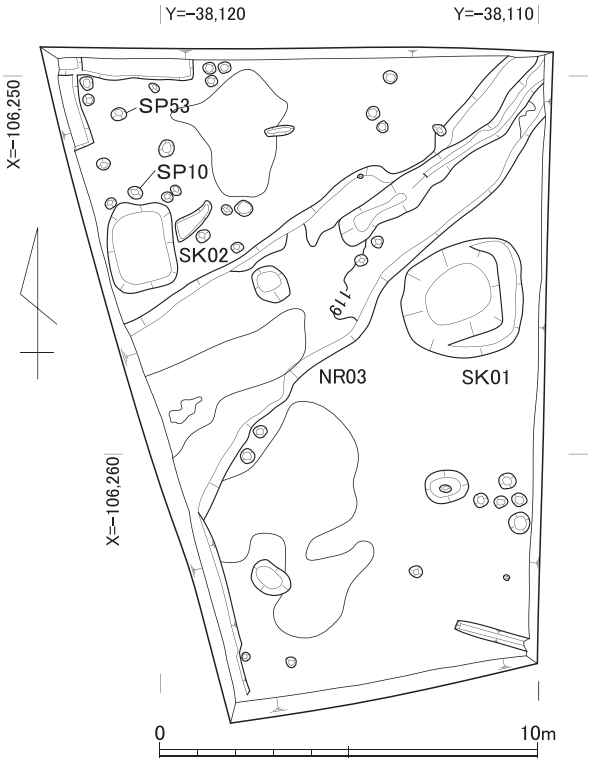
Ｂ３地区の西約10mに設定した調査区である。耕作土・床土を除去すると、耕作に伴うと思われる素掘り溝を多数検出した。これらを除去すると、おおむね地山となる。遺構はこの地山上で検出した（第105図）。検出した遺構としては、自然流路１条、土坑２基のほか、土坑や柱穴が多数ある。遺構は平安時代ないし中世に位置づけられる。

（1）平安時代の遺構・遺物

①自然流路ＮＲ03　調査区を北東から南西に向かって横断する自然流路である。検出長13.7m、幅1.9～5.5m、深さ25～70cmを測る。埋土は黒色粗砂礫混じり粘質土や暗褐色粗砂礫などである。埋土から少量ながら遺物が出土した（第106図１～３）。

（2）中世の遺構・遺物

①土坑ＳＫ01　調査区の東半部、やや北寄りで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺2.9～3.2m、深さ約40cmを測る。出土遺物としては土師器・瓦器・国産陶器などがある（第106図13～18）。13・14は土師器皿である。口縁部はヨコナデ調整が施されない。15は瓦器皿である。ヘラミガキは認められない。口縁端部外面には面取りが施される。



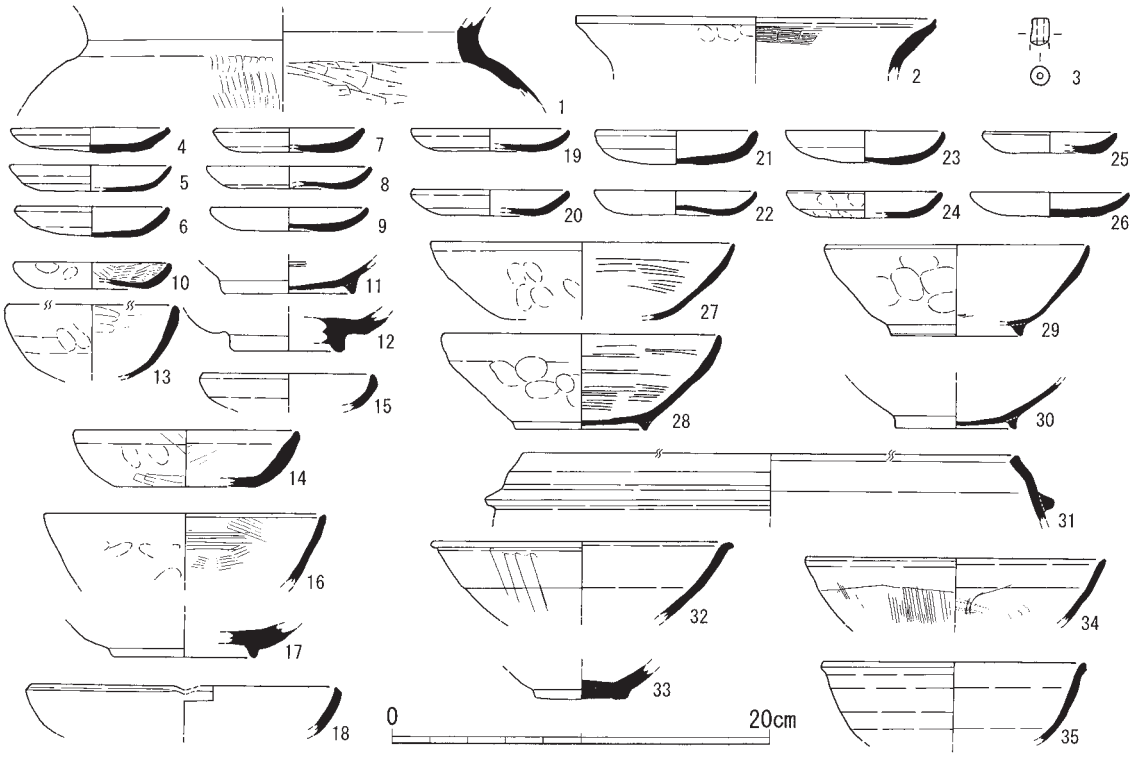
第105図　Ｂ４地区検出遺構配置図（1/200）

16は土師器椀である。内面に粗いハケ調整が施され、口縁部内端部には面取りが施される。17は無釉陶器椀である。内面は密なヘラミガキ、外面は粗いヘラミガキが施される。18は古瀬戸卸目皿である。口縁部外面は無釉である。

②土坑ＳＫ02　調査区の西半部、やや北寄りで検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、一辺1.8～2.3m、深さ20cmを測る。出土遺物としては土師器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器などがある（第106図19～32）。19～26は土師器皿である。口縁部はヨコナデ調整が施され、口縁端部は外面に面取りが施されるものと尖り気味に納めるものがある。27～30は瓦器椀である。31は瓦質土器羽釜である。32は同安窯系青磁椀である。口縁端部は外反し、体部外面に幅広の粗い櫛目文が施される。

③柱穴群　Ｂ４地区では約30基の柱穴を検出したが、建物や柵として復原できるものはなかった。ただ、これらの柱穴からは土師器や瓦器などが出土した（第106図４～９・11）。４～９は柱穴ＳＰ10から出土した土師器皿である。口縁部はヨコナデ調整が施され、口縁端部は外面に面取りが施されるものと尖り気味に納めるものがある。11は柱穴ＳＰ53から出土した丹波型瓦器椀である。内面に密な圏線ミガキが施される。

④その他の遺物　素掘り溝から出土した遺物として、土師器皿などがある（第106図10）。口縁部はヨコナデ調整が施されず、内面には粗いハケ調整、外面は指掌痕がみられる。第106図33～35は包含層から出土した。33は古瀬戸平椀である。高台は削り出し輪高台である。34・35は青磁椀である。34は同安窯系で外面に縦方向の細かい櫛目文、内面には櫛描きのジグザグ状点描文が施される。35は口縁部がわずかに外反する無文の椀である。　（筒井崇史・森島康雄）



第106図　Ｂ４地区出土遺物実測図

23. Ｂ５地区の調査

Ｂ４地区の西約15mに設定した調査区である。耕作土･床土を除去するとおおむね地山となる。遺構は地山上で検出した。検出した遺構としては溝１条、土坑４基、柱穴多数がある（第107図）。遺構はおおむね中世に位置づけられる。

（１）中世の遺構・遺物

①溝ＳＤ61（第108図）　調査区の南端で検出した。検出長3.0m、幅0.8m、深さ0.9～1.0mを測る。溝の断面形は逆台形を呈することから、Ｂ４地区で検出したような自然流路ではなく、人工的な遺構と考える。溝底に一辺30～40cmほどの角礫を検出した。溝の用途については、検出範囲が狭く、不明な点が多いが、区画溝や基幹水路のようなものと考える。

出土遺物としては土師器や輸入陶磁器・国産陶器などがある（第109図12～25）。12～18は土師器皿である。13はヘソ皿である。16～18は口縁端部が外折するタイプで、18は粗製で内面に粗いハケ調整が残る。19は白磁椀である。20は青磁筒形香炉である。21～24は蓮弁文の青磁小椀である。25は備前焼甕である。

②土坑ＳＫ15　調査区の北端で検出した。平面形はやや楕円形を呈し、東側を土坑ＳＫ14に切られる。長軸0.8m以上、短軸0.7m、深さ35cmを測る。出土遺物として土師器皿がある（第109図26・27）。26は口縁部外面のヨコナデが弱く指掌痕が残る。

③土坑ＳＫ39　調査区の東辺で検出した。遺構の南東部分は調査区外に広がるが、平面形はやや不整形な長方形を呈する。全長3.7m、幅1.5～2.1mを測るが、深さはわずかに５cmと、非常に浅い。土坑内から多数の角礫が、無造作な状態で出土しており、埋没過程で廃棄等されたもの

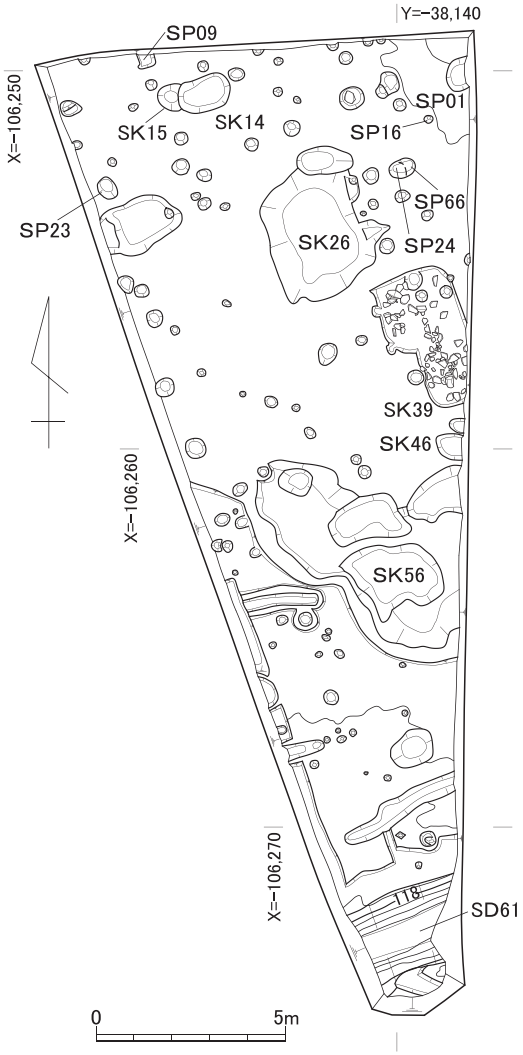
と考えられる。出土遺物として土師器や瓦質土器がある（第109図28・29）。28は土師器皿である。29は瓦質土器すり鉢である。内面は横方向の粗いハケ調整の後、細いヘラ描きによるすり目が施される。内面の下半は使用による磨滅でハケ調整とすり目が失われている。外面は指押さえで調整され、底部付近に横方向のヘラケズリ、口縁端部に強いヨコナデが施される。

④土坑ＳＫ46　調査区の東辺で検出した。遺構の東半部は調査区外に広がるが、平面形は楕円形を呈する。長軸0.7m以上、短軸0.6m、深さ10～15cmを測る。出土遺物として土師器や瓦質土器などがある（第109図30～33）。30～32は土師器皿である。30は口縁部外面のヨコナデが認められず、成形時の指掌痕がみられる。31・32は内面にヘラ状工具の痕跡がみられる。33は瓦質土器すり鉢である。29と同種であるが別個体と考えられる。Ｂ３地区ＳＫ02出土の破片と接合した。

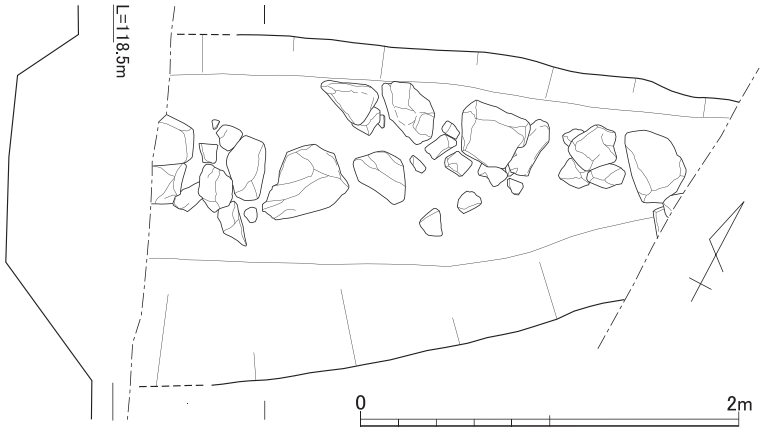
⑤土坑ＳＫ26　調査区の北半部、中央付近で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺は2.2～3.2m、深さ35cm前後を測る。出土遺物として土師器や山茶碗などがある（第109図34～38）。34～37は土師器皿である。35・36は口縁端部外面のヨコナデが不明瞭で、指掌痕がみられる。38は山茶碗である。内面は使用により極めて平滑になっている。

⑥土坑ＳＫ56　調査区のほぼ中央で検出した。平面形は不整形で、土坑の底面も一定にならないことから、多数の土坑が繰り返し掘削された結果と判断した。用途等は明らかでないが、粘土採掘のための土坑である可能性もある。

⑦柱穴群　Ｂ５地区では多数の柱穴を検出したが、建物や柵としては復原できなかった。ただ、これらの柱穴からは土師器などが出土した（第109図１～11）。１～４は柱穴ＳＰ01から出土した土師器皿



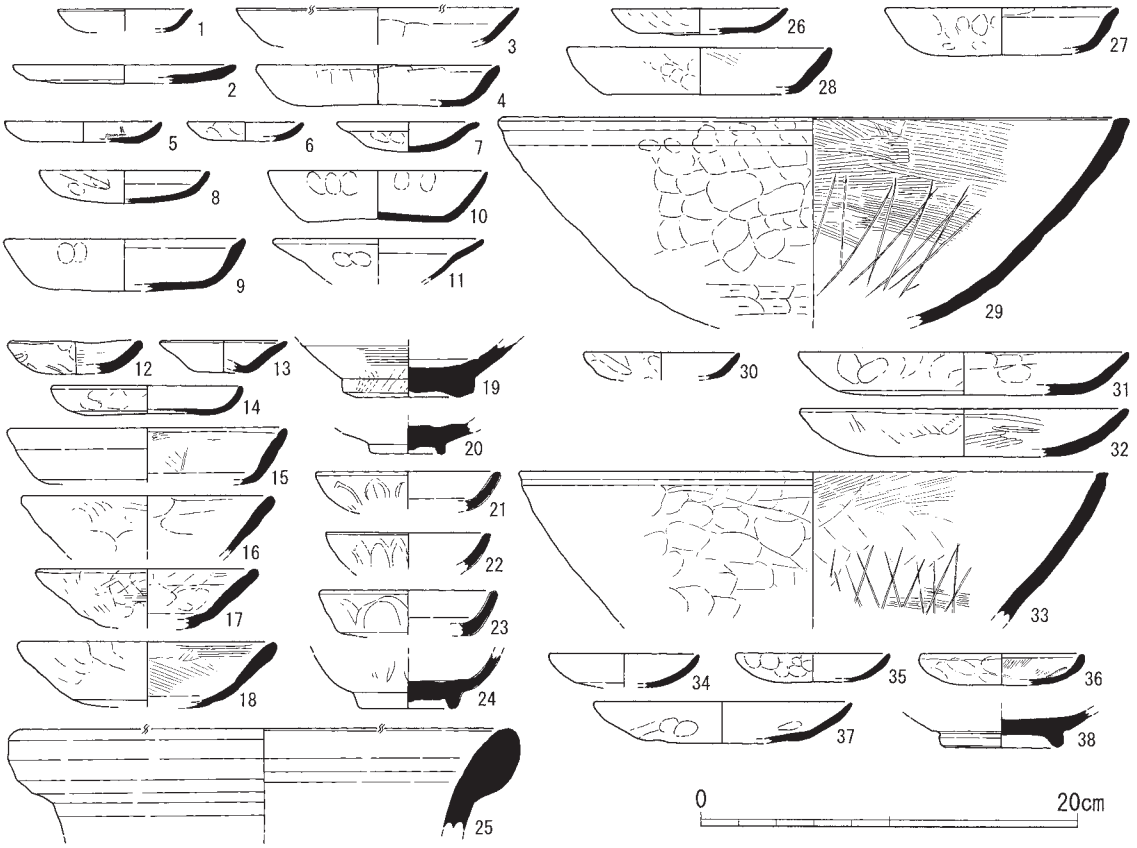
第107図　Ｂ５地区検出遺構配置図（1/200）



第108図　溝ＳＤ61実測図

である。いずれも焼成が甘く、器表面や断面が灰黒色を呈する。５は柱穴ＳＰ66から出土した土師器皿である。内面に粗いハケ調整がみられる。６は柱穴ＳＰ23から出土した土師器皿である。口縁部外面のヨコナデが弱く、粗いハケ調整や指掌痕がみられる。７は柱穴ＳＰ24から出土した土師器皿である。ほぼ完形で、口縁端部内面に浅い凹線がめぐらされる。乳白色の精良な胎土である。８・９は柱穴ＳＰ09から出土した土師器皿である。９は口縁部が緩やかに立ち上がり、端部は外折する。10は柱穴ＳＰ16から出土した土師器皿である。口縁部のヨコナデが弱く、指掌痕が残る。11は柱穴ＳＰ05から出土した土師器皿である。口縁端部が明瞭に外折するタイプである。

（筒井崇史・森島康雄）



第109図　Ｂ５地区出土遺物実測図

24. Ｂ６地区の調査

Ｂ４地区の南側に農道を挟んで設定した調査区である。柱穴や土坑、段状区画、溝などを検出した(第110図)。

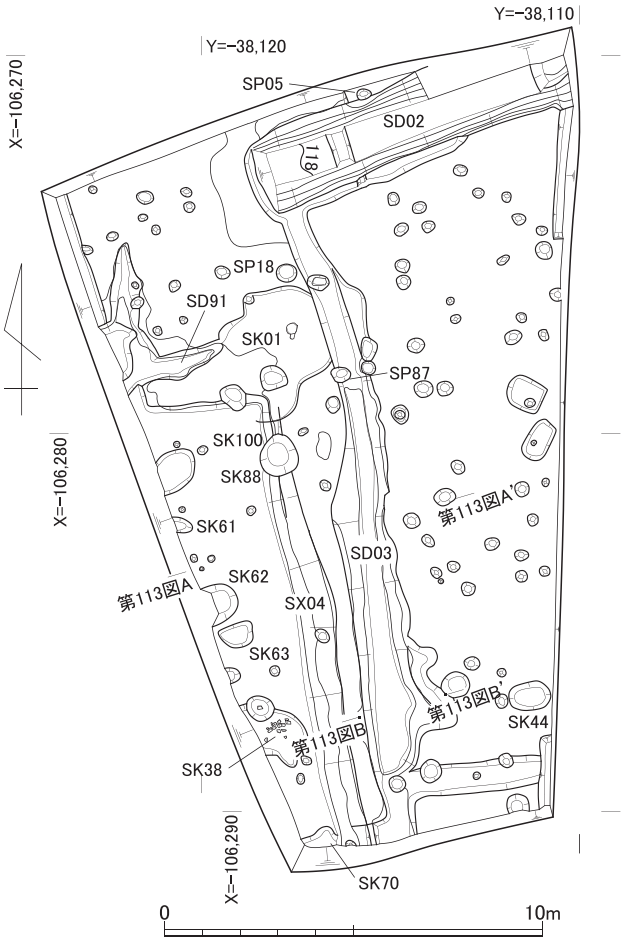
①柱穴群　直径20～30cmのものが大半で、黒褐色粘質土を埋土とする。調査区内において掘立柱建物跡は抽出できなかった。出土遺物として土師器皿がある(第114図１～４)。３・４は口縁部のヨコナデが施されない。３の口縁部内面には円周方向の粗いハケ調整が明瞭にみられる。１・２はＳＰ５から、３はＳＰ18から、４はＳＰ87から出土した。

②土坑ＳＫ61・62・63・38・70　これらは、後述する段状区画ＳＸ04が礫で埋め立てられる以前のもので、トレンチ西壁に沿って検出した。平面形は楕円形と方形のものがあり、礫を含む黒色粘質土を埋土とする。ＳＫ62は底面に炭と焼土がみられた。出土遺物として土師器皿がある(第114図５・６)。いずれも焼成が不十分で、破断面が灰黒色を呈する。５はＳＫ62から、６はＳＫ38から出土した。また、ＳＫ62では図示していないが、瓦器椀の破片が出土している。

③土坑ＳＫ44　平面形は隅丸方形で、大小の礫が多量に投げ込まれていた。長辺1.0m、短辺0.8m、深さ45cmを測る。

④土坑ＳＫ01　段状区画ＳＸ04の屈曲点に掘られた不整形な土坑である。長軸3.0m、短軸2.0m、深さ20～25cmを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物としては土師器・瓦質土器・国産陶器などがある(第114図７～15)。７～９は土師器皿である。７はヨコナデが施されず、口縁端部まで指押さえで成形される。８は口縁部が強いナデによって外反する。８は外反する口縁部が長く延びる京都系土師器皿に近いものである。10・11は瓦質土器羽釜である。10は炭素が吸着せず、全体に灰白色を呈する。11は大半が土師質焼成である。12は瓦質土器火鉢である。体部下端に１条の突帯がめぐらされる。突帯の下端に接してヘラ状工具でナデを施した痕跡が２条みられる。底部外面には離れ砂の痕跡が認められる。13は常滑焼壺である。14・15は青磁椀である。14は外面に蓮弁文が施される。15は無文である。

⑤土坑ＳＫ100　円形に近い平面形で、長辺105cm、短辺95cm、深さ35cmを測る。

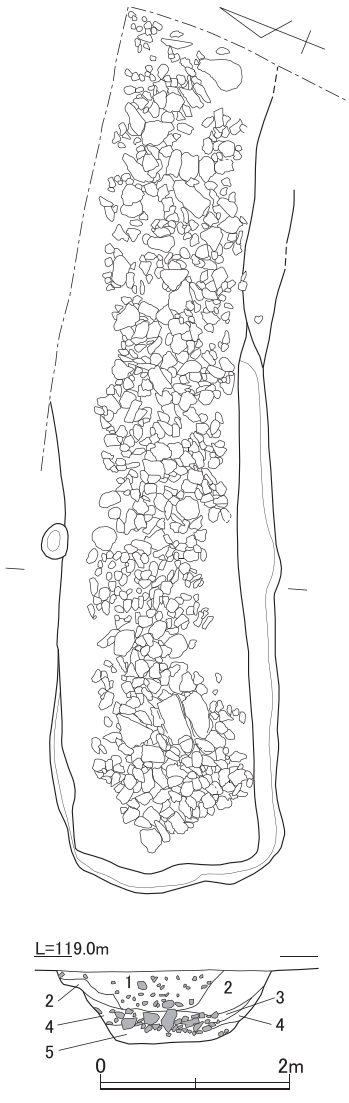


第110図　Ｂ６地区検出遺構配置図（1/200）

礫とともに土器類がまとまって出土した（第114図16～19）。16～19は備前焼甕である。口縁部の玉縁が小さいものから扁平化の進んだものまで差がみられる。18は溝ＳＤ02・土坑ＳＫ01出土の破片と接合した。19は溝ＳＤ03・土坑ＳＫ88出土の破片と接合した。色調は16～18は暗褐色～暗赤褐色、19は赤褐色を呈する。

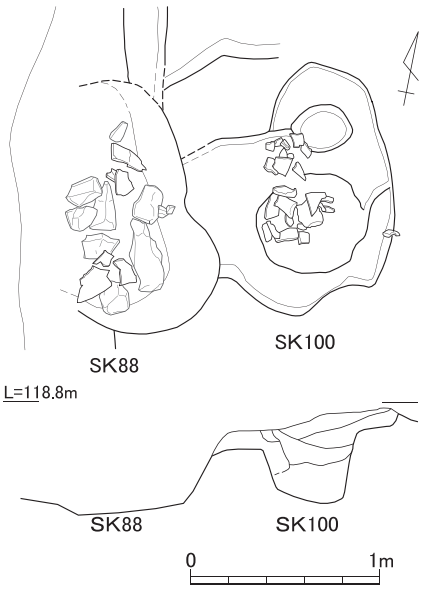
⑥土坑ＳＫ88　土坑ＳＫ100を包括するように掘られ、長軸1.4m、短軸0.7m、深さ45cmを測る。備前焼甕が出土した（第114図20）。色調は赤褐色を呈する。なお、土坑ＳＫ88とＳＫ100から出土した土器が互いに接合することから、ほぼ埋没時期を同じくするものと考える。

⑦溝ＳＤ02　調査区北東で部分的に検出した東西方向の溝である。検出長９m、幅2.3m、深さ75cmを測る。南から伸びてくる溝ＳＤ03を切っている。溝としての役割を終えて以後、大量の礫により埋め立てられている。礫面の表面レベルは118.8mで、ほぼ段状区画ＳＸ04の礫面レベルに等しい。



第111図　溝ＳＤ02実測図

出土遺物としては土師器や瓦質土器、東播系須恵器、国産陶器などがある（第115図21～39）。21～31は土師器皿である。21～24は口縁部のヨコナデが施されず、外面は指掌痕、内面には板ナデやハケ調整の痕跡がみられる。25～31は深手のもので、26・30・31は口縁部上半が外折する。32は瓦質土器すり鉢である。内面には斜交する細いすり目が施される。外面は指押さえが目立つ。33・34は瓦質土器羽釜である。体部外面は指押さえで特に調整は施されない。35は東播系須恵器鉢である。口縁端部が内側に巻き込まれる。胎土に９mm程度の大きな礫がひとつ含まれている。36・37は丹波焼壺である。頸部の形状や厚みがやや異なり、別個体である。37の外面には緑色の自然釉が厚く掛かる。接合しない同一個体の破片が多数出土している。38は陶器すり鉢である。ほぼ水平な口縁端部を持ち、内面のやや下がった位置に１条の



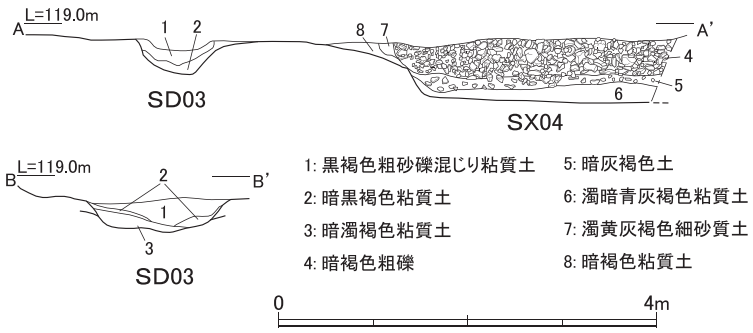
第112図　土坑
ＳＫ88・100実測図

凹線がめぐらされ、さらに下がった位置に２条の浅い沈線がめぐらされる。すり目は２条１単位か。色調は赤橙色を呈するが、内面の一部は灰黒色を呈する。39は青磁椀である

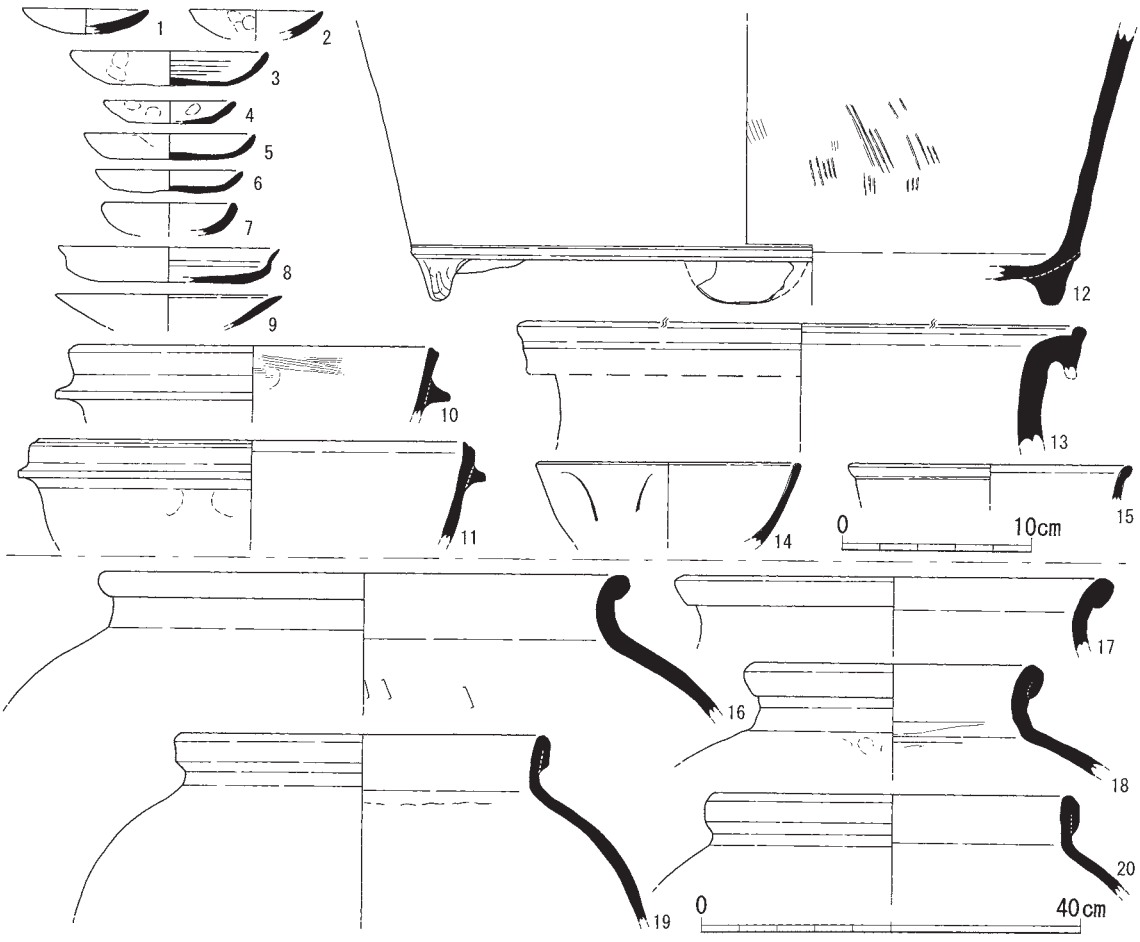
⑧溝ＳＤ91　40・41は土師器皿である。口縁部のヨコナデが施されず、指押さえが口縁端部付近までみられる。42は陶器甕である。胎土は比較的緻密で灰色を呈する。丹波焼か。

⑨溝ＳＤ03　段状区画ＳＸ04に平行する溝で、検出長15.5m、幅1～2.3m、深さ40cmを測る。調査区の南側で直角に屈曲し、その検出した東西辺は長さ４m、幅0.8m、深さ15cmを測る。断面形は逆台形またはU字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土である。

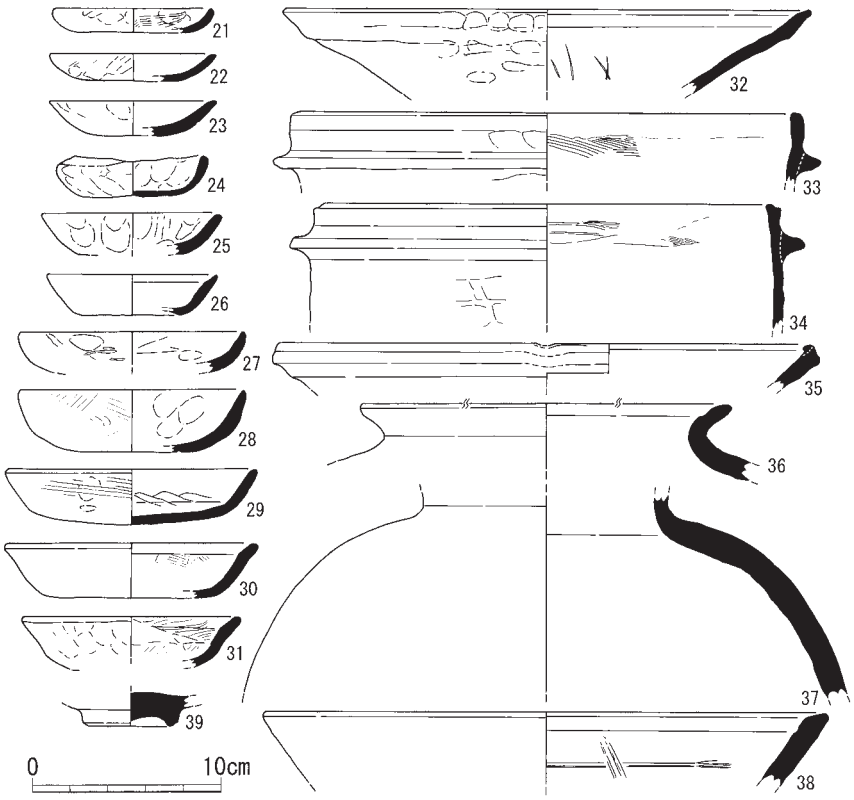
出土遺物として土師器や瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁器などがある（第116図43～83）。43～75は土師器皿である。43は口縁部内面にヘラ状工具による１条の沈線が施される。44は内面の立ち上がり部に凹線状の圏線がめぐらされる。45は口縁部の



第113図　溝ＳＤ03・段状区画ＳＸ04土層断面図



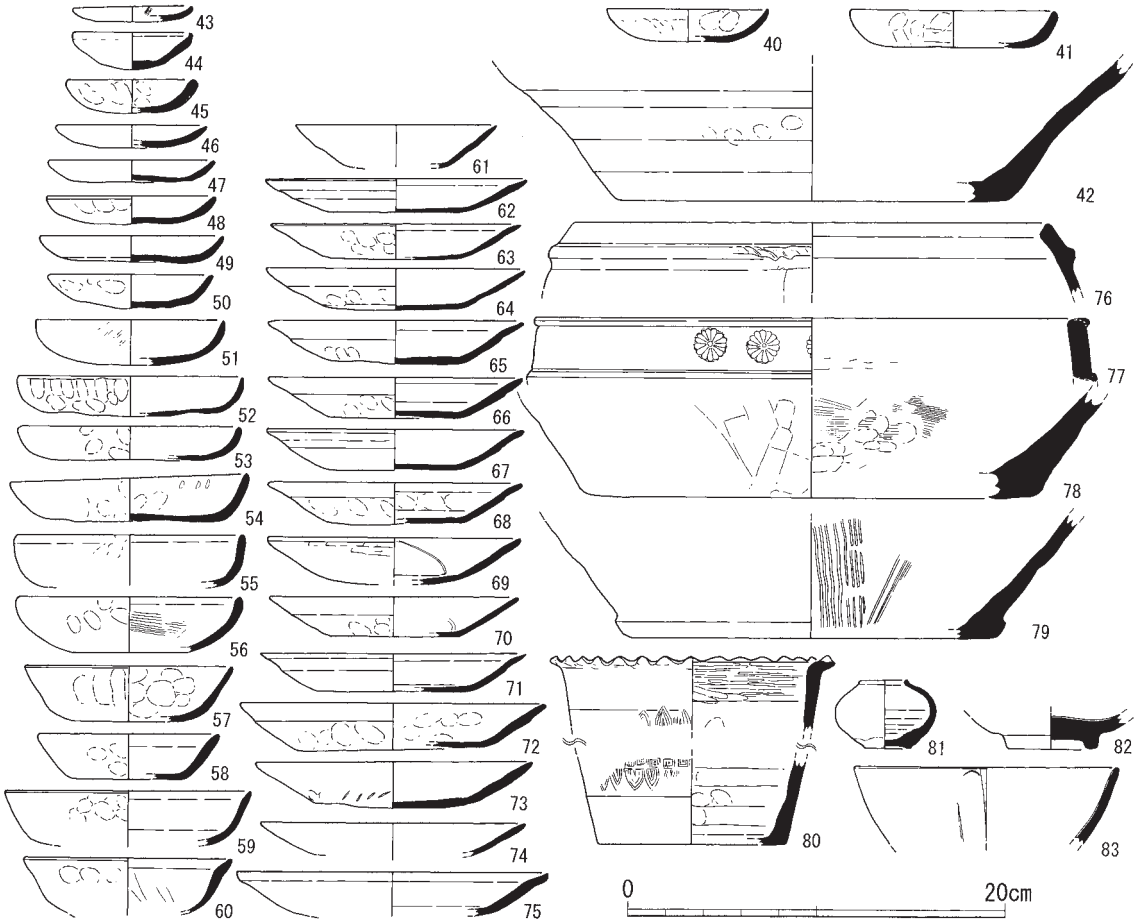
第114図　Ｂ６地区柱穴・土坑出土遺物実測図



第115図　Ｂ６地区溝ＳＤ02出土遺物実測図

ヨコナデが施されない。46～49は口縁部が短く立ち上がる浅い器形で口縁部にヨコナデが施される。50～57は口縁部のヨコナデが施されない。58～60は口縁部の上半が外折する。61～75は平らな広い底部から口縁部が直線的に延びるもので、口縁端部はやや外反する。口縁部にていねいなヨコナデが施され、ヨコナデの最後は周回方向から折り返す方向になで上げている。京都系土師器皿の特徴をよく写した器形で、16世紀中葉のものと考えられる。76は土師器羽釜である。白色の細粒を少量含む胎土で赤茶色を呈し、焼成は良好である。77は瓦質土器風炉である。口縁端面から口縁部外面はていねいなヘラミガキの後、菊花文のスタンプが押される。口縁部内面の下半はヘラケズリ、上半はヨコナデ調整が施される。口縁部と胴部との境目には突帯がめぐらされるが、突帯を貼り付ける前に１条の沈線がめぐらされている。胴部との接合面にはキザミが入れられている。突帯貼り付け後に突帯の上端部をヘラで押さえるなど、ていねいなつくりである。78は丹波焼甕である。胎土は砂粒を含みやや粗い。79は備前焼すり鉢である。胎土は精良で焼成は堅緻である。８条一単位のすり目が施される。80は瓦質土器火鉢である。口縁部は波状につくられる。外面から口縁部上半にかけてていねいなヘラミガキが施される。胴部外面に２条の細い沈線がめぐらされ、沈線に挟まれた区画にスタンプ文が押される。底部外面はヘラケズリが施される。81は古瀬戸合子である。内外面に灰釉が掛けられるが外面底部付近は露胎である。82・83は青磁椀である。

⑩段状区画ＳＸ04　調査区の西側を断面「Ｌ」字状に掘り込んで平坦面を設ける。この区画内の平坦面上に土坑ＳＫ61・62・38などが掘り込まれている。規模は南北辺15m、東西辺６ｍ、

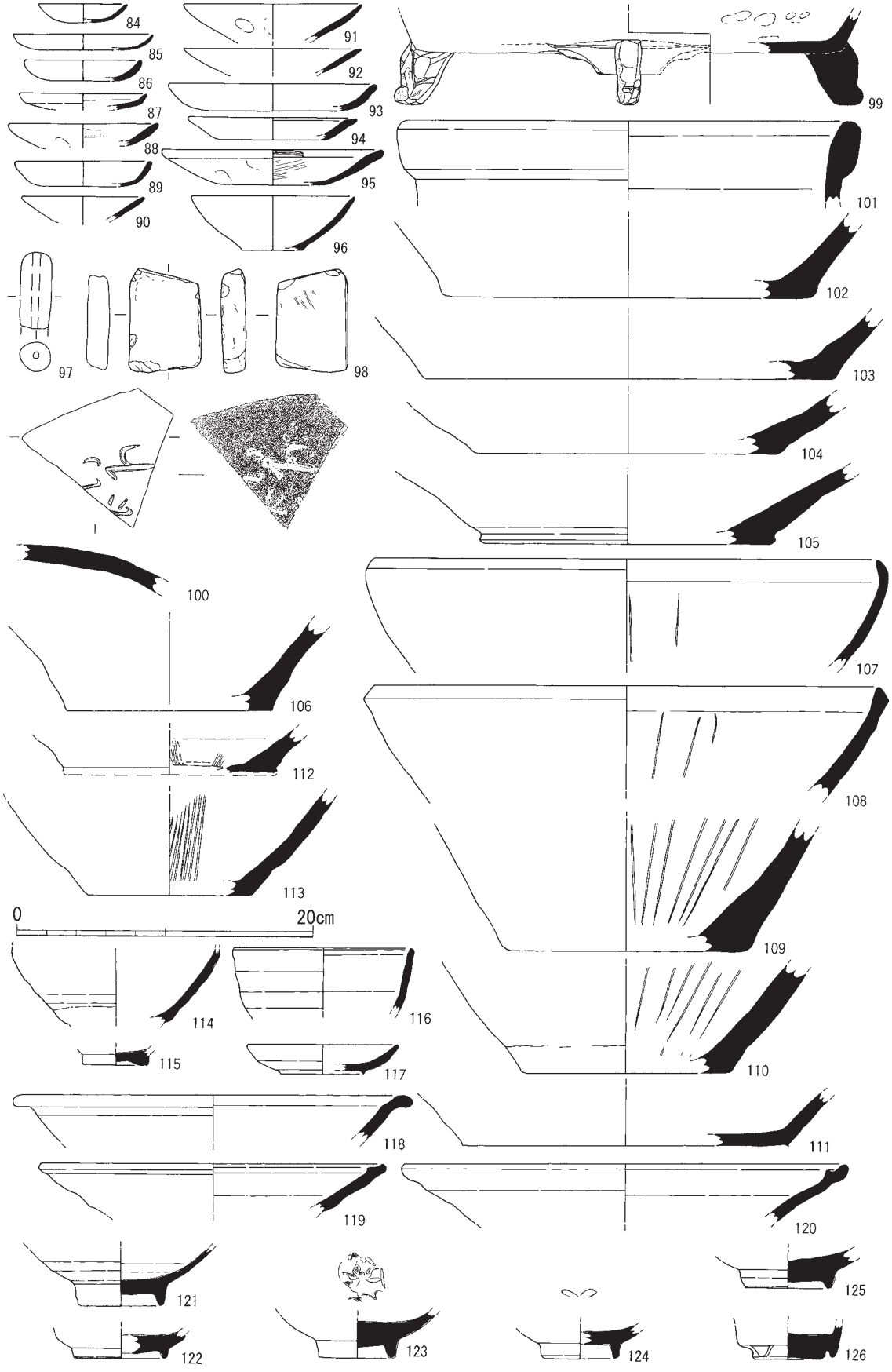


第116図　Ｂ６地区溝ＳＤ91・ＳＤ03出土遺物実測図

深さ60～70cmを測る。本遺構は、寺院や居館などの範囲の一画を区画する遺構である可能性がある。

また屈曲部や北辺は、土坑ＳＫ01や溝で壊され、さらに大小の角礫が大量に区画内を覆っている。礫の層は約50cmの厚さである。区画内の遺構群が役割を終えて以降、平坦面を確保する必要から、人工的に埋められたものといえる。

出土遺物として、土師器皿・備前焼の甕・仮名文字などの彫られた常滑焼の体部・石臼・中国製青磁の筒形香炉・中国製白磁椀などがある（第117図84～126）。84～95は土師器皿である。94・95は口縁部上半が外折するものである。84～86は口縁部のヨコナデが施されない。96は丹波型瓦器椀である。97は土錘である。98は須恵器甕片を加工したもので、３面が研磨されている。99は瓦質土器火鉢である。内面はヨコナデ、外面はヘラミガキが施される。底部外面は離れ砂痕がみられる。100は丹波焼壺である。肩部に「いろ」「に」と読めるヘラ描きがみられる。101は備前焼甕である。102～106は丹波焼甕である。このほか接合しない破片が多数出土している。107～110は丹波焼すり鉢である。110は良く使い込まれてすり目の一部が失われている。111は丹波焼鉢である。112・113は備前焼すり鉢である。113は８条一単位のすり目が施される。114～120は瀬戸系陶器である。114・115は天目茶碗である。116は鉄釉筒形椀である。117は灰釉丸皿である。118～120は古瀬戸折縁深皿である。118・119は灰釉、120は鉄釉である。121は白磁椀で



第 117 図　Ｂ６地区段状区画ＳＸ 04 出土遺物実測図

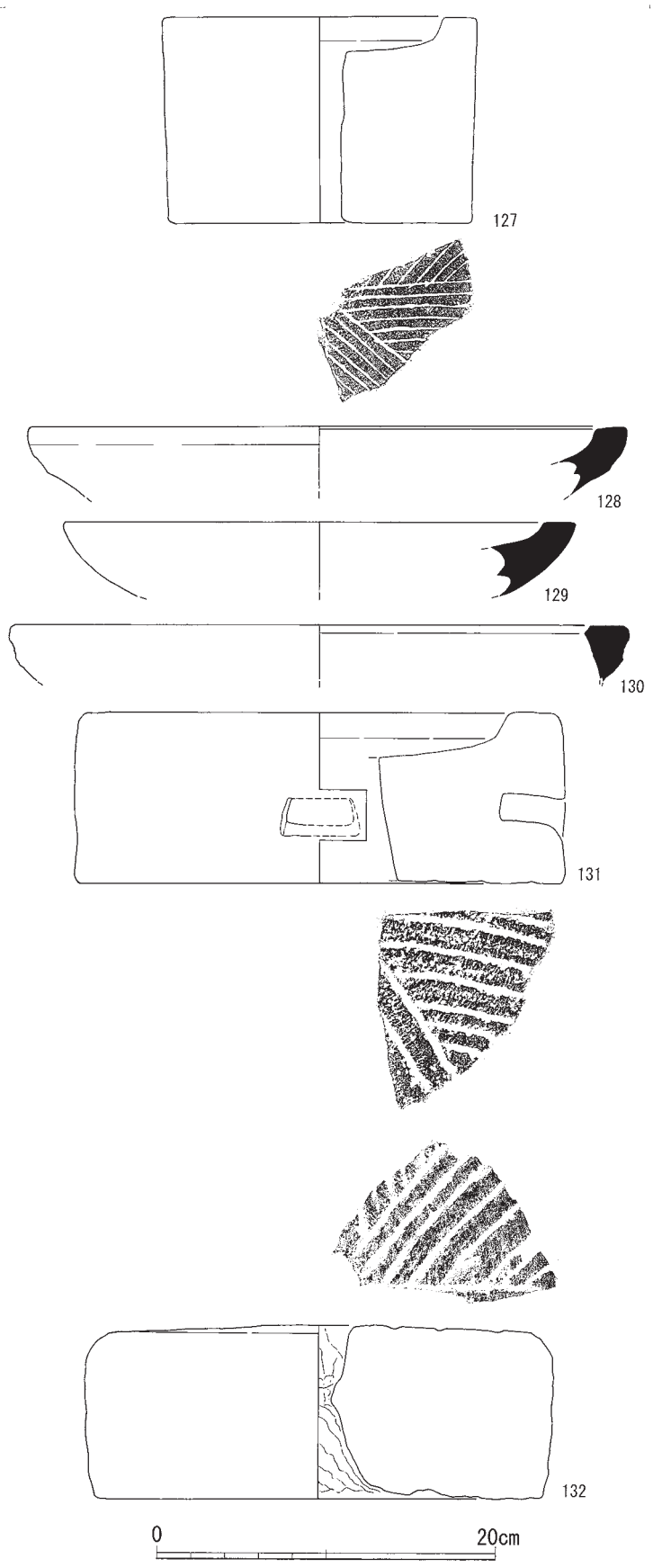
ある。122～125は青磁椀である。123は高台内に赤色顔料が付着する。122～124は畳付まで施釉している。125は畳付から高台内に掛けて露胎である。126は青磁香炉である。底部内外面は露胎である。

⑪Ｂ６地区出土石製品

ここではＢ６地区の各遺構から出土した石製品を一括して取り上げる(第118図)。

127～130は茶臼である。127～129は砂岩製、130は安山岩製である。129の外面はタタキ成形の凹凸を研磨して平滑にしている。131・132は安山岩製の粉引臼である。127･130～132は溝ＳＤ02から、129は段状区画ＳＸ04から出土した。なお、128はＳＤ02とＳＸ04から出土した破片が接合した。

(黒坪一樹・森島康雄)



第118図　Ｂ６地区出土石製品実測図

25. 110・112トレンチの調査

110・112トレンチはＢ３地区の東側および南東側に設定した用水路部分のトレンチである。110トレンチでは、土坑１基、自然河道１条、柱穴多数などを検出した。また、112トレンチでは土坑や柱穴を多数検出した(第119図)。

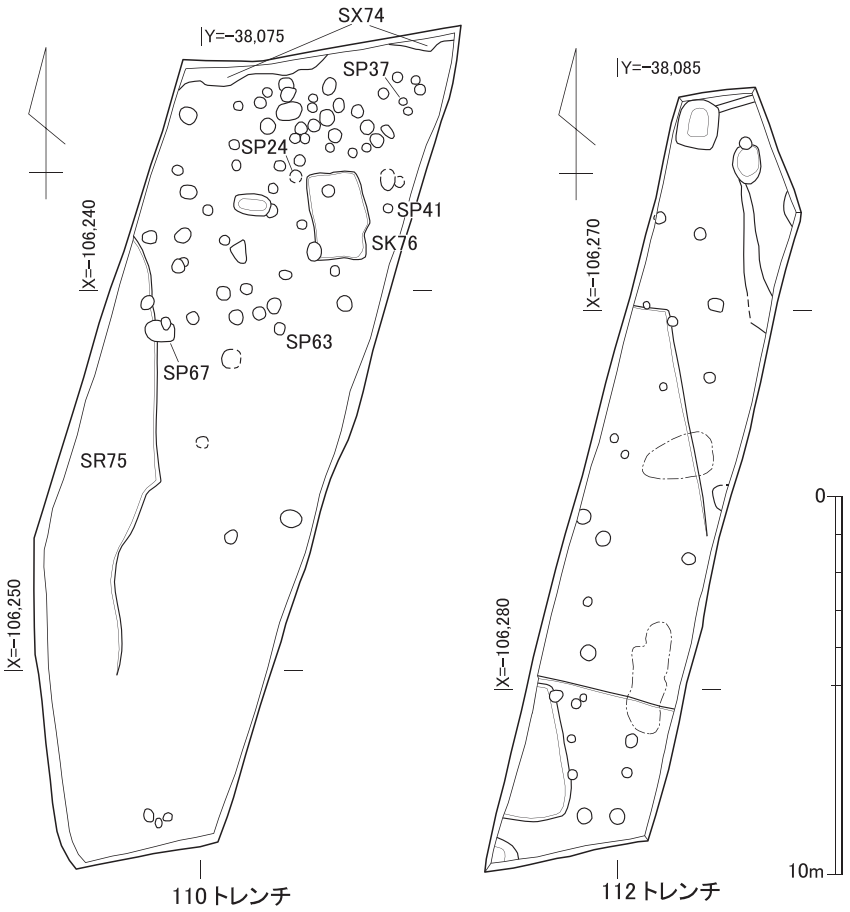
以下では110トレンチで検出した遺構・遺物について報告する。

①柱穴群　トレンチの北半部において多数の柱穴を検出したが、掘立柱建物や柵として復原することはできなかった。柱穴から出土した遺物について報告する(第120図２～５・７)。２は柱穴ＳＰ63から出土した小型の土師器皿である。３は柱穴ＳＰ24から出土した土師器杯である。歪みが激しい。４は柱穴ＳＰ67から、５は柱穴ＳＰ37から出土した中型の土師器皿である。２～５の土師器はいずれもナデ調整やユビオサエなどで整形する。７は柱穴ＳＰ41から出土した瓦器椀である。全体に磨滅が著しい。

②自然河道ＳＲ75　トレンチの西辺に沿って検出した。おおむね北から南に向かって流れると思われる。検出長11.5m、検出幅2.2m以上、深さ15～20cmを測る。埋土は暗灰褐色粗礫混じり細砂質土である。出土遺物としては土師器皿・須恵器、青磁などがある(第120図８～12)。８・９は土師器の杯、10は土師器の皿である。２～５と同じく、ナデ調整やユビオサエなどで整形する。11はいわゆる東播系の須恵器鉢である。12は青磁壺である。上半部を欠損する。

③その他の遺構　不明遺構ＳＸ74はトレンチの北辺で検出した落ち込み状の遺構である。自然地形の可能性がある。出土遺物としては土師器皿がある(第120図１)。土坑ＳＫ76はトレンチ北半部で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、全長2.35m、幅1.5m、深さ約15cmを測る。出土遺物としては白磁椀がある(第120図６)。

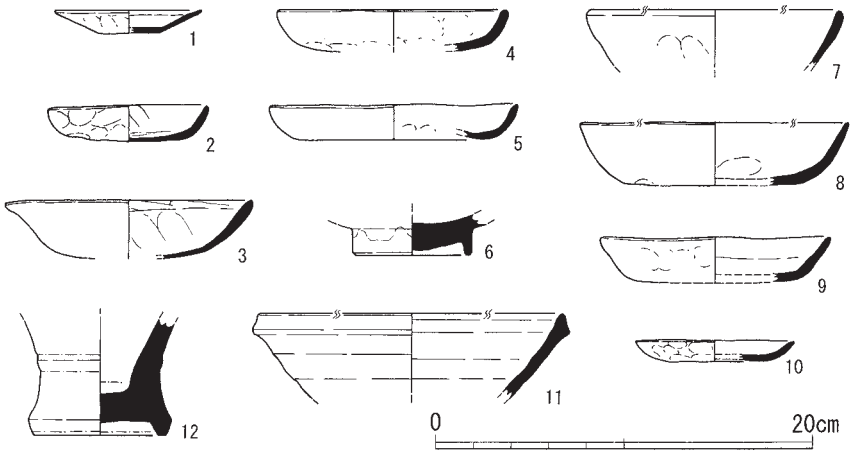
(筒井崇史)



第119図　110・112トレンチ検出遺構配置図(1/200)

26. ３・４トレンチの調査

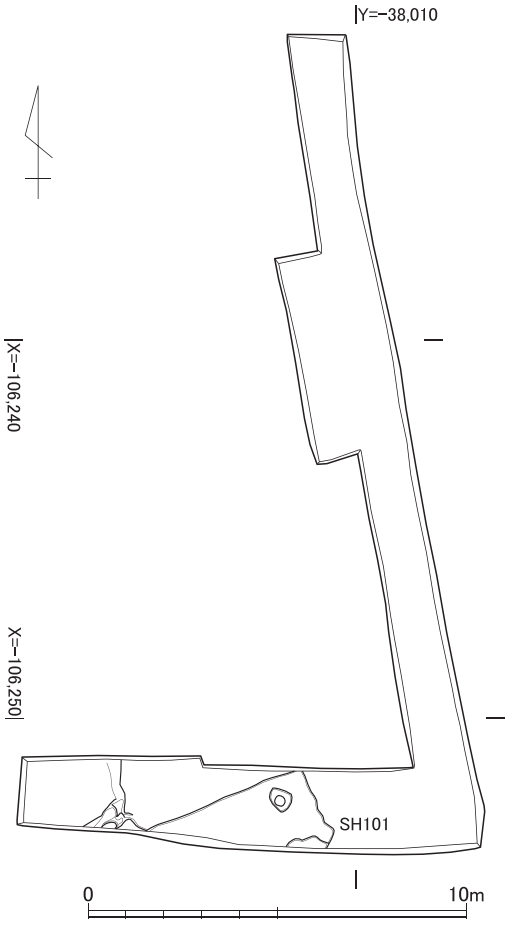
３・４トレンチは110トレンチの東約60ｍに設定した用水路部分のトレンチである。３・４トレンチでは耕作土や床土を除去すると、北半部では直ちに地山となり、素掘り溝などを検出した。南半部では若干の堆積土があり、これを除去すると、竪穴式住居跡１基や自然地形と思われる落ち込みなどを検出した（第121図）。



第120図　110トレンチ出土遺物実測図

①竪穴式住居跡ＳＨ101　トレンチの南端で検出した。トレンチの幅が狭いため、住居の北半部を検出したのみである。平面形は方形を呈すると考えられ、一辺4.4m以上、深さ10cm前後を測る。周壁溝はみられず、主柱穴も１基確認したのみである。出土遺物としては須恵器のほか、不明石製品がある（第122図１・７）。１は須恵器杯Ｈ蓋である。７は面取りするなど、加工痕のみられる不明石製品である。

②包含層ほかの出土遺物　３・４トレンチでは、顕著な遺構は上述の竪穴式住居跡ＳＨ101のみであるが、包含層ほかから若干の遺物が出土した（第122図２～６）。２は精査中に出土した須恵器杯Ａである。３～６は素掘り溝や落ち込みなどから出土した遺物である。３は須恵器の短頸壺である。４は青磁椀の小破片である。５は土師器皿である。６は瓦質土器尊式瓶である。

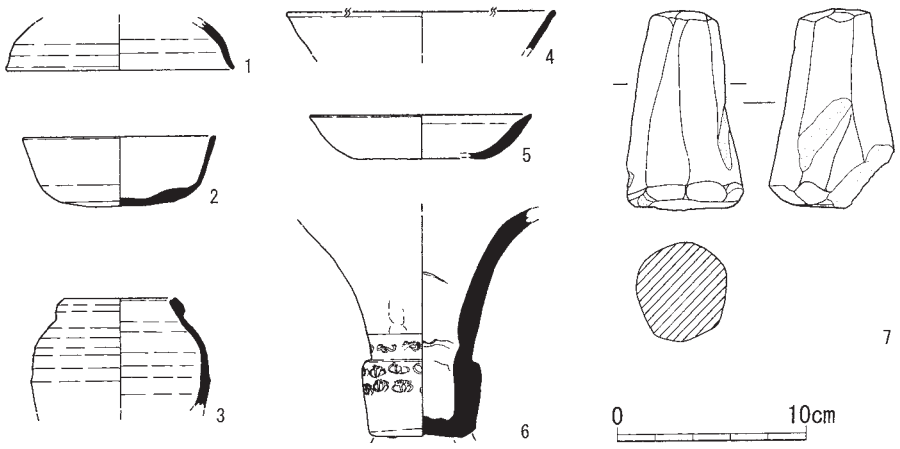


第121図　３・４トレンチ
検出遺構配置図（1/200）

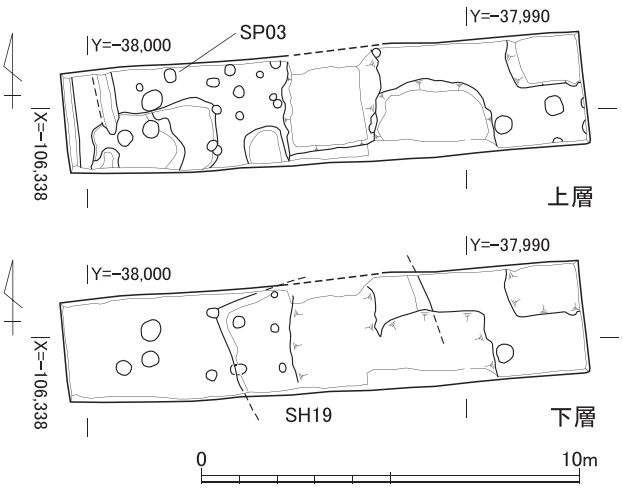
（筒井崇史）

27. 10トレンチの調査

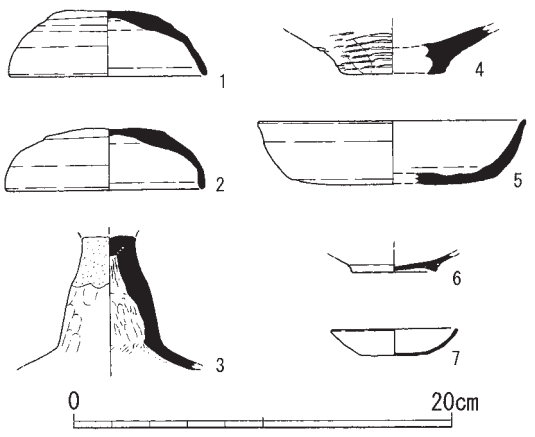
10トレンチはＡ２地区の北東側、農道を挟んで設定した用水路部分のトレンチである。トレンチの中央部～東側にかけて大規模な撹乱が見られたが、遺構面を２面確認することができた（第



第122図　３・４トレンチ出土遺物実測図



第123図　10トレンチ検出遺構配置図（1/200）



第124図　10トレンチ出土遺物実測図

123図）。上層では中世の柱穴や土坑などを検出した。また、下層では竪穴式住居跡１基ほかを検出した。

①竪穴式住居跡ＳＨ19　下層で検出した。トレンチの幅が狭いため、部分的な検出に留まるが、平面形は方形を呈すると考えられる。一辺5.6m前後、深さ15cmほどを測る。主柱穴２基と周壁溝を確認した。住居に伴う遺物として須恵器杯Ｈ蓋や土師器高杯脚部などがある（第124図１・３）。

②包含層ほかの遺物　10トレンチにおいても顕著な遺構は上述の竪穴式住居跡ＳＨ19のみであるが、包含層ほかから若干の遺物が出土した（第124図２・４～７）。２は１とほぼ同じ須恵器杯Ｈ蓋である。包含層出土であるが、住居に伴うものである可能性が高い。４は弥生時代後期の甕の底部である。10トレンチの付近まで弥生時代後期の遺構が広がっていた可能性がある。５は須恵器杯である。平安時代のものであろう。６は瓦器椀の底部である。７は土師器の皿である。４～７のうち、６は柱穴ＳＰ03から出土、その他は包含層もしくは重機掘削中の出土である。

（筒井崇史）

28. Ｃ１地区の調査

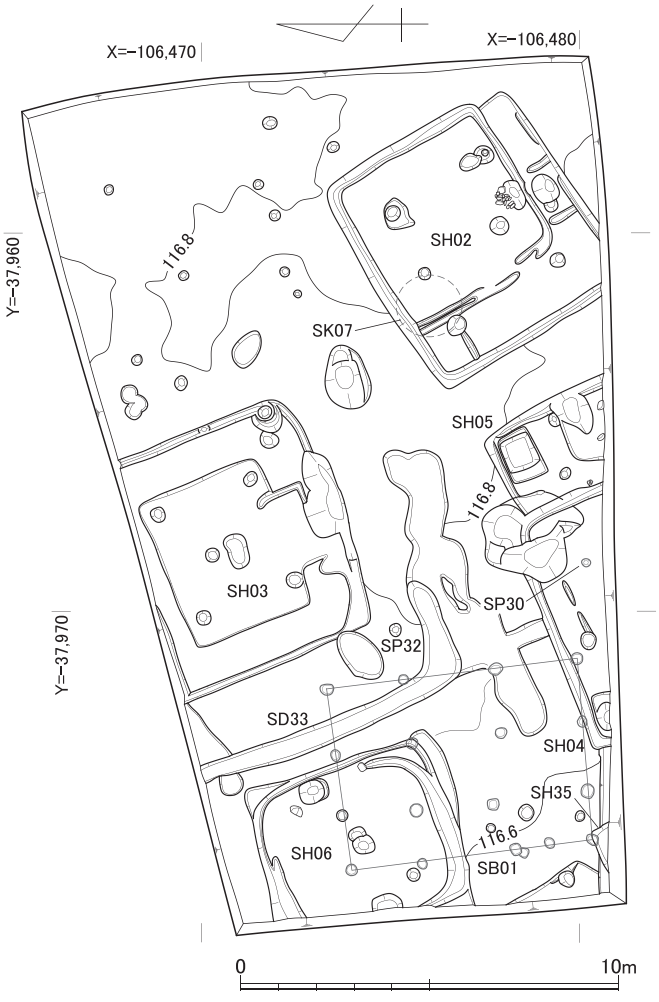
Ａ１地区の東側、農道を挟んで設定した調査区である。調査区の東半では床土を除去すると、直ちに地山を確認したが、中央部から西半にかけては黒褐色粘質土(黒ボク層)が若干堆積していた。この上面で中世の遺構を検出した。また、黒褐色粘質土を除去し、地山上で古墳時代前期の遺構を検出した(第125図)。

(１)古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構として竪穴式住居跡６基、溝１条などを検出した。出土遺物から、これらの遺構はいずれも古墳時代前期のものと考えられる。

①竪穴式住居跡ＳＨ02(第126図上)　調査区の南東部で検出した。平面形は方形を呈し、建て替えが認められた(ＳＨ02－ａ、02－ｂ)。ＳＨ02－ａは、一辺6.0m程度を測る。ＳＨ02－ｂは、一辺4.6～4.8mを測る。ＳＨ02－ａに対して北西辺と北東辺の位置をほぼ変えずに規模を小さく建て替えている。周壁溝はａ、ｂともにほぼ全周する。主柱穴もａ、ｂともに４基検出した。ａの主柱穴の柱間は南北が3.0～3.2m、東西が3.4mで、東西の間隔が若干広い。ｂの柱間間隔は南北が2.0m、東西が2.4mで、やはり東西の間隔が広い。なお、北西の主柱穴はａとｂがともに同一地点で建て替えられている。ａ、ｂともに南東辺の中央に貯蔵穴と思われる土坑を検出した。住居の方位はａ、ｂともに北に対して約35°西に振る。

出土遺物としては土師器がある(第130図15～30)。出土位置から、18・19はａに伴うもの、24～26・28・30はｂに伴うもの、それ以外はＳＨ02掘削中に出土したものである。15～17は小型の壺で、口縁部の形状に特色がある。16は小型の二重口縁壺、17は口縁端部をつまみ上げる壺である。18・19は小型丸底土器である。18は口縁部外面と内面全体にヘラミガキ調整を施す。19に比べ古相の特色を有する。20は複合口縁を呈する壺あるいは甕の口縁部である。21・22は鉢の底部である。23は口縁端部をつまみ上げる庄内式甕の特徴を有する甕である。24・25は口縁端部内面が肥厚する布留式甕である。26～29は高杯で、杯部に稜は有さない。



第125図　Ｃ１地区検出遺構配置図(1/200)

30は平底を呈する大型の壺の底部と考えられる。

②竪穴式住居跡ＳＨ04（第126図下）　調査区の南辺中央で検出した。住居の大半は調査区外に延びるが、北辺と両角を検出した。北辺長は6.1m、深さは約20cmである。幅25cm前後、深さ５～６cm程度の周壁溝がめぐる。北東の角は風倒木に伴う撹乱のため不明瞭である。北西の角には一辺１m、深さ20cm程度の貯蔵穴と思われる土坑を検出した。住居の方位は北に対して約21°西に振る。

床面から比較的多数の土器が出土した。いずれも土師器である（第130図１～14）。１は小型の壺もしくは甕である。２は直接接合しないものの、胎土や色調が類似することから同一個体の可能性を考えている脚台付の小型丸底土器である。３～６は甕である。３・４は口縁端部内面が肥厚しないものの、端部にわずかな面を有する。５・６は内面が肥厚する布留式甕である。７は口縁端部をわずかにつまみ上げ、体部外面に細筋のタタキ調整を施す。内面の調整は磨滅が著しく不明であるが、４～６の甕にくらべ器壁はやや薄い。８は椀形を呈する杯または高杯の杯部であろう。内外面とも磨滅するもののヘラミガキ調整を施す。９・10は有段の口縁部を有する鉢である。11～14は小型器台である。11・12はほぼ同形同大のもので、皿状の杯部に、「ハ」字状の脚部を有する。２点とも杯部中央に直径１cm弱の円孔を穿つ。13は有段状の杯部に、「ハ」字状の脚部を有する。14は小型器台の脚部である。11～13の脚部内面がヘラケズリ調整であるのに対して14はハケ調整である。

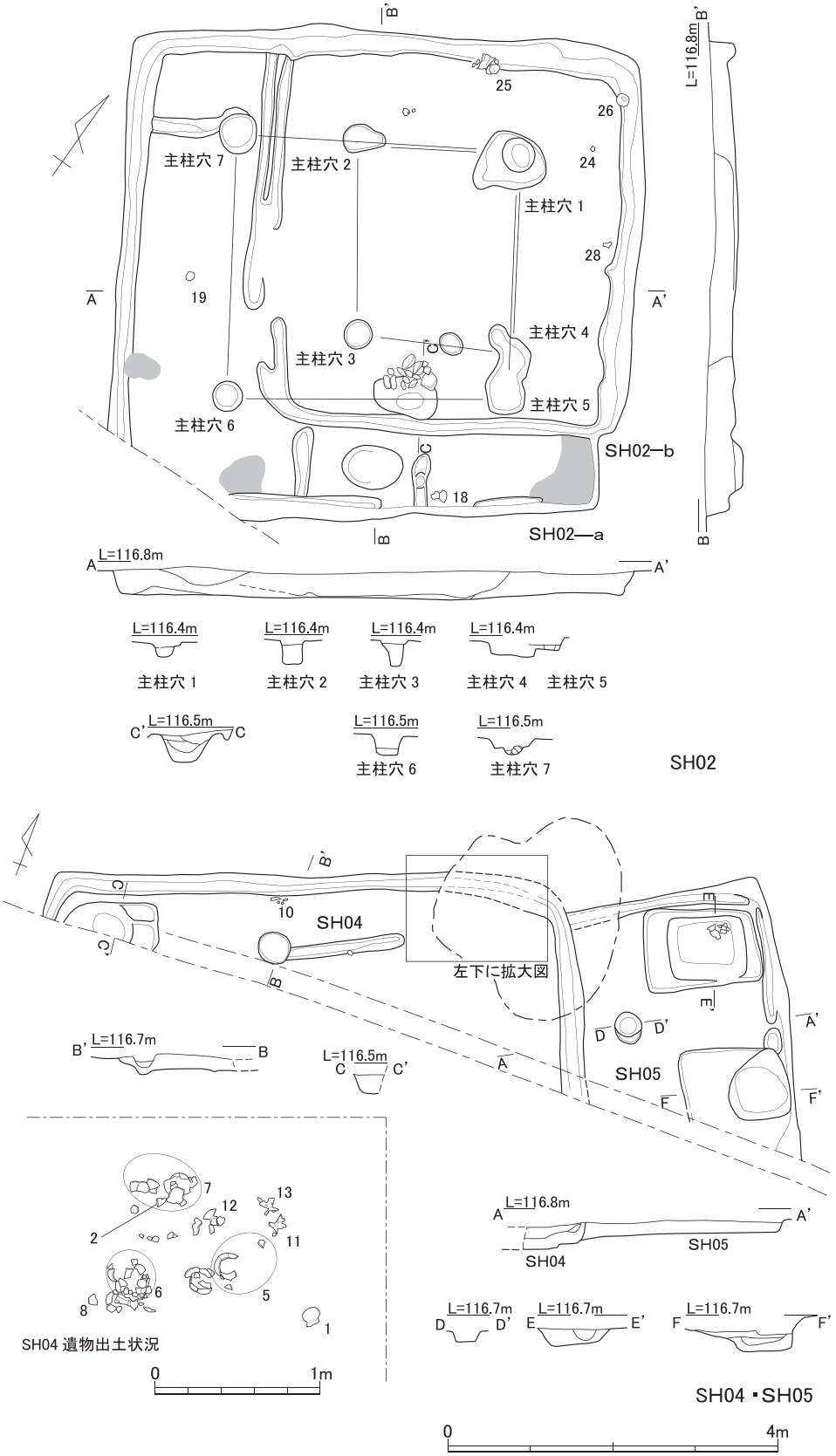
③竪穴式住居跡ＳＨ05（第126図下）　調査区の南辺中央で検出した。竪穴式住居跡ＳＨ04と切り合い関係にあり、ＳＨ05が古い。住居の北東角を検出したのみである。検出長は2.4～4.4m、深さ約15cmである。北角に接して、長辺1.4m、短辺1.0m、深さ約20cmの貯蔵穴とみられる土坑が存在する。住居の方位は北に対して約29°西に振る。

出土遺物は土師器のみで、量は少ない（第131図47～49）。47は複合口縁を呈する小型の甕である。48は高杯脚部である。49はやや大型の壺または甕の体部片である。内外面とも丁寧なナデ調整を施す。

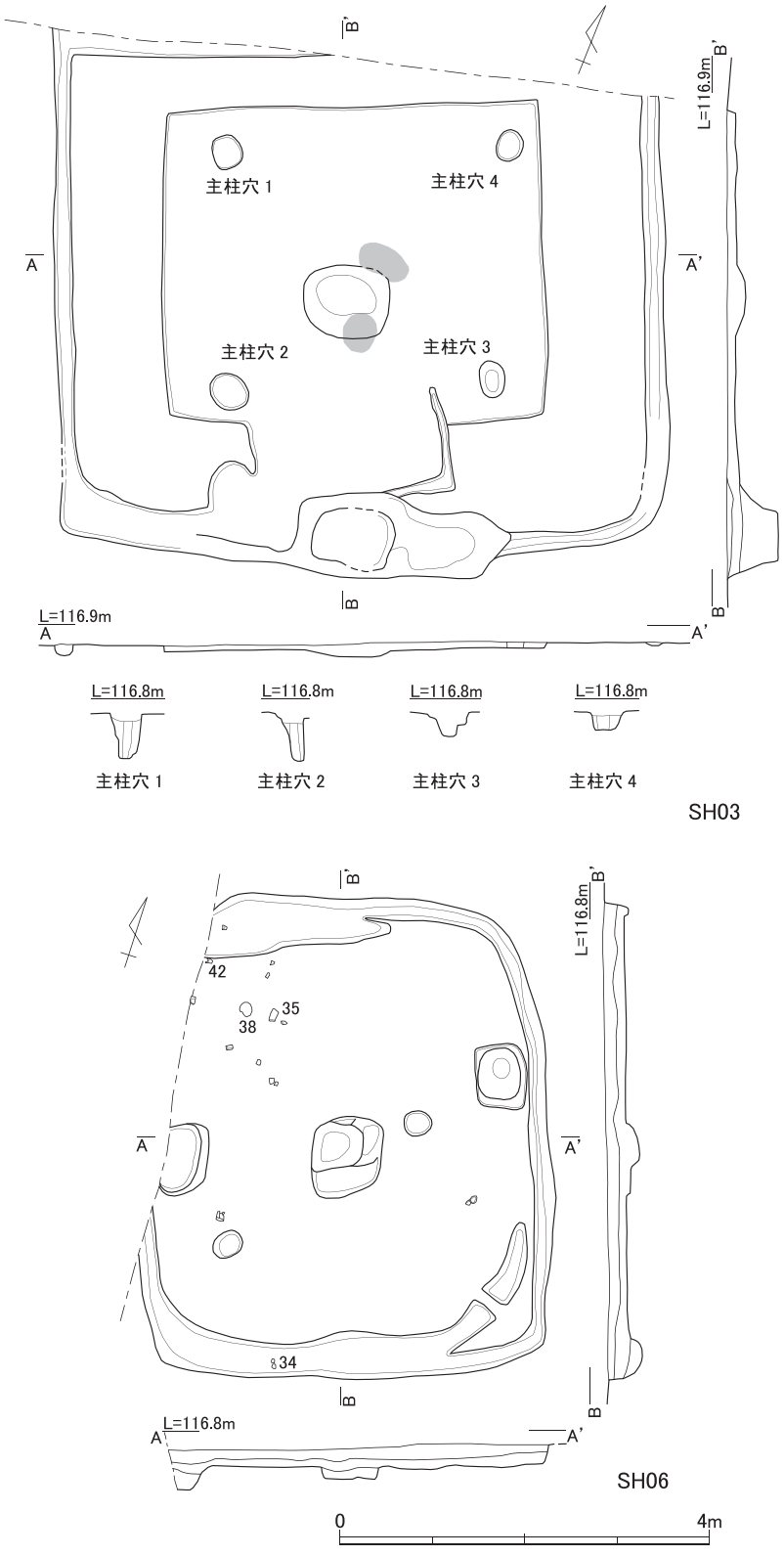
④竪穴式住居跡ＳＨ03（第127図上）　調査区の北辺中央付近で検出した。平面形は方形を呈し、北辺が調査区外に延びる。西辺5.6m以上、南辺6.5mを測る。深さは５cmほどで、住居の遺存状況はよくない。周囲にいわゆる「ベッド状遺構」を有する。南辺の中央に、風倒木痕と重複するため不明瞭であるが、貯蔵穴を有する。幅15～25cm、深さ10cm前後の周壁溝がほぼ全周する。主柱穴は４基確認した。いずれも円形を呈し、直径30～45cm、深さ20～50cmを測る。住居の方位は北に対して約21°西に振る。

出土遺物としては土師器が少量ある（第131図43～46）。43～45はいずれも外面にタタキ調整のみられる甕である。口縁部の形状等に違いがある。46は高杯脚部である。

⑤竪穴式住居跡ＳＨ06（第127図下）　調査区の西端で検出した。西辺の大半は調査区外に延びるが、３つの角と各辺を検出した。住居の規模は南北長が4.6m、東西長が4.2mである。深さは25cm程度である。幅20～50cm、深さ５～10cmの周壁溝が全周するが、部分的に２条みられる



第 126 図　竪穴式住居跡 S H 02・04・05 実測図



第127図　竪穴式住居跡ＳＨ03・06実測図

ことから、建て替えなどの可能性もある。主柱穴は検出されなかった。東辺と西辺の中央付近に貯蔵穴を検出した。住居の方位は北に対して約18°西に振る。

出土遺物としては土師器がある（第131図31～42）。31・32は小型丸底土器である。32は口縁部が開くので、鉢とすべきかもしれない。33は小型の壺の口縁部である。34は形状から壺の口縁部と考えられる。35・36は直口壺の口縁部と考えられる。37は口縁端部のつまみ上げが弱いものの、庄内式甕に近い特徴を有する。38は在地系の甕と思われる。口縁部が短く、全体に厚手の作りである。外面にハケ調整を施し、体部中央に焼成後の穿孔が１つある。39・40はミニチュアの土師器である。41・42は高杯脚部である。

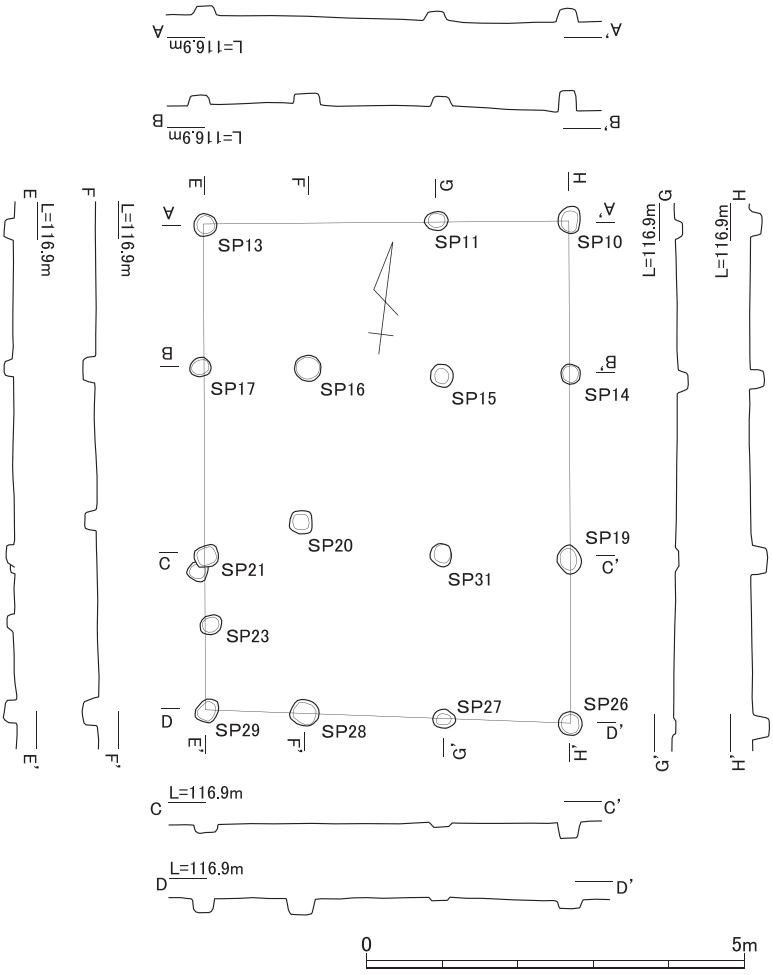
⑥竪穴式住居跡ＳＨ35

調査区の南西隅で検出した。住居の北東角のみで、周壁溝と土師器甕２点（第131図50・51）を検出した。周壁溝は幅15～20cm、深さ20cm前後である。出土した甕のうち、50は単純な「く」字状を呈する口縁部に、やや球形に近い体部を有し、外面にタタキ調整の後にハケ調整を施す。内面は一部にヘラケズリ調整がみられるものの、基本的にハケ調整である。51は口縁端部内面が肥厚し、外面にハケ調整、内面にヘラ

ケズリ調整を施す典型的な布留式甕である。両者は同一地点で折り重なるように出土したことから、弥生系の甕と布留式甕の確実な共伴例ということができる。

⑦溝ＳＤ33　調査区の西半部、竪穴式住居跡ＳＨ03とＳＨ06の間で検出した。検出長10.3m、幅0.7m、深さ５～10cmを測る。溝の方位は北に対して約22°西に振り、竪穴式住居跡ＳＨ03やＳＨ06とおおむね同方位である。出土遺物はないが、竪穴式住居跡と同一方位であることから同時期の溝と考えられる。

⑧その他の遺物　竪穴式住居跡ＳＨ02の上面で検出した新しい時期の溝の埋土から出土した土師器片がある（第131図52・53）。52は小型器台、53は小型丸底土器の口縁部である。



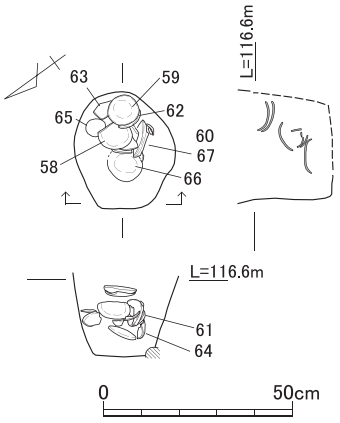
第128図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図

（筒井崇史）

（２）中世の遺構

中世の遺構としては掘立柱建物跡１棟のほか柱穴が数基ある。

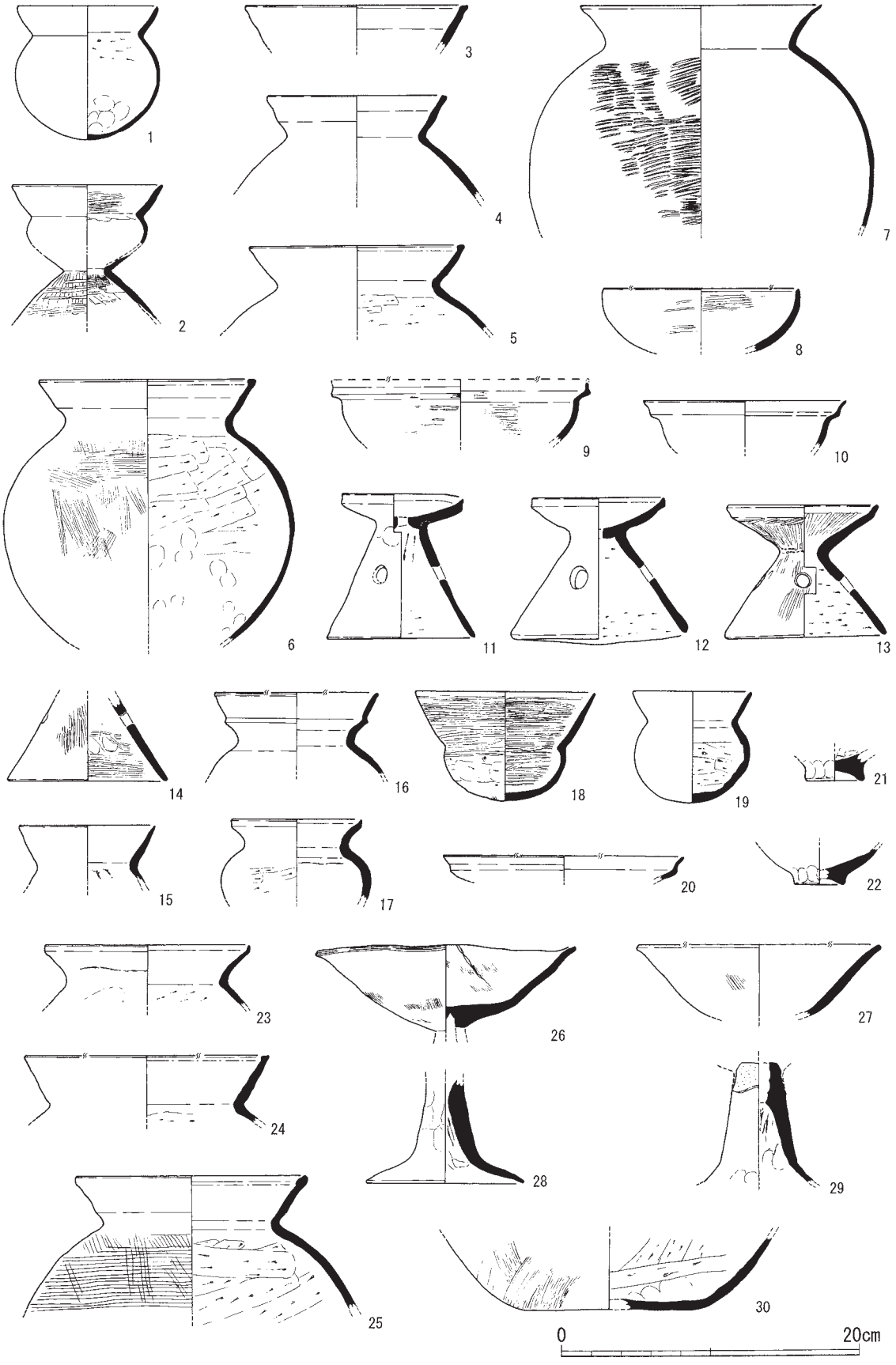
①掘立柱建物跡ＳＢ01（第128図）　調査区の西半で検出した。南北３間（約6.7m）、東西３間（約4.8m）の総柱の建物である。柱列の並びや間隔は不揃いであるが、１棟の建物と考えた。柱穴の直径は30cm前後のものが多い。建物の方位は北に対して約７°西に振る。



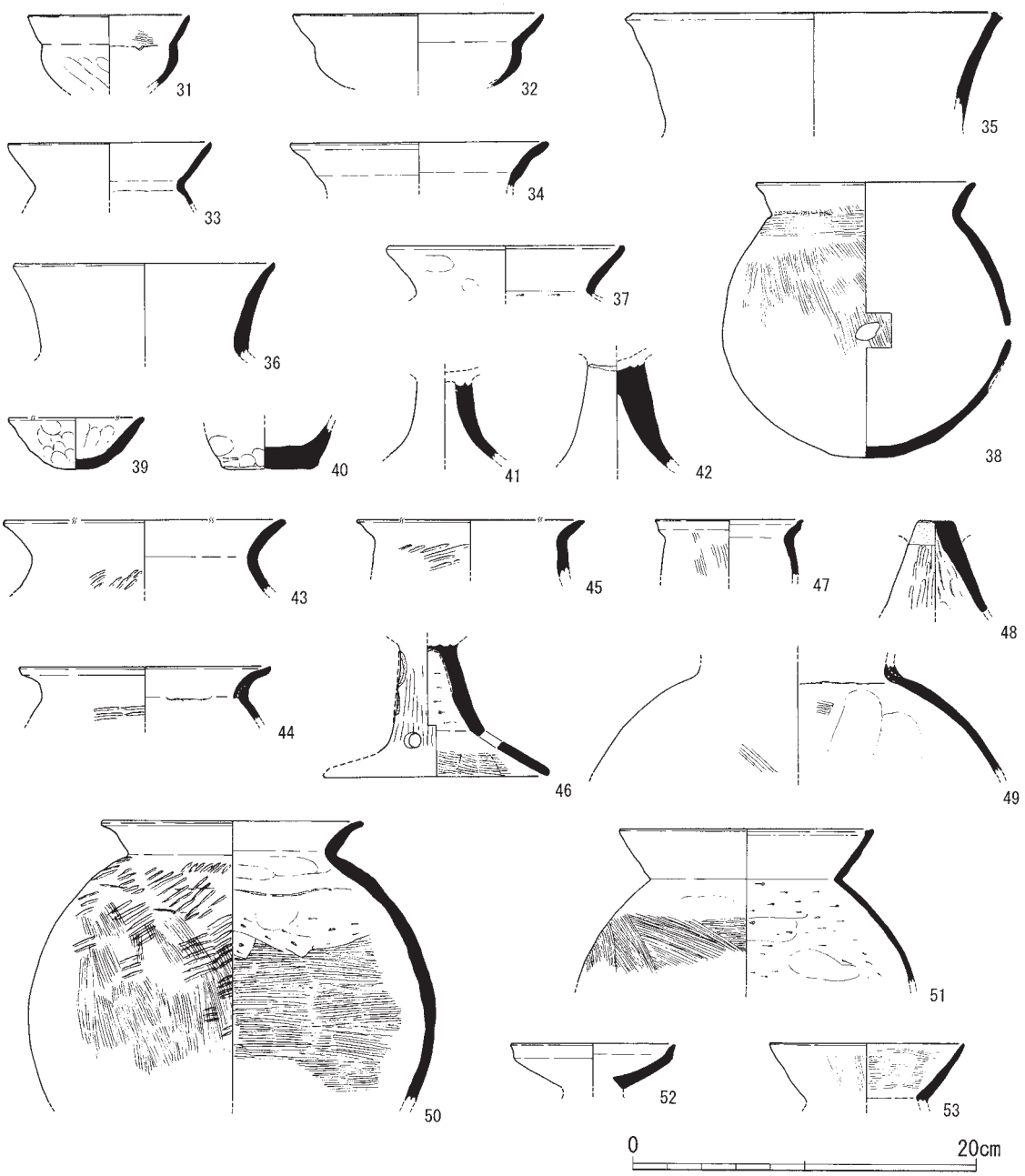
第129図　柱穴ＳＰ30遺物出土状況図

出土遺物としては土師器や国産陶器などがある（第132図54～57）。54～56は土師器皿である。口縁端部が直立気味で外端面を面取りするものである。柱穴ＳＰ28から出土した。57は東海系陶器鉢である。柱穴ＳＰ10から出土した。

②柱穴ＳＰ30（第129図）　調査区の中央南寄り、掘立柱建物跡ＳＢ01の南東約２mのところで検出した。平面形はやや楕円形を呈し、直径25～30cm、深さ20cmを測る。柱穴内からは瓦器椀



第 130 図　C 1 地区出土遺物実測図（1）



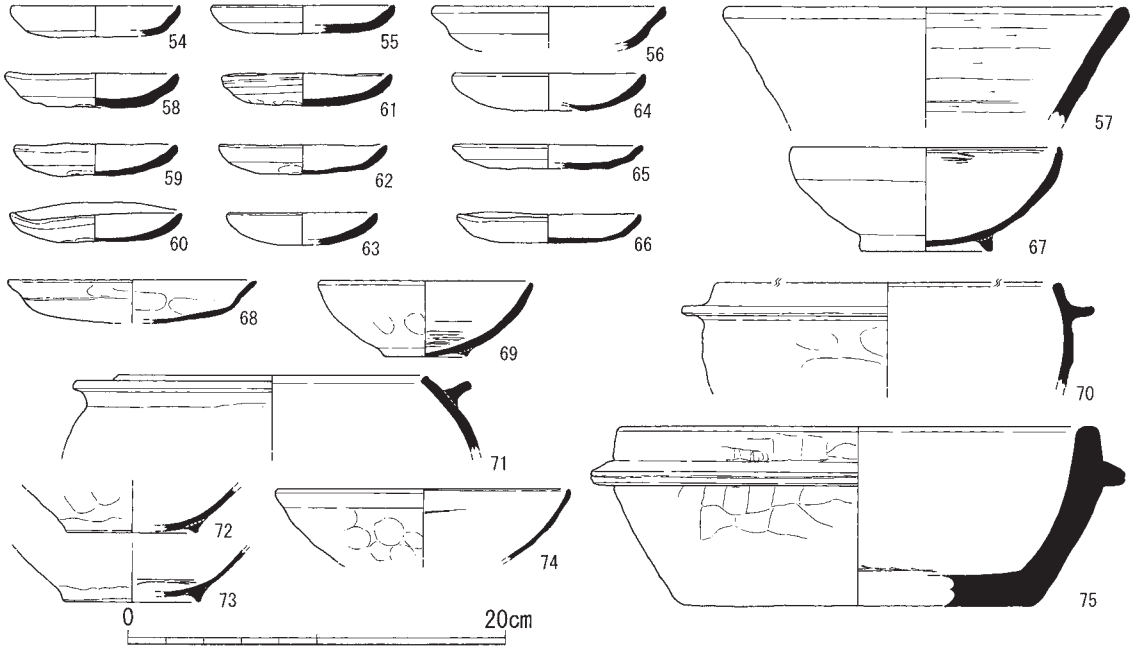
第131図　C１地区出土遺物実測図（２）

１点、土師器皿９点が重ねられたような状態で出土した（第132図58～67）。58～66は土師器皿である。口縁端部を面取りするものと面取りがやや崩れたものがある。67は丹波型瓦器椀である。口縁端部内面に沈線がめぐらされる。

③柱穴ＳＰ32　出土遺物としては土師器や瓦器がある（第132図68～71）。68は土師器皿である。薄手で口縁部が外反する。69は丹波型瓦器椀である。内面に隙間の空いた圏線ミガキが施される。70・71は瓦質土器羽釜である。

④土坑ＳＫ07　72～74は丹波型瓦器椀である。75は滑石製石鍋である。

（筒井崇史・森島康雄）



第132図　Ｃ１地区出土遺物実測図（３）

29. 22トレンチの調査

Ｃ１地区とＣ２地区を結ぶ用水路部分に設定したトレンチである。対象地内に畦畔が存在することから、南北２つのトレンチに分けた。Ｃ２地区で検出した竪穴式住居跡ＳＨ01の北東隅部分や溝、土坑などを検出した（第133図）。

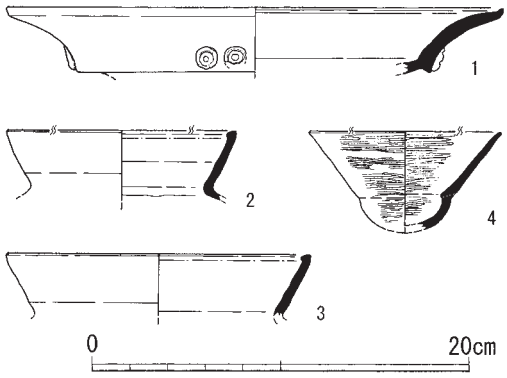
①竪穴式住居跡ＳＨ01　南トレンチの南端部で検出した。Ｃ２地区で検出した竪穴式住居跡ＳＨ01の北東隅部分に当たる。幅約0.4m、深さ５～10cmの周壁溝がめぐる。遺物は住居の床面や埋土から土師器が出土した（第134図１～４）。１は二重口縁壺の口縁部で、外面に２個１対の円形竹管文を貼り付ける。口縁端部はややつまみ上げ気味である。２・３は布留式甕の口縁部である。口縁端部内面が肥厚する。４は小型丸底土器である。非常に小さな体部と、大きく開く口縁部とからなる。内外面とも密にヘラミガキ調整を施す。

②土坑ＳＫ01　北トレンチの北端で検出した。東西約１m、南北約0.4m、深さ約20cmの楕円形を呈する。

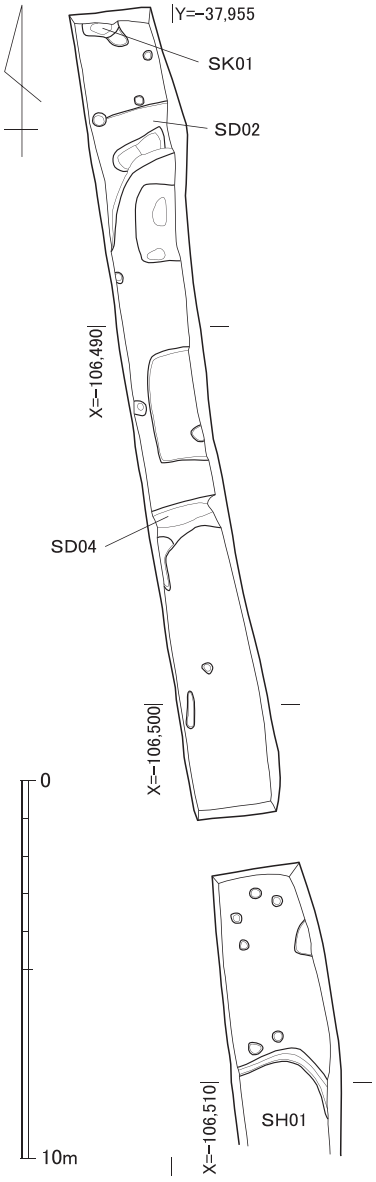
③溝ＳＤ02　北トレンチの北半部で検出した。幅約1.6m、深さ約0.3mを測る東西方向の溝と思われる。

④溝ＳＤ04　北トレンチの南半部で検出した。幅約0.8m、深さ約0.4mを測る。東西方向の溝である。

（村田和弘・筒井崇史）



第134図　22トレンチ出土遺物実測図



第133図　22トレンチ
検出遺構配置図（1/200）

30. Ｃ２地区の調査

Ｃ１地区の南約30mに設定した調査区である。調査区の東端では床土除去後に地山を確認することができたが、西に向かって黒褐色粘質土（黒ボク層）が厚く堆積していた。この上面で中世の遺構を検出した。黒褐色粘質土を除去すると、飛鳥時代ならびに古墳時代の遺構を検出した（第135図）。

（１）古墳時代の遺構・遺物

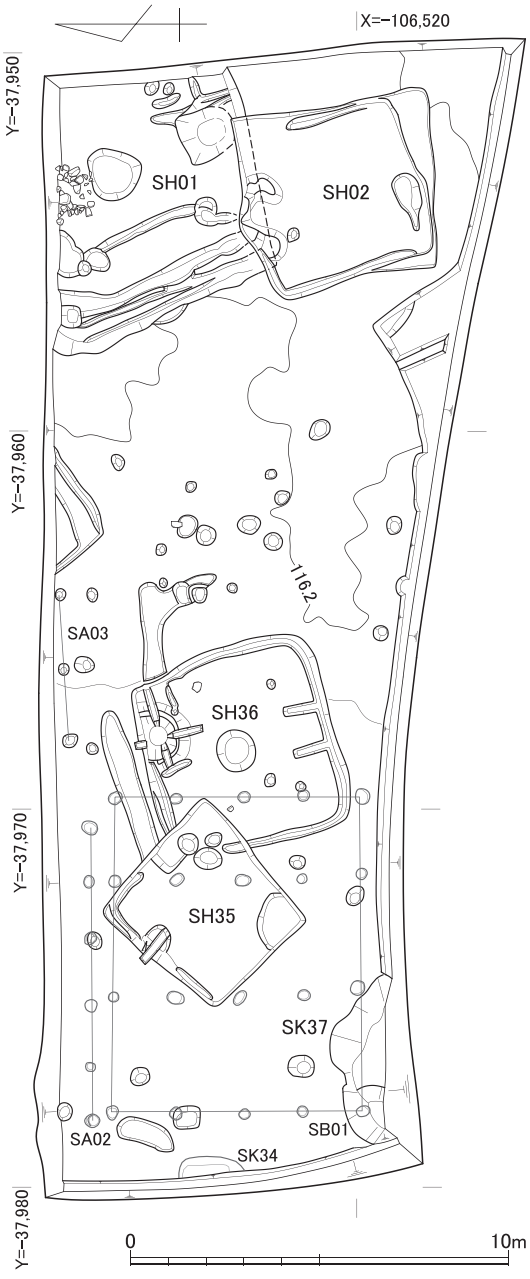
古墳時代の遺構として竪穴式住居跡２基、土坑１基がある。出土遺物から、いずれも古墳時代前期の遺構である。

①竪穴式住居跡ＳＨ01（第136図上）　調査区の北東部で検出した。住居の南辺は後述する飛鳥時代の竪穴式住居跡ＳＨ02と重複しており、東辺は調査区外に位置する。西辺はＣ２地区内で検出したが、北辺については用水路部分に設定した22トレンチにおいて検出した。住居の平面形は方形で、南北長8.0m、東西長7.6m、深さ40cm余りを測る。住居南辺付近で貯蔵穴を確認した。一辺1.4m、深さ約40cmを測る。住居の中央部でも貯蔵穴または炉跡と思われる落ち込みを検出した。直径1.4m、深さ約20cmを測る。主柱穴は４基確認した。柱穴の平面形は円形を呈し、直径30～50cm、深さ15～20cmを測る。西辺の周壁溝は３条ほど認められることから、住居の建て替えがあったと考えられるが、土層観察を含めて詳細は明らかにできなかった。

遺物としては埋土や床面直上から土師器や土製品が比較的多数出土した（第140図１～16）。１・２は小型丸底土器である。１は内外面ともヘラミガキ調整を密に施す。胎土も精良である。２は磨滅が著しいものの、１と同様にヘラミガキ調整をやや密に施した個体と思われる。３は大型の壺の口縁部である。口縁部はわずかに内傾すると考えられる。４～９は甕の口縁部の破片である。口縁部の形状は多様であるが、小破片が多く、いずれを主体とするのか不明である。４・７は口縁端部をつまみ上げ気味にし、８は口縁端部内面が肥厚する。９は複合口縁形態を採る。10・11

は高杯の杯部である。10は内外面ともヘラミガキ調整を密に施す。12・13は壺の底部と思われるが、12は器壁が厚く詳細は不明である。13は直径2.5cmほどの小さな底部を有する壺の底部である。14はてづくねの小型の土器、15は土錘である。16は壺の頸部から肩部にかけての破片である。頸部には突帯がみられる。突帯と肩部に線刻による文様(綾杉文・直線文)が認められる。

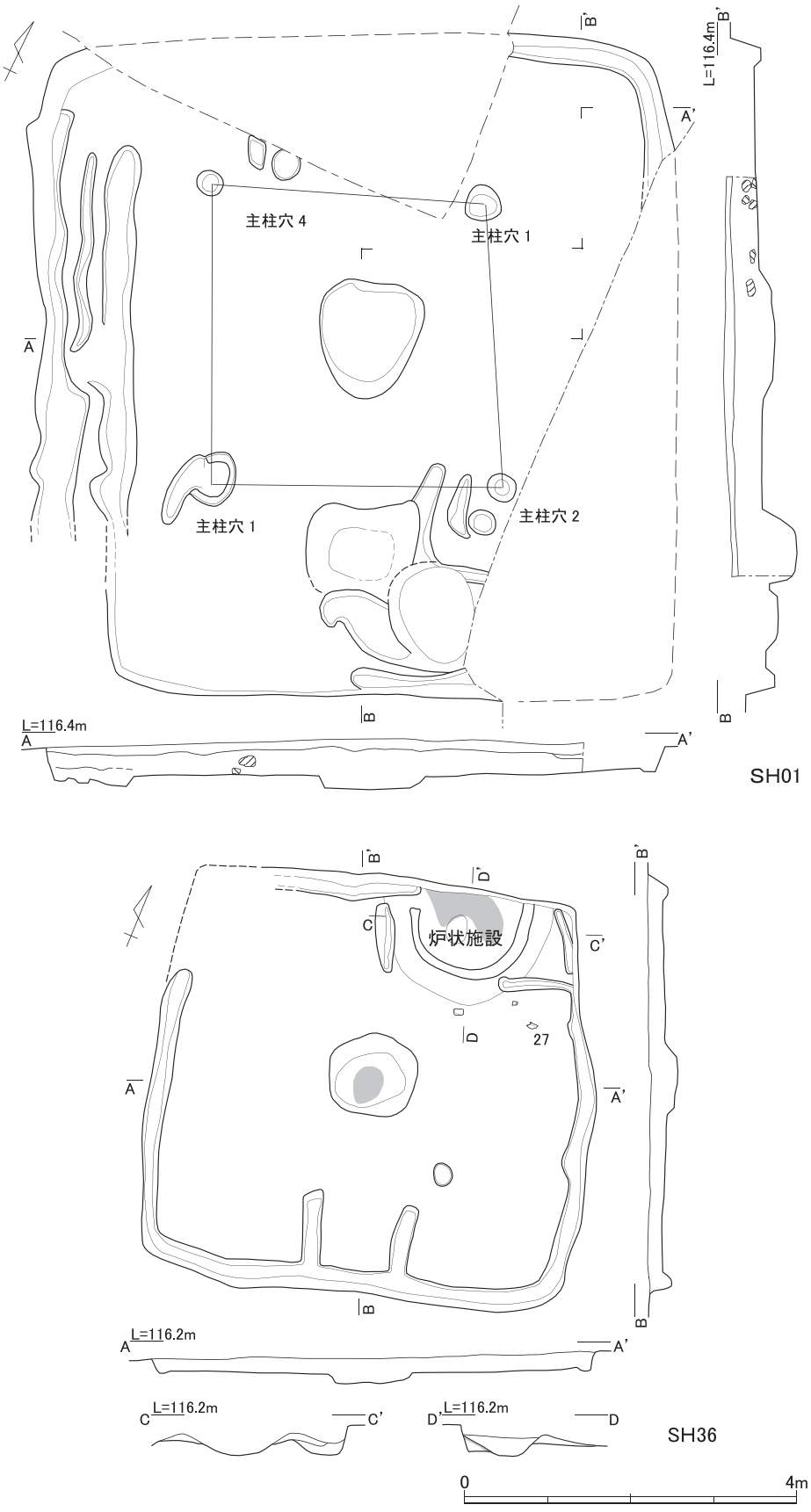
②竪穴式住居跡ＳＨ36（第136図下）　調査区の中央部、やや西寄りで検出した。住居の北西角が後述する飛鳥時代の竪穴式住居跡ＳＨ35と重複する。平面形は方形で、一辺4.9～5.1m、深さ約20cmを測る。主柱穴は２基確認した。本来は４基と推定され、北側の２基については確認することができなかった。いずれも平面形は円形を呈し、直径25cm前後、深さ10～20cmを測る、やや小規模なものである。幅25cm前後、深さ７～８cm程度の周壁溝が後述する炉状施設を除いて全周する。南辺では周壁溝から直交して延びる溝を２条検出した。用途は不明である。床面中央に直径1.0m、深さ15cm程度の土坑を検出した。土坑の底面がわずかに赤変していたことから炉跡と考えられる。また北辺のやや東寄りで、土手状の高まりが半円形にめぐる遺構を検出した。詳細は不明であるが、これも炉状の施設と考えられる。ただしカマドではない。



第135図　Ｃ２地区検出遺構配置図（1/200）

出土遺物としては土師器がある（第140図17～27）。17～19は小型丸底土器である。17は内外面ともヘラミガキ調整を密に施す。18は磨滅気味であるがヘラミガキ調整の痕跡がみられる。底部外面にはヘラケズリ調整を施すようである。19は内外面ともナデ調整である。20は有段口縁の鉢である。21は口縁部内外面ともヘラミガキ調整を施し、頸部が中空であることから小型器台と考えられる。22は壺または甕の底部である。23～27は甕である。口縁端部をつまみ上げ気味のもの（25・26）と口縁端部内面が肥厚気味のもの（23・27）がある。前者は庄内式の、後者は布留式の甕の特徴を示すが、前者においても体部外面の調整がハケ調整であることから布留式段階のものと考えられる。

③土坑ＳＫ37　調査区の南西隅で検出した。遺構の半分ほどが調査区外に広がるが、平面形は不整形な円形状を呈するようである。長軸4.5



第 136 図　竪穴式住居跡 S H 01・36 実測図

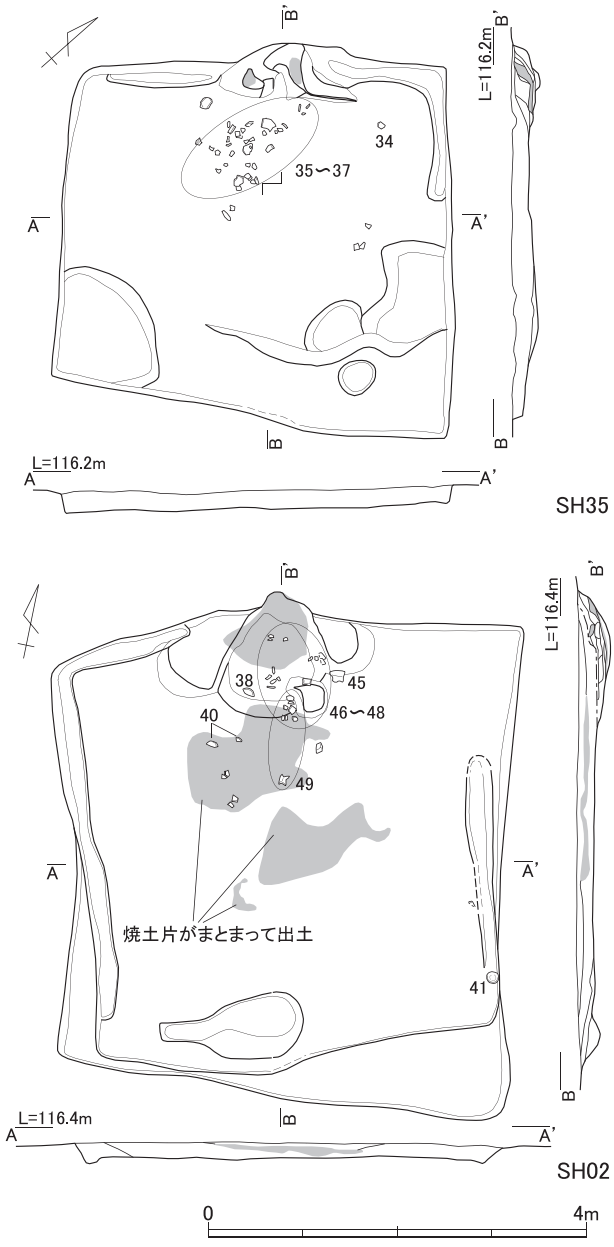
m、深さ約50cmを測る。

出土遺物としては土師器片がある（第140図28～31）。28は口縁端部をつまみ上げ気味の甕である。29は上半部が剝離して失われているものの、広口壺または器台の口縁部の下垂部である。外面に刺突文が認められる。30は壺の底部と考えられる。31は壺の口縁部と推定される破片である。

（2）飛鳥時代の遺構・遺物

飛鳥時代の遺構として竪穴式住居跡２基を検出した。

①竪穴式住居跡ＳＨ35（第137図上）　調査区の西半部で検出した。平面形は住居の東角が東へやや突出する歪な方形である。一辺3.9m、深さ約20mを測る。住居の底面は凹凸が著しいことから、貼床が存在したと考えられるが、土層観察等で確認することはできなかった。また周壁溝は部分的に検出したのみである。主柱穴も明確に確認することはできなかった。住居の方位は北に対して約48°西に振る。北西辺の中央にカマドを伴う。

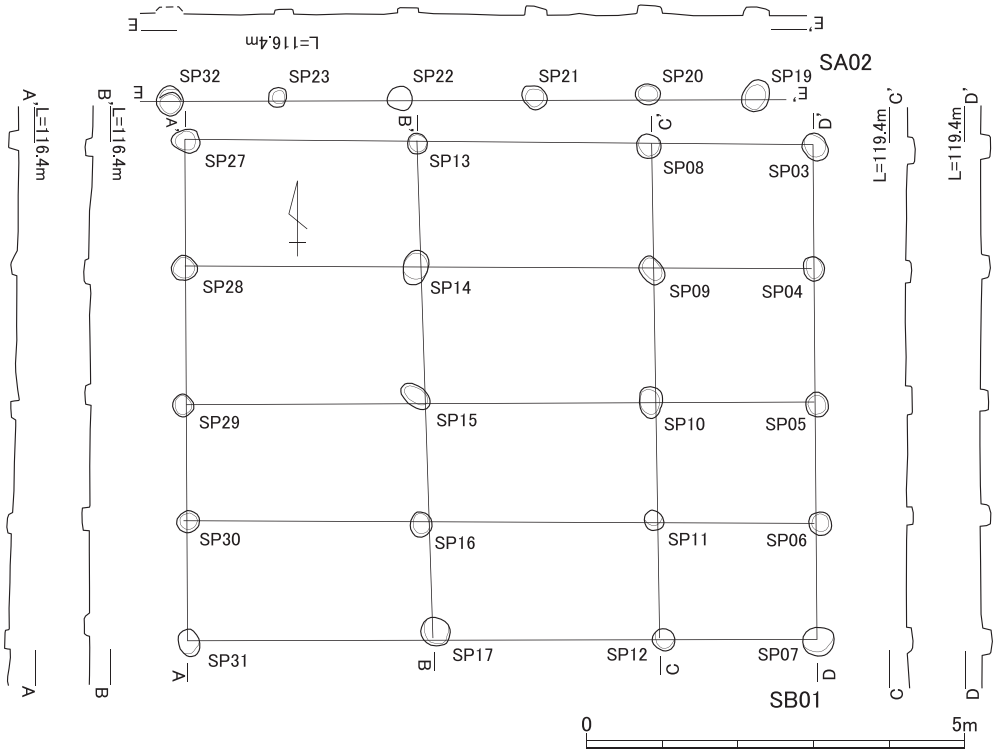


第137図　竪穴式住居跡ＳＨ02・35実測図

出土遺物として須恵器や土師器などがある（第140図32～37）。32・33は須恵器杯Ｈ蓋である。34は土師器杯である。磨滅気味であるがナデ調整で仕上げる。暗文が施されていないことから在地産の杯であろう。35～37は土師器甕である。いずれも口縁端部はつまみ上げであるが、器壁の厚さなどに若干の違いが見られる。32・33から飛鳥時代前半から中頃に位置づけられる。

②竪穴式住居跡ＳＨ02（第137図下）　調査区の東半部で検出した。平面形は方形であるが、やや歪な形状を呈する。一辺4.3～5.0m、深さ約20cmを測る。竪穴式住居跡ＳＨ35と同じく、床面や主柱穴を明確に確認することはできなかった。また周壁溝も断続的にめぐる。住居の方位は北に対して約12°西に振る。北辺の中央にカマドを伴う。

出土遺物としては須恵器や土師器がある（第141図38～49）。また鉄器が１点出土している（第139図57）。38～42は須恵



第138図　掘立柱建物跡ＳＢ01・柵ＳＡ02実測図

器である。38・39は杯Ｂ蓋である。38は内面にかえりを有する。40は杯Ａ、41は杯Ｂ、42はやや大型の杯の口縁部である。43～49は土師器である。43は土師器杯Ａである。内面に放射状の暗文がみられる。44～49は甕である。ＳＨ35出土土師器甕にくらべると、いずれも口縁端部に面を持つ。47と48は胎土や色調から同一個体と考えられ、47・48のような長胴の甕が一定量存在すると思われる。これに対して、49は体部が球形に近く、把手を備える甕である。57は長頸鏃の頸部と思われる破片である。38・40・43がこの住居のおおよその時期を示していると考えられ、飛鳥時代後半から奈良時代の初めに位置づけられる。

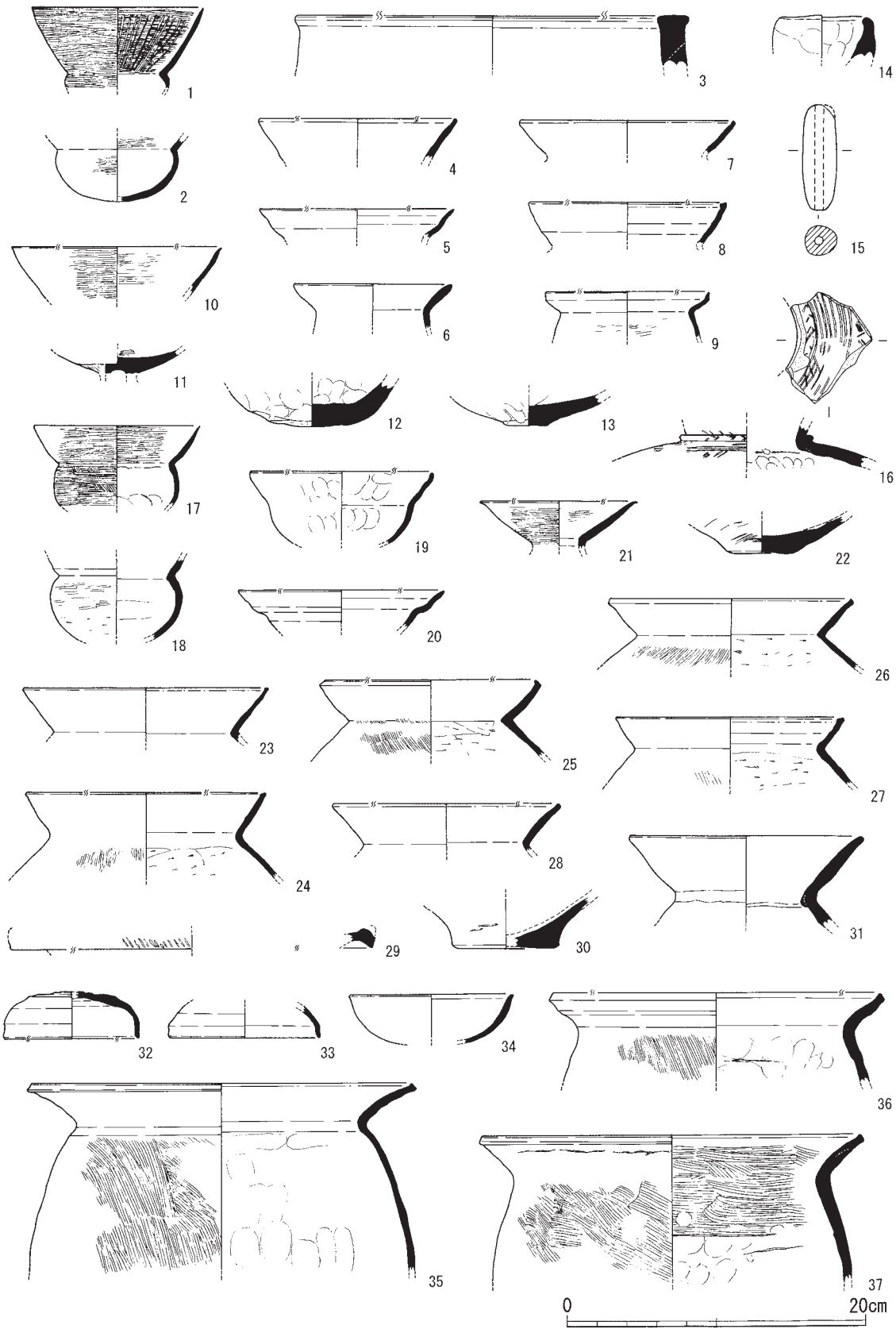
（３）中世の遺構・遺物

中世の遺構としては、掘立柱建物跡１棟・柵２条などを検出した。いずれの遺構も出土遺物が少なく、時期については推測によるものが多い。

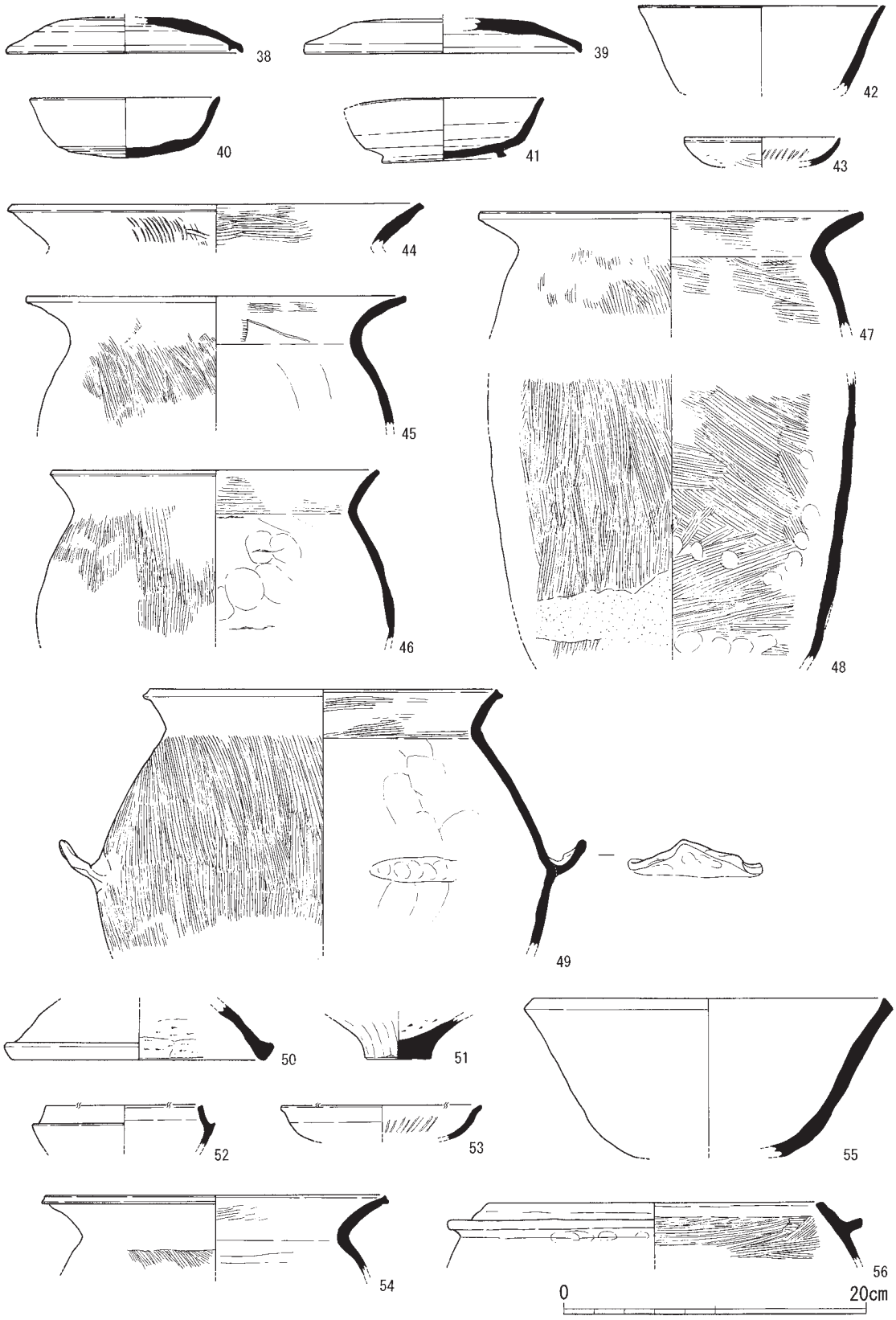
①掘立柱建物跡ＳＢ01（第138図）　調査区の西半部で検出した。桁行４間（約6.5m）、梁行２間（約5.7m）の総柱の建物で、東側に庇を有する。柱穴の直径は30～40cmのものが多い。建物の方位は北に対して約１°西に振る。柱穴内からの出土遺物はほとんどないが、遺構埋土がＣ１地区で検出した掘立柱建物跡ＳＢ01に類似することから、中世の遺構と判断した。

②柵ＳＡ02　掘立柱建物跡ＳＢ01の北側で検出した。直線上にならぶ６基の柱穴からなる。ＳＢ01の北妻柱列に接して検出したことから、ＳＢ01に伴うものではなく、別の時期のものである可能性が高い。ただし、柱穴からの出土遺物はなく、詳細は不明である。

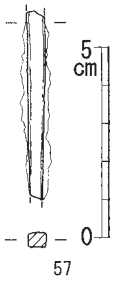
③柵ＳＡ03　調査区の中央、北辺寄りで検出した。直線上にならぶ柱穴３基を検出したが、北側に展開する掘立柱建物跡の南妻柱列の可能性もある。時期については柱穴からの出土遺物は



第 139 図　Ｃ２地区出土遺物実測図（１）



第140図　C２地区出土遺物実測図（２）



第141図　C２地区出土遺物実測図（３）

なく不明である。

④土坑ＳＫ34　調査区に西辺に接して検出した。大半が調査区外に延びる。長軸0.9m、深さ約10cmである。出土遺物は少ないが、磨滅した須恵器鉢を図示した（第141図55）。

（４）包含層出土遺物

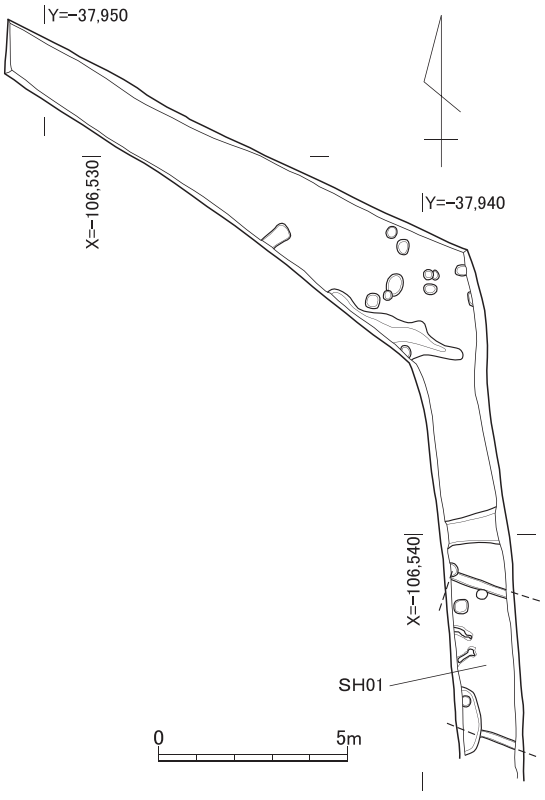
包含層から出土した遺物として、弥生土器・須恵器・土師器などがある（第141図50～54・56）。50は弥生時代中期の高杯の脚部である。内面にヘラケズリ調整を施す。51は土師器の壺の底部である。外面にはヘラミガキ調整もしくは丁寧なナデ調整を施す。52は古墳時代の須恵器杯である。口縁端部に面を持つ。53は奈良時代の土師器皿で、内面に放射状暗文を施す。54も同時期の土師器甕である。56は瓦質土器羽釜の口縁部である。

（筒井崇史）

31．24・25トレンチの調査

Ｃ２地区とＣ３地区を結ぶ用水路部分に設定したトレンチである。24トレンチでは、東半部で柱穴や不定形な土坑などを検出した。また、25トレンチでは、南半部で竪穴式住居跡や柱穴などを検出した（第142図）。

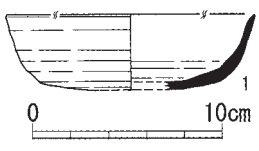
①竪穴式住居ＳＨ01　25トレンチの南半部で検出した。住居の北辺と南辺の一部を検出した。東辺と西辺は調査区外に広がる。北辺と南辺が直線状を呈することから、住居の平面形は方形と考えられる。一辺は約3.7mに復原できる。調査区西壁に重複してカマドを検出した。おそらく西辺の中央付近にカマドを有していたのであろう。蔵垣内遺跡で検出したカマドを持つ住居のうち、明らかに住居の西辺にカマドを有するものは本住居のみである。住居の方位は西に対して約20°北に振る。出土遺物として土師器があるが、図示できなかった。住居の時期は、カマドを有することや土師器片から飛鳥時代のものと考えられる。



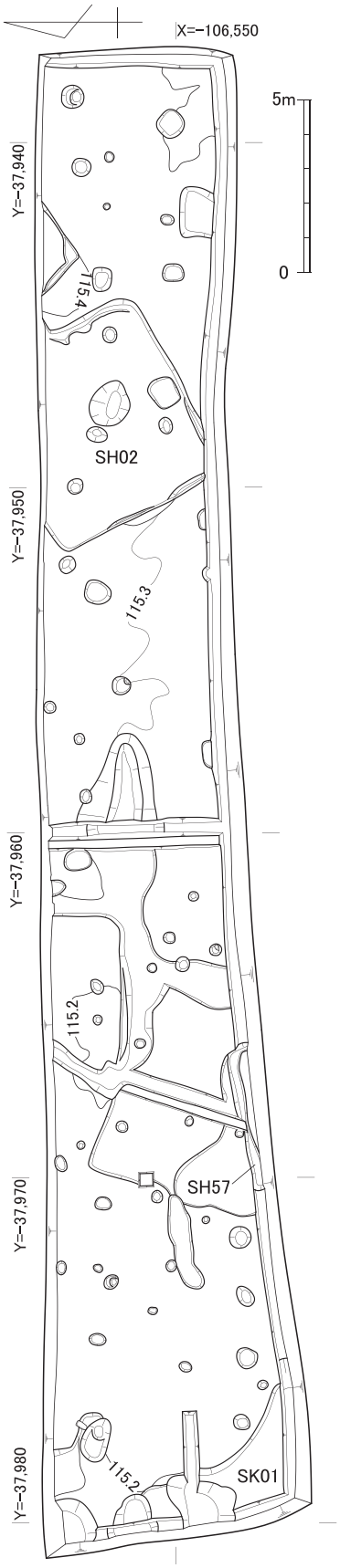
第142図　24･25トレンチ検出遺構配置図（1/200）

②包含層出土遺物　包含層出土遺物として須恵器杯Ａを図示した（第143図１）。

（村田和弘・筒井崇史）



第143図　25トレンチ出土遺物実測図



第144図 C３地区
検出遺構配置図（1/200）

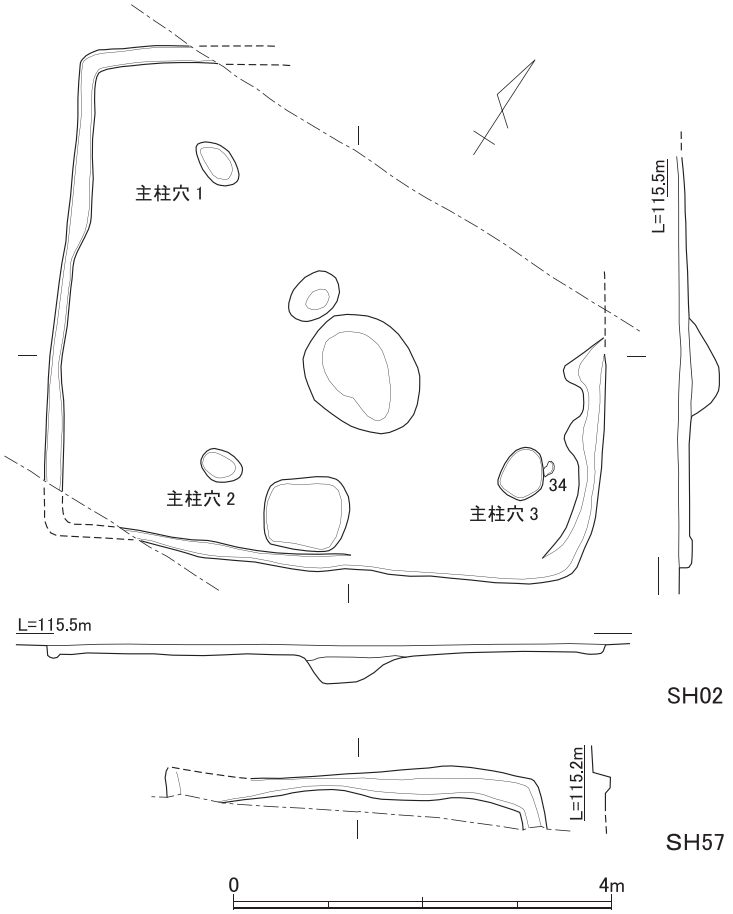
32. C３地区の調査

C２地区の南約20mに設定した調査区である。床土を除去するとおおむね地山面で、西半部に部分的に黒褐色粘質土（黒ボク層）がみられた。調査の結果、古墳時代や奈良時代の遺構を検出した（第144図）。

（１）古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構として竪穴式住居跡１基を検出した。ほかに時期不明の竪穴式住居跡が１基あり、合わせて報告する。

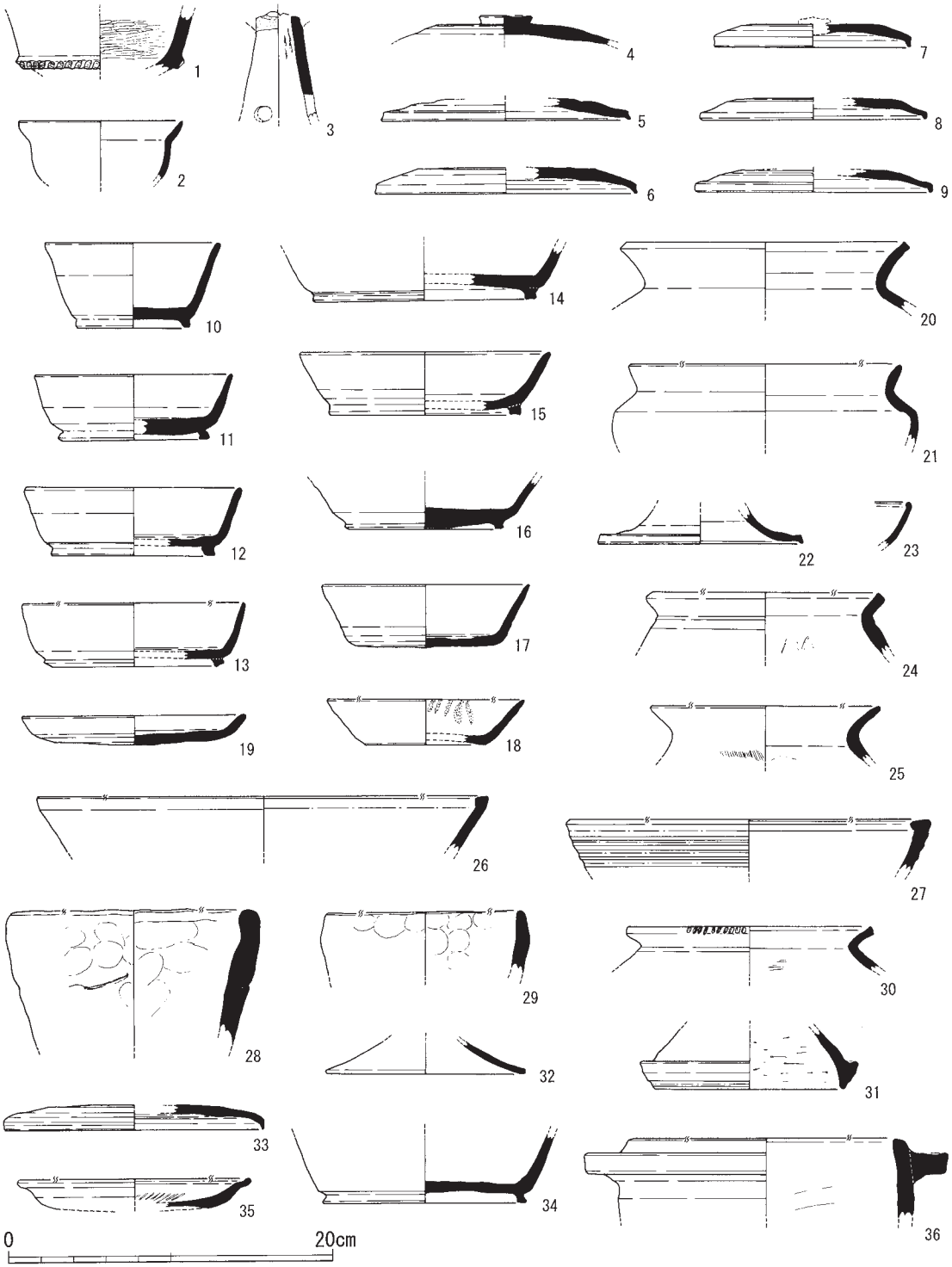
①竪穴式住居跡ＳＨ02（第145図上） 調査区の東半部で検出した。北辺と東辺の一部が調査区外に延びる。一辺5.3～5.8m、深さ約10cmである。床面中央に長軸1.4m、短軸1.1m、深さ約40cmの、やや不整形な土坑がある。主柱穴は４基と推定されるが、そのうち３基を検出した。残る１基は調査区外に位置する。おおむね円形を呈し、直径35～50cm、深さ10cm前後を測る。幅15cm前後、深さ５cm前後の周壁溝が断続的にめぐる。住居の方位は北に対して約29°西に振る。



第145図 竪穴式住居跡ＳＨ02・57実測図

遺物は少なく、土師器が少量出土したのみである（第146図１～３）。１は加飾壺の口縁部と思われる。内面にヘラミガキ調整を施す。外面に刺突を施した突帯がめぐる。２は小型の鉢であろう。３は高杯脚部で、スカシ孔が確認できる。

②竪穴式住居跡ＳＨ57（第145図下）　調査区の南辺、やや西寄りで検出した。住居の北辺のみの検出で、大半は調査区外に広がる。両角を検出しており、一辺4.0m程度の規模の住居と考え



第 146 図　Ｃ３地区出土遺物実測図

られる。幅15～30cm、深さ５cm程度の周壁溝がめぐる。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。古墳時代ないし飛鳥時代の住居である可能性が高い。

（２）奈良時代の遺構・遺物

奈良時代の遺構としては土器を大量に包含していた大型の土坑１基を検出した。また、柱穴を多数検出したが、出土遺物が少なく、時期の明らかなものはほとんどない。これらは建物や柵としてのまとまりは認められなかった。

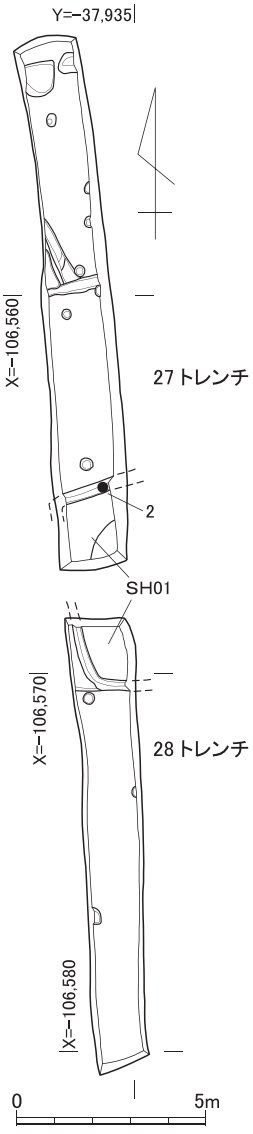
①土坑ＳＫ01　調査区の西端で検出した。土坑の西半部は調査区外に延びるため、平面形等は不明である。南側で少し東へ広がる。また、底面も一定ではなく、複数の土坑が切り合うような状況である。深さは20～50cmである。遺物は多数出土した。なお、遺構の性格については不明であるが、現在の水田の畦畔とほぼ一致して大型の土坑から奈良時代の土器が大量に出土するものとして、後述するＣ７地区の土坑ＳＫ02・14などがある。

出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器などがある（第146図４～25・28・29）。４～22は須恵器である。４～９は杯Ｂ蓋である。基本的には口縁端部が下方に屈曲し、天井部が笠形を呈する。10～16は杯Ｂである。器壁の厚手な個体が多いが、高台は古い特徴を有する。17・18は杯Ａである。18は火襷が明瞭に残る。19は皿Ａと考えられる。20は甕である。21は鉢Ｄである。22は高杯脚端部である。23～25は土師器である。23は杯Ａと考えられる小破片である。24・25は甕である。28・29は製塩土器である。また、混入品として弥生時代中期の土器片がある（26・27）。ともに鉢の口縁部と考えられる。27は外面に凹線文を４条ほど施す。

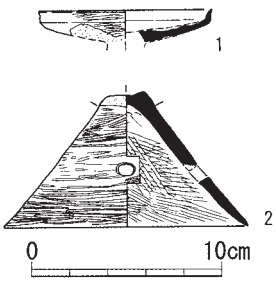
（３）包含層出土の遺物

遺物包含層や遺構面の精査中にそれほど多くないが、弥生時代中期から中世にかけての遺物が出土している。30・31は弥生時代中期の土器である。30は甕の口縁部で、口縁端部外面に刺突文がある。31は高杯の脚部で、内面にヘラケズリ調整を施す。32は古墳時代と思われる土師器の高杯脚部の破片である。33～35は奈良時代の土器で、33は須恵器杯Ｂ蓋である。34は須恵器杯Ｂである。35は土師器皿Ａで、内面に放射状暗文が認められる。なお、34・35は竪穴式住居跡ＳＨ02の上面で出土した。36は中世の羽釜と思われる。

（筒井崇史）



第147図　27・28トレンチ検出遺構配置図



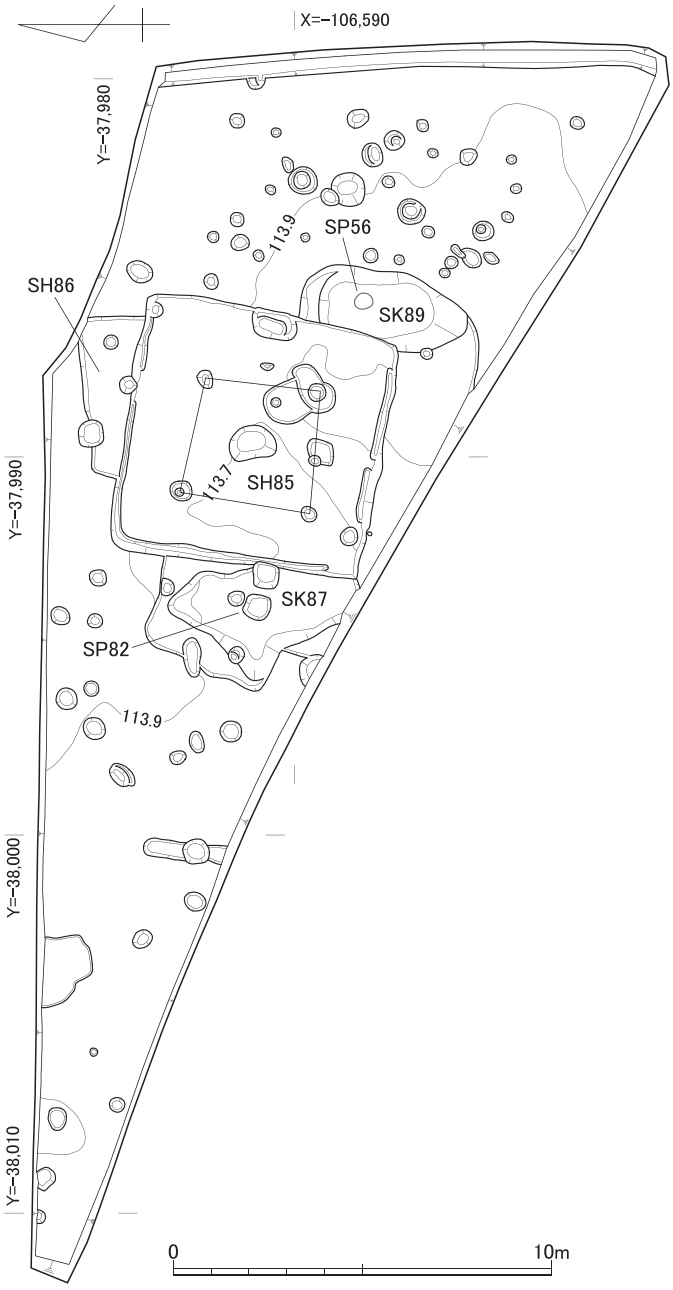
第148図　27トレンチ出土遺物実測図

33. 27・28トレンチの調査

Ｃ３地区から南に延びる用水路部分に設定したトレンチである。北側に位置する27トレンチでは、土坑や柱穴などを検出した。また、27トレンチと28トレンチにまたがって竪穴式住居跡１基を検出した（第147図）。

①竪穴式住居跡ＳＨ01　27トレンチと28トレンチにまたがって検出した。北辺と南西隅の周壁溝を検出し、一辺５ｍ程度の住居と推定される。主柱穴は調査範囲が狭いため、検出できていない。住居の方位は北に対して約11°西に振る。北辺の周溝から土師器小型器台の脚部、埋土から土師器小型器台の受部が出土した（第148図１・２）。１は小型器台の受部で、器表面の剝離が著しいものの、ヘラミガキ調整を施していることが確認できる。２は小型器台の脚部で、外面にヘラミガキ調整、内面にハケ調整を施す。スカシ孔を４方向に穿つ。

（村田和弘・筒井崇史）



第149図　Ｃ４地区検出遺構配置図（1/200）

34. Ｃ４地区の調査

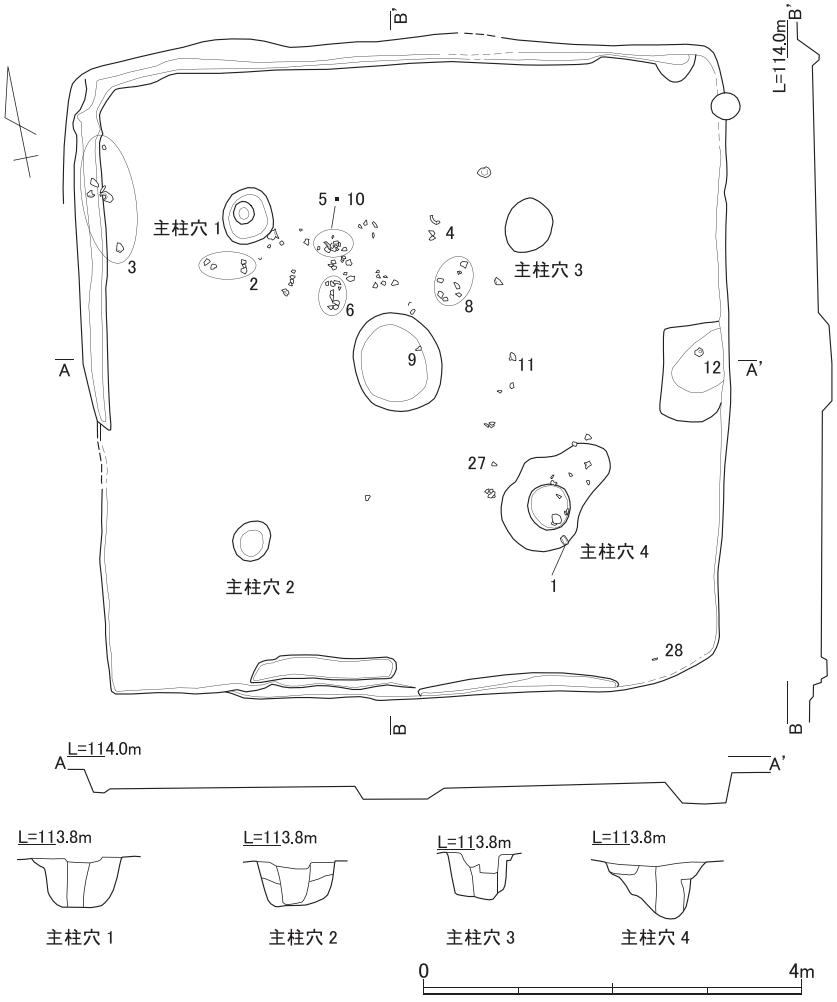
Ｃ３地区の南西約30ｍに設定した調査区である。表土・床土を除去すると、おおむね地山面となる。検出した遺構としては、竪穴式住居跡や土坑、柱穴などがあるが、明確に時期がわかるものは少ない（第149図）。

（１）古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構として竪穴式住居跡１基がある。

①竪穴式住居跡ＳＨ85（第150図）　調査区のほぼ中央で検出した。いくつかの遺構が重複していたが、全容を明らかにすることができた。なお、ＳＨ85がこれら重

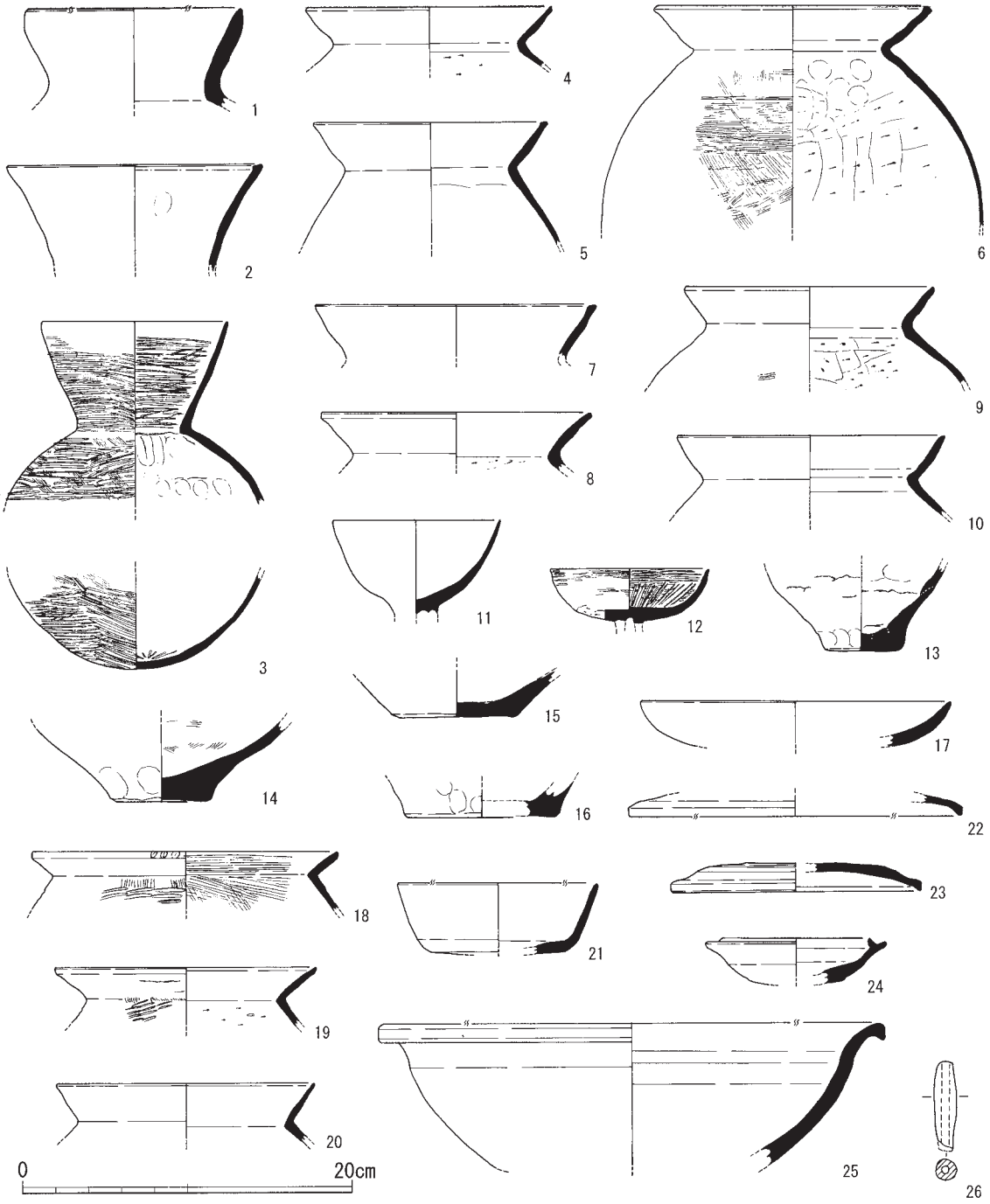
複する遺構では最も新しい。平面形は方形で、一辺6.8m、深さ15cm前後を測る。主柱穴は４本確認した。いずれも直径65～80cm、深さ50～60cmほどの掘形に、直径25cm前後の柱痕が確認できた。周壁溝は幅20cm前後、深さ10cmほどであるが、全周はしない。床面中央に長軸1.1m、短軸0.9m、深さ15cmほどの不整形な楕円形を呈する土坑を検出した。東辺中央でも長辺1.0m、短辺0.7m、深さ20cmほどを測る長方形を呈する土坑を検出した。住居の方位は北に対して約11°東に振る。



第150図　竪穴式住居跡ＳＨ85実測図

遺物は床面から多数出土した。また東辺に接する土坑からも椀形高杯の杯部(12)が出土した。

出土遺物としては、土師器のほか、鉄器がある(第151図１～13、第152図27・28)。１はやや厚手の直口壺である。２は口縁端部内面が肥厚する直口壺である。３は直接接合しないものの、胎土や色調から同一個体と判断した直口壺である。丸底の底部に、球形の体部を持ち、ほぼ斜め上方にまっすぐのびる口縁部を有する。口縁部内外面、体部外面に細かいヘラミガキ調整を密に施す。底部のヘラミガキ調整は５分割で施されている。４～10は甕である。口縁端部の形状はつまみ上げ気味のもの、面をなすもの、丸くおさめるものなど、多様である。６は口縁端部をややつまみ上げながらも外傾する面を持つ。体部は球形を呈すると考えられ、外面にハケ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。11・12はともに高杯の杯部である。11はやや深手の椀形を呈する。12は杯部の内外面にヘラミガキ調整を施す。杯底部外面にはヘラケズリ調整を施す。13は小型の壺もしくは鉢の底部である。内外面に接合痕がみられ、やや粗雑な作りである。27・28は鉄器である。27は住居埋土から出土したので、住居に伴うものとは限らない。腸抉を有する三角形鏃である。28は住居の南東隅から若干浮いた状態で出土した。鉄鏃もしくは刀子の茎と思われる。なお、



第151図　C４地区出土遺物実測図（１）

14・15は器形から弥生時代中期の壺または甕の底部片と思われる。混入であろう。

（２）その他の時期の遺構・遺物

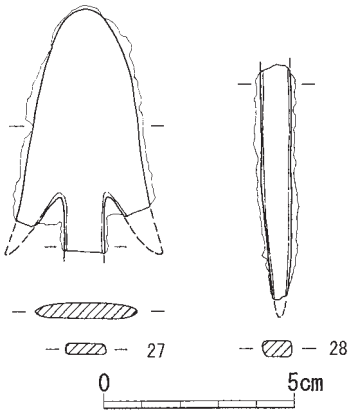
ここでは、竪穴式住居跡ＳＨ85以外の遺構・遺物について報告する。

①竪穴式住居跡ＳＨ86　調査区の中央、北寄りで検出した。竪穴式住居跡ＳＨ85と重複し、ＳＨ86の方が古い。大半はＳＨ85によって削平されているが、北辺で4.1m、深さ約５cmを測る。周壁溝は確認できなかった。出土遺物がなく、時期は不明であるが、周辺で検出されている竪穴式住居跡などの状況から古墳時代のものである可能性が高い。

②柱穴ＳＰ56　調査区の東半部、土坑ＳＫ89の上面で検出した。平面形はほぼ円形である。柱穴内から須恵器杯Ａ（第151図21）が出土した。

③柱穴ＳＰ82　調査区の中央部、土坑ＳＫ87の上面で検出した。平面形は隅丸方形で、一辺75cm前後、深さ約25cmを測る。柱穴内から土師器皿（第151図17）が出土した。

④土坑ＳＫ87　調査区のほぼ中央で検出した。平面形は不整形で、竪穴式住居跡ＳＨ85と重複する。検出状況からＳＫ87の方が古い。長軸4.9m、短軸1.7m、深さ30cmを測る。土坑内から弥生時代中期の壺または甕の底部片（第151図16）が出土した。



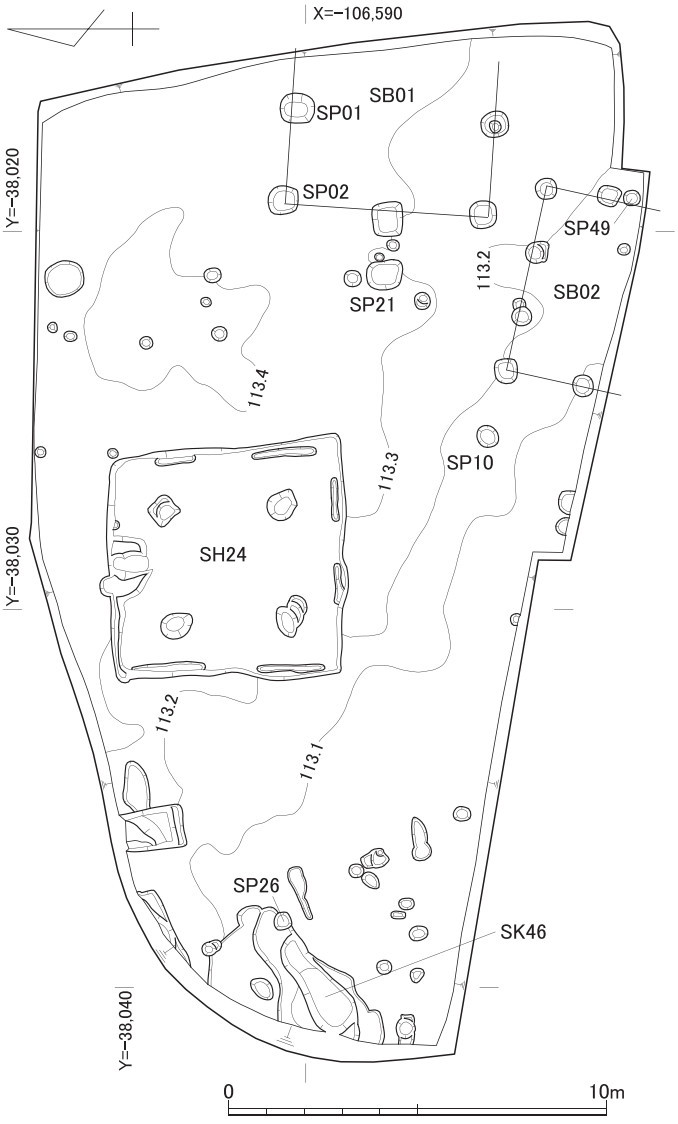
第152図　Ｃ４地区出土遺物実測図（２）

⑤土坑ＳＫ89　調査区の東半部で検出した。平面形は不整形な楕円形を呈し、竪穴式住居跡ＳＨ85と重複する。検出状況からＳＫ89の方が古い。長軸4.7m、短軸1.8m以上、深さ約25cmを測る。出土遺物がなく、時期は不明である。

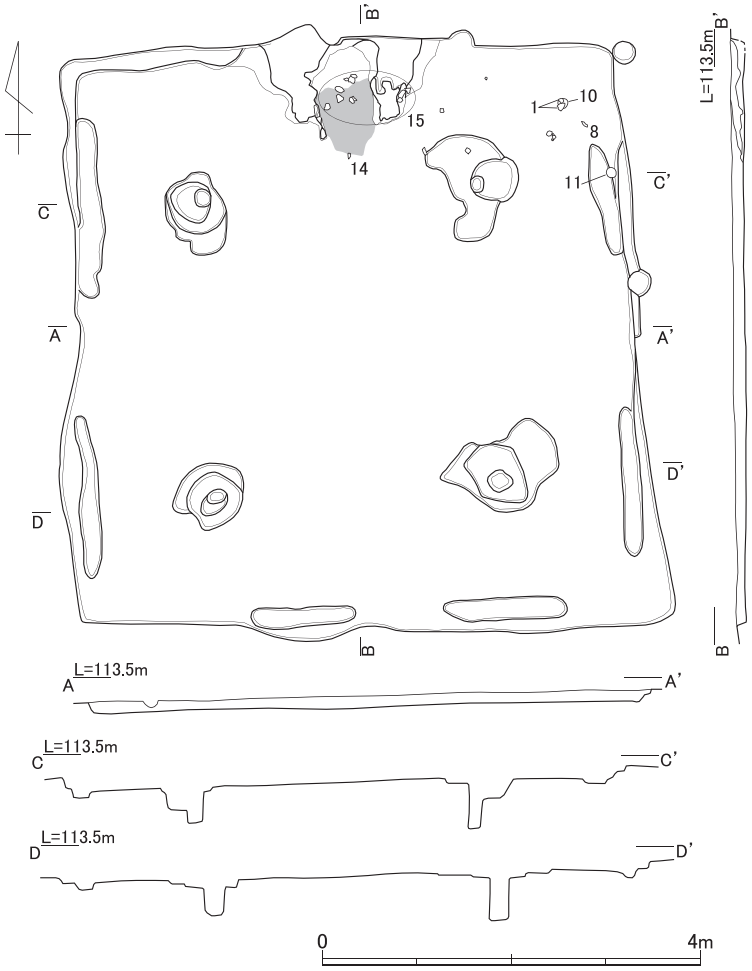
（３）包含層出土遺物

Ｃ４地区では明確な遺物包含層は存在せず、以下に報告するのは遺構面の精査中に出土したものである（第151図18～20・22～26）。18は弥生時代中期の甕である。口縁端部外面に刻み目がある。体部外面にタタキ調整が確認できる。19・20は古墳時代の土師器甕である。19は口縁端部をつまみ上げ気味、20は口縁端部内面がわずかに肥厚する。24は飛鳥時代の須恵器杯Hである。22・23は奈良時代の須恵器杯Ｂ蓋である。25は古墳時代の須恵器の器台である。26は土錘である。

（筒井崇史）



第153図　Ｃ５地区検出遺構配置図（1/200）



第154図　竪穴式住居跡ＳＨ24実測図

35. Ｃ５地区の調査

Ｃ４地区の西側、農道を挟んで設定した調査区である。耕作土や床土を除去すると、東半部ではほぼ地山を確認したが、西半部では黒褐色粘質土（黒ボク層）が堆積していた。この黒褐色粘質土を除去すると、地山上で遺構を検出した。遺構はおおむね飛鳥時代から奈良時代にかけてのものである（第153図）。

（１）飛鳥時代の遺構・遺物

検出した遺構として竪穴式住居跡１基がある。

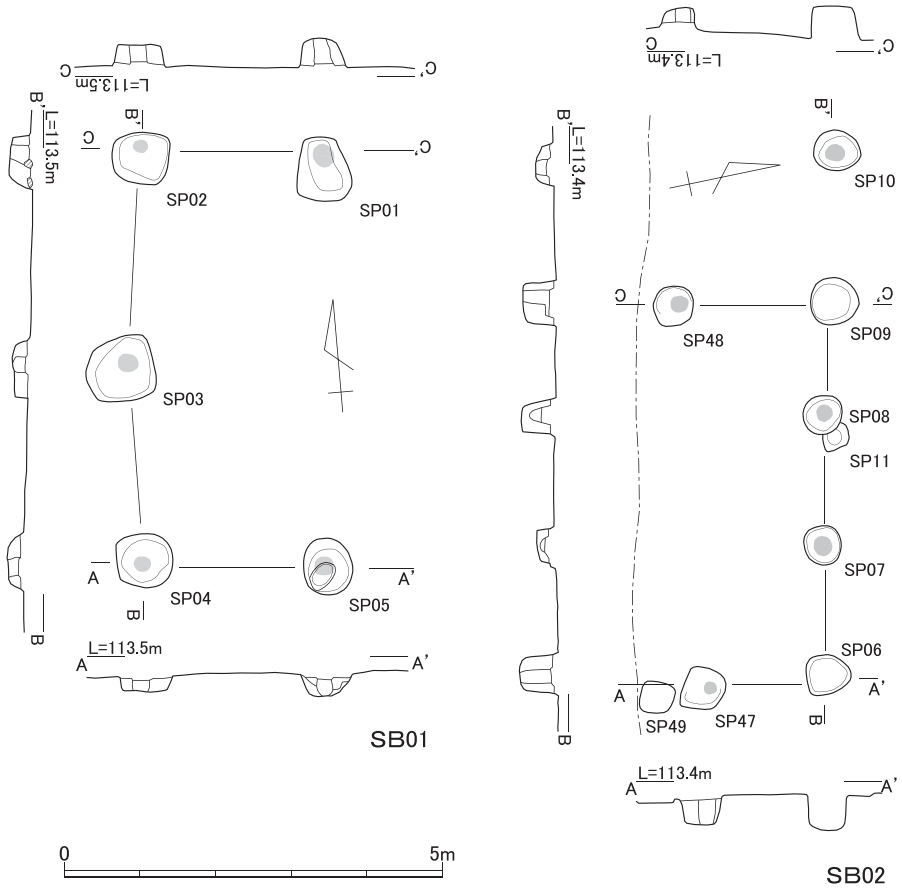
①竪穴式住居跡ＳＨ24（第154図）　調査区のほぼ中央、やや北寄りで検出した。平面形は方形を呈し、一辺6.0m前後、深さ約15cmを測る。幅15～25cm、深さ５～10cmを測る周壁溝が断続的にめぐる。主柱穴は４基確認した。直径50～60cmのやや不整形な円形を呈し、深さ40～50cmを測る。北辺の中央にカマドを有する。遺物はカマドの周辺からやや多く出土した。住居の方位はほぼ南北方向である。

出土遺物として須恵器や土師器などのほか、紡錘車がある（第156図、第157図１～19）。１～６は須恵器杯Ｈ蓋である。口径は10～11.8cmで、天井部はいずれもヘラキリ後ナデもしくは不調整である。７～11は須恵器杯Ｈである。口径は10.3～11.6cmで、底部はヘラキリ後ナデ、もしくは不調整である。12は土師器杯で、外面にヘラケズリ調整を施す。13・14は土師器甕である。14は口縁部内面にナデ調整の痕跡を明瞭に残す「青野型」甕である。15は土師器鍋である。16・17は土師器の甕または鍋の把手である。18・19は土錘である。１～12は飛鳥時代中頃に位置づけられる。紡錘車はＳＨ24の北西部埋土から出土した。滑石製で、直径3.0cm、残存高1.0cmを測る。

（２）奈良時代の遺構・遺物

検出した遺構として掘立柱建物跡２棟のほか、土坑や柱穴などがある。

①掘立柱建物跡ＳＢ01（第155図左）　調査区の東辺で検出した。桁行１間以上（1.9m以上）、梁行２間（約4.4m）の東西方向の建物と考えられる。建物の東半部は調査区外に延びる。確認した柱穴は５基で、いずれも一辺60cm前後の隅丸方形を呈する。直径15～25cmの柱痕を確認した。

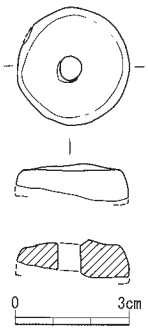


第155図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02実測図

深さは15～30cmを測る。

柱穴から須恵器や製塩土器が出土した（第157図20～22）。20は柱穴ＳＰ１の柱痕から出土した須恵器杯、21はＳＰ１の掘形から出土した須恵器杯Ａである。いずれも小破片である。22はＳＰ２から出土した製塩土器である。

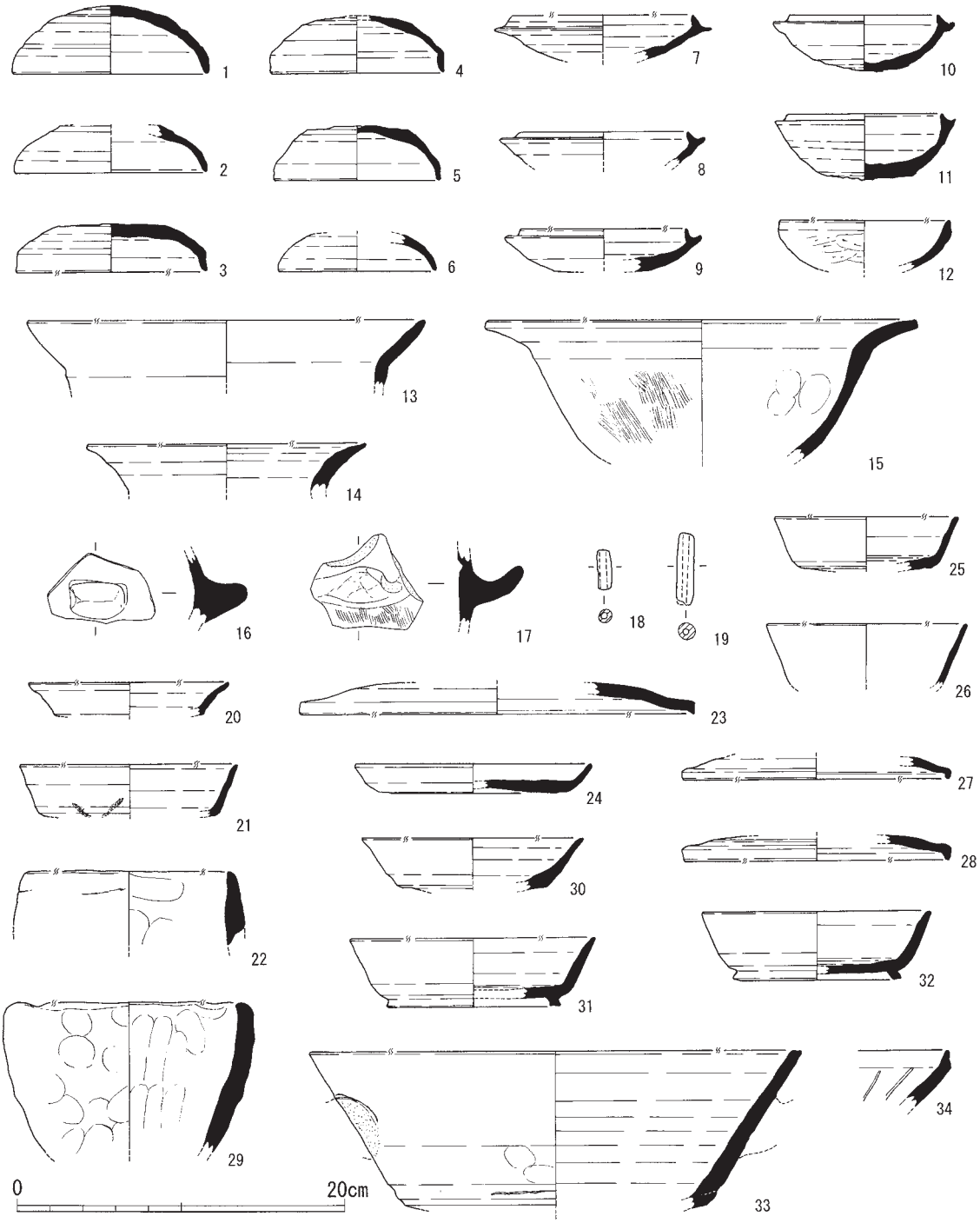
②掘立柱建物跡ＳＢ02（第155図右）　調査区の南辺、東寄りで検出した。桁行３間（約4.0m）、梁行１間以上（1.6m以上）の東西方向の建物と考えられる。建物の南半部は調査区外に延びる。確認した柱穴は６基で、いずれも直径40～50cmの不整形な円形を呈する。深さは35cm程度を測るが、柱穴ＳＰ07のみ非常に浅く、18cm程度である。



第156図　竪穴式住居跡ＳＨ24出土紡錘車実測図

出土遺物としては土器片があるものの、時期を確定することはできなかった。ただ近接する柱穴ＳＰ49から奈良時代の須恵器杯Ａ（第157図25）が出土しており、奈良時代を中心とする時期と考えられる。

③その他の柱穴　Ｃ５地区では上記の建物に復原できた柱穴のほかにも多数の柱穴を検出した。これらは建物や柵としてのまとまりは認められなかった。柱穴出土遺物としては、柱穴ＳＰ10の掘形から須恵器杯Ｂ蓋、皿Ａの破片がある（第157図23・24）。柱穴のＳＰ49の柱痕から須恵器杯Ａの破片が出土した（第157図25）。柱穴ＳＰ26から須恵器杯が出土した（第157図26）。柱穴Ｓ



第157図　Ｃ５地区出土遺物実測図

Ｐ21から須恵器杯Ｂ蓋の破片が出土した（第157図27）。

④**土坑ＳＫ46**　調査区の西端部で検出した。平面形は不整形な長楕円形を呈し、全長2.9m、幅1.0m、深さ約20cmを測る。出土遺物として須恵器杯Ｂ蓋の破片がある（第157図28）。

（３）包含層出土遺物

Ｃ５地区では遺構面の精査中にも遺物が出土した。その一部を包含層出土として報告する（第157図29～34）。29は製塩土器である。30は須恵器杯Ａである。31・32は須恵器杯Ｂである。33は

須恵器盤である。把手の剝離した痕跡がある。34はすり鉢である。内面に２条分のすり目がみられる。

（筒井崇史）

36. Ｃ６地区の調査

Ｃ５地区の西側、農道を挟んで設定した調査区である。耕作土・床土を除去するとほぼ地山となる。地山上で、飛鳥時代や奈良時代の遺構を検出した（第158図）。

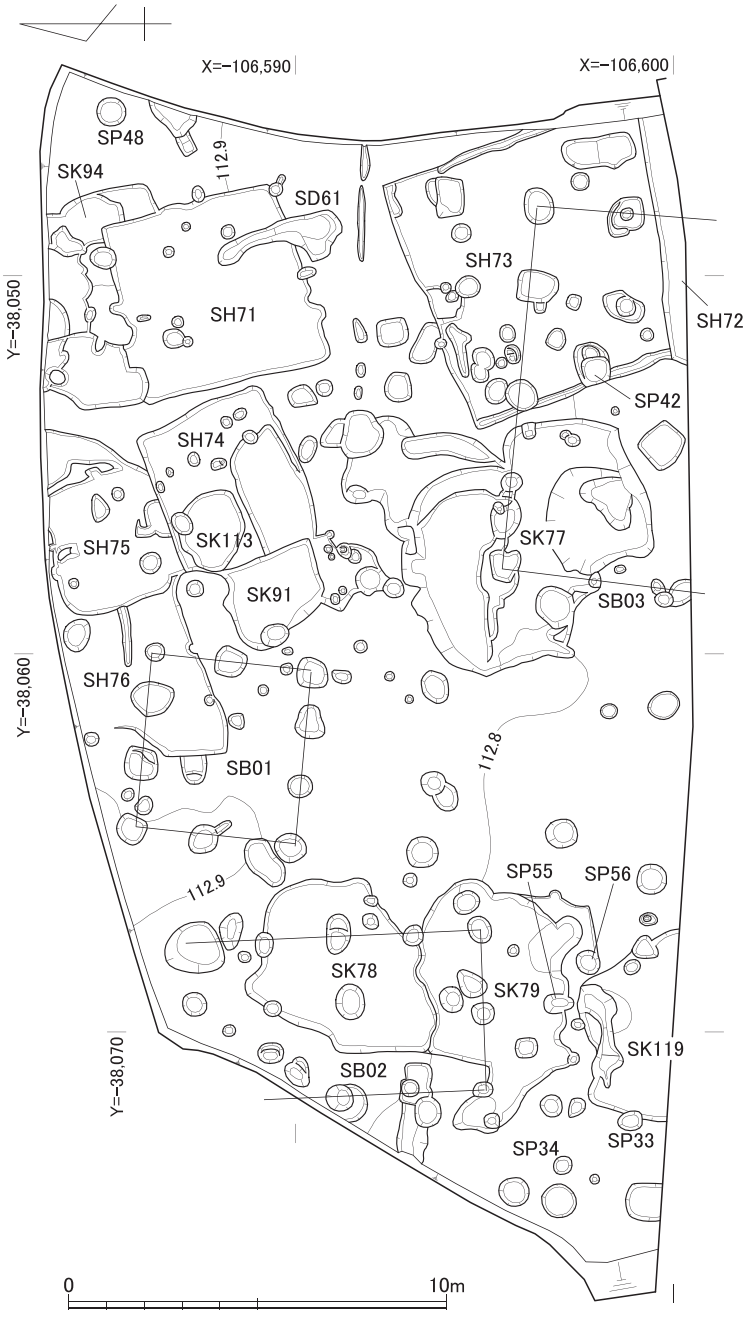
（１）飛鳥時代の遺構・遺物

竪穴式住居跡５基を検出した。

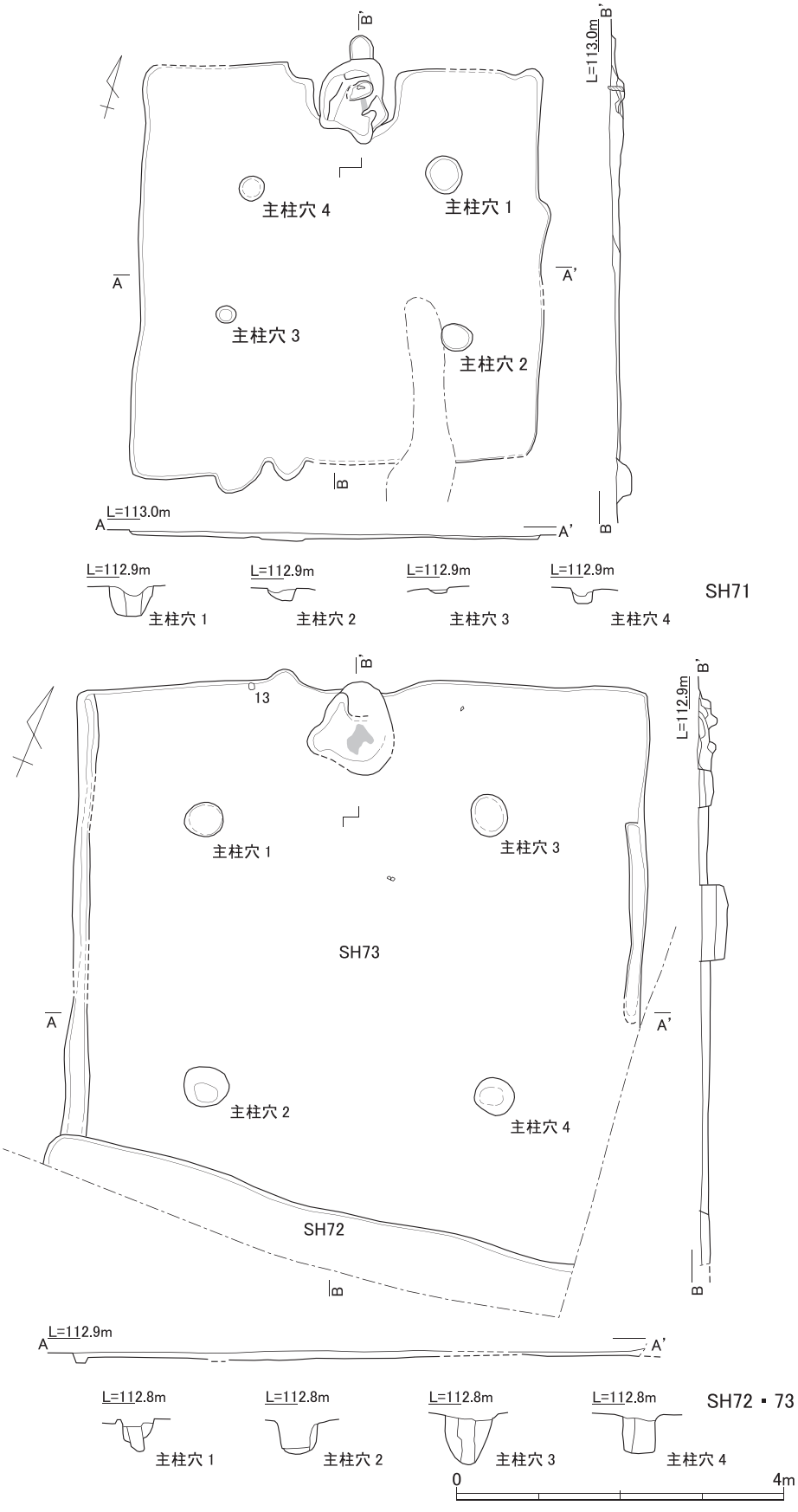
①竪穴式住居跡ＳＨ71（第159図上） 調査区の北東部で検出した。平面形は方形を呈し、一辺4.8～4.9mを測る。検出面から床面まではわずか５cmを測り、遺存状況はよくない。北辺の中央にカマドを有する。住居の方位は北に対して約15°西に振る。

出土遺物としては須恵器・土師器がある（第165図１～５）。１～４は須恵器である。１は杯Ｈ蓋、２は杯Ｇ蓋、３・４は杯Ｈである。１と２は共伴していてもよい資料である。５は土師器鍋または甕の口縁部である。１～４は飛鳥時代前半に位置づけられる。

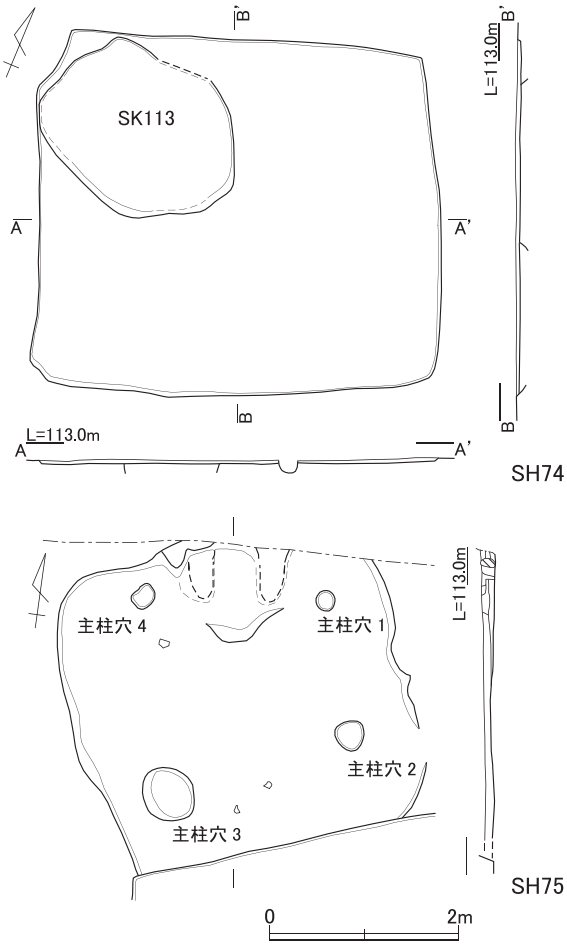
②竪穴式住居跡ＳＨ72（第159図下） 調査区の南辺、東端で検出した。住居の一辺を検出したのみであるが、平面形は方形を呈すると考えられる。また、竪穴式住居跡ＳＨ73と切り合い関



第158図　Ｃ６地区検出遺構配置図（1/200）



第 159 図　竪穴式住居跡 S H 71・72・73 実測図



第160図　竪穴式住居跡ＳＨ74・75実測図

係にあり、ＳＨ72の方が新しい。周壁溝がめぐる。北辺長は6.5m以上、深さ10～15cmを測る。住居の方位は北に対して約８°西に振る。

遺物として北西の周壁溝から土師器甕もしくは鍋の口縁部の破片が出土した（第165図６）。詳細な時期は不明であるが、ＳＨ73との切り合い関係から飛鳥時代中頃以降に位置づけられる。

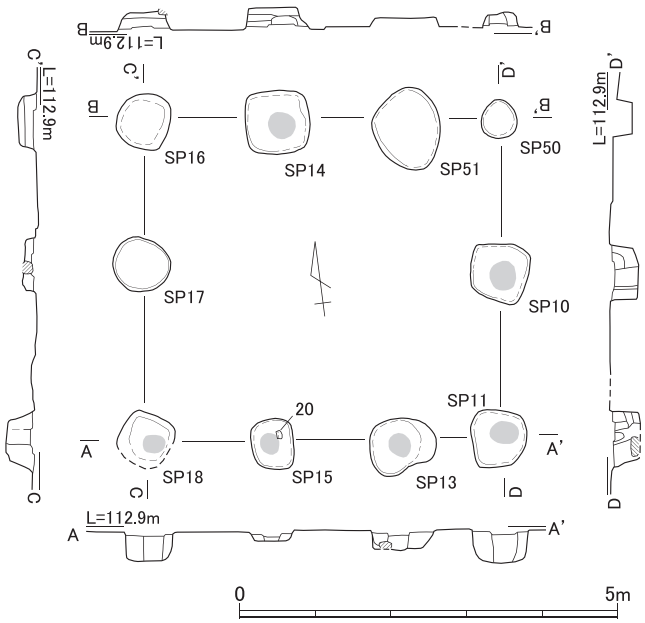
③竪穴式住居跡ＳＨ73（第159図下）　調査区の南東部で検出した。住居の南辺は上述の竪穴式住居跡ＳＨ72によって切られる。平面形は方形を呈し、一辺約6.9m、深さ約10cmを測る。幅20cm前後、深さ５～10cmを測る周壁溝が東辺と西辺において断続的に認められる。主柱穴は４基確認した。平面形はほぼ円形を呈し、直径40～50cm、深さ40～60cmを測る。北辺の中央にカマドを有する。住居の方位は北に対して約22°西に振る。

出土遺物としては須恵器や土師器、土錘などがある（第165図７～13）。７～11は須恵器である。７・８は杯Ｈ蓋、９は杯、10は瑞、11は杯Ｈである。９は口縁部の先端が内方へ屈曲するような形態から、７・８とは異なる器種と判断し、杯として報告する。12は土錘である。13は土師器杯Ｃである。復原口径16.6cmを測る大型品で、口縁部外面にヘラミガキ調整、底部外面にヘラケズリ調整を施す。内面には放射状の暗文を施す。胎土・調整などからいわゆる畿内産土師器と考える。７・８・13から飛鳥時代前半から中頃に位置づけられる。

④竪穴式住居跡ＳＨ74（第160図上）　調査区の中央部北寄りで検出した。平面形はやや東西方向に長い長方形を呈し、一辺3.7ないし4.3mを測る。床面まで深さは非常に浅く、５cm前後である。周壁溝や主柱穴は認められなかった。住居の方位は北に対して約23°西に振る。

⑤竪穴式住居跡ＳＨ75（第160図下）　調査区の北辺中央付近で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺3.6m、深さ約10cmを測る。周壁溝は検出されなかった。主柱穴は４基確認したが、確実にＳＨ75に伴うものとはいえない。北辺の中央にカマドを有する。住居の方位は北に対して約７°西に振る。

出土遺物として須恵器や土師器がある（第165図14・15）。14は須恵器杯Ｈである。15は土師器杯である。上述の13のような畿内産土師器を在地で模倣したものと思われる。14・15は飛鳥時代



第161図　掘立柱建物跡ＳＢ01実測図

前半から中頃に位置づけられる。

⑥竪穴式住居跡ＳＨ76　調査区の北辺中央付近、竪穴式住居跡ＳＨ75の西側で検出した。

出土遺物は少ないが、土師器杯Ｃなどがある（第165図16）。16は内面に放射状の暗文を施す。飛鳥時代後半に位置づけられる。

（２）奈良時代の遺構・遺物

奈良時代の遺構としては、掘立柱建物跡３棟、土坑６基、溝１条などを検出した。

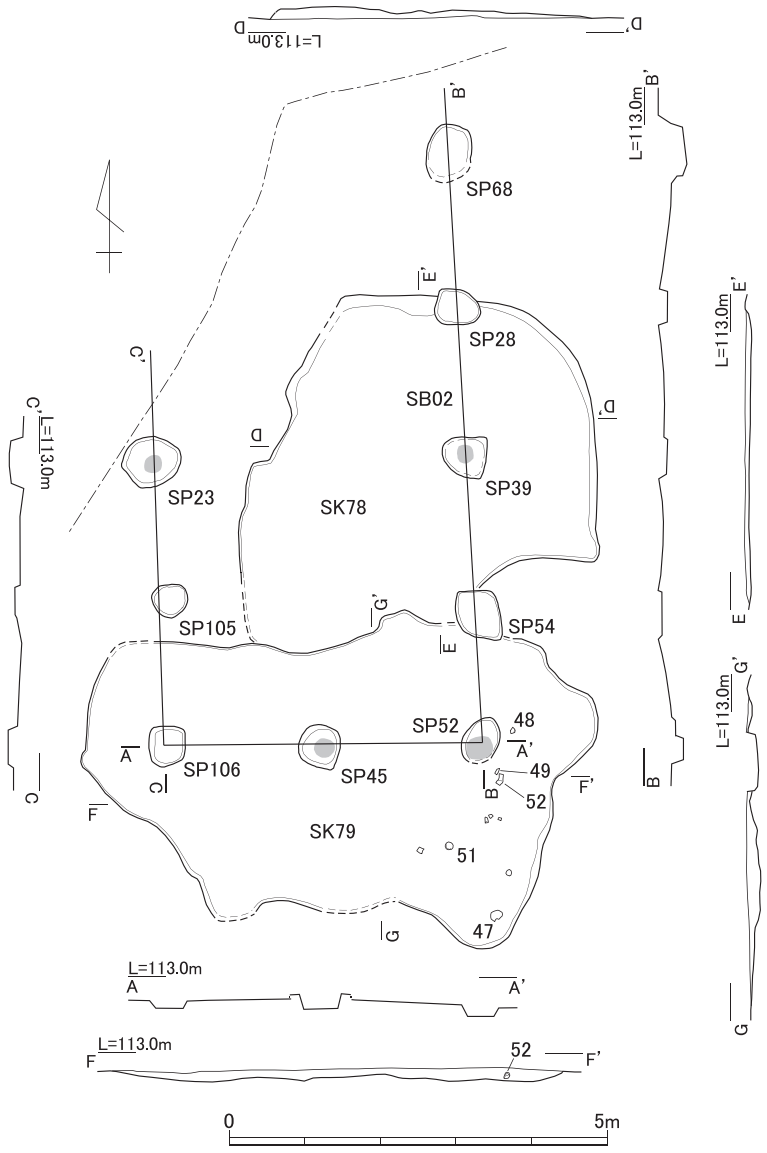
①掘立柱建物跡ＳＢ01（第161図）　調査区の中央部北寄りで検出した。桁行３間（約4.7m）、梁行２間（約4.2m）の東西方向の建物である。柱間は、桁行が1.4～1.65m、梁行が約2.1mである。柱穴の形状や大きさはやや不揃いである。柱痕は６個確認した。直径25～35cmを測る。建物の方位は北に対して７°30′東に振る。

出土遺物としては須恵器・土師器・製塩土器などがある（第165図19～22）。19は柱穴ＳＰ18から出土した須恵器杯Ｂ蓋の破片である。20は柱穴ＳＰ15から出土した須恵器杯Ｂの底部である。21は柱穴ＳＰ14から出土した土師器甑の口縁部の破片である。22は製塩土器である。ＳＢ01出土遺物は破片が多く、量も少ないが、19・20は奈良時代前半頃に位置づけられる。

②掘立柱建物跡ＳＢ02（第162図）　調査区の西半部で検出した。土坑ＳＫ78・ＳＫ79と重複するが、遺構の切り合い関係からＳＢ02の方が新しい。桁行４間以上（8.1m以上）、梁行２間（約4.1m）の南北方向の建物である。ただし北西部の柱穴２基は調査区外となるため未確認である。柱間は、桁行が約1.7～2.1m、梁行が約2.0mである。柱穴の形状や大きさはやや不揃いである。柱痕は４個確認した。直径25～35cmを測る。建物の方位は北に対して２°30′西に振る。

出土遺物は小破片のみで、図示できるものはなかった。ＳＫ79よりも新しいことから、奈良時代でも後半に位置づけられる。したがって、ＳＢ01とＳＢ02の間には時間差が想定でき、主軸方位が北に対して７～８°程度東に振る建物から、おおむね正方位を指向する建物へと、建物の主軸方位が変化したことが指摘できる。

③掘立柱建物跡ＳＢ03（第163図）　調査区の東半部南寄りで検出した。竪穴式住居跡ＳＨ73や土坑ＳＫ77と重複する。遺構の切り合い関係から、ＳＢ03はＳＨ73よりも新しく、ＳＫ77よりは古い。桁行は４間（約9.5m）、梁行は２間（約4.7m）と推定される東西方向の建物である。柱間は、桁行が2.2～2.8mと不揃いであるが、梁行は約2.3mである。柱穴の形状や大きさはやや不揃いである。柱痕は３個確認した。直径20～40cmを測る。建物の方位は北に対して７°東に振り、掘立

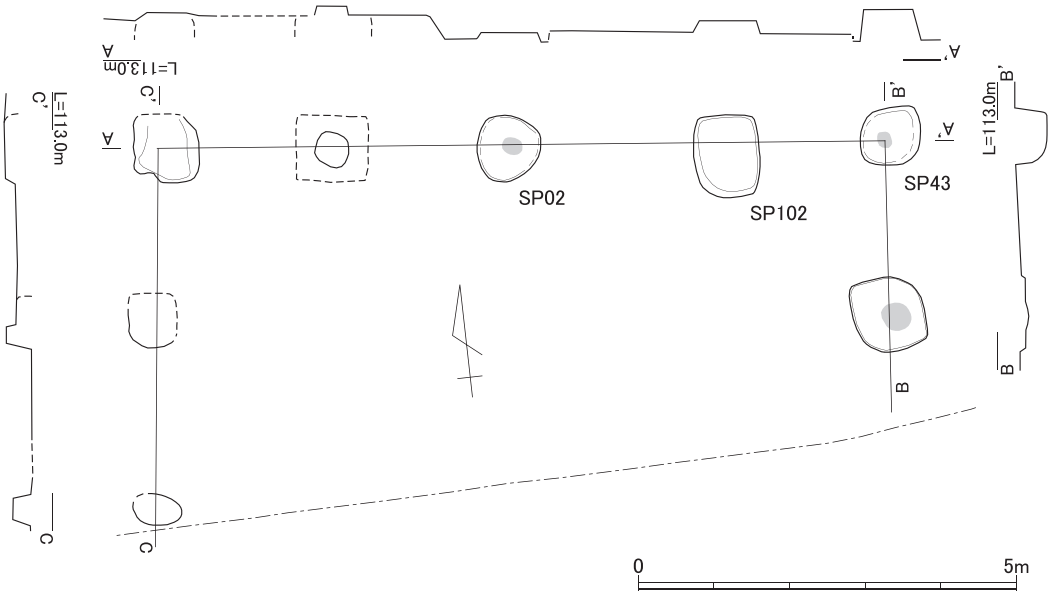


第162図　掘立柱建物跡ＳＢ02実測図

柱建物跡ＳＢ01とほぼ同じ方位である。

出土遺物は少なく、図示できたのは柱穴ＳＰ43から出土した須恵器甕のみである（第165図25）。また、26はＳＨ73から出土した須恵器杯Ｂであるが、柱穴ＳＰ102に伴う遺物の可能性がある。建物の時期は遺物から詳細に知ることはできないが、建物の方位が掘立柱建物跡ＳＢ01と一致すること、ＳＫ77よりも古いことなどから、奈良時代前半に位置づけられる。

④その他の柱穴　Ｃ６地区では上記の建物に復原できた柱穴のほかにも多数の柱穴を検出した。しかし、これらは建物や柵としてのまとまりは認められなかった。柱穴からは若干の遺物が出土した（第165図17・18・27～33）。18は柱穴ＳＰ48から出土した須恵器杯Ｇ蓋である。17・27は柱穴ＳＰ42から出土した須恵器杯Ｈ、土師器皿である。17は本来、竪穴式住居跡ＳＨ73に伴うものであった可能性が高い。28は柱穴ＳＰ55から出土した須恵器杯Ｂ蓋である。29・30は柱穴ＳＰ56から出土した須恵器杯Ｂ蓋、須恵器杯Ｂである。28～30は本来、土坑ＳＫ79に伴うものであ



第163図　掘立柱建物跡ＳＢ03実測図

った可能性もある。31・32は柱穴ＳＰ33から出土した須恵器杯、製塩土器である。33は柱穴ＳＰ34から出土した製塩土器である。

⑤**溝ＳＤ61**　竪穴式住居跡ＳＨ71の上面で検出した。形状は不整形で、土坑の可能性もある。検出長3.2m、幅0.4～0.7m、深さ10～20cmを測る。出土遺物としては須恵器や製塩土器などがある（第166図42～46）。42～45は須恵器である。42・43は杯Ｈである。ＳＨ71の遺物が混入したものであろう。44は杯Ａ、45は杯Ｂである。46は製塩土器である。

⑥**土坑ＳＫ113**　竪穴式住居跡ＳＨ74と重複する。平面形は隅丸方形を呈し、長辺1.6m以上、短辺1.5m、深さ10～15cmを測る。出土した遺物として土師器杯Ｃがある（第165図34）。外面にヘラミガキ調整を、内面に暗文を施す。

⑦**土坑ＳＫ91**　調査区の中央、竪穴式住居跡ＳＨ74の西側に接して検出した。平面形は不整形な形状を呈し、長軸4.2m、短軸2.4m、深さ15cm前後を測る。出土遺物として図示したのは土師器の小型丸底土器である（第165図35）。

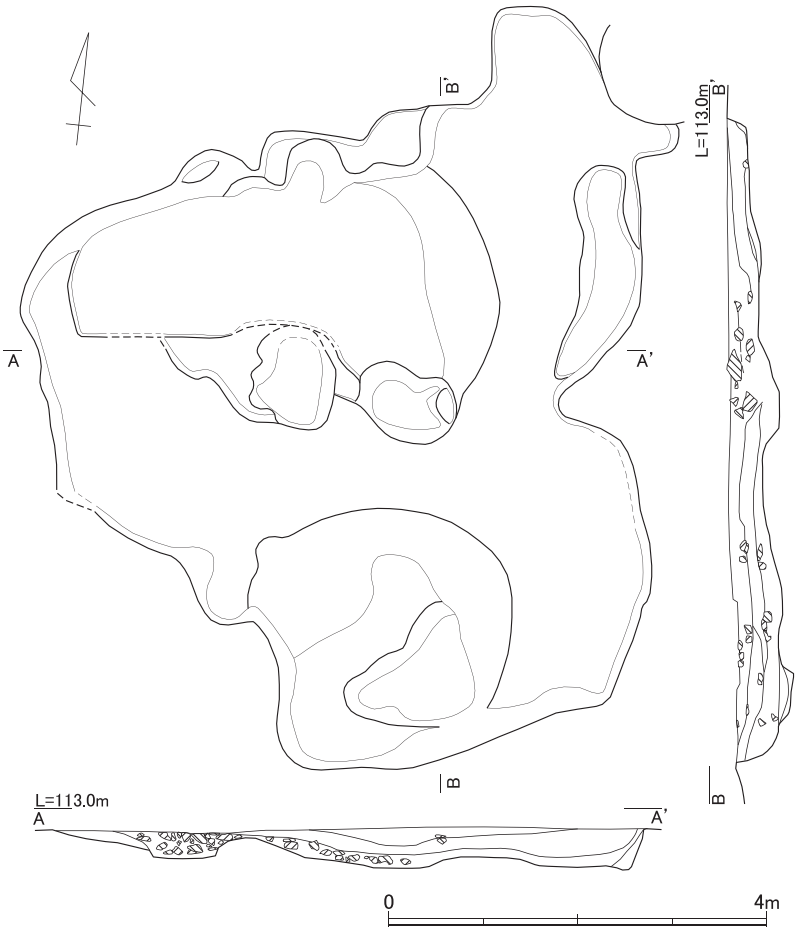
⑧**土坑ＳＫ94**　調査区北東部で検出した。出土遺物として須恵器杯Ｂの底部がある（第165図36）。高台がやや長く、内端面が接地することから古い特徴を持つと思われ、飛鳥時代後半から奈良時代の初め頃に位置づけられる。

⑨**土坑ＳＫ119**　調査区の南西部で検出した。土坑の南半は調査区外に延びる。長軸5.7m、短軸検出長1.1m、深さ10cm前後である。出土遺物として須恵器や土師器がある（第165図37～41）。37・38は須恵器杯Ｂ蓋である。37は口縁部が屈曲気味である。39は須恵器杯である。40は土師器小型壺ないし甕である。外面にユビオサエ痕が明瞭に残るが、内面は丁寧なナデ調整を施す。41は土師器甕の口縁部である。出土した土器から時期は不明瞭であるが、奈良時代中頃に位置づけられよう。

⑩**土坑ＳＫ79**　調査区の西半部で検出した。平面形は不整形な形状を呈し、長軸6.3m、短軸

4.6m、深さ10～15cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。掘立柱建物跡ＳＢ02はＳＫ79の埋土上面で検出したことから、ＳＢ02の造営に先立つ整地層の可能性がある。

出土遺物としては須恵器や土師器、製塩土器などがある（第166図47～55）。47～52は須恵器である。47は杯Ｂ蓋、48・51は杯Ａ、49は杯または椀の口縁部、50は杯Ｂの底部である。52は長頸壺の口頸部で、外面に沈線が１条めぐる。54・55は土師器甕の口縁部、もしくは口縁部から体部にかけての破片である。53は製塩土器である。47・50・51から奈良時代前半頃に位置づけられる。

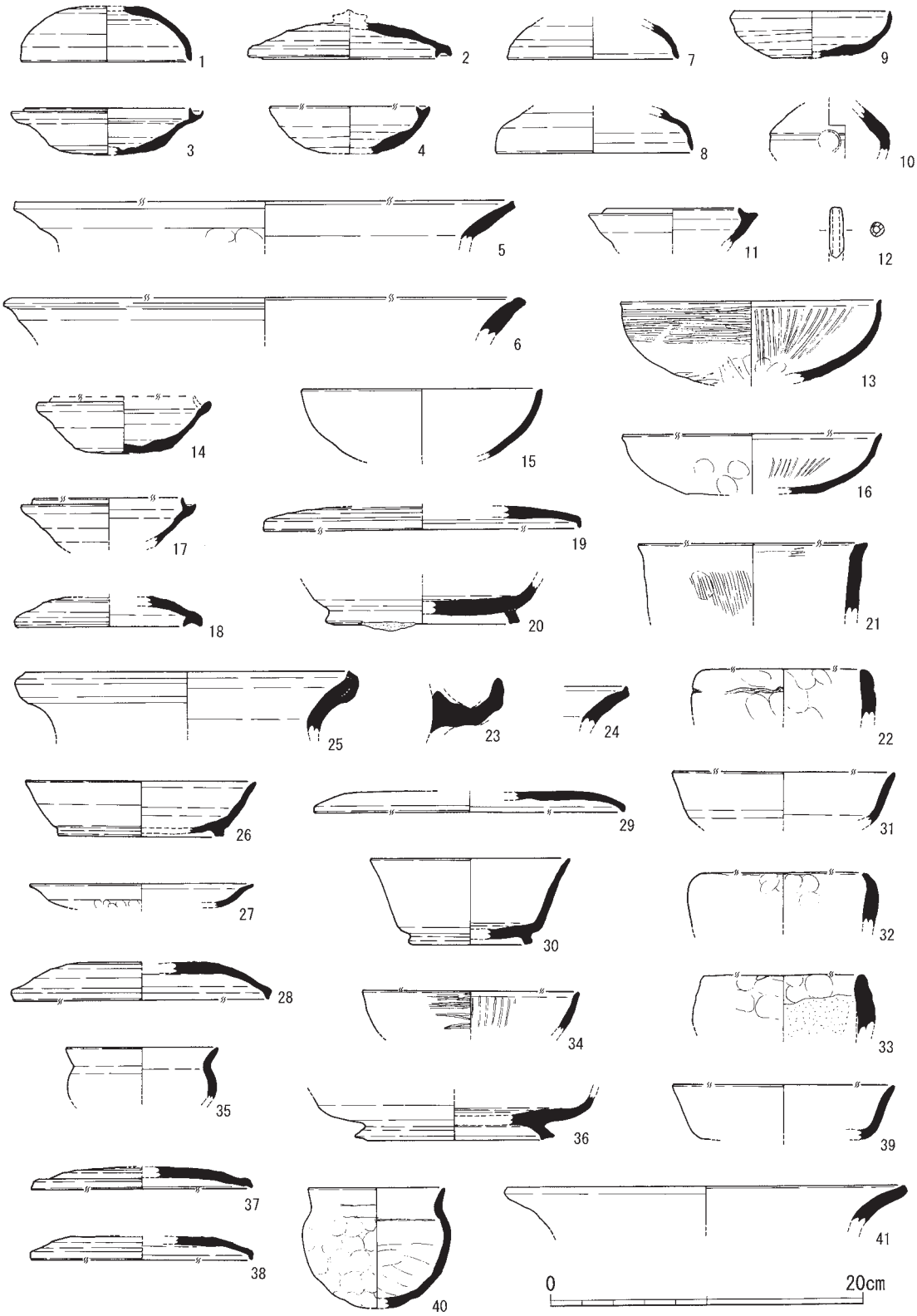


第164図　土坑ＳＫ77実測図

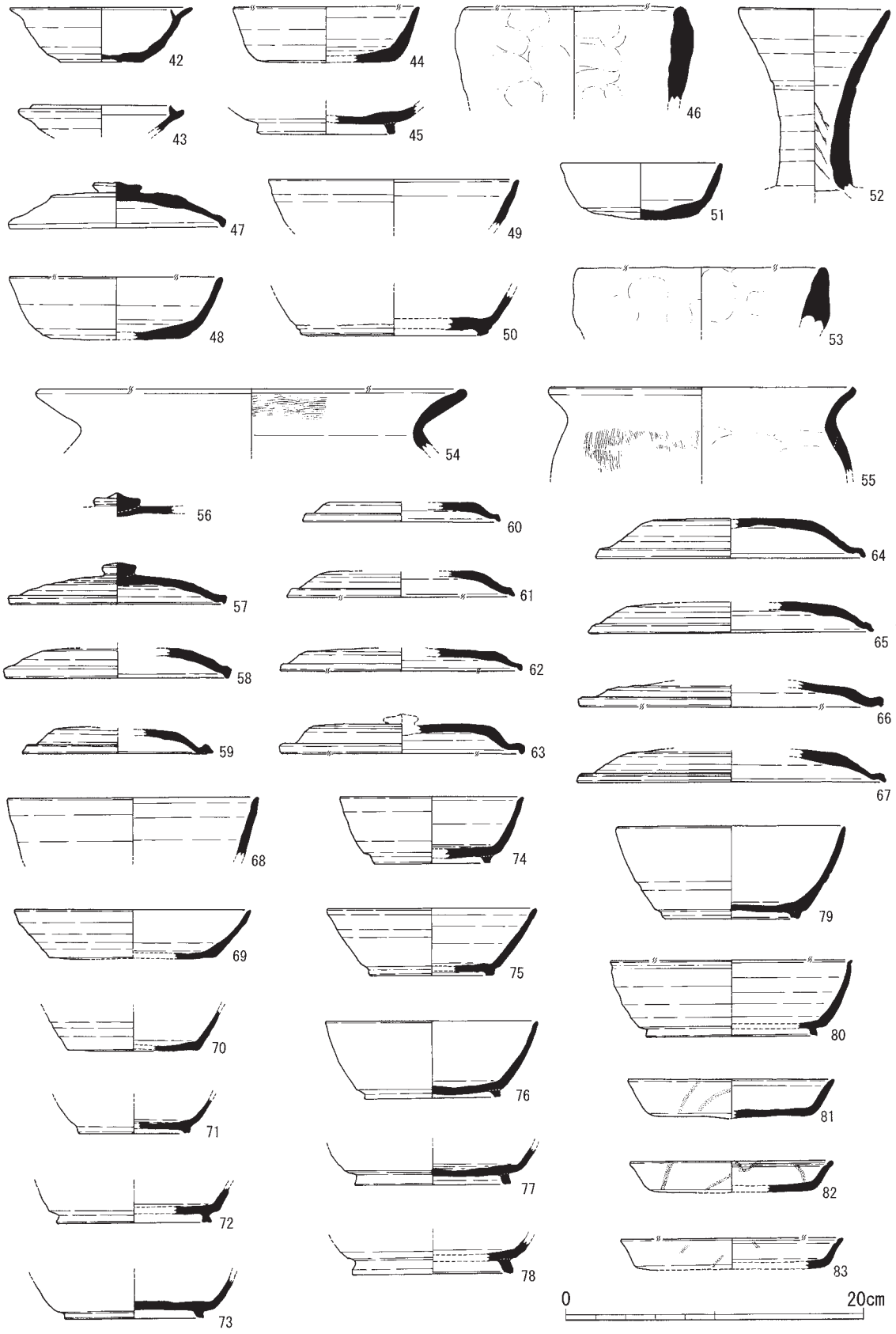
⑪**土坑ＳＫ77**　調査区の東半部南寄りで検出した。平面形は不整形な形状を呈し、土坑底面も一定にはならない。長軸7.0m、短軸6.2m、深さ20～50cmを測る。埋土は上層が暗茶褐色粘質土、下層が礫を比較的多く含む暗茶褐色粘質土である。また、遺構検出面で礫が若干集中する土坑状のまとまりがある（ＳＫ07、ＳＫ09）。最終的に明確な掘形を確認することはできなかったが、出土遺物から平安時代前半のものと推定される。なお、土坑完掘後に柱穴を複数検出した。いずれも掘立柱建物跡ＳＢ03に伴うものと考えられる。

出土遺物には奈良時代から平安時代にかけての須恵器や土師器、製塩土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などのほか、鉄器がある（第166図56～第168図131、第169図151・152）。土器の出土量は非常に多く、種類も豊富である。このうち56～109が奈良時代後半から平安時代初めにかけての遺物である。112・113は古墳時代のもの、114～131は平安時代のものであろう。

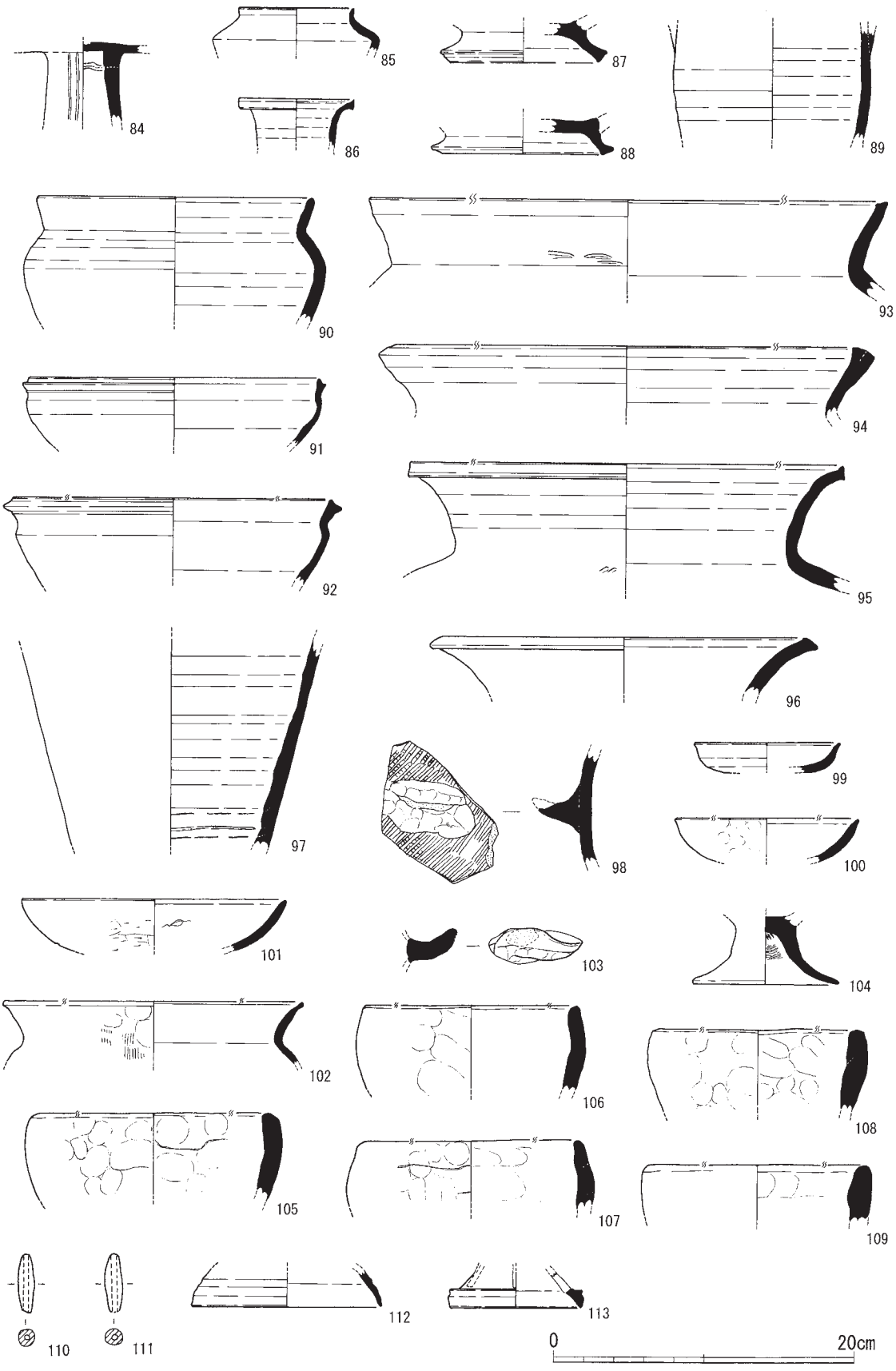
56～98は須恵器である。56～67は杯Ｂ蓋で、64～67は皿Ｂ蓋の可能性もある。口縁部の屈曲するものが多い。68は杯、69・70は杯Ａである。71～79は杯Ｂである。高台が底部外周よりも若干内側に接合され、断面形状も逆台形を呈さないものと、底部外周付近に接合され、断面形状が台形を呈するものとが混在する。80は椀Ｃである。81は皿Ａである。82・83は皿Ｃである。81～83



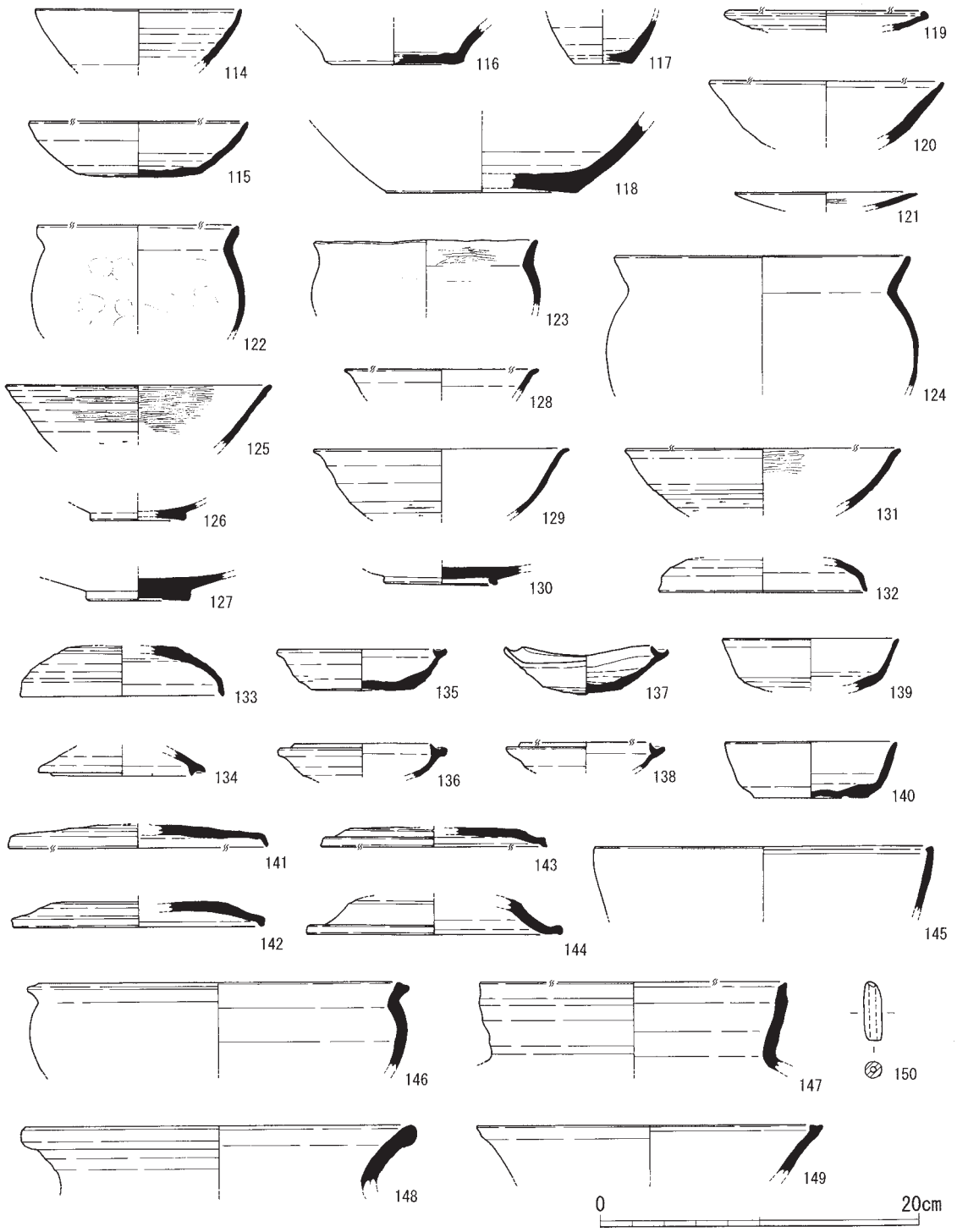
第 165 図　Ｃ６地区出土遺物実測図（１）



第 166 図　Ｃ６地区出土遺物実測図（２）

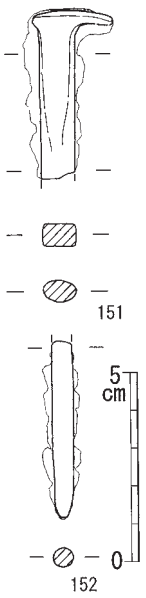


第 167 図　Ｃ６地区出土遺物実測図（３）



第168図　C６地区出土遺物実測図（４）

は火襷がみられる。84は高杯脚部で、外面にヘラ書きによる沈線が２条認められる。85は短頸壺である。86は長頸壺の口縁部、87・88は長頸壺の底部である。89は耳を持つ壺の体部片である。90～92は鉢であるが、口縁部形状は多様である。93～96は甕の口縁部であるが、形状は多様である。97は捏ね鉢と推定される。内面下半部に粘土紐接合痕がみられる。98は甕の把手である。



第169図Ｃ６地区出土遺物実測図（５）

99～104は土師器である。99～101は杯である。101は体部下半外面にヘラケズリ調整を施す。102は甕の口縁部である。103は甕や鍋などの把手である。104は高杯脚部である。105～109は製塩土器である。106のみ内面に布目が認められる。110・111は土錘である。112は杯蓋、113は高杯脚部である。112・113は古墳時代のものであるが、112は後期後半、113は中期末頃のものと考える。

114～118は須恵器である。114は杯、115は杯Ａである。ともに口縁部が内湾気味に立ち上がる。116は椀の底部である。117は小型の壺の底部である。118は鉢の底部である。116～118の底部にはいずれも糸切り痕が認められる。119は土師器皿である。口縁端部を内方に丸く納める。120は土師器杯または椀である。121は黒色土器皿である。内面にヘラミガキ調整の痕跡が認められる。122～124は黒色土器甕で、内面に黒色処理を施す。

125は緑釉陶器椀の口縁部である。内外面ともヘラミガキ調整を施す。126・127は緑釉陶器椀の底部で、どちらも削り出し高台である。128・129は灰釉陶器椀の口縁部である。130は灰釉陶器椀もしくは皿の底部である。131は須恵質だが、内面にミガキ調整を施すことから無釉陶器椀と考える。

151・152は埋土掘削中に出土した鉄釘である。

（３）包含層出土遺物

Ｃ６地区では遺物包含層はほとんど存在しないものの、遺構面の精査中などに多くの遺物が出土した。その一部を包含層出土として報告する（第168図132～150）。なお、150を除いてすべて須恵器である。132・133は杯Ｈ蓋、134は杯Ｇ蓋である。いずれも竪穴式住居跡ＳＨ71周辺で出土した。135～138は杯Ｈである。いずれも竪穴式住居跡と同時期のものである。139・140は杯Ｇであるが、134～138よりも新しい時期のものである。141～144は杯Ｂ蓋である。144は笠形を呈するが､口縁端部が屈曲する。145は鉢の可能性があるものの詳細は不明である。146は鉢Ｄである。147～149は甕の口縁部である。150は土錘である。

（筒井崇史）

37. 39トレンチの調査

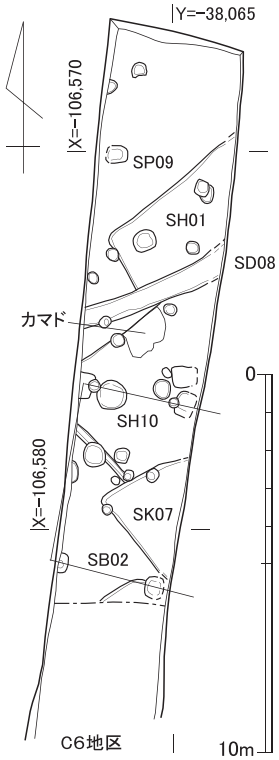
Ｃ６地区の北側に位置する用水路部分に設定したトレンチである。

39トレンチでは、竪穴式住居跡２基、掘立柱建物跡１棟、土坑１基、溝１条、柱穴群を検出した(第170図)。

①竪穴式住居跡ＳＨ01　トレンチ北半部で検出した。住居の南半部は後述する竪穴式住居跡ＳＨ10と重複し、ＳＨ01の方が古い。平面形は方形を呈すると考えられ、一辺約４ｍ、深さ約15cmを測る。主柱穴は３か所検出でき、柱間は約２ｍであった。西側の主柱穴では径約20cmの柱痕が認められた。

出土遺物として須恵器や土師器がある(第172図３～７)。３は須恵器杯Ｈ蓋である。４は土師器杯である。５・６は土師器甕である。７は土師器甑である。３・４は飛鳥時代前半～中頃に位置づけられる。

②竪穴式住居跡ＳＨ10　トレンチ中央部で検出した。住居の北西部を確認し、その全容については調査地外に広がるため不明である。平面形は方形と推定され、東西5.3m以上、南北3.7m以上、深さ約20cmを測る。部分的に周壁溝がめぐる。主柱穴は西側で２基検出した。住居北辺において長辺1.0m、短辺0.8mの範囲が赤色に焼けていた。掘削したところ、両袖部の内法が0.3m、奥行き0.5mを測るカマドを検出した。

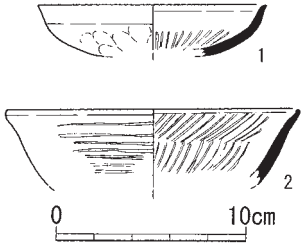


第170図　39トレンチ検出遺構配置図（1/200）

出土遺物として須恵器がある(第172図８～12)。８はカマド上面から出土した杯Ｂ蓋である。９は高台の剝離痕がみられることから杯Ｂである。10～12は杯Ａであるが、若干、杯Ｇの特徴を残す古相のものと考える。

③掘立柱建物跡ＳＢ02　竪穴式住居跡ＳＨ10と重複して検出し、ＳＨ10よりも新しい。規模は梁行２間(約4.8m)、桁行１間以上(約2.7m以上)の東西方向の建物である。柱穴の平面形は方形で、一辺0.5～0.8m、深さ20～30cmを測る。柱痕は直径20～30cmであった。建物の方位は北に対して約11°東に振り、Ｃ６地区で検出した掘立柱建物群に近い。

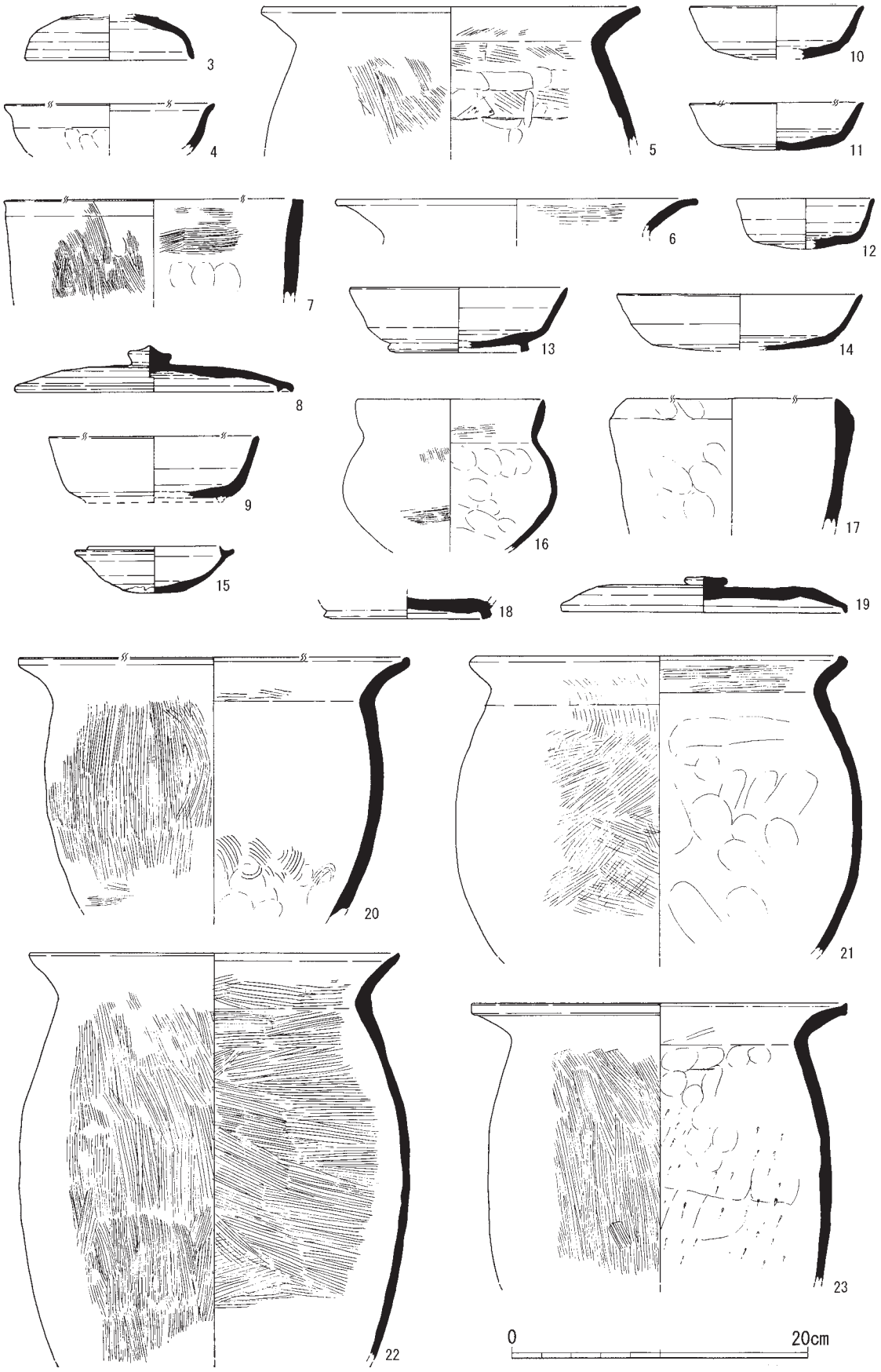
④土坑ＳＫ07　トレンチ南半部で検出した。当初、竪穴式住居跡と考えていたが、周壁溝や主柱穴がなく、床面が平坦でなかったことから、土坑と判断した。遺構内から須恵器杯Ｂやその蓋、土師器甕が出土した(第172図18～21)。須恵器からみて奈良時代前半～中頃の遺構であろう。



第171図　39トレンチ出土遺物実測図（１）

⑤溝ＳＤ08　トレンチ北半部で検出した。検出長3.9m、幅約0.5m、深さ約25cmを測る。竪穴式住居跡ＳＨ01・ＳＨ10よりも新しい。溝の方位は東に対して約21°北に振る。埋土中から土師器甕などが出土した(第172図22・23)。奈良時代の遺構であろう。

⑥柱穴群　その他に10数か所から柱穴を検出した。調査範囲が狭いため、建物跡や柵として復原することはできなかった。トレンチ北端



第 172 図　39 トレンチ出土遺物実測図（2）

の柱穴ＳＰ09からは須恵器杯Ａ（第172図14）が出土した。

⑦包含層出土遺物　遺構面の精査中などに出土した遺物として土師器杯Ａなどがある（第171図１・２）。ともに精良な胎土で、やや明るい橙褐色を呈する。内面に放射状暗文を施す。いわゆる畿内産土師器である。

（岡崎研一・筒井崇史）

38. Ｃ７地区の調査

Ｃ６地区の南西約30mに設定した調査区である。耕作土・床土を除去すると、おおむね地山となり、南端部で黒褐色粘質土（黒ボク層）の堆積が認められた。黒褐色粘質土を除去して、地山上で飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構を検出した。

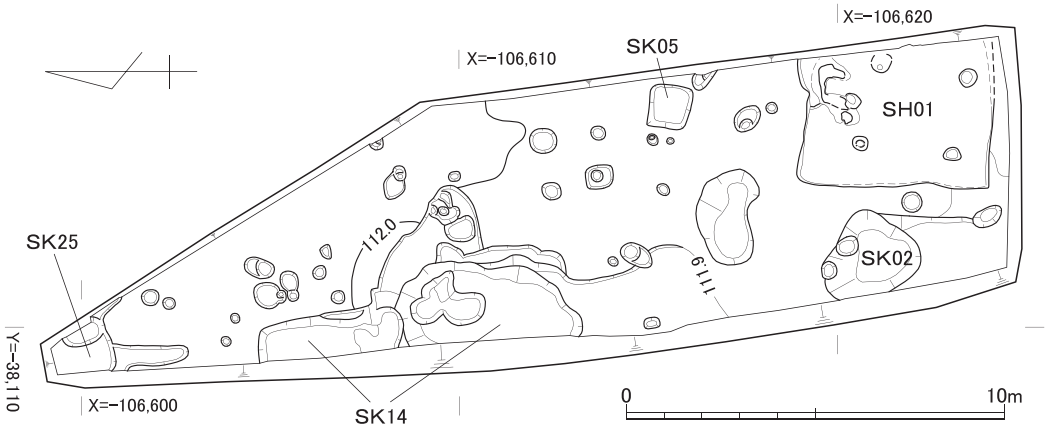
（１）飛鳥時代の遺構・遺物

飛鳥時代の遺構として竪穴式住居跡１基、土坑２基などを検出した。

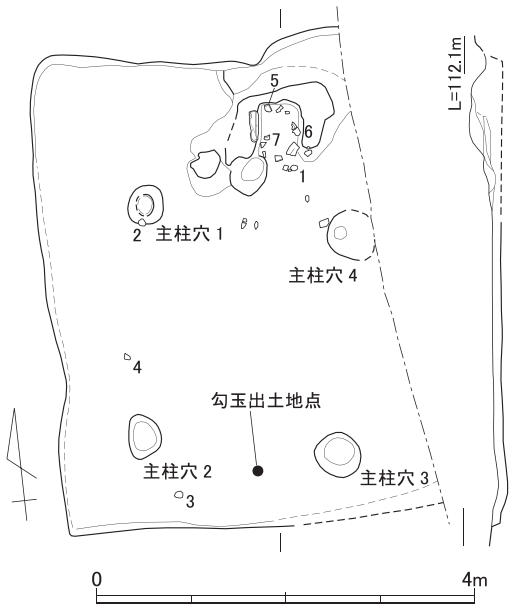
①竪穴式住居跡ＳＨ01（第174図）　調査区の南端で検出した。平面形は方形で、一辺5.1m、深さ５～10cmを測る。北辺にカマドを有する。周壁溝は検出されなかった。主柱穴は４基を確認した。平面形は円形を呈し、直径40cm前後、深さ30cm前後を測る。住居の方位は、北に対して約６°東に振る。

出土遺物としては須恵器・土師器がある（第176図１～７）。１～４はほぼ同じ大きさの須恵器杯Ｈ蓋である。ただし、ＳＨ01で杯類は出土していないので、１～４が杯として利用された可能性もある。５は土師器杯である。内面に放射状の暗文を施し、底部外面はユビオサエで整形する。６は土師器高杯脚部である。７は土師器皿である。内面にわずかに暗文らしきものがある。土師器はいずれもカマドの上面もしくはカマド内で出土した。なお、７は１～５にくらべ、やや新しく位置づけられるが、混入とは考えず、１～５の時期を示す土器と考えることもできる。したがって飛鳥時代中頃から後半に位置づけられる。

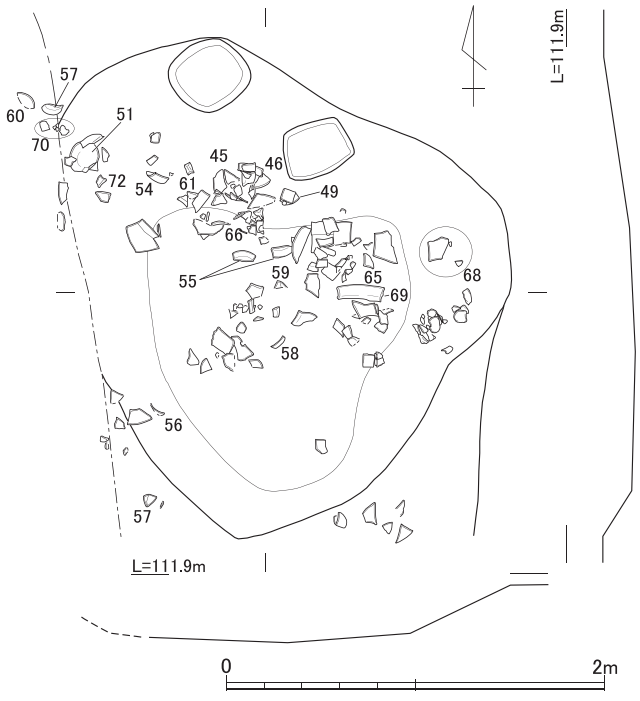
②土坑ＳＫ14　調査区の西辺、やや北寄りで検出した。土坑の西半部は調査区外に延びるため、形状等の詳細は不明である。また、検出面では不整形な形状の大型の土坑と判断し、掘削を続け



第173図　Ｃ７地区検出遺構配置図（1/200）



第174図　竪穴式住居跡ＳＨ01実測図



第175図　土坑ＳＫ02実測図

たが、最終的に２基の土坑が近接して掘削されていることがわかった。ＳＫ14北は平面形が方形を呈すると考えられ、一辺3.8m程度、深さ20～25cmである。ＳＫ14南は平面形は円形を呈すると考えられ、直径5.2m程度、深さ約40cmである。

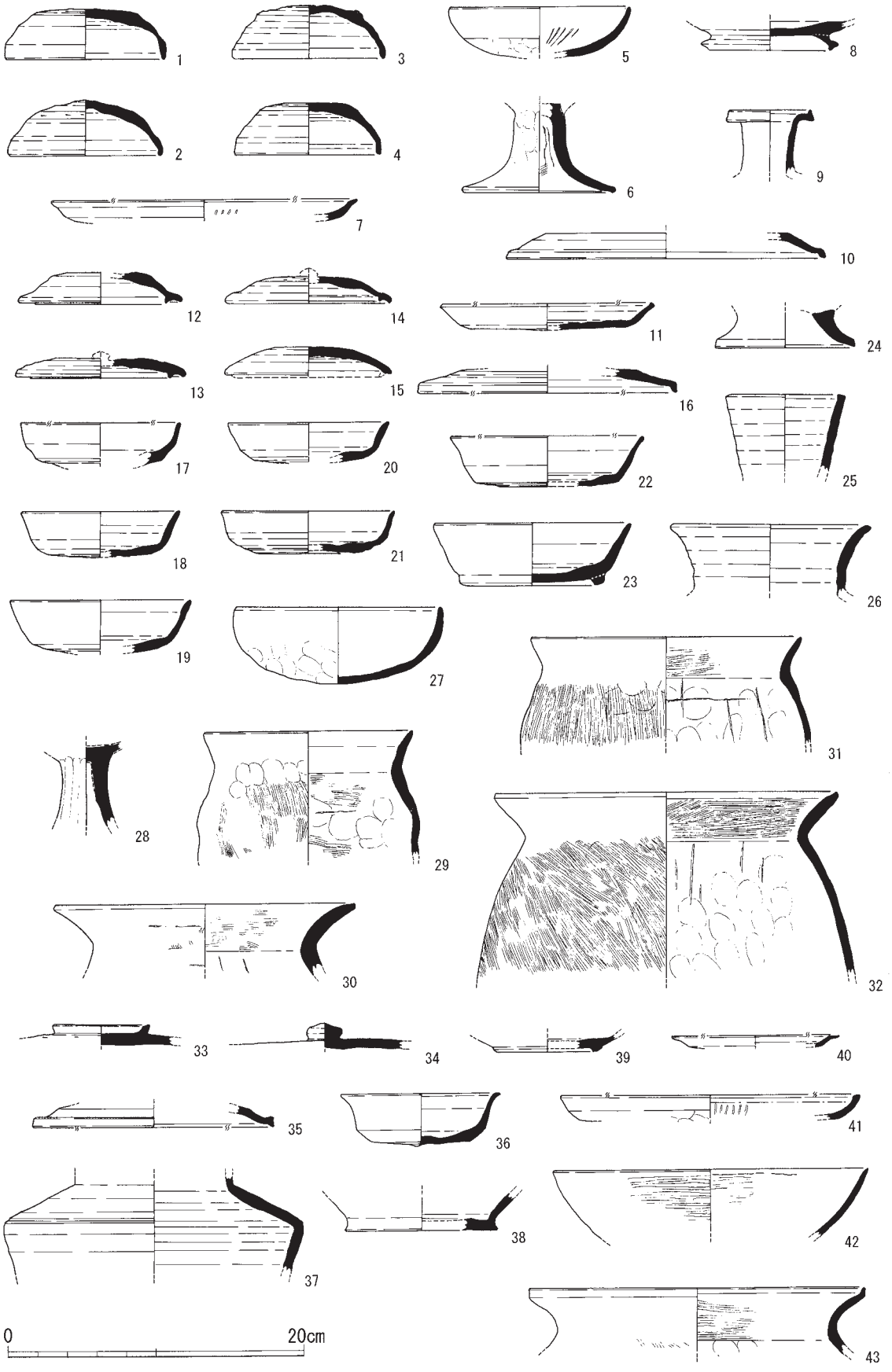
出土遺物としては須恵器や土師器がある（第176図12～32）が、遺物取り上げの地区割と土坑の位置関係が対応しないため、ここでは一括して報告する。12～26は須恵器である。12～15は杯Ｇ蓋、16は杯Ｂ蓋である。17～22は杯Ｇまたは杯Ａ、23は杯Ｂである。これらのうち、16・19・22・23はやや新しい様相を示すが、その他はおおむね飛鳥時代後半を中心とする一群である。24は脚台部と考えられるが、上部の器種は不明である。25は壺の口縁部と思われる。26は甕の口縁部であろう。27～32は土師器である。27は杯である。いわゆる杯Ｃを在地で模倣したものと推定される。27は飛鳥時代前半から中頃にかけての資料と考えられる。28は高杯脚部である。29～32は甕である。29・31は体部調整がやや粗雑で、器表面に凹凸がみられる。

（２）奈良時代の遺構・遺物

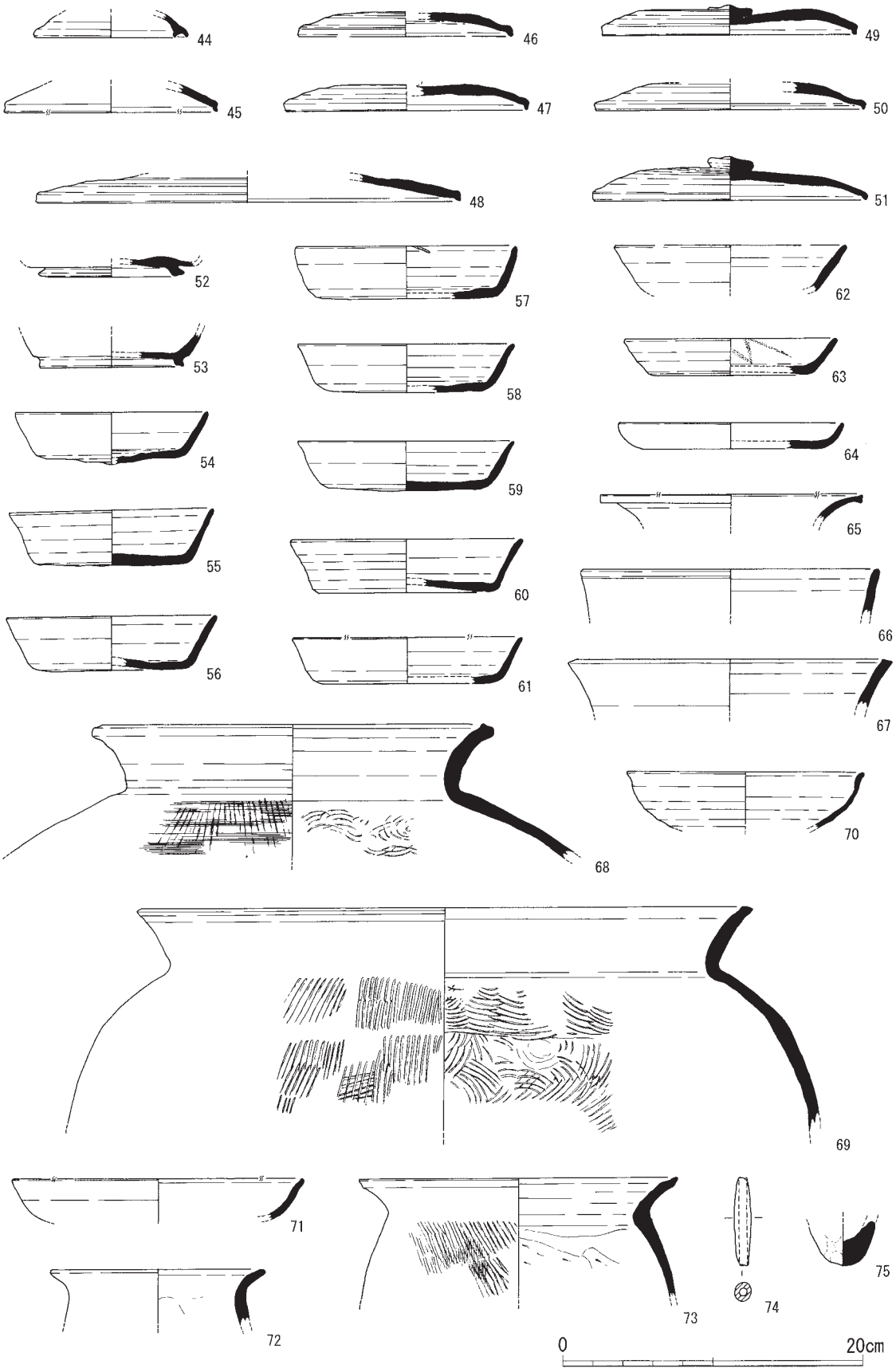
奈良時代の遺構として土坑３基を検出した。時期不明の柱穴も多数検出したが、その一部はこの時期に属すると考える。

①土坑ＳＫ25　調査区の北端で検出した。検出された範囲が狭いため、形状は明らかでない。深さは約10cmである。出土遺物として須恵器長頸壺の底部を図示した（第176図８）。

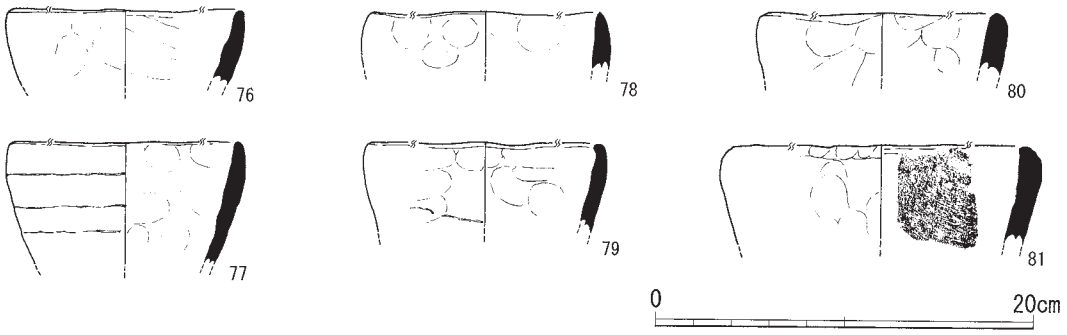
②土坑ＳＫ05　調査区の中央、東辺寄りで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、一辺は1.1m、深さは約15cmである。出土遺物としては須恵器の破片がある（第176図９～11）。９は小型の長頸壺の口頸部である。10は杯Ｂ蓋もしくは皿Ｂ蓋である。11は口縁端部をややつまみ上げており、皿Ｃと考えられる。



第176図　C７地区出土遺物実測図（１）

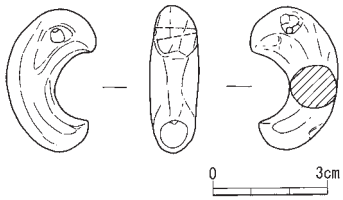


第 177 図　Ｃ７地区出土遺物実測図（２）



第178図　Ｃ７地区出土遺物実測図（３）

③土坑ＳＫ02　調査区の南西部で検出した。最終的に確認した平面形は不整形な形状を呈し、長軸2.6m、短軸2.2m、深さ約30cmである。ただし、上面で検出した遺物の広がりは、土坑よりも大きく広がっており、もっと大きな遺構であった可能性もある。



第179図　竪穴式住居跡
ＳＨ01出土勾玉実測図

出土した遺物としては須恵器や土師器、製塩土器などがある（第177図44～第178図81）。44～70は須恵器である。44は杯Ｇ蓋である。46～51は杯Ｂ蓋である。杯Ｂ蓋はいずれも笠形の形態を呈し、つまみはやや扁平な擬宝珠形である。なお、48は皿Ｂ蓋の可能性もある。52・53は杯Ｂである。高台の形態から古相の一群である。54～61は杯Ａ、62は杯、63・64は皿Ａである。杯Ａは土坑ＳＫ14出土の杯Ａにくらべると、より新しい形態を呈する。63は内面に火襷の痕跡がみられる。65は広口壺の口縁部であろうか。66～69は甕である。70は平安時代の須恵器椀である。混入であろう。71～73は土師器である。71は杯Ａである。72・73は甕である。74は土錘である。75はミニチュア土器と思われる。76～81は製塩土器である。77は外面に粘土紐の接合痕を明瞭に残す。81は内面に布目がみられる。このほか図示することはできなかったが、移動式カマドがある。比較的まとまった量の破片が出土した。

（３）包含層出土遺物

Ｃ７地区では南端部の黒褐色粘質土層の掘削中や遺構面の精査中などに遺物が出土した。それらを包含層出土として報告する（第176図33～43）。なお、33～39は須恵器である。33は環状のつまみを持つ蓋である。34・35は杯Ｂ蓋である。36は口縁端部が大きく外反する杯である。37は短頸壺の頸部から肩部にかけての破片である。38は椀の底部で、糸切り痕跡が残る。39も椀の底部と考えられるが、貼付け高台である。40・41・43は土師器である。40は口縁端部をつまみ上げる皿の破片である。41は口縁端部内面が少し肥厚する皿である。内面に放射状暗文がみられる。43は甕である。口縁端部をつまみ上げる。42は内面を黒色処理する黒色土器椀である。磨滅するものの、内外面にミガキ調整を施す。

（筒井崇史）

39. Ｃ８地区の調査

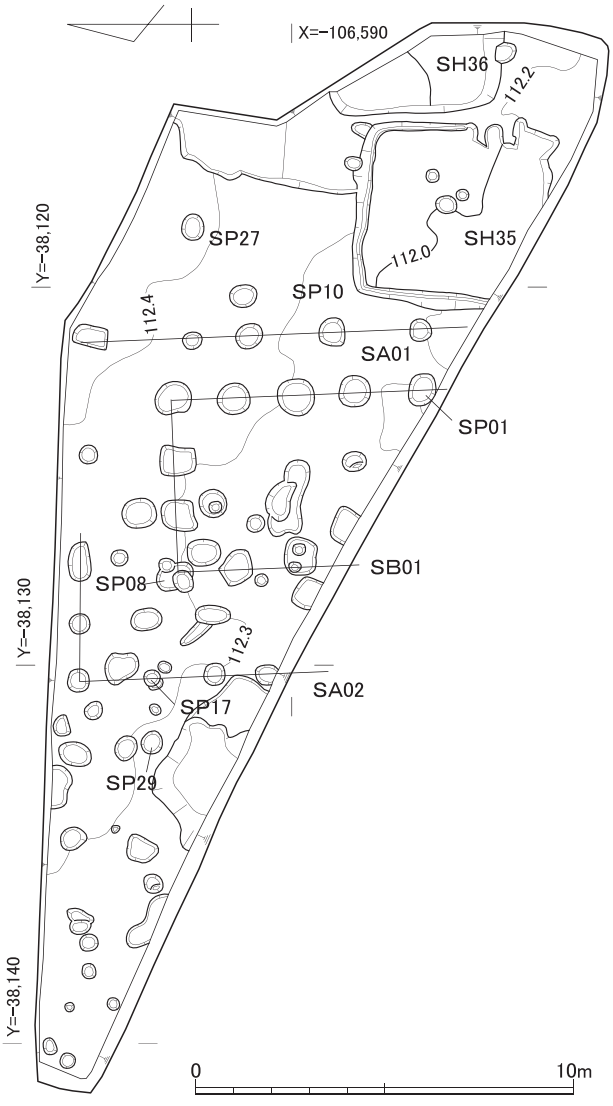
Ｃ６地区の西約40mに設定した調査区である。耕作土・床土を除去すると、北半部は直ちに地山となるが、南半部では黒褐色粘質土層(黒ボク層)が若干の厚さをもって堆積していた。黒褐色粘質土を除去して飛鳥時代ないし奈良時代の遺構を検出した(第180図)。

(１)飛鳥時代の遺構・遺物

飛鳥時代の遺構としては竪穴式住居跡２基を検出した。

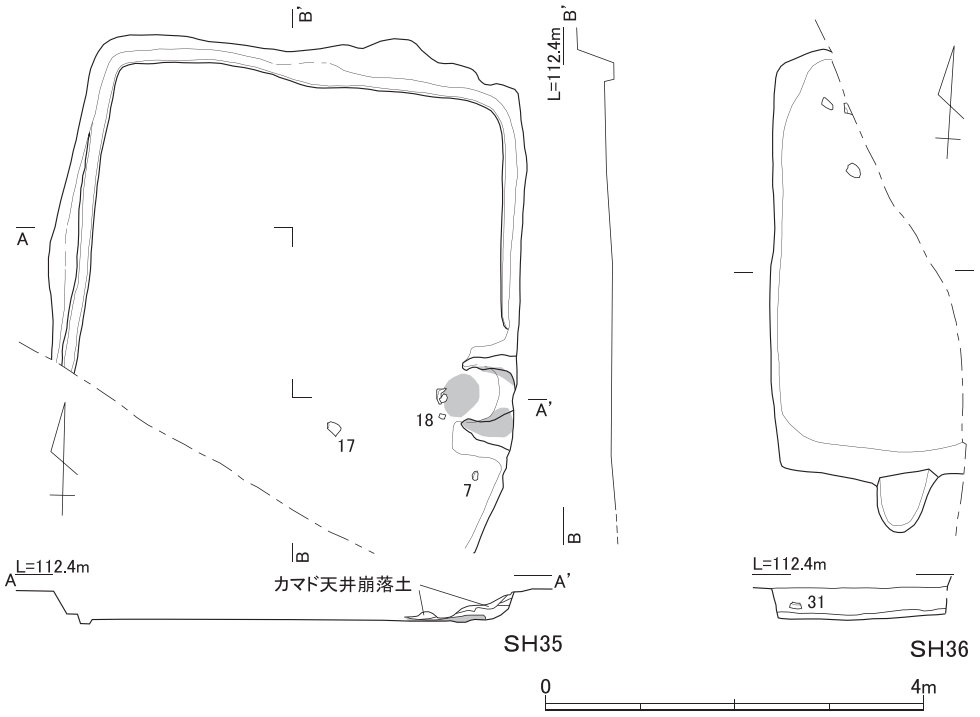
①竪穴式住居跡ＳＨ35(第181図左)　調査区東半部で検出した。平面形は方形であるが、南西角は調査区外に延びる。一辺4.5mないし5.0m以上、深さ25～30cmを測る。遺構の遺存状況が良好なため、多数の遺物が出土した。他の住居と異なり、東辺のやや南寄りにカマドを持つ。住居の方位はほぼ南北方向である。主柱穴は検出されなかった。床面に直接、柱を建てていた可能性もある。周壁溝は幅15～20cm、深さ５cm前後で、カマド付近で途切れるものの、ほぼ全周する。

出土遺物としては須恵器や土師器がある(第183図１～20)。１～13は須恵器である。１～３は杯Ｂ蓋である。１・２は内面にかえりを有する。４～６は杯Ｂ、７～12は杯Ａである。杯Ａはやや古い特徴を有すると思われる。13は平瓶の口縁部と思われる破片である。14～20は土師器である。14は杯である。形状から中世の土師器が混入したものと考える。15は皿Ａである。内面に放射状暗文を施す。外面はナデ調整やユビオサエで整形する。16～19は甕である。口縁部は基本的に端部をつまみ上げ、外面に面を持つものである。しかし、体部内面の調整には違いがみられ、ハケ調整のもの(17)やナデ調整のもの(18･19)などがある。20は鍋である。破片資料が多く、時期は不明瞭であるが、須恵器の特徴から飛鳥時代末ないし奈良時代初頭の住居と考えられる。



第 180 図　Ｃ８地区検出遺構配置図（1/200）

②竪穴式住居跡ＳＨ36(第181図右)　調査区の東半部、竪穴式住居跡ＳＨ35にほぼ接して検出した。平面形は方形であるが、東半部は調査区外に延びる。一辺4.3m、深さ約30cmを測る。カマドは調査区外に存在する可能性が高いが、周壁溝や主柱穴は検出されなかった。



第181図　竪穴式住居跡ＳＨ35・36実測図

出土遺物としては須恵器や土師器などがある（第183図21～33）。21～32は須恵器である。23・24は須恵器杯Ｂ蓋である。23は内面にかえりを有する。25は蓋の端部と思われるが、小破片のため詳細は不明である。26は杯、27～29は杯Ａである。杯Ａは竪穴式住居跡ＳＨ35とほぼ同時期かやや古い特徴を持つ。30・31は杯Ｂである。高台の形状はやや古い特徴を示す。32は長頸壺の底部である。やや長めの高台で、内端面が接地する。33は土師器甕である。

（２）奈良時代の遺構・遺物

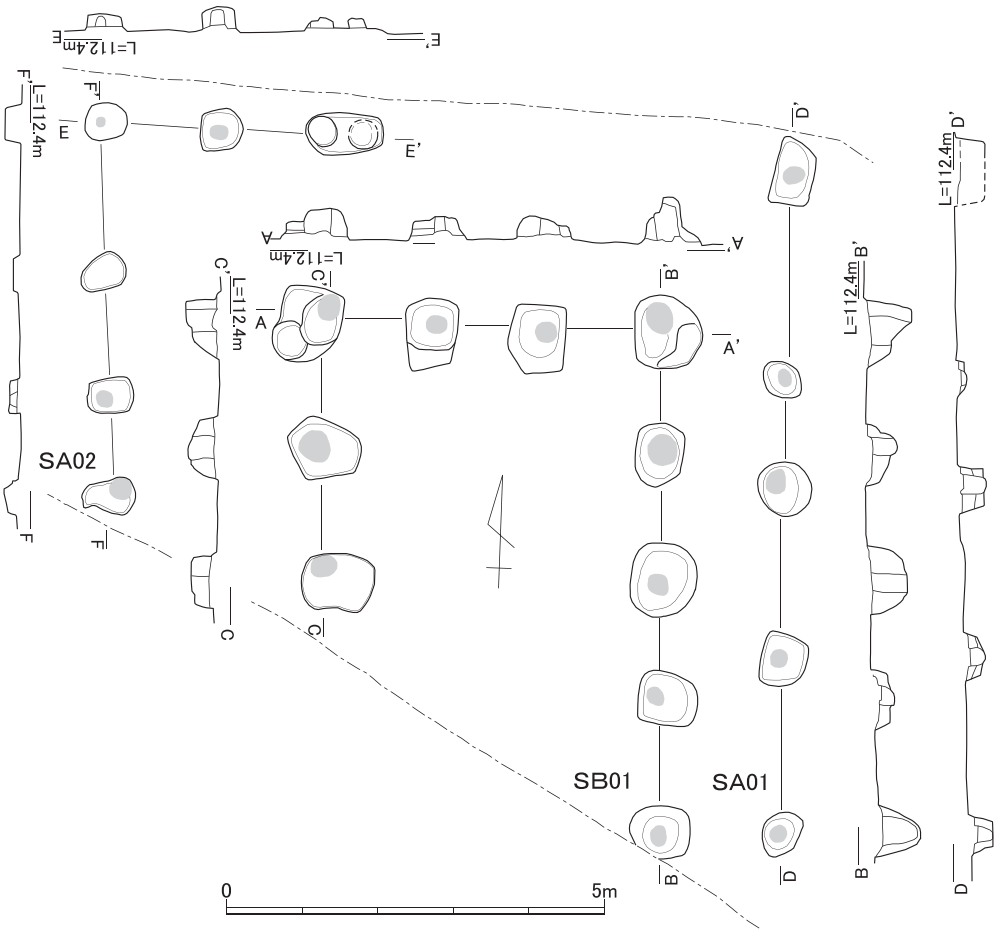
①掘立柱建物跡ＳＢ01（第182図）　調査区のほぼ中央で検出した。桁行４間以上（6.9m以上）、梁行３間（4.5m）の建物である。柱穴は円形に近いものや隅丸方形のものなどがあるが、一辺ないし径が70～100cm、深さ30～60cmを測る。建物の方位は北に対して約１°西に振る。柱間は桁行が1.7m前後、梁行が1.5mである。直径30～40cmの柱痕を確認した。

出土遺物は少なく、図示できたのは須恵器と土師器が１点ずつである（第184図34・35）。34は柱穴ＳＰ08の掘形から出土した須恵器杯Ｂ蓋である。35は柱穴ＳＰ01から出土した土師器甕である。34の形態から奈良時代中頃の建物である可能性が高い。

②柵ＳＡ01（第182図）　調査区の東半部で検出した。４間分を確認した。柱穴は直径50～70cmのほぼ円形を呈する。柱間は1.3～2.6mと不揃いである。柵の方位は北に対して１°東に振る。

出土遺物は少なく、柱穴ＳＰ10から須恵器杯Ａの底部片が出土したのみである（第184図36）。

③柵ＳＡ02（第182図）　調査区の中央部で検出した。ＳＢ01の西側と北側を「Ｌ」字状に囲う。柵ＳＡ01とは、北辺で東半部の柱穴が検出されなかったことから別の柵と考えたい。柱穴は直径ないし一辺が50cm前後の円形ないし隅丸方形を呈する。ＳＡ02の西側柱列の方位は北に対して



第182図　掘立柱建物跡ＳＢ01、柵ＳＡ01・02実測図

約３°西に振る。出土した遺物は少なく、柱穴ＳＰ17から須恵器杯Ｂの底部片が出土したのみである（第184図37）。

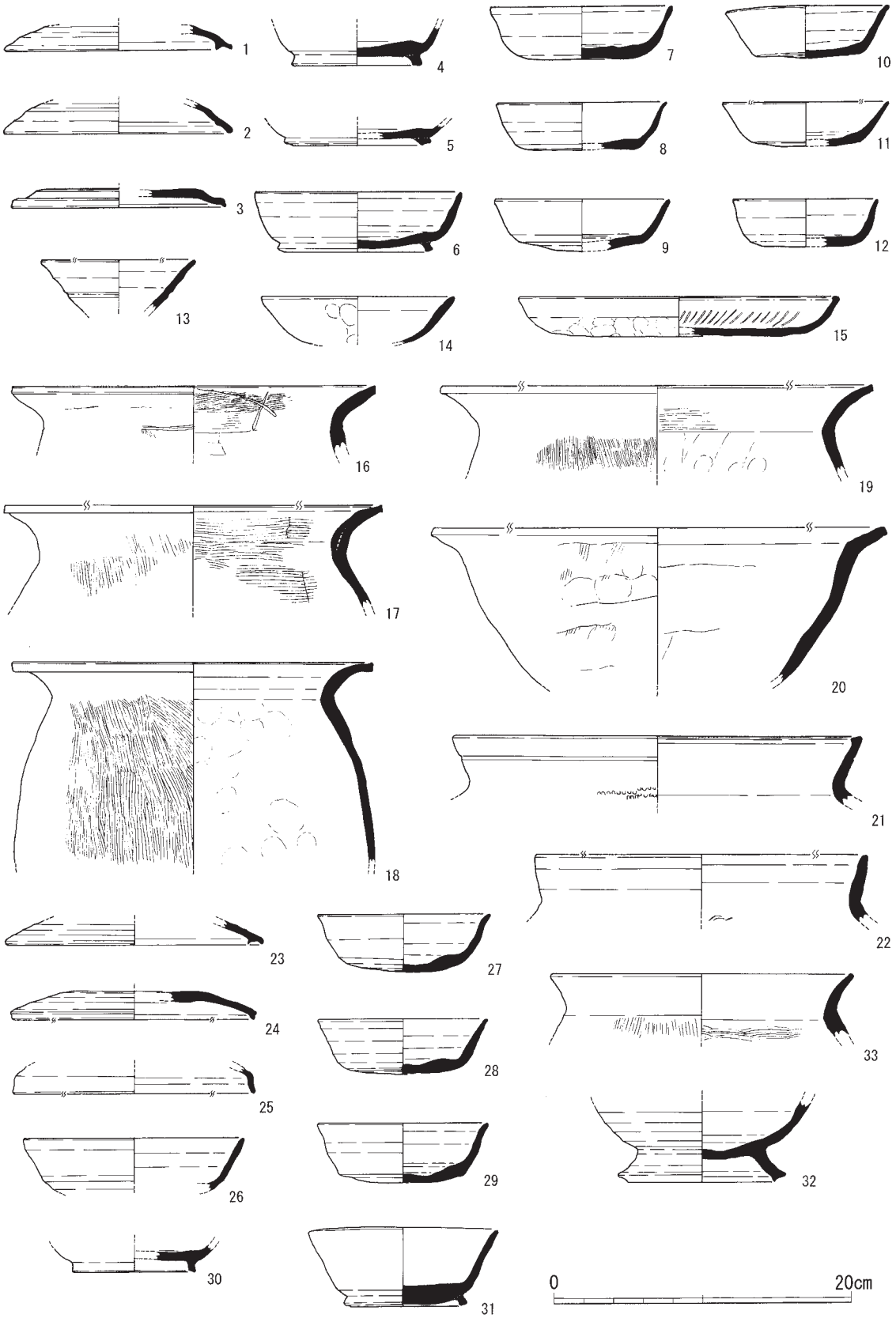
④その他の柱穴　Ｃ８地区では上記の建物や柵に復原できた柱穴のほかにも多数の柱穴を検出した。しかし、これらは建物や柵としてのまとまりは認められなかった。柱穴から出土した遺物としては、柱穴ＳＰ29から須恵器杯Ｂの底部（第184図38）、柱穴ＳＰ27から土師器皿Ａ（第184図39）がある。

（３）包含層出土遺物

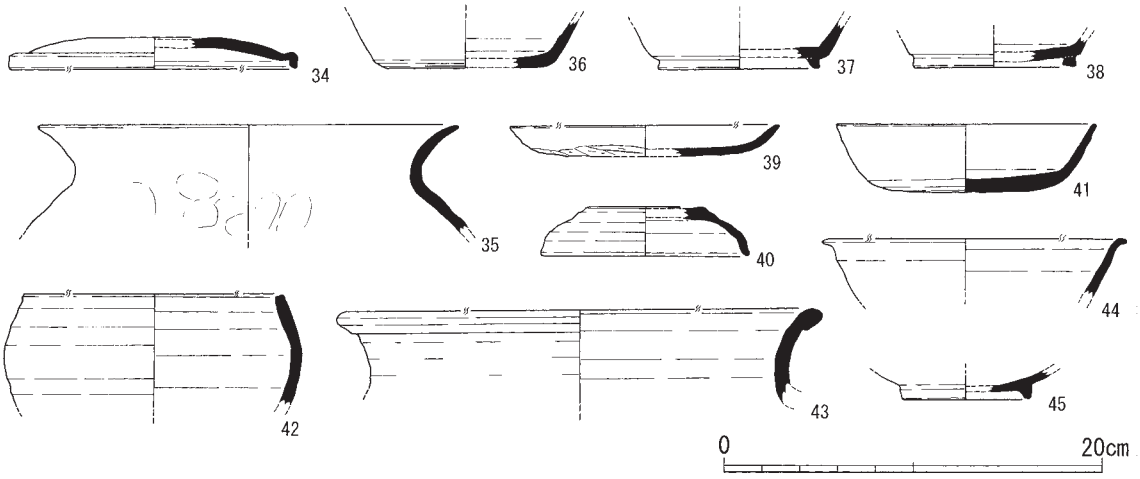
Ｃ８地区では遺構面の精査中に若干の遺物が出土した。また、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡の埋土からも遺構の時期とは異なる遺物が出土した（第184図40～45）。これらを包含層出土遺物として報告する。

40は掘立柱建物跡ＳＢ01の柱穴から出土した須恵器杯Ｈ蓋である。41は須恵器杯Ａである。42はやや内湾気味の形態で、鉢と推定されるが、詳細は不明である。43は須恵器甕である。口縁端部外面が玉縁状を呈する。44は須恵器杯Ｅもしくは杯Ｆの口縁部と考える。45は灰釉陶器と推定される椀の底部である。Ｃ８地区では、Ｃ６・Ｃ７・Ｃ９地区にくらべると、平安時代の遺物はあまり出土しておらず、図示できたのは45のみである。

（筒井崇史）



第183図　C８地区出土遺物実測図（１）



第 184 図　Ｃ８地区出土遺物実測図（２）

40. Ｃ９地区の調査

Ｃ８地区の南約20mに設定した調査区である。奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物を検出した(第185図)。

(１)奈良・平安時代の遺構・遺物

検出した遺構としては、柱穴、土坑、溝などがある。柱穴の一部は柵として復原できたが、大半は建物や柵として復原することはできなかった。

①柵ＳＡ01　調査区の北半部で検出した。直径30～50cm、深さ20～25cm程度の円形の柱穴が３基、等間隔に並ぶ。柵の方位は東に対して約19°北に振る。出土遺物がなく、時期は不明である。ただし、包含層等の出土遺物などから奈良・平安時代のものと考えられる。

②柵ＳＡ02　調査区の中央部で検出した。一辺60cm程度の隅丸方形の柱穴３基がほぼ等間隔で「Ｌ」字状にならぶ。ただし、角に相当する柱穴は調査区外となるため、検出できていない。柵の方位は北に対して約１°西に振る。ＳＡ02も柵ＳＡ01と同様、出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。ただし、ＳＡ02の方位がＣ８地区で検出した掘立柱建物跡ＳＢ01や柵ＳＡ02の方位におおむね一致すること、Ｃ８地区のＳＡ02の延長上にＣ９地区のＳＡ02が位置することなどから、Ｃ８地区の建物などと同時期のものと考えられる。

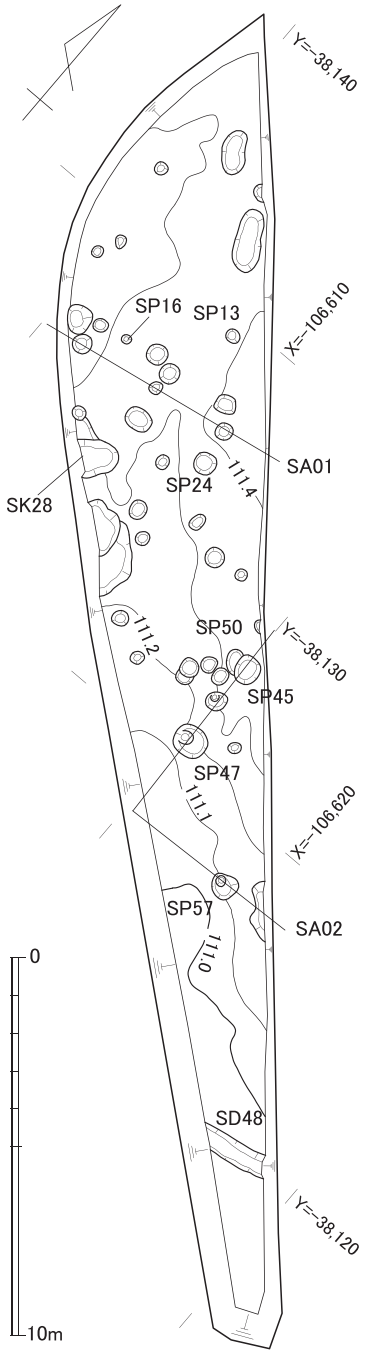
③溝ＳＤ48　調査区の南半部で検出した。検出した範囲が狭く、詳細は不明である。東西方向の溝であるが、溝の方位は東に対して約11°北に振り、柵ＳＡ02とは少しずれる。出土遺物はない。

④その他の柱穴・土坑　柵ＳＡ01・ＳＡ02として復原した柱穴のほかにも柱穴を多数検出している。柱穴から出土した遺物としては、柱穴ＳＰ16・50、土坑ＳＫ28から須恵器椀の口縁部がある(第186図１～３)。柱穴ＳＰ13・24からは土師器皿が出土した(第186図４・５)。いずれも平安時代中期のものであろう。

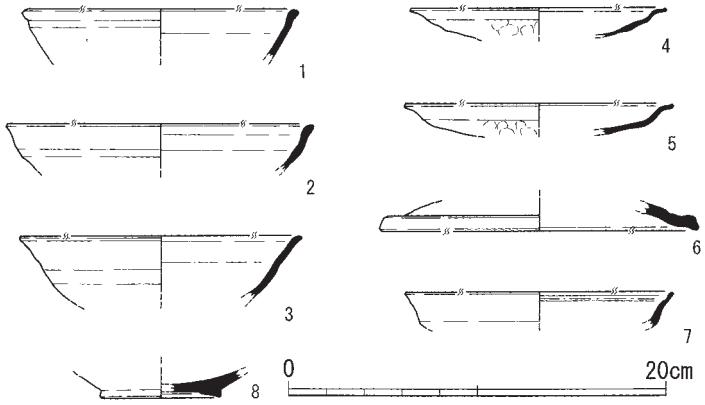
(２)包含層出土遺物

Ｃ９地区では、遺構面の精査中などに少量の遺物が出土した(第186図６～８)。６は須恵器杯Ｂ蓋、７は須恵器皿Ｃである。どちらも奈良時代のものである。８は緑釉陶器椀または皿の底部と思われる。

(筒井崇史)



第185図　Ｃ９地区検出遺構配置図（1/200）



第186図　Ｃ９地区出土遺物実測図

41．35トレンチの調査

Ｂ１地区とＣ６地区との間に位置する用水路部分に設定したトレンチである。土坑１基のほか、多数の柱穴を検出した(第187図)。

①土坑ＳＫ01　平面形は隅丸方形に近いが、東半分が調査区外に延びるため、全容については不明である。一辺1.3m、深さ約25cmを測る。床面は部分的に赤色に焼けていた。その焼土の上には、厚さ約５cmの炭を多量に含む濃茶褐色土が堆積していた。須恵器片が出土した(第188図１)。

②柱穴群　トレンチ全域から大小さまざまな柱穴を検出した。調査地の幅が限られていたことから、建物や柵などに復原することはできなかった。

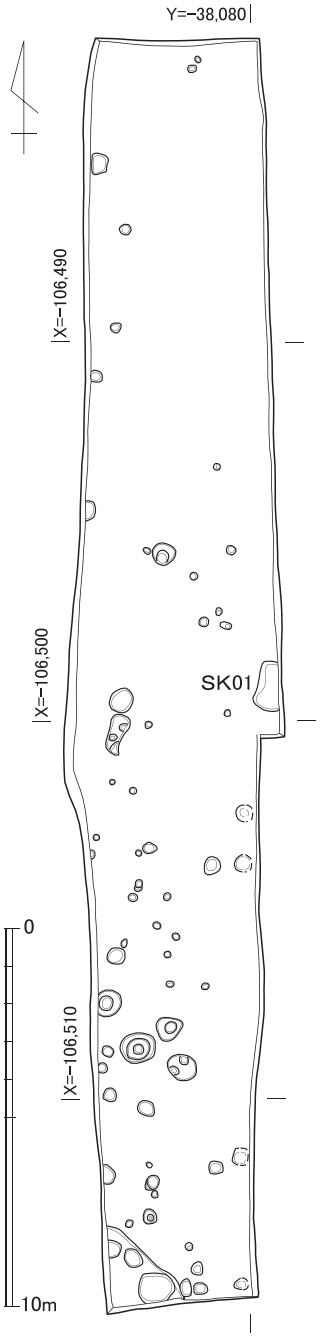
(岡﨑研一)

42．157～159トレンチの調査

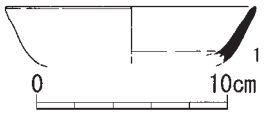
Ｂ２地区から南へ延びる用水路部分に設定したトレンチである。157～159トレンチは上述の132～134トレンチの延長部分に当たる。

157トレンチでは、顕著な遺構はなく、柱穴を10基検出した(第189図左)。調査地の幅が限られていたことから、建物や柵などに復原することはできなかった。

158・159トレンチでは、土坑３基以上、柱穴多数を検出した(第189図右)。耕作土・床土を除去すると、暗茶褐色土・茶色土の包含層が堆積しており、縄文土器が出土した。また、柱穴群を検出した面を精査したところ、長方形に土色の変化が認められた。しかし、調査の結果、周壁溝や柱穴は認められず、緩やかに落ち込むことから、自然の落ち込みと考えられる。



第187図　35トレンチ検出遺構配置図（1/200）



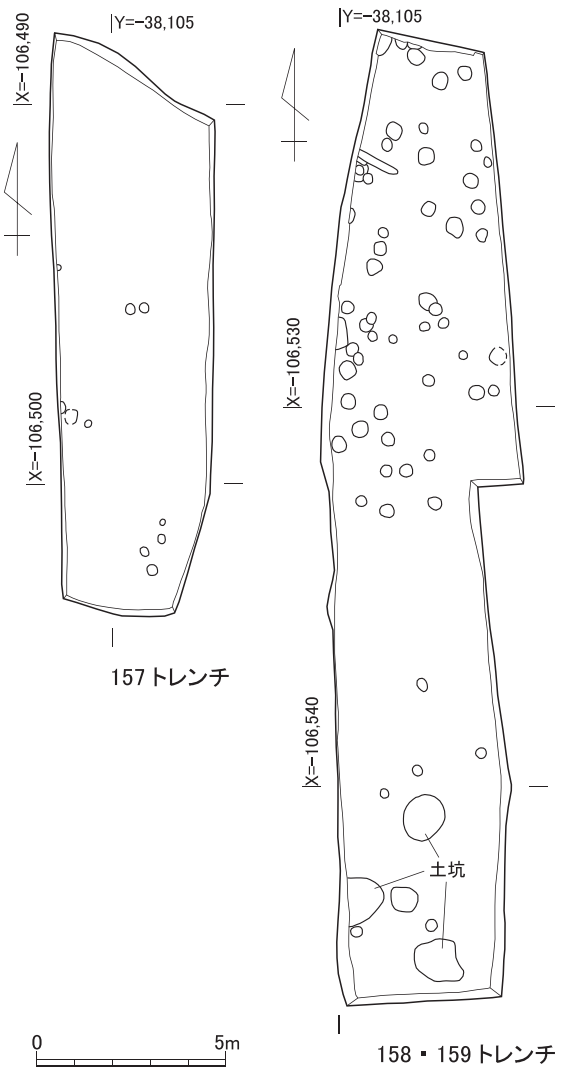
第188図　35トレンチ出土遺物実測図

①土坑群　トレンチ南半部で土坑３基を検出した。いずれも平面形は不整形な円形を呈し、直径1.0～1.4m、深さ約25～30cmを測る。埋土下層に若干の炭が混入する。焼土はなく、その性格は不明である。

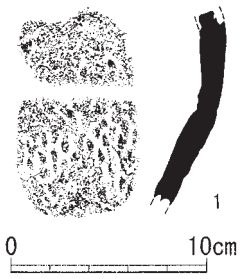
②柱穴群　トレンチ北半部において大小さまざまな柱穴を検出した。調査地の幅が限られていたことから、建物や柵などに復原することはできなかった。

③包含層出土遺物　158・159トレンチでは、縄文時代早期後半の縄文土器が少量ながら出土している（第190図１）。いずれも外面に長軸0.8cm程度の粒を持った押型文土器である。土器の特徴から高山寺式の押型文土器と思われる。

（岡﨑研一）



第189図　157～159トレンチ
検出遺構配置図（1/200）



第190図　158・159トレンチ出土遺物実測図

総　括

蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群の調査は、足掛け３か年にわたって実施し、縄文時代から中世に至る各時期の遺構・遺物を多数検出した。本来なら、これら膨大な遺構・遺物について詳細な検討を加え、考察を行うべきであるが、整理期間や紙幅の都合上、割愛せざるを得なくなった。ご容赦願いたい。

最後に、今回の調査成果について、『京都府遺跡調査報告集』第129冊で報告した分も合わせて、時代ごとに遺跡の概要をまとめて、本報告の結びとしたい。

縄文時代　遺構は検出されなかったが、158・159トレンチにおいて早期の押型文土器が数点出土した。また、Ａ６地区でも後期と思われる縄文土器の小破片が出土した。このように蔵垣内遺跡ではごく少量の縄文土器が出土しており、大規模な集落遺跡の存在は予想されないものの、狩猟場などの生活空間として利用されていた可能性がある。

弥生時代　Ｃ２地区からＣ４地区にかけて、包含層から中期の土器が出土した。遺構に伴うものではないが、中期の集落などが遺跡の南東部を中心に分布していたと考えられる。なお、これらの土器の分布する範囲は、後述する古墳時代前期の集落とほぼ重複しているので、その集落形成時に中期の遺構が削平された可能性もある。

一方、Ｄ１・Ｄ２地区において後期後半の竪穴式住居跡４基を検出した。また、Ｄ４地区などでは包含層からほぼ同時期の土器が出土した。住居跡と土器の分布から、後期後半の集落は国分古墳群とほぼ重複する範囲に存在したと考えられる。

古墳時代　Ａ４地区からＣ４地区にかけての広い範囲において、前期の竪穴式住居跡18基を検出した。広い範囲に比較的密集して分布しているので、前期に大規模な集落が形成されていたと考えられる。また、この時期としては比較的多量の土器が出土し、亀岡盆地における当該期の土器編年を検討するのに十分な資料を提供することができた。

しかし、須恵器の出現段階から古墳時代後期にかけての遺構群は、１、２の例を除いて全くみられないので、この時期の集落は存在しなかった可能性が高い。

飛鳥時代　古墳時代後期末ごろになると、蔵垣内遺跡の広範囲で、再び集落が形成されはじめるとともに、横穴式石室を内部主体とする古墳群が造営されるようになる。これらの集落と古墳群は、出土遺物から飛鳥時代を通じて営まれ、集落は奈良時代にも引き続き営まれていることが明らかになった。調査で検出した竪穴式住居跡は29基、古墳は24基に達するが、調査の及ばなかった地点もあるので、集落と墓域はもっと広範囲に及んでいたと考えられる。

今回の調査で注目されるのは、集落と墓域が近接して営まれていること、古墳群中に八角形墳（国分45号墳）が含まれることである。国分45号墳や国分29号墳など、大規模な横穴式石室を埋葬施設とする古墳の被葬者までも近接する集落に居住していたかどうかは明らかでないが、横穴式石室の出土土器は、集落出土の土器と同じような様相がみられることから、蔵垣内遺跡の集落居住者が国分古墳群に埋葬された可能性は高いと考えられる。このことと関連して、Ｃ７地区の竪穴式住居跡ＳＨ01から瑪瑙製の勾玉が出土した点は示唆的である。

また、古墳や住居跡から大量の土器が出土しており、これらも飛鳥時代の土器編年を考える上で重要な資料となるものである。

奈良時代　奈良時代前半においては、飛鳥時代の集落が引き続き営まれる。Ａ４・Ａ５地区の調査成果によると、奈良時代初頭までは竪穴式住居であったものが、間もなく掘立柱建物へと変化しているようである。ただ、奈良時代前半における掘立柱建物の集落の様相については、建物の復原が十分できなかったため、明らかではない。

集落の消長で大きな画期になるのは、上記のＡ４・Ａ５地区を中心とする集落が途絶え、それと同時にＣ６地区からC８地区にかけて、建物主軸を正方位にとる掘立柱建物群が出現する奈良時代中頃である。この時期は丹波国分寺の造営時期に当たることから、C６地区からＣ８地区にかけての掘立柱建物群の出現が丹波国分寺の造営と大きく関わる可能性がある。また、この建物群の出現する前後には、大量の土器を廃棄したような土坑をＣ３・Ｃ６・Ｃ７地区で検出した。

このように、丹波国分寺周辺における奈良時代の集落の様相の一端が明らかになり、歴史的景観の復原に多大な資料を提供することができた点で大きく評価することができる。

平安時代　奈良時代までにくらべると、遺物の出土量が急激に減少する。これに伴い、遺構も非常に少なくなる。おそらく、奈良時代末から平安時代前半頃にかけて、この地域で大規模な集落の様相に変化があったものと考えられる。ただ､遺物は調査地全体から少量ずつ出土するので、調査地周辺で何らかの土地利用が行われていたものと考えられる。

中世　Ｄ９・Ｄ７地区からＢ地区・Ａ地区を経て、Ｃ２地区にいたるまでの広い範囲で、中世の遺構・遺物を検出した。Ａ地区やＣ１・Ｃ２地区では、多数の掘立柱建物跡や土坑などを検出し、集落の一画であることが明らかになった。このことから、平安時代に、一旦衰退した集落が再び盛行するようになったと考えられる。中世でも後半期になると、Ｄ７地区やＢ３～Ｂ６地区で、大規模な土木工事を伴う遺構群が形成されるとともに、青磁香炉や天目茶碗などの一般集落ではあまり出土しない遺物が出土した。遺構や遺物の様相から、在地領主層の居館もしくは寺院に関係する施設の一部と考えられる。これらは中世の丹波国分寺に伴う可能性がある。

以上、蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群の調査成果について簡単にまとめた。国営農地再編整備事業に伴う蔵垣内遺跡の調査では、当調査研究センターのほかに、京都府教育委員会や亀岡市教育委員会が調査を実施した。しかし､その調査成果については十分に触れることができなかった。また、蔵垣内遺跡を縦断する府道の建設に伴う発掘調査も進んでいることから、改めて蔵垣内遺跡について検討する機会を持ちたい。

なお、足掛け３か年に及ぶ調査には、多数の方々に参加いただいたが、『報告集』第129冊に名簿を記載したので、本冊では省かさせていただく。また、今年度の整理作業に参加していただいたのは以下の方々である。

荒川仁佳子・谷上真由美

（筒井崇史）

注１　石崎善久・筒井崇史・松尾史子ほか「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16・17・18年度発掘調査報告　蔵垣内遺跡第４次・国分古墳群（Ⅰ）」（『京都府遺跡調査報告集』第129冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2008

注２　飛鳥時代から奈良時代にかけての須恵器・土師器の器種名については、原則として、奈良文化財研究所が使用している器種分類を用いる。ただし、古墳出土の高杯や壺については、形態の特徴を表す通有的な器種名を用いる。

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』（『奈良国立文化財研究所学報』第26冊）　1976

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』（『奈良国立文化財研究所学報』第31冊）　1978

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅺ』（『奈良国立文化財研究所学報』第40冊）　1981

奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告』（『奈良文化財研究所学報』第63冊）　2002

奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ』（『奈良文化財研究所学報』第70冊）　2002　ほか参照。

注３　遺構・遺物の時期区分についての表現方法は、執筆者によって異なるが、表記・表現の統一は行わなかった。したがって、土器編年の型式名や実年代観を示す場合もある。

注４　林部均氏によると、「畿内のとくに大和・河内」において多く見ることができる「精製された粘土をつかい、ていねいに暗文やヘラ磨きをくわえ、赤褐色に焼き上げた土師器」を指すとされる。

林部均「西日本の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」（『考古学研究』第39巻第３号　考古学研究会）　1992

注５　注１文献141～162頁

注６　補助ケズリは、菱田哲郎ほか「八代宮ノ谷窯跡出土の須恵器」（『鬼神谷窯跡発掘調査報告』（『竹野町文化財調査報告』第７集　竹野町教育委員会）　1990）によって定義、命名されたもので、ロクロ台から須恵器を切り離す際に、ヘラキリの前に底部の周囲を１周程度の回転ヘラケズリを行うものである。したがって補助ケズリの痕跡は通常の回転ヘラケズリとは逆になることで区別できる。補助ケズリは、須恵器杯Ｈ、同蓋のほか、須恵器杯Ｇにおいても確認できる。

注７　田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ）　1966

注８　増田孝彦「薪遺跡第８次発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第128冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2008　第32図62や第36図の土製品が類似品と考えられる。

注９　石崎善久「『青野型甕』について」（『京都府埋蔵文化財論集』第３集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996

図　　版



(1)調査地遠景(南から)



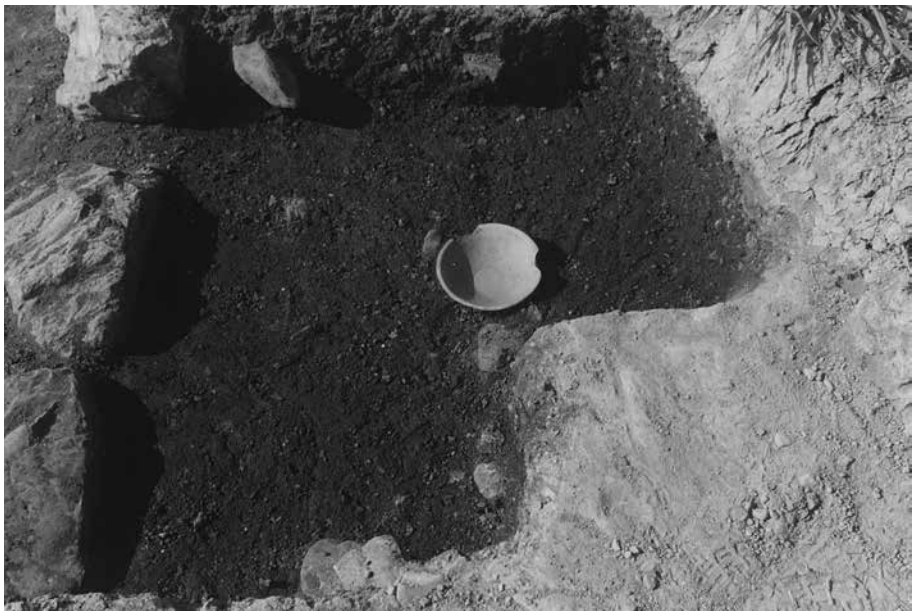
(2)調査地南半部全景(東から)



（1）Ｄ６地区全景（南から）



（2）国分53号墳全景（南から）



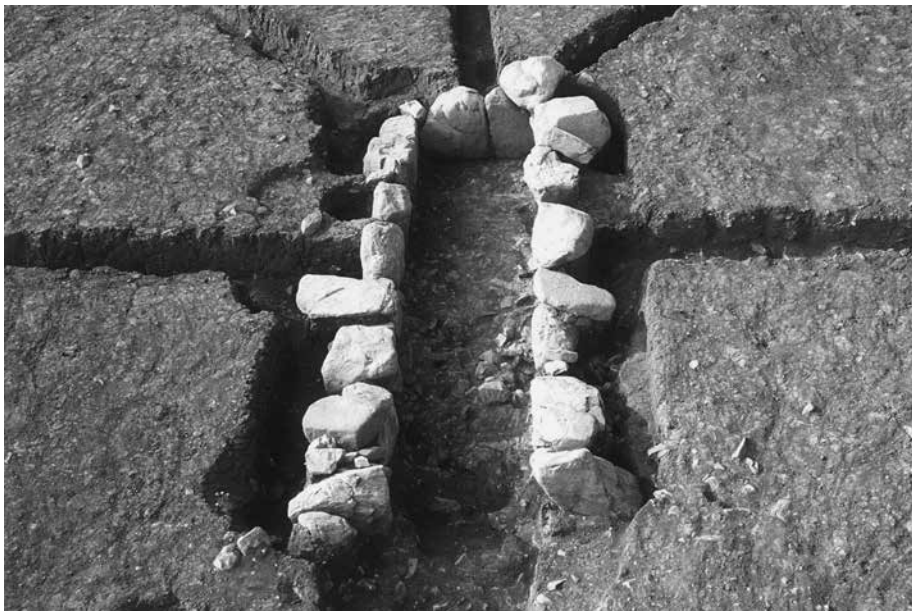
（3）国分53号墳石室内
遺物出土状況
（再利用時、南から）



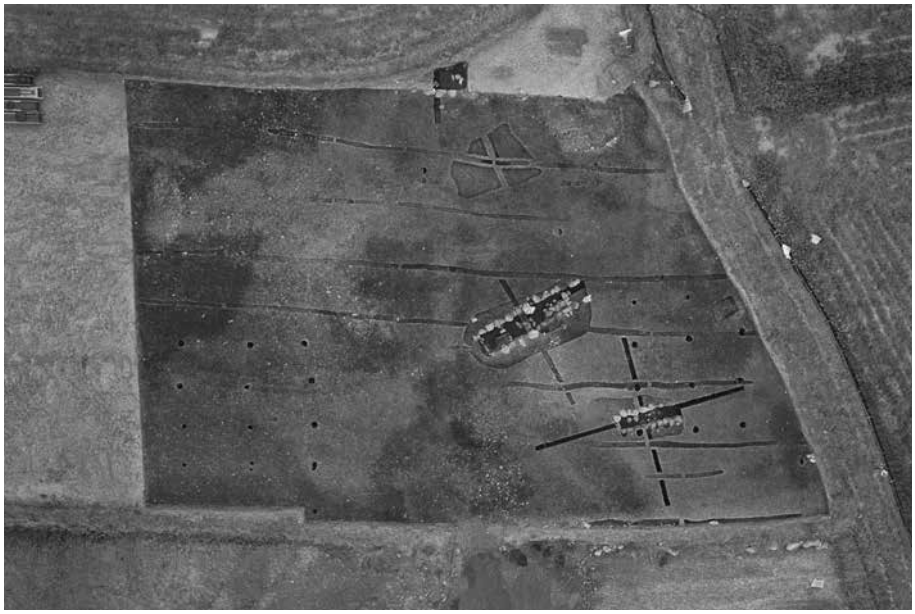
(1)国分54・55号墳全景(上が北西)



(2)国分54号墳石室全景
（南東から）



(3)国分55号墳石室全景
（南南東から）



(1) Ｄ６地区掘立柱建物跡
ＳＢ01・ＳＢ02全景（上が東）



(2) Ｄ６地区柱穴ＳＰ16
遺物出土状況（西から）



(3) Ｄ６地区柱穴ＳＰ48
遺物出土状況（南東から）



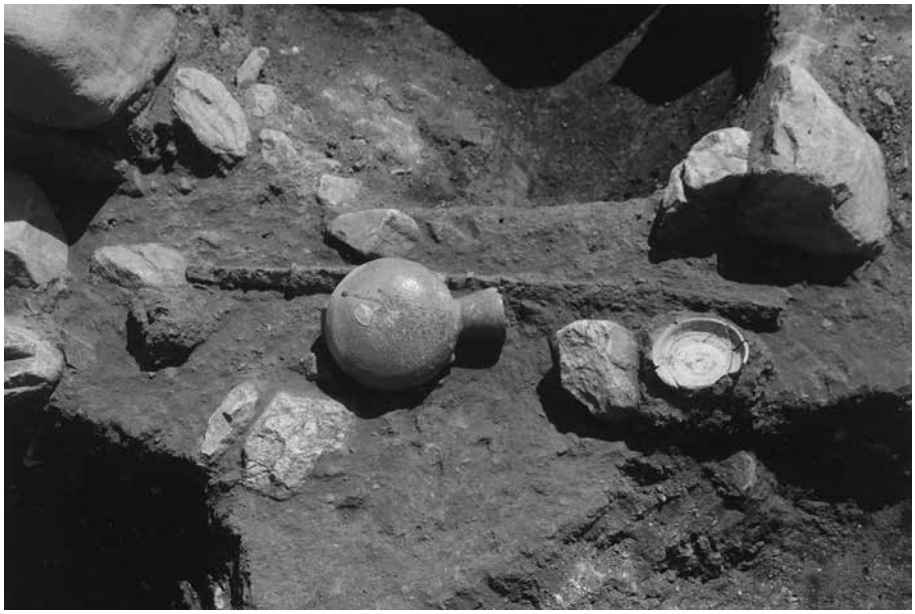
(1)Ｄ９地区全景(西から)



(2)国分56号墳石室全景(南から)



(3)国分56号墳玄室内
遺物出土状況(東から)



(1)国分56号墳羨道部
遺物出土状況(西から)



(2)Ｄ９地区土坑ＳＫ04
遺物出土状況(北から)



(3)Ｄ９地区溝ＳＤ02全景
(南東から)



(1) Ａ２地区全景(北から)



(2) Ａ３地区全景(西から)



(3) Ａ３地区竪穴式住居跡
ＳＨ23全景(北から)



(1) Ａ３地区竪穴式住居跡ＳＨ201
全景（北西から）



(2) Ａ３地区竪穴式住居跡ＳＨ156
全景（南から）



(3) Ａ３地区竪穴式住居跡ＳＨ157
全景（南から）



(1) Ａ３地区竪穴式住居跡ＳＨ156・157全景（西から）



(2) Ａ３地区土坑ＳＫ21全景（南西から）



(3) Ａ３地区柱穴ＳＰ06遺物出土状況（東から）



(1) A ４地区竪穴式住居跡 S H241
全景（北東から）



(2) A ４地区竪穴式住居跡 S H241
遺物出土状況（南東から）



(3) A ４地区竪穴式住居跡 S H242
全景（南南東から）



(1) Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ237
全景(南から)



(2) Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ237
貼床除去後全景(南から)



(3) Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ256
全景(南西から)



(1) Ａ４地区竪穴式住居跡ＳＨ256
検出カマド全景（南西から）



(2) Ａ４地区柱穴ＳＰ262
遺物出土状況（南から）



(3) Ａ４地区掘立柱建物跡ＳＢ13
全景（西から）



(1) Ａ５地区全景（西から）



(2) Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ51
全景（南から）



(3) Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ148
全景（南から）



(1) Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ50
全景（南から）



(2) Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ50
北東部遺物出土状況（東から）



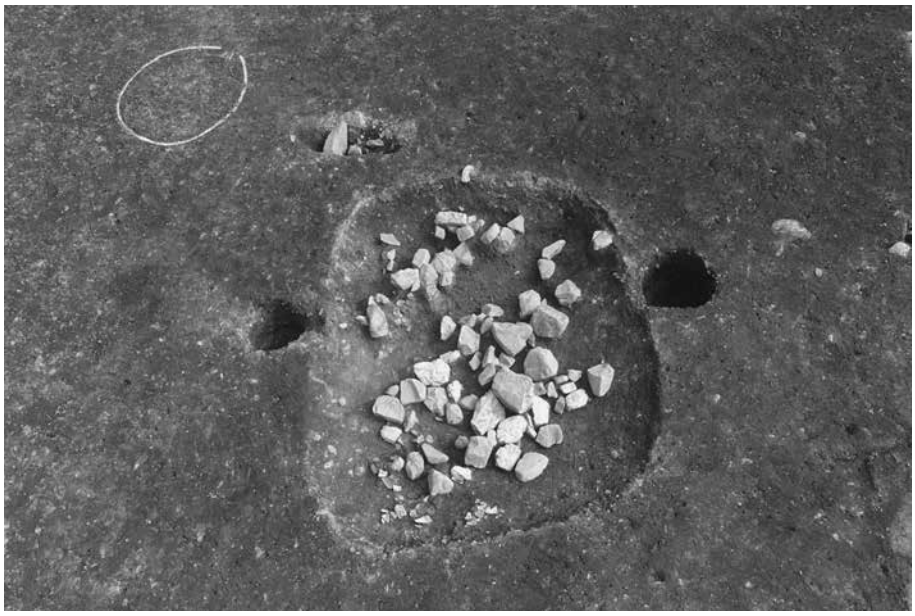
(3) Ａ５地区竪穴式住居跡ＳＨ34
全景（南東から）



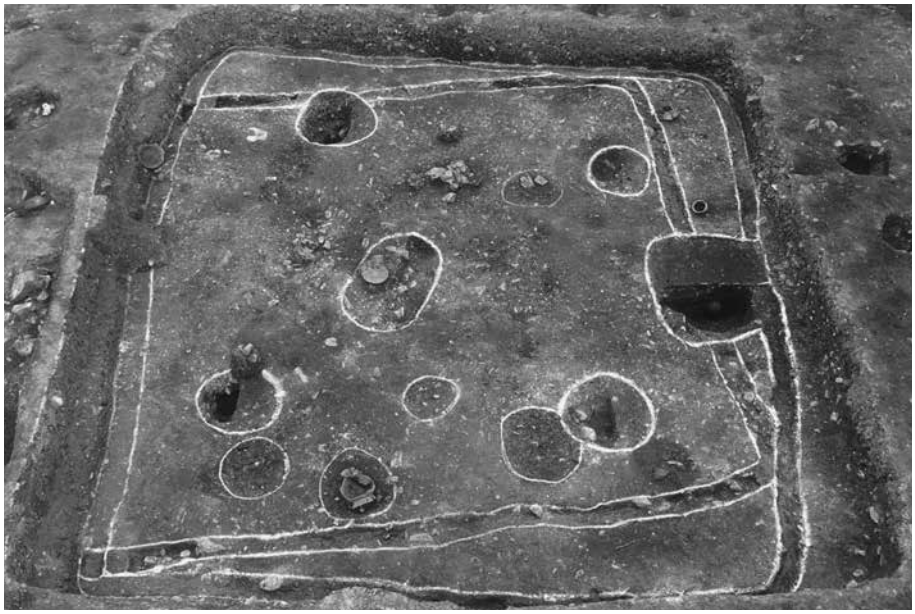
(1) Ａ５地区土坑ＳＫ70
遺物出土状況(南西から)



(2) Ａ５地区掘立柱建物跡ＳＢ02
全景(西から)



(3) Ａ５地区土坑ＳＫ24全景
(北から)



(1) Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ15
全景（西から）



(2) Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ15
遺物出土状況（南から）



(3) Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ15
石杵出土状況（南から）



(1) Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ103
全景（南西から）



(2) Ａ６地区竪穴式住居跡ＳＨ105
全景（北東から）



(3) Ａ１地区全景（東から）



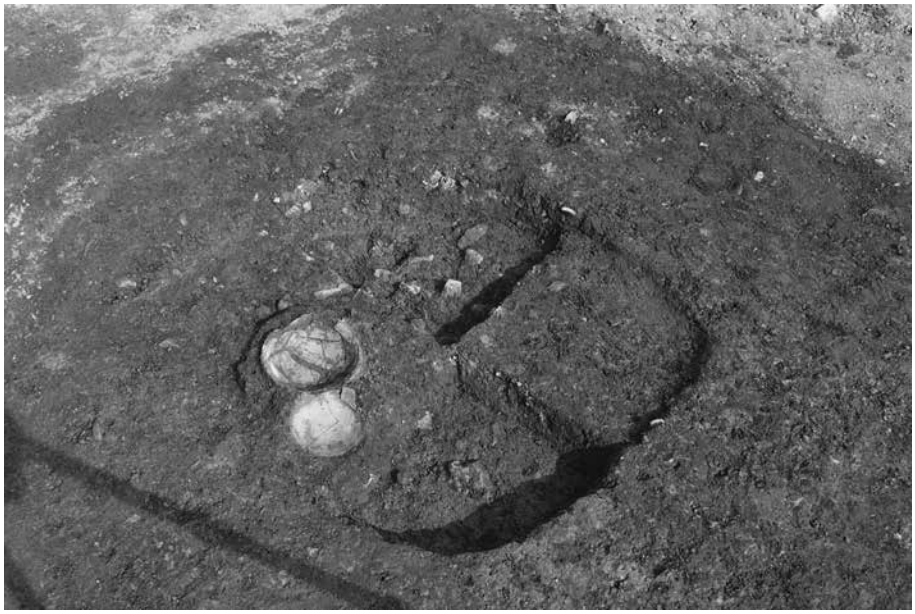
(1) Ｂ１－２地区全景(南東から)



(2) Ｂ１－３地区全景(東から)



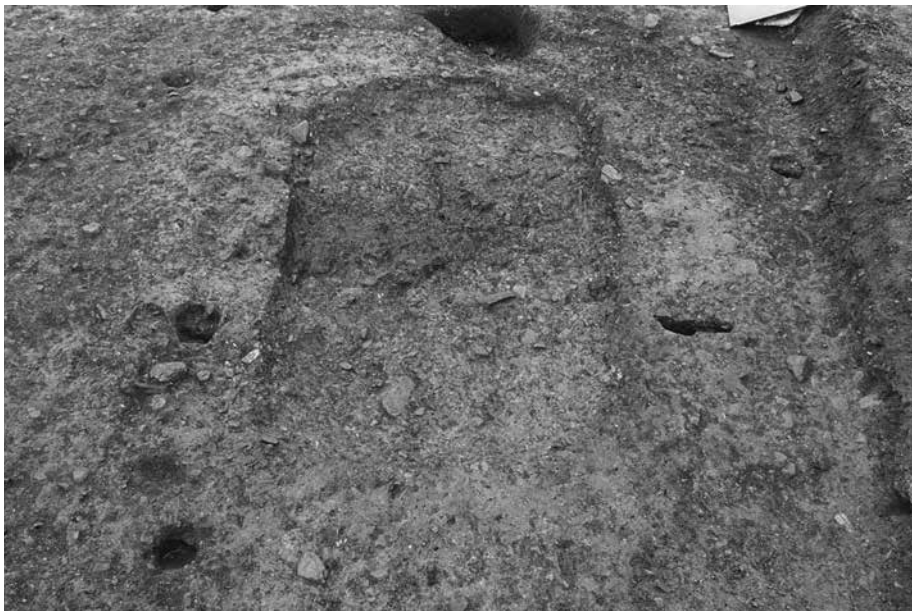
(3) Ｂ１－４地区全景(南東から)



(1) Ｂ１－２地区土坑ＳＫ115全景（南から）



(2) Ｂ１－４地区土坑ＳＫ14全景（西から）



(3) Ｂ１－４地区土坑ＳＫ01全景（南から）



(1) Ｂ２地区全景(西から)



(2) Ｂ３地区全景(南東から)



(3) Ｂ４地区全景(北東から)



(1) Ｂ５地区全景（北から）



(2) Ｂ５地区溝ＳＤ61全景
（北東から）



(3) Ｂ６地区全景（南から）



(1) Ｂ６地区段状区画ＳＸ04全景
（北から）



(2) Ｂ６地区溝ＳＤ02全景
（北東から）



(3) Ｂ６地区土坑ＳＫ44全景
（東から）



(1) Ｂ６地区土坑ＳＫ100全景
（東から）



(2)116トレンチ全景(西から)



(3)132～134トレンチ全景
（北から）



(1)110・112トレンチ全景
（南西から）



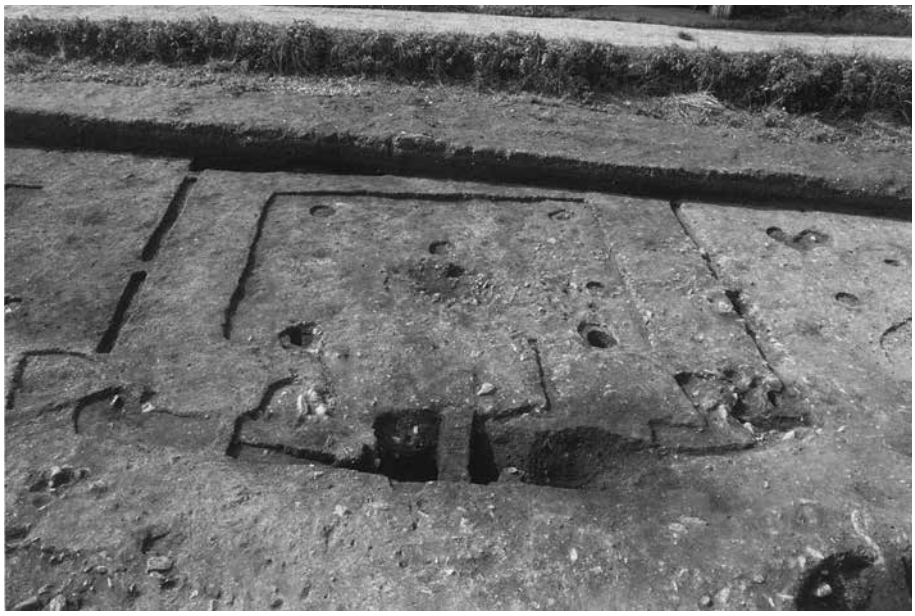
(2)10トレンチ全景(南から)



(3)３・４トレンチ全景(東から)



(1) Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ02
全景（北西から）



(2) Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ03
全景（南東から）



(3) Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ04
全景（北西から）



(1) Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ05
全景（北西から）



(2) Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ06
全景（北東から）



(3) Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ35
遺物出土状況（北から）



(1) Ｃ１地区竪穴式住居跡ＳＨ04
遺物出土状況(北西から)



(2) Ｃ１地区掘立柱建物跡ＳＢ01
全景(北から)



(3) Ｃ１地区柱穴ＳＰ30
遺物出土状況(北西から)



(1) Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ01
全景（西から）



(2) Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ36
全景（南から）



(3) Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ36
炉状施設全景（南から）



(1) Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ02
全景(南から)



(2) Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ02
カマド全景(南から)



(3) Ｃ２地区竪穴式住居跡ＳＨ35
全景(南東から)



(1) Ｃ２地区掘立柱建物跡ＳＢ01
全景（東から）



(2) Ｃ３地区竪穴式住居跡ＳＨ02
全景（南西から）



(3) Ｃ２地区土坑ＳＫ01全景
（北から）



(1)22・24・25・27・28トレンチ
全景(北から)



(2)Ｃ４地区全景(東から)



(3)Ｃ４地区竪穴式住居跡ＳＨ85
全景(西から)



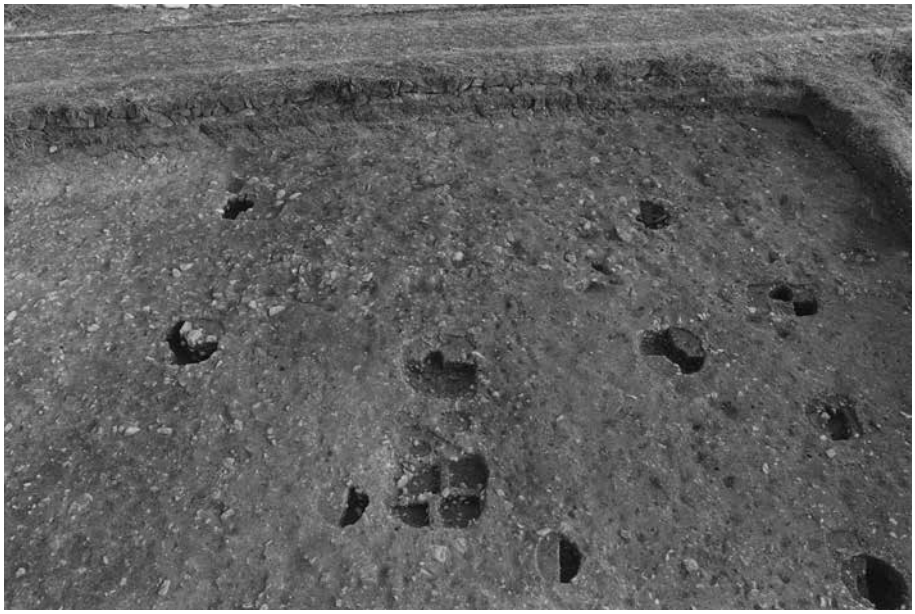
(1) Ｃ５地区全景(南東から)



(2) Ｃ５地区竪穴式住居跡ＳＨ24
全景(南から)



(3) Ｃ５地区竪穴式住居跡ＳＨ24
カマド全景(南から)



(1) Ｃ５地区掘立柱建物跡ＳＢ01
全景（西から）



(2) Ｃ５地区掘立柱建物跡ＳＢ02
全景（北から）



(3) Ｃ６地区全景（東から）



(1) Ｃ６地区全景（西から）



(2) Ｃ６地区竪穴式住居跡ＳＨ71
全景（南から）



(3) Ｃ６地区竪穴式住居跡ＳＨ73
全景（南から）



(1) Ｃ６地区竪穴式住居跡
ＳＨ74・75全景（南から）



(2) Ｃ６地区土坑ＳＫ77全景
（北から）



(3) Ｃ６地区掘立柱建物跡ＳＢ02
全景（西から）



(1) Ｃ７地区全景(南から)



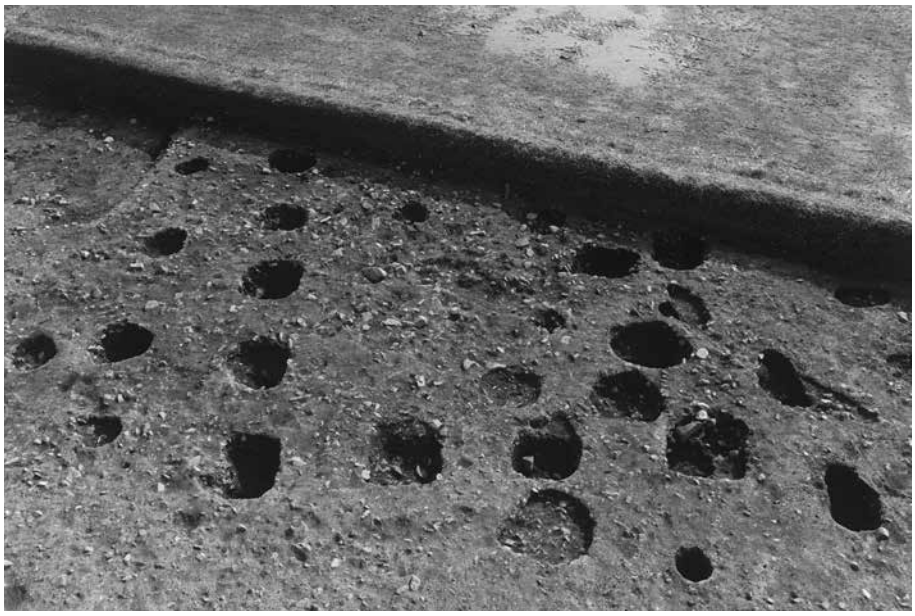
(2) Ｃ７地区竪穴式住居跡ＳＨ01
カマド全景(南から)



(3) Ｃ７地区土坑ＳＫ02全景
(北西から)



(1) Ｃ８地区全景（東から）



(2) Ｃ８地区掘立柱建物跡ＳＢ01
全景（北から）



(3) Ｃ９地区全景（南東から）



(1)35トレンチ全景(北から)



(2)39トレンチ・Ｃ６地区全景
（南東から）



(3)157～159トレンチ全景
（南から）

















出土遺物（１）


14-1


18-25


18-24


18-22


18-23


53-1


53-10

出土遺物（２）







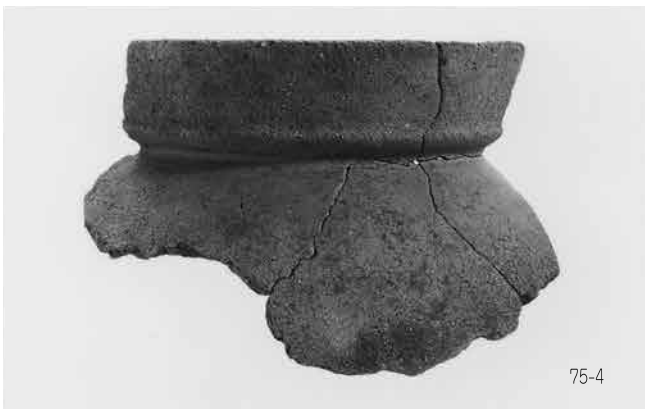














出土遺物（３）


76-40


76-46


86-9


86-23


77-83


77-92


77-93


86-10


89-85

出土遺物（４）


87-40


87-46


130-26


130-18


131-50


131-51


130-1


130-12


130-13


141-41


146-10

出土遺物（５）


151-3


151-6


166-57


166-47


166-76


176-5

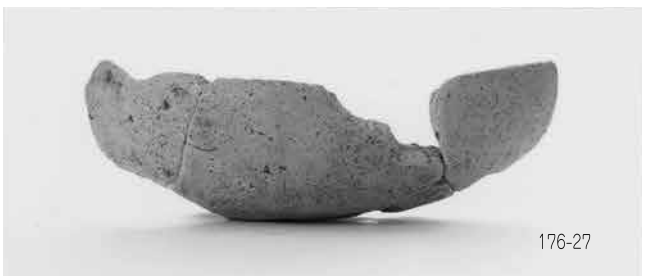

156-1


156-11


165-1


165-13


176-3


176-27

出土遺物（６）


176-32

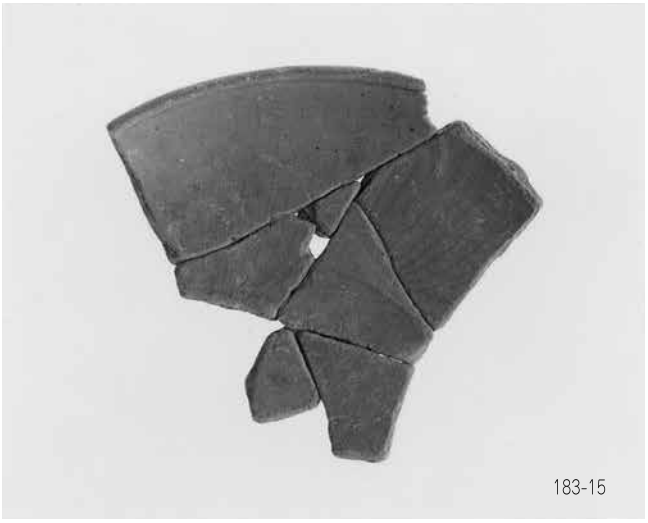

183-6


183-18


183-31


177-51

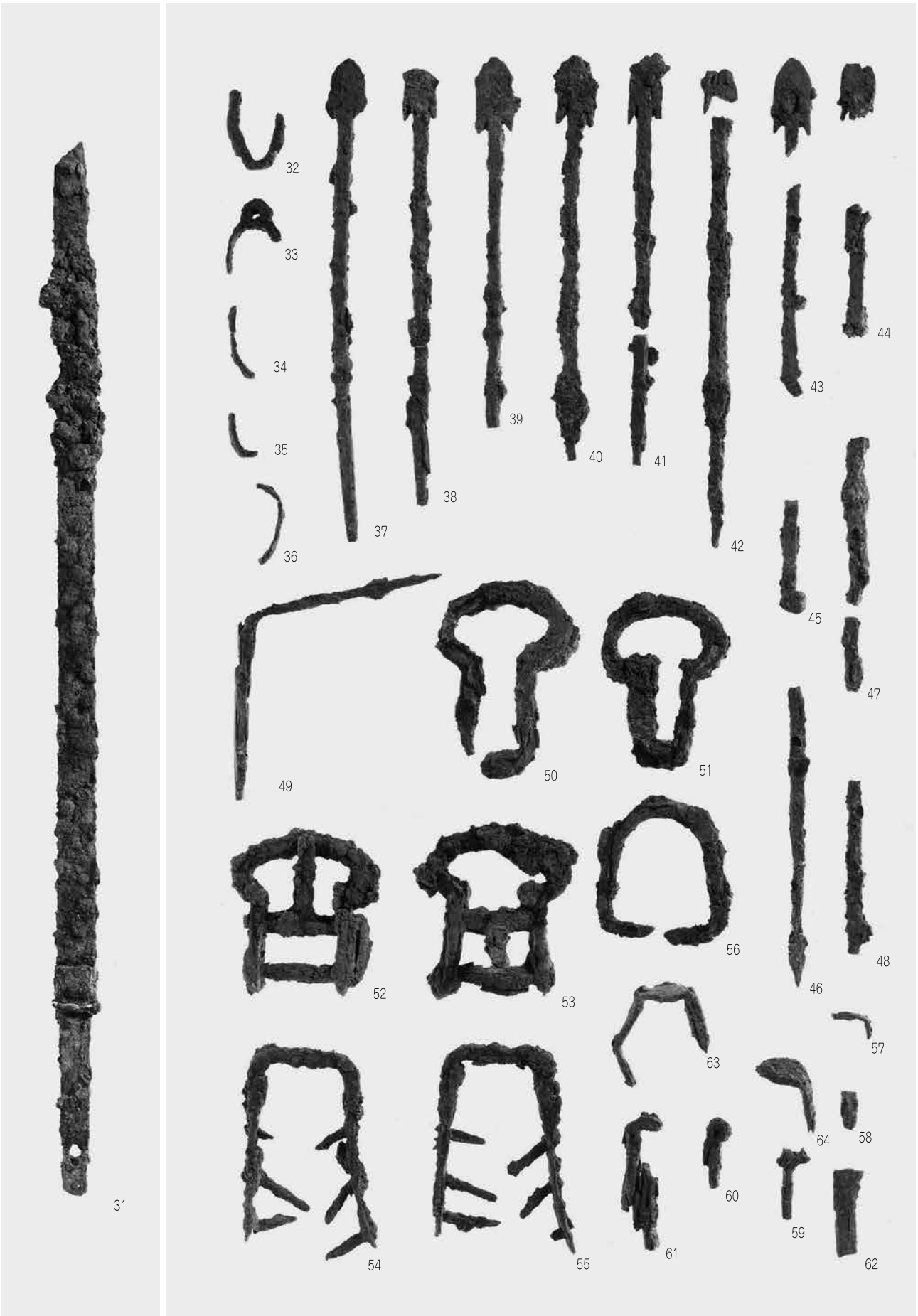

177-55


183-15


第156図


第179図

出土遺物（７）



出土遺物（８）（番号は第20・21図に対応）

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第134冊
編著者名	
編集機関	（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Tel. 075（933）3877
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
くらがいちいせきだいよんじ・こくぶこふんぐん	きょうとふかめおかしちとせちょうこくぶやなぎがつじ・さがみ・くらがいち・やぶのもと・うちがきうち・しょうだ					20050311 ～ 20050316 20050523 ～ 20060310 20060410 ～ 20060926		
蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群	京都府亀岡市千歳町国分柳ヶ辻・相模・蔵垣内・薮ノ本・内垣内・正田	26206	37・38	35° 2′ 25″	135° 34′ 54″		18,620	ほ場整備

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蔵垣内遺跡第4次	集落・墓	縄文		縄文土器	
		弥生	竪穴式住居跡	弥生土器	
		古墳	竪穴式住居跡／土坑／ピット／溝／横穴式石室	土師器／須恵器／鉄製品／石製品	
		飛鳥	竪穴式住居跡／土坑／ピット／溝／横穴式石室	土師器／須恵器／鉄製品	
		奈良	竪穴式住居跡／掘立柱建物跡／土坑／ピット／溝	土師器／須恵器／瓦	
		平安	掘立柱建物跡／土坑／ピット／溝	土師器／須恵器／緑釉陶器／灰釉陶器／黒色土器／瓦器／中国陶磁器	
		鎌倉～室町	掘立柱建物跡／土坑／ピット／溝／堀／墓	土師器／須恵器／瓦器／国産陶器／中国陶磁器／石製品／鉄製品／鉄滓	丹波国分寺に関連。

所収遺跡名	要約
蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群	蔵垣内遺跡では、弥生時代後期や古墳時代前期では竪穴式住居跡などを検出し、集落の存在が明らかになった。遺跡の北東部では新たに横穴式石室を埋葬施設とする古墳24基（国分古墳群）を調査するとともに、遺跡の南半部では同時期の竪穴式住居跡を多数検出しており、集落と墓域が近接して営まれていることが判明した。また、奈良時代の集落を確認し、丹波国分寺造営当時の歴史的景観が明らかになった。鎌倉時代から室町時代にかけての集落や丹波国分寺と関連するような遺構・遺物を検出した。このほか、縄文時代・弥生時代中期・平安時代の遺物が少量出土した。

京都府遺跡調査報告集 第134冊

平成21年３月31日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　中 西 印 刷 株 式 会 社
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入ル
Tel (075)441-3155(代)　Fax (075)417-2050